兵庫県文化財調査報告　第 474 冊

淡路市

田井 A 遺跡

－（二）志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 27（2015）年 3 月

兵庫県教育委員会

田井A遺跡

兵庫県文化財調査報告　第474冊

兵庫県教育委員会

26教Ⓣ1-019A4

淡路市

田井 A 遺跡

－（二）志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 27（2015）年 3 月

兵庫県教育委員会

遺跡周辺の景観（南東から 2012 年度撮影）

遺跡周辺の景観（北西から 2012 年度撮影）

遺跡周辺の景観（南から 2012 年度撮影）

遺跡周辺の景観（北から 2012 年度撮影）

2009 年度調査区

2011 年度調査区

2012 年度調査区（平安時代遺構面）

2012 年度調査区（旧河道・飛鳥時代遺構面）

2009 年度調査区（奈良・平安時代遺構面　南東から）

2009 年度調査区（奈良・平安時代遺構面　北東から）

2011 年度調査区（飛鳥時代遺構面　南東から）

2011 年度調査区（飛鳥時代遺構面　北東から）

2012 年度調査区（平安時代遺構面　南東から）

2012 年度調査区（平安時代遺構面　北東から）

2012 年度調査区（飛鳥時代遺構面　南東から）

2012 年度調査区（飛鳥時代遺構面　北東から）

旧河道出土の土師器・須恵器

旧河道出土須恵器甕

銅鏡（洪水砂層出土）

旧河道出土の人形

旧河道出土の木製祭祀遺物

旧河道出土の木簡

例　　言

1　本書は、兵庫県淡路市志筑に所在する、田井Ａ遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は、（二）志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴うもので、兵庫県淡路県民局洲本土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体とし、兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部および公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターを調査機関として、平成 18 ～ 24（2006 ～ 2012）年度に実施した。また整理事業は、同事務所の委託により、平成 22 ～ 26（2010 ～ 2014）年度に、兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部　公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部において実施した。

3　調査の推移

（発掘調査）

分布調査　平成 19 年 3 月 22 日
　実施機関：兵庫県教育委員会

確認調査　平成 20 年 2 月 25 日・2 月 27 日～ 2 月 29 日
　実施機関：兵庫県立考古博物館

平成 20 年 11 月 25 日～ 12 月 15 日
　実施機関：兵庫県立考古博物館

本発掘調査　平成 21 年 11 月 24 日～平成 22 年 2 月 26 日
　実施機関：兵庫県立考古博物館
　工事請負：津名土木株式会社

平成 23 年 10 月 26 日～平成 24 年 3 月 19 日
　実施機関：兵庫県立考古博物館
　工事請負：北淡路産業株式会社

平成 24 年 7 月 20 日～平成 24 年 11 月 16 日
　実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
　工事請負：株式会社尾田建設

（出土品整理）

平成 22 年 10 月 12 日～平成 23 年 3 月 31 日
平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日
平成 24 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日
平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日
平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 25 日
　実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

4　本書の執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部西口圭介･久保弘幸･鐵英記が担当し、久保が編集をおこなった。

5　本調査において出土した遺物および作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

6　遺物写真撮影は委託によって実施し、委託先については本文第２章に記載した。

7　本書中の図で示した方位は、調査地点における座標北による。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

8　発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々よりご指導を頂戴した。記して謝意を表したい（順不同･敬称略）。工楽善通（大阪府立狭山池博物館館長）･山本崇（奈良文化財研究所）･大平茂（播磨町郷土資料館）・青木哲哉（立命館大学）・伊藤宏幸（淡路市教育委員会）・浦上雅史

9　自然科学的分析については、下記のとおり委託して実施し、その成果は本書に収録している。

放射性炭素年代測定	（株）加速器分析研究所
木製品樹種同定	パリノ・サーヴェイ（株）
	（株）古環境研究所
花粉分析	（株）パレオ・ラボ
種実同定	（株）古環境研究所
昆虫遺体同定	（株）古環境研究所
動物遺存体同定	（株）古環境研究所

10　本書中で用いた地層および土器の色調の記号番号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によっている。

11　挿図中で用いた遺構の略称は、下記のとおりである。

P：柱穴　SK：土坑　SD：溝　SX：不明遺構

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 1

第２章　調査の概要
第１節　調査に至る経緯 …… 4
第２節　発掘調査の概要 …… 4
第３節　整理事業の概要 …… 6

第３章　遺構と遺物
第１節　層序と遺構面の位置 …… 7
第２節　飛鳥時代の遺構と遺物 …… 9
第３節　奈良時代の遺構と遺物 …… 11
第４節　平安時代の遺構と遺物 …… 24
第５節　包含層出土の遺物 …… 29

第４章　自然科学的分析
第１節　田井Ａ遺跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）（(株）加速器分析研究所） …… 30
第２節　横入遺跡と田井A遺跡の地形環境（青木哲哉） …… 34
第３節　田井Ａ遺跡の花粉およびプラント・オパール分析（(株）パレオ・ラボ） …… 48
第４節　田井Ａ遺跡出土木製品等の樹種同定 （パリノ・サーヴェイ（株）・(株）古環境研究所） 51
第５節　田井Ａ遺跡における種実同定（(株）古環境研究所） …… 57
第６節　田井Ａ遺跡における昆虫遺体同定 （(株）古環境研究所） …… 62
第７節　田井A遺跡から出土した動物遺存体（(株）古環境研究所） …… 64

第５章　結　語 …… 66

報告書抄録

巻 頭 図 版 目 次

巻頭図版１　上　　遺跡周辺の景観（南東から　2012年度撮影）
　　下　　遺跡周辺の景観（北西から　2012年度撮影）
巻頭図版２　上　　遺跡周辺の景観（南から　2012年度撮影）

下　遺跡周辺の景観（北から　2012年度撮影）
巻頭図版３　左　2009年度調査区
右　2011年度調査区
巻頭図版４　左　2012年度調査区（平安時代遺構面）
右　2012年度調査区（旧河道・飛鳥時代遺構面）
巻頭図版５　上　2009年度調査区（奈良・平安時代遺構面　南東から）
下　2009年度調査区（奈良・平安時代遺構面　北東から）
巻頭図版６　上　2011年度調査区（飛鳥時代遺構面　南東から）
下　2011年度調査区（飛鳥時代遺構面　北東から）
巻頭図版７　上　2012年度調査区（平安時代遺構面　南東から）
下　2012年度調査区（平安時代遺構面　北東から）
巻頭図版８　上　2012年度調査区（飛鳥時代遺構面　南東から）
下　2012年度調査区（飛鳥時代遺構面　北東から）
巻頭図版９　上　旧河道出土の土師器・須恵器
下左　旧河道出土須恵器甕　　下右　銅鏡（洪水砂層出土）
巻頭図版10　旧河道出土の人形
巻頭図版11　旧河道出土の木製祭祀遺物
巻頭図版12　旧河道出土の木簡

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第２図　人形の分類 …… 20
第３図　調査区周辺の地形分類図 …… 35
第４図　調査区付近における微地形の分布 …… 36
第５図　横入遺跡２区における南西―北東方向の地質断面図 …… 39
第６図　横入遺跡２区における南東―北西方向の地質断面図 …… 40
第７図　横入遺跡３区における南東―北西方向のトレンチ断面図 …… 40
第８図　横入遺跡３区における南西―北東方向の地質断面図 …… 41
第９図　横入遺跡４区の地質断面図 …… 42
第10図　田井Ａ遺跡調査区西半部の地質断面図 …… 43
第11図　田井Ａ遺跡調査区東半部の地質断面図 …… 44
第12図　田井Ａ遺跡における植物珪酸体分布図 …… 49
第13図　木製品の器種と樹種の相関図 …… 56
第14図　田井Ａ遺跡の種実 …… 61
第15図　田井Ａ遺跡の昆虫 …… 63
第16図　田井Ａ遺跡の動物遺存体 …… 65

表　目　次

第１表　田井A遺跡調査一覧 …… 4
第２表　収録遺物一覧 …… 71 ～ 95
第３表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値） …… 32
第４表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代） …… 33
第５表　産出花粉胞子一覧 …… 48
第６表　試料１g当りのプラント・オパール個数 …… 49
第７表　田井Ａ遺跡出土木製品の器種別種類構成 …… 51
第８表　田井Ａ遺跡の樹種同定結果（2011年度調査） …… 53
第９表　田井Ａ遺跡における樹種同定結果（2012年度調査） …… 55
第10表　種実同定試料一覧 …… 57
第11表　田井Ａ遺跡における馬歯一覧 …… 65
第12表　田井Ａ遺跡における馬歯計測値 …… 65

図　版　目　次

図版１　調査区位置図
図版２　各年度の調査区
図版３　調査区断面図（１）
図版４　調査区断面図（２）
図版５　下層水田面平面図・畦畔断面図
図版６　下層水田面足跡検出状況
図版７　上層水田面全体図
図版８　上層水田面平面・断面図
図版９　上層水田面遺構断面図
図版10　上層水田面遺構平面・断面図
図版11　上層水田面遺構編遷図
図版12　下層水田面全体図
図版13　旧河道断面図
図版14　旧河道内杭列位置図
図版15　杭列A・B平面・断面図
図版16　杭列B・C平面図
図版17　杭列C断面図
図版18　杭列D・F平面・断面図
図版19　杭列E・G平面図
図版20　杭列E・G断面図
図版21　杭列H・杭群・須恵器埋設遺構平面・断面図
図版22　平安時代遺構面全体図
図版23　平安時代遺構面溝平面・断面図
図版24　SB01・02平面・断面図
図版25　SB02・P86 SB03 ～ SB05平面・断面図
図版26　SB06平面・断面図
図版27　SB07・08平面・断面図
図版28　溝SD・土坑SK平面・断面図
図版29　土坑SK平面・断面図
図版30　出土遺物１（土器１・瓦）
図版31　出土遺物２（土器２）
図版32　出土遺物３（土器３）
図版33　出土遺物４（土器４）
図版34　出土遺物５（土器５・瓦）
図版35　出土遺物６（土器６）
図版36　出土遺物７（土器７）
図版37　出土遺物８（土器８）

図版38　出土遺物９（土器９）
図版39　出土遺物10（土器10）
図版40　出土遺物11（土器11）
図版41　出土遺物12（土器12）
図版42　出土遺物13（土器13・瓦）
図版43　出土遺物14（土器14・土製品）
図版44　出土遺物15（土器15・土製品）
図版45　出土遺物16（石器・金属製品）
図版46　出土遺物17（木製品１）
図版47　出土遺物18（木製品２）
図版48　出土遺物19（木製品３）
図版49　出土遺物20（木製品４）
図版50　出土遺物21（木製品５）
図版51　出土遺物22（木製品６）
図版52　出土遺物23（木製品７）
図版53　出土遺物24（木製品８）
図版54　出土遺物25（木製品９）
図版55　出土遺物26（木製品10）
図版56　出土遺物27（木製品11）
図版57　出土遺物28（木製品12）
図版58　出土遺物29（木製品13）

写真図版目次

写真図版１　上　上層水田面（奈良時代遺構面）全景（南から）
下　上層水田面（南東から）
写真図版２　上　上層水田面（南東から）
下　上層水田面（北東から）
写真図版３　上　上層水田面　土器出土状況（東から）
下　上層水田面　土器出土状況（北から）
写真図版４　上左　旧河道部上面（北西から）
上右　旧河道部上面（南東から）
中左　上層水田畦畔断面（北東から）
中右　旧河道部噴砂断面（南東から）
下左　溝SD01断面（南から）
下右　溝SD04断面（南から）
写真図版５　上左　溝SD05断面（西から）
上右　溝SD06断面（西から）
中左　溝SD08断面（南から）
中右　溝SD09断面（南から）
下左　溝SD10断面（南から）
下右　溝SD11断面（南から）
写真図版６　上　奈良時代遺構面旧河道の重複状況（西から）
中　旧河道全景（北東から）
下　旧河道と下層水田面の重複状況（北から）
写真図版７　上　飛鳥時代遺構面全景（西から）
下　飛鳥時代遺構面全景（東から）
写真図版８　上　飛鳥時代遺構面（南東から）
中　飛鳥時代遺構面（南から）
下　飛鳥時代遺構面（北西から）
写真図版９　上　平安時代遺構面（南東から）
中　飛鳥時代遺構面（北から）
下　飛鳥時代遺構面（南東から）
写真図版10　上　溝SR04断面（東から）
中　溝SD05断面（西から）
下　溝SD06断面（西から）
写真図版11　上　溝SD05下層断面（西から）
中　溝SD05下層断面（西から）
下　飛鳥時代遺構面大畦畔断面（南東から）
写真図版12　上　小畦畔断面（南から）
中　大・小畦畔とりつき部断面（西から）

下　大・小畦畔とりつき部断面
（部分　西から）
写真図版13　上　奈良時代遺構面旧河道2・3杭列B・C検出状況（西から）
中　旧河道2・3杭列B・C検出状況
（北から）
写真図版14　上　旧河道2・3杭列C検出状況
（南から）
中　旧河道2・3杭列C検出状況
（西から）
下　旧河道2・3杭列C検出状況細部
（北西から）
写真図版15　上　旧河道2・3杭列B検出状況
（西から）
下　旧河道2・3杭列B検出状況
（北西から）
写真図版16　上　旧河道2・3杭列B検出状況細部
（南西から）
中　旧河道2・3杭列B検出状況細部
（北西から）
下　旧河道2・3杭列B検出状況細部
（北から）
写真図版17　上左　洪水砂中の青銅鏡出土状況
上右　青銅鏡出土状況
中左　旧河道内槽出土状況
（南から）
中右　旧河道内槽出土状況
（南から）
下左　旧河道内舟形出土状況
（南から）
下右　洪水砂中の馬歯出土状況
写真図版18　上　下層水田面（飛鳥時代遺構面）足跡（西から）
下　下層水田面足跡（西から）
写真図版19　上左　水田面足跡1検出状況
（南から）
上右　水田面足跡1掘削後（南から）
中左　水田面足跡3検出状況
（南から）
中右　水田面足跡3掘削後（南から）
下左　水田面足跡4（上）・5（下）検出状況（南から）
下右　水田面足跡4（上）・5（下）掘削後（南から）
写真図版20　上　調査区北壁断面東部
（南西から）
中　調査区北壁断面中央
（南東から）
下　調査区北壁断面西部
（南西から）
写真図版21　上　調査区北壁断面東部（東から）
中　調査区北壁断面東部
（南東から）
下　調査区北壁断面中央
（南東から）
写真図版22　上　調査区西壁断面（北から）
中　調査区南壁断面西部
（北西から）
下　調査区南壁断面東部
（北西から）
写真図版23　上　調査区南壁断面東部
（北西から）
中　調査区南壁断面東部
（北西から）
下　下層遺構面下位暗緑灰色粘土層中の土器出土状況
写真図版24　上　上層遺構面（平安時代遺構面）全景（南西から）
下　上層遺構面全景（北東から）
写真図版25　上　上層遺構面（平安時代遺構面）全景（北東から）
下　上層遺構面東部（西から）
写真図版26　上　平安時代遺構面掘立柱建物跡群（北西から）

下　掘立柱建物跡群（西から）
写真図版27　上　掘立柱建物跡群（北から）
中　掘立柱建物跡SB01（南西から）
下　掘立柱建物跡SB01（北西から）
写真図版28　上　掘立柱建物跡SB02（南西から）
中　掘立柱建物跡SB02（北西から）
下　掘立柱建物跡SB03（南西から）
写真図版29　上　掘立柱建物跡SB03（北西から）
中　掘立柱建物跡SB04（北西から）
下　掘立柱建物跡SB05（北西から）
写真図版30　上　掘立柱建物跡SB06（南西から）
中　掘立柱建物跡SB06（北西から）
下　掘立柱建物跡SB07（南西から）
写真図版31　上　掘立柱建物跡SB07（北西から）
中　掘立柱建物跡SB08（北西から）
写真図版32　上左　SB01 P34遺物出土状況（南東から）
上右　SB02 P68遺物出土状況（南西から）
中左　SB02 P86根石出土状況（北東から）
中右　SB02 P89遺物出土状況（北東から）
下左　SB02 P89遺物出土状況（北東から）
下右　SB02 P89・SB03 P90遺物出土状況（南東から）
写真図版33　上左　SB05 P31遺物出土状況（南西から）
上右　SB05 P31遺物出土状況（北西から）
中左　SB05 P31遺物出土状況（北西から）
中右　SB05 P31遺物出土状況（北西から）
下左　SB05 P31遺物出土状況（北西から）
下右　SB05 P32遺物出土状況（北西から）
写真図版34　上左　SB06 P117根石出土状況（南東から）
上右　SB06 P179根石出土状況（北西から）
中左　SB08 P144遺物出土状況（北東から）
中右　SB08 P144断面（北東から）
下左　P40断面（南西から）
下右　P40遺物出土状況（南西から）
写真図版35　上　SB06床面 鉄床石110（左）・土坑SK109（右）（北東から）
中　鉄床石110（北東から）
下　土坑SK109検出状況（南西から）
写真図版36　上　SB06床面 土坑SK109（左）・鉄床石110（右）（南西から）
中　鉄床石110（南西から）
下　土坑SK109（南西から）
写真図版37　上　SB06床面 土坑SK109（左）・鉄床石110（右）（南西から）
中　土坑SK109（南西から）
下　土坑SK109（左）・鉄床石110（右）断面（南西から）
写真図版38　上　SB06床面 鉄床石110断面（南西から）
中　土坑SK109断面（南西から）
下　土坑SK109断面（南西から）
写真図版39　上　SB06床面 土坑SK109底面（北東から）
中　土坑SK109底面（北東から）
下　土坑SK109底面（南東から）
写真図版40　上左　土坑SK01検出状況（南東から）
上右　土坑SK01断面（南東から）
中左　土坑SK01完掘状況（南東から）

中右　土坑SK02断面（南から）
下左　土坑SK78断面（南西から）
下右　土坑SK78遺物等出土状況（南東から）
写真図版41　上左　土坑SK105検出状況（南東から）
上右　土坑SK105断面（南西から）
中左　土坑SK148断面（南西から）
中右　土坑SK148完掘状況（南西から）
下右　土坑SK147断面（南西から）
写真図版42　上左　溝SD19断面（南東から）
上右　溝SD20断面（南東から）
中左　溝SD21断面（南東から）
中右　溝SD22断面（南東から）
下左　溝SD23断面（南東から）
下右　溝SD24断面（南東から）
写真図版43　上左　溝SD26北断面（南東から）
上右　溝SD26南断面（南東から）
中左　溝SD101断面（南東から）
中右　溝SD102南断面（南東から）
下左　溝SD102北断面（南東から）
下右　溝SD114（左）・SD135（右）断面（南東から）
写真図版44　上　溝SD183・SD184・SR185全景（北東から）
中左　溝SD183・SD184全景（北西から）
中右　溝SD183断面（南東から）
下左　溝SD184断面（南東から）
下右　溝SD115土師器皿出土状況（南東から）
写真図版45　上　奈良時代旧河道全景（南から）
中　飛鳥時代遺構面全景（北東から）
下　飛鳥時代遺構面全景（南西から）
写真図版46　上左　旧河道1 人形出土状況（南東から）
上右　旧河道1 人形出土状況（南から）
中左　旧河道1 人形出土状況（南南東から）
中右　旧河道1北半 人形出土状況（南西から）
下左　旧河道1北半 人形出土状況（南東から）
下右　旧河道1北半 人形出土状況（北東から）
写真図版47　上左　旧河道1北半 人形出土状況（北東から）
上右　旧河道1北半 人形冠帽出土状況（北東から）
中左　旧河道1北半 木製品出土状況（南から）
中右　旧河道1 木皿出土状況（北東から）
下左　旧河道2南1区 木製品出土状況（南東から）
下右　旧河道2南2区 杭列B東側 人形出土状況（北東から）
写真図版48　上左　旧河道2南2区 木製品出土状況（北東から）
上右　旧河道2南3区 木簡出土状況（北東から）
中左　旧河道2南3区 斎串出土状況（南東から）
中右　旧河道2南3区 木製品出土状況（北東から）
下左　旧河道2南3区 木製品出土状況（北東から）
下右　旧河道2南2区 木製品出土状況（南東から）
写真図版49　上左　旧河道2あぜ15層 土器出土状

況（南東から）
上右　旧河道2南2区 土器出土状況（南西から）
中左　旧河道2北半 土器出土状況（北東から）
中右　旧河道2北半 土器出土状況（北から）
下左　旧河道2北半 土器出土状況（南東から）
下右　旧河道2北半 土器出土状況（南東から）
写真図版50　上左　旧河道3杭列E付近 木製品出土状況
上右　旧河道3南3区 木製品出土状況（北西から）
中左　旧河道3南3区杭列C内 木製品出土状況（北東から）
中右　旧河道3 須恵器出土状況（南西から）
下左　旧河道3南1区東側下底 馬歯出土状況（北西から）
下右　旧河道3南1区東側 馬歯出土状況（南西から）
写真図版51　上　旧河道1 北壁断面（南東から）
中　旧河道1・2北壁断面（南東から）
下　旧河道1・2あぜ断面（南から）
写真図版52　上　旧河道1あぜ断面 検出面－50～－80㎝（南東から）
中　旧河道2あぜ断面（南から）
下　旧河道2南区あぜ断面（南東から）
写真図版53　上　旧河道2南1区根株検出状況（南東から）
中　旧河道SR185全景（北から）
下　旧河道SR185断面（南東から）
写真図版54　上　旧河道2全景（北から）
下　旧河道2全景（北から）
写真図版55　上　旧河道2南1区杭列A検出状況（南西から）
下　旧河道2杭列A（北から）
写真図版56　上　旧河道2杭列B・C（北東から）
中　旧河道2杭列B・C周辺の状況（北から）
下　旧河道2杭列B断面（北東から）
写真図版57　上　旧河道2・3杭列C（南東から）
下　旧河道2・3杭列C（北西から）
写真図版58　上　旧河道2・3杭列C 横木1枝払痕（北から）
下　旧河道2・3杭列C 横木1伐採痕（北から）
写真図版59　上　旧河道2・3杭列C（南西から）
下　旧河道2・3杭列C断ち割り（北東から）
写真図版60　上　旧河道2・3杭列C断ち割り（北東から）
下　旧河道2・3杭列C横断面（北西から）
写真図版61　上　旧河道2・3杭列C東側（北東から）
下　旧河道2・3杭列C最下部（北東から）
写真図版62　上　旧河道2・3杭列D（北東から）
中　旧河道2・3杭列D（南から）
下　旧河道2・3杭列D 横木2直下草本遺体（北東から）
写真図版63　上　旧河道3杭列E（北西から）
下　旧河道3 杭列E（北西から）
写真図版64　上　旧河道3杭列E（南西から）
中　旧河道3杭列E（北西から）
下　旧河道3杭列E（南東から）
写真図版65　上　旧河道3杭列E・G（南から）
下　旧河道3杭列E（南西から）
写真図版66　上　旧河道2・3杭群出土状況（南西から）
下　旧河道2・3杭群出土状況（南から）

写真図版67　上　旧河道3 須恵器甕出土状況（東から）
中　旧河道3 須恵器甕（東から）
下　旧河道3 須恵器甕取りはずし後（東から）
写真図版68　上　調査区東壁断面北部（南から）
中　調査区東壁断面中央付近～南端（西から）
下　調査区東壁断面（西から）
写真図版69　上　調査区南壁断面（北から）
中　調査区南壁断面（西から）
下　調査区南壁断面（西から）
写真図版70　上　調査区北壁断面西部（南から）
中　調査区北壁断面西部（南から）
下　調査区北壁断面東部付近（南から）
写真図版71　上左　調査前の状況（南西から）
上右　機械掘削状況
中左　平安時代遺構面調査状況
中右　調査風景
下左　掘立柱建物跡調査状況
下右　図化作業
写真図版72　上左　図化作業（2012年度）
上右　工楽善通氏現地指導状況（2012年度）
中左　青木哲哉氏現地指導状況（2012年度）
中右　志筑小学校生見学(2012年度)
下左　現地説明会実施状況（2011年度）
下右　現地説明会実施状況（2012年度）
写真図版73　出土遺物1（土器1）
写真図版74　出土遺物2（土器2）
写真図版75　出土遺物3（土器3・瓦）
写真図版76　出土遺物4（土器4）
写真図版77　出土遺物5（土器5）
写真図版78　出土遺物6（土器6）
写真図版79　出土遺物7（土器7）
写真図版80　出土遺物8（土器8）
写真図版81　出土遺物9（土器9・瓦）
写真図版82　出土遺物10（土器10）
写真図版83　出土遺物11（土器11）
写真図版84　出土遺物12（土器12）
写真図版85　出土遺物13（土器13）
写真図版86　出土遺物14（土器14）
写真図版87　出土遺物15（土器15）
写真図版88　出土遺物16（土器16）
写真図版89　出土遺物17（土器17）
写真図版90　出土遺物18（土器18）
写真図版91　出土遺物19（土器19）
写真図版92　出土遺物20（土器20・瓦）
写真図版93　出土遺物21（土器21・土製品）
写真図版94　出土遺物22（土器22）
写真図版95　出土遺物23（土器23・土製品）
写真図版96　出土遺物24（石器・金属製品）
写真図版97　出土遺物25（木製品1）
写真図版98　出土遺物26（木製品2）
写真図版99　出土遺物27（木製品3）
写真図版100　出土遺物28（木製品4）
写真図版101　出土遺物29（木製品5）
写真図版102　出土遺物30（木製品6）
写真図版103　出土遺物31（木製品7）
写真図版104　出土遺物32（木製品8）
写真図版105　出土遺物33（木製品9）
写真図版106　出土遺物34（木製品10）
写真図版107　出土遺物35（木製品11）
写真図版108　出土遺物36（木製品12）
写真図版109　出土遺物37（木製品13）

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

田井Ａ遺跡が所在する淡路市は、兵庫県淡路島の北部～中央部に位置している。淡路市は、2005年に旧津名郡の淡路町、津名町、北淡町、一宮町、東浦町の５町が合併して発足したもので、田井Ａ遺跡は、旧津名町に属している。

淡路島の中央部には、緩やかな津名山地（丘陵）が南北に延びており、東西は断層によって大阪湾と播磨灘に急傾斜に落ち込んでいる。海岸平野はごく狭いため、旧津名町の市街地は、東海岸線に沿って形成されている。津名山地は、淡路市志筑と郡家を結ぶ谷によって区切られており、この谷部は、淡路島の東西を結ぶ有力な交通路となっている。

田井Ａ遺跡は、この谷部を大阪湾へ流下する宝珠川の南西にあたる平野部にある。この志筑平野の古代地形復元案（伊藤宏幸　2004）によれば、現在は志筑市街地を流れる志筑川は、古代以前においてはより北東寄りの流路を流れており、志筑平野一帯には入江ないしは湿地帯が広がっていたとされる。

第２節　歴史的環境

１　後期旧石器時代～縄文時代

田井Ａ遺跡周辺では、後期旧石器時代の明確な遺跡は知られていない。縄文時代の遺跡としては、老谷遺跡・大円道向遺跡・五反畑遺跡・覗遺跡・八幡遺跡・湯ノ谷池遺跡などの散布地が知られているほか、横入遺跡でも縄文時代の土器が出土しているが、明確な集落遺跡は確認されていない。

２　弥生時代

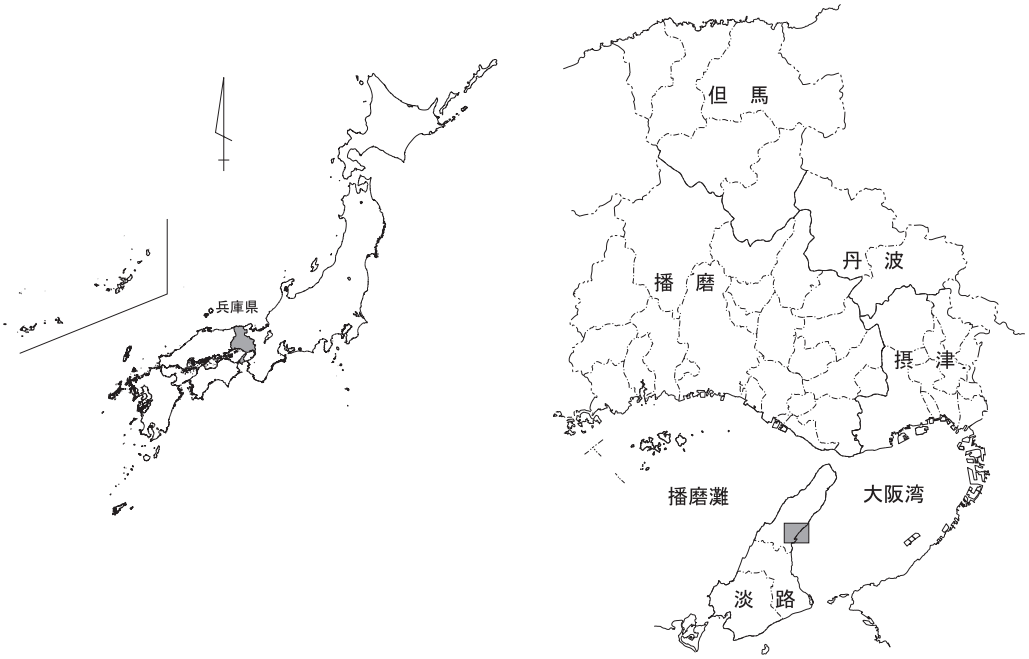
弥生時代になると、志筑平野周辺には複数の集落が成立する。それらのうち天神遺跡は、前期に成立し、中期まで継続しており、地域の中核的集落であった可能性が高い。また横入遺跡では、前期の水田面および旧河道中に杭を打設した堰が検出されている。今回報告する田井Ａ遺跡の下層で縄文時代晩期～弥生時代前期の土器が出土したことを勘案するならば、少なくとも弥生時代前期には、志筑平野の広い範囲が水田として開墾されつつあった可能性を指摘しうる。他に弥生時代の集落、散布地として、田井Ｂ遺跡、古城江Ａ・Ｂ遺跡、佐古遺跡、休場遺跡、権太夫原遺跡、王子遺跡、大谷浜遺跡、品ヶ谷遺跡等が知られている。

３　古墳時代

志筑平野では、古墳時代前期の集落、古墳ともに知られていない。古墳時代後期（6世紀後半～７世紀初頭）には、天神遺跡で集落が成立する。当該期の天神遺跡では、これまで竪穴住居跡は知られておらず、すべてが掘立柱建物跡であることから、通常の集落とは異なる機能が推定されている（伊藤　前掲）。この他に、古墳時代の遺物散布地として、柳原遺跡、池尻遺跡、王子遺跡、大谷浜遺跡、大谷五反田遺跡等が知られている。

４　古代～中世

古代に入ると、志筑地域は大きく変容する。その基点となるのが、淡路島最古の寺院跡とされる志筑



1　田井 A 遺跡　2　田井 B 遺跡　3　黒日東遺跡　4　脇遺跡　5　柳原遺跡　6　船橋遺跡　7　高松遺跡
8　志筑城跡　9　殿下遺跡　10　池尻遺跡　11　横入遺跡　12　志筑廃寺　13　臨池庵池遺跡
14　中田古城跡　15　老谷遺跡　16　大円道向遺跡　17　古城江 B 遺跡　18　佐古遺跡　19　休場遺跡
20　古城江 A 遺跡　21　高場遺跡　22　権太夫原遺跡　23　妙安寺城跡　24　天神遺跡　25　天神北遺跡
26　王子遺跡　27　砂川遺跡　28　黒田西遺跡　29　石畑遺跡　30　傍示谷遺跡　31　大谷傍示遺跡
32　大谷浜遺跡　33　大谷五反田遺跡　34　五反畑遺跡　35　覗遺跡　36　志筑傍示遺跡　37　品ヶ谷遺跡
38　神川遺跡　39　八幡遺跡　40 湯ノ谷池遺跡

第 1 図　田井 A 遺跡の位置と周辺の遺跡

廃寺の成立である。志筑廃寺の創建は、7 世紀末～ 8 世紀初頭とされる。創建時に用いられた瓦には、藤原京と同笵のものが含まれており、同寺院が大和地域との緊密な関係の下に成立したことは明らかである。津名郡の郡衙は、宝珠川沿いに谷を遡って丘陵地帯を越え、播磨灘側へ至った場所に位置する郡家長谷遺跡と推定されているが、大阪湾に面する志筑平野地域も、港湾を通じて畿内に通ずるという地理的重要性を持っていたと推測される。田井 A 遺跡において今回の調査で出土した木簡、人形をはじめとする多数の木製祭祀具は、官衙的性格を強く示唆しており、この時期に志筑平野地域が担っていた役割が注目される。

中世には、それまで入江ないしは湿地状態であった範囲の埋積が進行し、次第に現在の志筑平野の景観が成立したと考えられる。田井 A 遺跡周辺だけをとっても、20 か所以上の中世集落遺跡ないしは遺物散布地が見られるようになり、当該期に、開墾が大きく進んだことを示している。

参考文献

伊藤宏幸編　2004 『志筑廃寺発掘調査報告Ⅰ』 津名町教育委員会

第2章　調 査 の 概 要

第1節　調査に至る経緯

今回の発掘調査は、兵庫県淡路県民局洲本土木事務所が実施する、（二）志筑川床上浸水対策特別緊急事業に先立つものである。兵庫県教育委員会では、平成18（2006）年度に、洲本土木事務所の事業計画に基づいて対象地の分布確認調査を実施した。この分布調査で遺物が採集され、兵庫県教育委員会は洲本土木事務所に対し、事業地内に埋蔵文化財が存在するとした回答をおこなった。

平成19・20（2007・08）年度には、兵庫県教育委員会が、洲本土木事務所の依頼（淡路（洲土）第1990号　平成20年1月30日付　および　淡路（洲土）第1666号　平成20年11月20日付）に基づいて確認調査を実施した。この確認調査で、遺構の存在が明らかとなった範囲について、平成21年度、平成23・24年度の3年度にわたり、洲本土木事務所からの依頼により（淡路（洲土）第1620号　平成21年10月21日付・淡路（洲土）第1089号　平成23年4月21日付・淡路（洲土）第2230号　平成24年3月12日付）、本発掘調査を実施した。

第1表　田井A遺跡調査一覧

調査年度	調査番号	調査種別	調 査 期 間	担　当　者	調査面積（㎡）
2006	2006198	分布調査	2007/3/22	山田清朝・鐵　英記	20,400
2007	2007131	確認調査	2008/2/25　2008/2/27 ～ 2/29	篠宮　正・長濱誠司	64
2008	2008199	確認調査	2008/11/25 ～ 2008/12/15	山本　誠	87
2009	2009225	本発掘調査	2009/11/24 ～ 2010/2/26	西口圭介・久保弘幸	996
2011	2011185	本発掘調査	2011/10/26 ～ 2012/3/19	渡辺　昇・久保弘幸	1,715
2012	2012085	本発掘調査	2012/7/20 ～ 2012/11/16	久保弘幸・鐵　英記	1,624

第2節　発掘調査の概要

⑴　分布調査

分布調査は、上記事業地を対象として、地表面の観察により実施した。調査対象面積は、20,400㎡である。分布調査の時点では、地表面で観察可能な遺構は見いだされなかったが、須恵器・土師器等の散布が認められたため、確認調査を実施することとなった。

【調査の体制】

調査主体　兵庫県教育委員会

分布調査担当者　兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部

調査第1班　山田清朝・鐵　英記

⑵　確認調査

第1次確認調査は、上記事業地を対象として実施した。調査は、2m × 2mの試掘坑16か所を設定して実施した。調査体制は以下のとおりである。

【調査の体制】

発掘調査主体　兵庫県教育委員会

発掘調査担当者　兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部
調査第２班　篠宮　正・長濱誠司

確認調査の結果、試掘坑のうちほぼすべてのトレンチにおいて遺物包含層が検出された。

第２次確認調査は、第１次確認調査で推定された遺跡の範囲を、さらに明確にするために実施した。調査は、試掘坑 10 か所を設定して実施した。調査体制は以下のとおりである。

【調査の体制】

発掘調査主体　兵庫県教育委員会

発掘調査担当者　兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部
企画調整班　山本　誠

確認調査の結果、試掘坑のうち７か所において遺物が検出され、その結果を受けて、田井Ａ遺跡の調査範囲を設定することとなった。

⑶　本発掘調査

【調査の体制】

平成 21（2009）年度の調査

発掘調査主体　兵庫県教育委員会

発掘調査担当者　兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部
調査第１班　西口圭介・久保弘幸

平成 23（2011）年度の調査

発掘調査主体　兵庫県教育委員会

発掘調査担当者　兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部
調査第１課　渡辺　昇・久保弘幸

平成 24（2012）年度の調査

発掘調査主体　兵庫県教育委員会

発掘調査担当者　（公財）兵庫県まちづくり技術センター　埋蔵文化財調査部
調査第２課　久保弘幸・鐵　英記

【調査の方法と成果の概要】

本発掘調査区は３年度にわたり、のべ調査面積は 4,335㎡である（図版１・2）。調査は、重機による表土掘削の後、遺物包含層以下を人力により掘削し、遺構検出作業を実施するという手順でおこなった。また遺構面の図化は空中写真測量によったが、個別遺構の平面・断面図は調査担当者が作成し、あわせて写真撮影も実施した。

平成 21（2009）年度の調査では、996㎡の調査を実施した。この調査では、上層水田面とともに、多数の溝が検出された。この調査過程で、調査区北東端および北西壁際で下層遺構の有無を確認するためのトレンチ調査を実施した結果、調査区北東端では旧河道と、後に杭列Ｂと呼称される杭および板が検出された。また、調査区北西壁際のトレンチでは、下層水田の存在が確認された。このため、上層水田の調査終了後、下層水田の一部について本発掘調査を実施した。

平成 23（2011）年度の調査では、1,715㎡について本発掘調査を実施した。この調査では、前回調査

で検出された下層水田、および旧河道について調査が実施され、少なくとも３条の重複した旧河道の存在と、杭列Ｂ・Ｃが確認された。

平成 24（2012）年度の調査では、1,624㎡が調査対象となった。前年度には調査期間の関係上、杭列および旧河道を完掘することができなかったため、前年度調査区の一部も調査対象となった。この調査では、調査区北東部で中世の掘立柱建物跡群が検出されたほか、８か所に杭列が構築された旧河道部、および下層水田が調査された。

調査の結果、本遺跡では次章以降で詳述するとおり、少なくとも上下３面の遺構面から、掘立柱建物跡、柱穴、土坑、溝、旧河道、杭列（井堰）、水田跡等が検出された。

第３節　整理事業の概要

整理事業は、平成 22（2010）～平成 26（2014）年度に、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部において実施した。整理事業は同調査部整理保存課の所管の下に実施され、非常勤嘱託員が各作業を担当した。木製品および金属器の保存処理については、同課の岡本一秀が実施した。本書に収録した遺物写真については、年度ごとに（株）地域文化財研究所、（株）タニグチフォト、（株）クレアチオに委託して撮影を実施した。また、出土遺物等の自然科学的分析を、下記の通り委託によって実施し、その成果は本書に収録している。

【自然科学的分析委託】

（株）加速器分析研究所	放射性炭素年代測定
パリノ・サーヴェイ（株）	木製品樹種同定
（株）古環境研究所	木製品樹種同定・種実同定・動物遺存体同定・昆虫遺体同定
（株）パレオ・ラボ	花粉分析

なお、整理事業に携わった非常勤嘱託員は以下のとおりである（順不同）。

今村直子、家光和子、小林俊子、渡辺二三代、小林陽子、村上令子、嶺岡美見、吉村あけみ、島田留里、高瀬敬子、西口由紀、柏原美音、栗山美奈、池田悦子、杉村明美、宮田麻子、森本貴子、八木和子、加藤裕美、佐々木誓子、榎真菜美、小野潤子、藤尾裕子、桂　昭子、浜脇多規子、河合たみ、加古千恵子、荻野麻衣、島村順子、上田紗耶香、藤池かずさ、平宮可奈子、佐々木愛、菅生真理子、遠藤貴子、柴垣良樹、前谷幸次、松本恵梨子、梶原奈津子、古谷章子、寺西梨紗

また、木簡の文字釈読については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の山本崇氏に依頼しておこなった。

なお本発掘調査時に、本遺跡の成立に至る地形形成過程を明らかにするため、青木哲哉氏（立命館大学）の指導の下に実施した、深掘トレンチによる調査成果については、青木氏より玉稿を頂戴し、本書第４章に掲載している。

本報告書に収録した遺物、写真、図等については、すべて兵庫県立考古博物館に保管している。

第３章　遺構と遺物

第１節　層序と遺構面の位置

１　本発掘調査区の位置（図版１・2）

本発掘調査区は、志筑川と宝珠川に挟まれた平野部に位置し、宝珠川の南に隣接している。北西側には標高 40 ～ 50m を測る丘陵が広がり、南東側には大阪湾を望む。これまでの調査によれば、田井Ａ遺跡から北東側の平野部は、弥生時代以前には深く入り込んだ湾となっており、以降、次第に埋積が進行して、中世に至り現在のような平野が形成されたと考えられている（伊藤宏幸編　2004）。

田井Ａ遺跡で人の活動が行われた期間の多くの部分で、遺跡周辺は洪水の影響を受けやすい、低湿な環境下にあったのであろう。平安時代末～鎌倉時代に至り、ようやく集落を営みうる微高地が形成されたと思われるが、その段階においても、微高地は宝珠川に沿った限定された領域であり、周辺には低湿な環境が継続していたと思われる。

調査区付近の現在の標高は 9.5 m、遺構面の標高は、平安時代の遺構面が 9.0 m、奈良時代の遺構面（上層水田）が 8.8 m、飛鳥時代の遺構面（下層水田）が 8.2 ～ 8.4 m付近にあたる。

２　調査区内の層序と遺構面の位置

図版３・４には、本発掘調査区全周壁面の地層断面図を掲載している。これは、３年度の調査において分層、図化したものであるが、全周を掲載する縮尺の関係から、調査時点では細分されていた地層を、時期ごとに包括し、地層の色調、粒度等の記載も、各層を代表する層相を掲載している。

第Ⅰ層・第Ⅱ層　調査区内では、表土層（第Ⅰ層：水田耕土）下に、砂質シルトから成る３～４層に細分される古水田土壌が見られる（第Ⅱ層）。これらは、包含される遺物から近世～近代に相当すると考えられ、本発掘調査範囲内全域に広がっている。

第Ⅲ層　第Ⅱ層の下位には、シルト混砂～細砂を主体とし、粗砂を含む古土壌層（第Ⅲ層）が、調査区内に広く認められる。この古土壌層は、土壌化の程度によって２～３層に細分されるが、いずれも平安時代～鎌倉時代の遺物を包含する。調査区北東部では、第Ⅲ層直下の面で、平安時代中期の遺構が検出されたが、その他の領域では遺構は検出されておらず、大きく離れた 2011 年度調査区南西部の北壁際で、同時期の溝（SR04）が検出されている。

第Ⅳ層　第Ⅲ層の下位には細砂～粗砂を主体とした洪水砂層が堆積している（第Ⅳ層）。調査区中央部付近の一部では、この砂層が断続する部分が見られるが、概ね、調査区全域に分布しており、場所によっては下位の第Ⅴ層を浸食している状況を確認できる。調査区中央の旧河道部上層付近では、旧河道内の堆積物と第Ⅳ層の洪水砂の明確な重複関係を把握することはできなかった。

第Ⅴ層　第Ⅴ層は、シルトから細粒の砂を主体とする古土壌層である。調査区北部と、南西部では認められなかったが、その他の領域には広く堆積しており、調査区中央部では、この層準で水田遺構（上層水田）が検出された。奈良時代の古水田土壌と考えられる。

第Ⅵ層　細砂～粗砂を主体とした洪水砂層で、場所により３～４層に細分される。調査区北部～北西部では、第Ⅳ層によって浸食を受けているが、ほぼ調査区全域を覆う層である。

第Ⅶ層　特徴的な黒色の粘土～シルトから成る古水田土壌である。上面を覆う第Ⅵ層中の遺物から、当

該水田は７世紀代以前に営まれたものと推定される。調査区のほぼ全域に広がっているが､水田遺構（畦畔）は調査区北西側で遺存状況が良好である。

第Ⅷ層　第Ⅶ層の下位に堆積する、青灰色～緑灰色の粘土～シルト層である。調査区中央部、北東壁際などで、本層より縄文時代晩期～弥生時代前期の土器が少量出土している。

旧河道　調査区中央部に位置し、ほぼ北 - 南の方位をもっている。調査区の壁面における観察では、多数回にわたって河道の形成と埋没があったものと思われるが、平面的に識別可能であったのは、旧河道１～３の３条である。河道内はシルト～砂礫によって埋積されていたが、主体となるのは砂～砂礫層であり、一定の流量をもった河道であったと思われる。

河道内からは奈良時代～平安時代初頭に属する、多数の土器・木製品が出土していることから、当該期間に形成され、埋没した河道であったと判断される。旧河道が、上層水田（奈良時代）を浸食し、かつ、第Ⅲ層（平安時代中期以降）に被覆される点からも、この判断は首肯される。

第２節　飛鳥時代の遺構と遺物

１　概要

飛鳥時代の遺構は、調査区中央部から北東部にかけて検出された、水田遺構（下層水田）である。黒色粘土～シルト層に造営された水田面で、その上面は厚い洪水砂に被覆されている。水田面からの出土遺物はほとんど見られなかったが、洪水砂中に包含される遺物が、概ね７世紀代と推定されることから、下層水田についても、飛鳥時代の所産と判断した。１条の大畦畔とこれに取りつく小畦畔から成る。

以下では、水田面の状況を記載するとともに、水田面を被覆する洪水砂中の遺物について記載をおこなう。

２　遺構（図版５　写真図版６～９・11・12・18・19・45）

下層水田面は、１条の大畦畔と 12 条の小畦畔が検出されたほか、水田面より多数の足跡が検出された。

大畦畔は、基底部の幅 1.5 ～ 2.0m、頂部の幅 0.9 ～ 1.2m、高さ 25 ～ 40㎝を測る。北東 - 南西方向にほぼ直線的な延びを見せ、旧河道によっておよそ 25 ｍが浸食されたと考えられる。この流失部分を含めると、大畦畔の延長は 97 ｍに達する。この大畦畔に直交方向に延びる明確な大畦畔は検出されなかったが、その痕跡かと推定される土色の違いが、図中に破線で示したとおり、調査区南西部および調査区東部の壁際で検出されている。

小畦畔は、基底部の幅 0.6 ～ 1.0m、頂部の幅 0.4 ｍ前後、高さ 20 ～ 25㎝を測る。大畦畔に直交して取りつくものが見られるほか、大畦畔にほぼ平行して 23.5 ｍの延長を測るものが見られる。小畦畔相互も直交するものが目立つが、大きく湾曲するものも一部に見られる。

大小の畦畔で区画された水田のうち、面積の算出が可能なもの５筆についてその面積を示すならば、水田１が 33.2㎡、２が 28.0㎡、３が 66.6㎡、４が 60.5㎡、５が 28.5㎡となり、相当のばらつきが認められる。

水田面上からは、極めて多数の足跡が検出された。そのすべてを記録することはできなかったが、一部の水田で図化をおこなった（図版 6）。これによれば、足跡には明らかに人と判断できるものと、偶蹄類のものが混在している。前者の場合、遺存状況が良好な足跡では、指先、土踏まず等が識別できるものも見られることから、これが人の足跡であることに疑問の余地はない。偶蹄類の足跡は、その形状からウシの可能性が高いと判断している。

３　遺物（図版 42・43　写真図版 93・94）

下層水田面に直接的に伴うと判断された遺物はない。しかし下層水田の上面を被覆する洪水砂層からは、土師器、須恵器、土製品等が出土しており、下層水田の時期を推定する鍵となったため、第５節の内容と重複するが、本項でもこれらについて触れておく。

216 ～ 222、230、234、235、238、240 は、いずれも下層水田を被覆する洪水砂あるいは、その上面付近にあたる上層水田の遺構検出面より出土したものである。216 ～ 220 は須恵器の杯Ｈである。216・217 は蓋で、216 にやや古い様相が認められる。218 ～ 220 は身で、形態に差はあるが時期的には近いものと思われ、蓋よりも新しい。

221 は土師器の杯Ａ、222 は皿Ａの破片である。

230 は製塩土器であろう。粘土紐の継目が残る。

234・235 は土馬の脚である。外面はヘラケズリによって成形され、ナデ調整が施される。234 での足の表現はやや曖昧で穿孔は貫通している。235 では蹄の表現がなされ、穿孔は上下からされているが、貫通はしていない。

238・240は須恵器の杯Hである。238は蓋で、天井部は丸みを帯び、口縁部との境界が曖昧になっている。240は身で、体部が浅くなり、平底化している。7世紀まで下るものと思われる。

４　小結

下層水田は、直線的な大畦畔と直交する小畦畔という、きわめて規格性の高い水田面である。区画された各水田の面積にばらつきが多いことと、典型的な条里型地割りと比較すると、水田区画の形態が異なることから、これを条里型地割と断ずるにはなお躊躇が伴う。しかし、今回検出された下層水田が、地形に沿って個々に造営され、その結果、不定形な水田が連鎖する「小区画水田」とは大きく異なることには疑問の余地がなかろう。

水田の造営時期は明らかではないが、水田面を被覆する洪水砂層より、古墳時代後期～飛鳥時代の須恵器が出土することから、飛鳥時代を大きく下らない時期に厚い洪水砂で覆われ、その結果廃絶したとするのが穏当であろう。

このような規格性の高い水田面が、集落を単位とした個別的な開墾によって造営されるとは考え難い。田井Ａ遺跡の西方約500ｍに、淡路最古の寺院跡と言われる志筑廃寺が存在することを勘案すれば、法隆寺周辺に古い条里型地割が認められるのと同様、田井Ａ遺跡周辺に早い段階から条里型地割が形成されつつあった可能性を指摘しても大過あるまい。

今回の調査では、残念ながら直交方向の確実な大畦畔を検出することはできなかった。また、原地表に見られる条里型地割の、坪境までを調査対象とすることができなかったため、下層水田面が、原地表の坪境付近でどのような形態を示すかについては不明のままであり、調査上の今後の課題と言えよう。

第３節　奈良時代の遺構と遺物

１　概要

当該時期に相当する古土壌層は、調査区内に広く堆積するが、遺構面は調査区中央部のみで検出された。これは、当該期の遺構が旧河道を除けば水田面（上層水田）に限られており、畦畔の遺存状況が良好な部分でのみ検出が可能であったという事情によるものであろう。以下では、当該期の遺構と遺物について、上層水田と旧河道部を中心に記載をおこなうが、記述の便宜のため、水田面およびこれに重複する溝群と、旧河道とに区分して記述を進めるものとする。なお、上層水田面とした遺構の一部は平安時代に属するが、編集の都合上本節で記載する。

２　奈良時代の遺構と遺物

⑴　遺構と遺物

ア　上層水田面（図版７～11　写真図版１～５・９・10）

上層水田面及び水田面に伴う遺構としたものは、平成21年度（2009）調査区及び平成23年度（2011）の調査区において検出された遺構である。2011年度の調査区は、2009年度調査区の西側及び南側に拡張した調査区であることから一括して記述する。

㈠　概要（図版７）

両年度をあわせた調査区の東西延長は約73ｍである。奈良時代(8世紀)～平安時代前期(9～10世紀)の遺構を検出した。

調査区全域にわたって、各時期の水田面とこれに伴う畦畔・溝、水田祭祀に伴う土器、旧河道１、埋没した旧河道１の痕跡に沿って走る溝、噴砂などを検出した。

このなかで、奈良時代の水田畦畔が、基本的に南北に近い方向を保って延びているのに対し、平安時代前期の畦畔は、現地表の水田区画とほぼ同一の方向性をもつことが判明した。

㈡　遺構

遺構検出は８世紀代の遺構面において一括して実施したため、遺構面に被覆する洪水砂層を挟んだ上面の平安時代の遺構についても同一面において検出している。ここでは煩雑さを避けるため、通常まとめにおいて施す時期ごとの遺構の分類を行い、概ね４期に分類し、遺構について述べてゆく。

Ⅰ期　８世紀前半の遺構

南北方向に走る畦畔（畦畔１～10）　調査区の中央から東半にかけて南北方向に走る畦畔を９条、東西方向に走る畦畔10を検出している。これらの畦畔は高さはごく低く、幅40～60㎝を測る小畦畔である。全体に緩やかに蛇行するが、残りの良い畦畔４・５ではN5°Ｅ～N10°Ｅ、畦畔１・２ではN2°Ｗを測る。畦畔４・５間は約６ｍを測る。また、畦畔４・５・８は北端で途切れており、畦畔５と６の間から畦畔２に向かって東西方向（N80°Ｅ前後）に走行をとる畦畔もしくは段差が存在した可能性が想起される。これら南北方向の畦畔は、Ⅱ期の畦畔と切り合い先行する。

Ⅱ期　８世紀後半～９世紀の遺構

現地表に近い走行をもつ畦畔Ⅰ（畦畔11～20）　調査区中央北よりを中心に、調査区に対して並行もしくは直交する畦畔を検出している。これらの畦畔は高さはごく低く、幅40～60㎝を測る小畦畔である。畦畔11は調査区の東半から西端まで縦断しており、N51°Ｅ～N52°Ｅの方位をもつ。また、畦畔17は分枝し北側へと延びる。畦畔12は畦畔11と約2.5ｍの間隔をあけて並行しており、畦畔13・15・16が分枝している。N55°Ｅの方位をもつ。畦畔14は畦畔12と約1.4ｍの間隔をあけて並行して

おり、屈曲し南へと延び、水田の方形区画の一部を造りだしている。畦畔の残りは全体に悪く、水田一枚の規模は不明であるが、畦畔 13・14 あるいは畦畔 11・15 が限る東西方向は一辺約 7 m前後を測る。また南北方向の規模については、畦畔 11･12 間では 2.5 mと狭く、傾斜の変換点であった可能性が高い。これらの畦畔はⅢ期の畦畔・溝に切られている。

畦畔 12 及び溝 11 の西端南側より、土師器長胴甕 1 点（37）が出土している（図版 10　写真図版 3）。甕に伴う土坑などの施設は検出されなかった。甕は西側に口縁部を向けて横倒しの状態で圧潰している。出土位置が、溝・畦畔の先端にあたることからⅡ期の水田の水口祭祀などに伴う可能性が考えられる。甕の時期は 8 世紀後半と考えられ、Ⅱ期遺構面の時期を推測する資料である。

溝　SD09　SD05 の北側に位置する。N45° W に走る。全長約 2.5 m・幅 25㎝・深さ 8㎝を測る丸底の溝である。暗灰黄砂によって埋没している。

溝　SD11　畦畔 12 の内側に沿って東西方向、N51° E に走る。全長約 7 m・幅 22㎝・深さ 9㎝を測る丸底の溝である。暗灰黄砂によって埋没している。

旧河道 1　2011 年度に調査を実施した。調査区の東端を蛇行しつつ南流する旧河道である。検出全長 30 m、幅 4 ～ 6 mを測る。河道内からは木製祭祀具人形・馬形、折敷、槽などが出土している。木製人形は 8 世紀末から 9 世紀初頭の時期が考えられる。この他、縄文時代～奈良時代の土器が多量に出土している。河道は埋没した後も旧地形に痕跡をとどめ、Ⅳ期では蛇行する溝 SD01 ～ SD03・SD06・SD10 を形成したと考えられる。

Ⅲ期　9 世紀の遺構

現地表に近い走行をもつ畦畔Ⅱ（畦畔 21 ～ 31）　調査区全域に、調査区に対して心持ち斜行する畦畔群を検出している。畦畔の幅はそのほとんどが約 20㎝から 50㎝に収まり小畦畔に属するものである。調査区の北端には畦畔 3 及び畦畔 22 が東西方向 N45° E に走っており、これらの畦畔に伴って溝 SD08 が検出されている。畦畔 3・22 は高さはごく低く、幅 40 ～ 50㎝を測る。

畦畔 23・25・畦畔 31 は調査区を南北方向に横断しており、N15° E ～ N22° W の方位をもつ。このうち､畦畔 31 は畦畔 22 より分枝しており､畦畔 31 で分けて東側と西側の水田面は大きくレベル差を持っている。畦畔 25 は埋没した旧河道の肩にあり、他の南北方向の畦畔に比べ幅 0.8 mと広い。畦畔 31 とともに水田区画の東西方向を大きく限る役割を持っていた可能性が高い。畦畔 25・畦畔 31 間の幅は約 25.5 mである。

各畦畔の残りは全体に悪く、水田一枚の規模は不明であるが、畦畔 25・31 間の大きな区画に対して、畦畔 30・31 間は東西幅約 4.5 m、畦畔 26・27 間は南北約 4.3 m、畦畔 23・24 間は東西約 2.0 mと南北・東西ともに狭い。地形の凹凸に合わせ、大きく区画した中を更に細かく区画していた可能性が考えられる。

Ⅳ期　10 世紀の遺構

更に上層の水田の土壌化によって水田畦畔等の詳細なあり方が不分明な時期の遺構である。

溝 SR04　2011 年度に調査を実施した。調査区の北西端より出現し東走して北へ屈曲をみせる大型の溝である。検出長東西全長約 18 m･幅 2.3 m･深さ 0.8 mを測る丸底の溝である。走行は N51° E にとる。主に灰黄砂によって埋没している。溝は北側へ直角に屈曲しており、その在り様から集落・館を区画する溝である可能性が高い。溝内より黒色土器が出土しており 10 世紀代の時期と考えられる（図版 10）。

溝 SD01・SD02・SD03・SD06・SD10　これらの溝は調査区の東端にかたまり、北東から南西に流

れる溝である。SD01・SD06がⅢ期の畦畔23・25を切っており、Ⅲ期よりも新しいと判断している。その位置からこれらの溝は旧河道1の凹みに流れ込んだ自然流路と考えられ、蛇行し主に暗灰黄砂によって埋没している。SD06は顕著な蛇行をみせ、幅1.25 m・深さ20cmを測る比較的規模の大きい溝である。上半が黒褐極細砂質シルトによって埋没しており、よく土壌化している。

噴砂　SD06の埋土を切って噴砂が検出された。立ち上がりはSD02・SD03埋土と同じ暗灰黄砂層の半ばに至っている。検出長約1.6 m、走行はN48° Wにとる。

溝SD05　調査区南端を東西方向、N40° Eに走る。Ⅲ期では主に上層の溝が機能していたと考えられ、検出全長24.5 m・幅0.6 m・深さ0.25 mを測る丸底の溝である。にぶい黄褐色極細砂によって埋没している。溝下層は、下層遺構と共に精査を実施した。検出全長24.5 m・幅1.2 m・深さ0.4 mを測る逆台形の溝である。Ⅲ期に至るまで3回前後掘り直されている。

溝SD08・SD08南分枝・SD04　SD08は畦畔3・畦畔22を両肩にもち東から西へN45° Eに走る。検出全長37.5 m・幅0.6 m・深さ0.15 mを測る断面皿状の溝である。SD08の東端・西端は土地区画の屈曲に合わせて緩やかな蛇行をみせており、溝のあり方から水田の用水路として機能していたと考えられる。暗灰黄砂によって埋没する。SD08南分枝はSD08より分枝し南へと流れだす自然流路と考えられ、SR04もまた、その延長にあたると考えられる。SD05の中層に流れ込む。SD08南分枝からSD04を含めた検出全長は約18 m、幅0.25 m・深さ0.05 mを測る。断面は浅い皿状を呈する。暗灰黄砂によって埋没する。

溝SD12　畦畔30の西肩に沿って、北から南へN20° Wに走る溝である。検出全長6 m・幅0.4 mを測る。残りが悪く全容は不明である。

(ウ)　遺物（図版31　写真図版76）

29～31はSR04から出土した。29は土師器の椀で、内面にヘラ磨きを施す。30は黒色土器A類の椀底部で見込み部に平行に施された暗文が認められる。31は須恵器の杯Aである。底部はヘラ切りの後ナデを施している。

32は土師器甕の口縁片である。SD01から出土した。

33は土師器甕の口縁部片である。奈良時代に属する。34は須恵器甕の口縁部片である。いずれもSD05から出土した。

35は須恵器の杯蓋である。口径から考えて杯Bのものと思われる。飛鳥時代～奈良時代初めに属する。SD08から出土している。

36は須恵器の口縁部片である。瑳のものと思われる。P3から出土した。

37は土師器の甕である。1個体分が水田面で固まって出土した。使用痕を持たないものである。

3　旧河道の遺構と遺物

(1)　概要

旧河道は調査区中央部を、北 - 南に横断しており、調査区の壁面における観察では、複雑に重複する3～6条が存在したものと思われるが、調査時に平面的に識別可能であったのは、旧河道1～3の3条である。旧河道は1が最も新しく、3が最も古く形成されたものである。なお調査時に付された遺構名は、本報告書の記載名とは異なるため、その対照を各河道ごとに示した。

河道内からは奈良時代～平安時代初頭に属する、多数の土器・木製品が出土していることから、当該期間に形成され、埋没した河道であったと判断される。旧河道が、上層水田（奈良時代）を浸食し、か

つ、第Ⅲ層（平安時代末～鎌倉時代）に被覆される点からも、この判断は首肯される。

旧河道のうち２・３内からは、少なくとも８か所の杭列が検出された。それらのいくつかは、河道内の堆積物中で明瞭な上下関係をもつことから、河道が埋没するに従って、順次構築されたものと考えられる。また、河道の最下底部からは、須恵器の甕を埋設した遺構が検出された。

⑵　旧河道１（SR02：2011・SR170：2012）

ア　遺構（図版 12）

最も新しく形成された旧河道１は、調査区北西壁から緩やかに蛇行しつつ南流して、旧河道２・３の堆積物を浸食して南東壁に至る。河道は深いＶ字形からＵ字形の断面形を示し、特にその下底部はコブル級を含む砂礫層によってＶ字形ないしは深いＵ字形に浸食、埋積されていた。

旧河道１内には、旧河道２・３のような杭列は設けられていないが、これは本河道の形成と埋没が、ごく短期間のうちに継起したことを示唆するものであろう。

⑶　旧河道２（SR01：2011・SR171：2012）・３（SR03：2011・SR186：2012）

ア　遺構（図版 12）

旧河道２・３は、調査区内ではほぼ並行しつつ旧河道２が３の堆積物を浸食していることから、３の埋没後に２が形成されたことは明らかなように見える。しかし、この２条の旧河道は、場所によってはほぼ完全に重複していること、河道内がほぼ同様の堆積物で埋積されていること（図版 13）、本発掘調査時に断面で検討したところでは、平面的に捉えられた２条の旧河道が単純に重複しているのではなく、実際には幅の広い河道内で、埋没の進行とともに分岐・合流を繰り返す、複雑な流路の変遷があったと考えられること等から、一括して記載をおこなう。

上記２つの河道を合わせた広い河道の縁辺からは、河畔林と思われる根株が多数検出されたこと、河道を埋積する堆積物が、砂、砂礫を主体としつつも、ラミナが見られる細粒の堆積物や、草本類遺体の堆積、腐植質を含む粘土～シルトを含むこと、河道内に多数の杭列が設けられていたこと等から、河道の形成から埋没までには、一定の期間を要したことは明らかである。

以下では、河道内より検出された杭列、須恵器埋設遺構等について記載をおこなう。

㈠　杭列Ａ（図版 14・15　写真図版 55）

杭列Ａは、旧河道の北半部に位置する。１列 15 本の杭から成り、杭列の延長は 2.7 ｍを測る。最も高位にある杭頂部の標高は 8.5 ｍ前後を測り、杭の長さは 40 ～ 90㎝を測る。流路にほぼ直交する杭列であることから、井堰の機能が推定される。

㈡　杭列Ｂ（図版 14 ～ 16　写真図版 13・15・16・56）

杭列Ｂは、旧河道の南東半部に位置する。１列 10 本の杭と、幅 20㎝、長さ 180㎝の板１枚（図版 58　151：モミ属）から成り、杭列の延長は 5.4 ｍを測る。最も高位にある杭頂部の標高は 7.8 ｍから 7.9 ｍの間にあり、杭の長さは 20 ～ 80㎝を測る。流路にほぼ直交する杭列であることから、井堰の機能が推定される。

杭列Ｂは、2009・11 年度調査区の北東壁際に位置していたため、両年度には検出および平面図の作成を実施したのみでそのまま埋め戻しをおこなった。2012 年度に改めて全体を調査しようとしたが、先の調査で検出されていた杭のうち、少なくとも５本の劣化が進行して、再調査することができなかった。このため、図版 16 で示した平面図と、同 15 で示した断面図の杭の数が整合していない。

㈢　杭列Ｃ（図版 14・16・17　写真図版 13・14・56 ～ 61）

杭列Cは、大型材を横木に用いた杭列C1を中心に、約25㎡の範囲に打設された一群の杭と横木から構成される。検出当初は、視覚的に判断してこれらを同一の遺構と考えていたが、調査の結果、少なくとも4段階に分離しうる可能性が高いという結果を得た。以下では、大型材の横木を含む一群をC1、その北側に位置する一群をC2、C1の南に接し、C1より低い位置にあるものをC3と呼称して記述を進める。

a 杭列C1

杭列C1は、旧河道2の南東壁際に位置し、その南東端は調査区外へと延びる。基底部の幅約2m、頂部の幅約0.7mを測る、河道北側の肩部から河道中央部にかけて設けられた土手状の盛土上（図版17）に、少なくとも2列24本の杭と、直径36㎝、長さ4.5mを超える大型の横木によって構築された、大規模な杭列である。最も高位にある横木頂部の標高は約8mであり、これに伴う杭の長さは80㎝～115㎝を測る。杭列は横木の両側に、これを支えるように打設されている。流路にほぼ直交する杭列であることから、大規模な井堰の機能が推定される。これは本来、北～南西に蛇行しつつ流下していた河道内に貯水し、南東方向に導水したものと推定され、奈良時代の農業用水を供給する機能を有していたものと推定してよかろう。

b 杭列C2

杭列C2は、杭列C1の北東に位置する。2列17本の杭と、直径5～10㎝、長さ1.1～2.5mの横木4本から成り、杭列の延長は3.2mを測る。最も高位にある杭頂部の標高は7.9m前後である。杭の長さは20～125㎝を測る。調査時点では、この杭列はすべて同時に打設されたものと判断していたが、杭列の垂直投影図を作成して検討したところ、17本の杭のうち、5本は明らかに杭の下底レベルが高いことから、C2そのものが2段階に分離しうるものと判断するに至った。杭列の方向は、C1に対してやや斜行しているものの、この位置での旧河道の方向にはほぼ直交することから、井堰の機能が推定される。

c 杭列C3

杭列C1の南西に接する位置にあってほぼC1と平行し、南東端は調査区外へと延びる。検出レベルを最頂部で比較すると、C2はC1よりも80～100㎝ほど低い位置にある。少なくとも杭13本、横木4本から構成され、杭列の延長は4.6m以上を測る。杭の長さは70～190㎝を測り、横木は直径5～12㎝、長さ3.0～4.2mを測る。

杭列C3の杭は、杭頂部と杭先端部を直線で結ぶと、すべての杭が水平面に対して20°～31°という大きく傾斜した状況で検出された。また1本を除き、すべての杭は横木より上位にある。このような緩斜度で杭を打設することそのものが困難であること、こうした緩斜度の杭の直下に横木を設置することによって、何らかの機能が付与されるとは考えがたいこと、今回の調査で検出された他の杭列では、ほとんどの杭が垂直ないしはこれに近い角度で打設されていること等から、C3は、本来垂直に打設されていた杭とこれに伴う横木が、何らかの要因で倒壊した状態であった可能性が高いと判断される。

㈥ 杭列D（図版14・18　写真図版62）

杭列Dは、旧河道の北壁際に位置する。1列8本の杭と、最大径10㎝、長さ210㎝、および260㎝を測る2段に組まれた丸太材の横木から成り、杭列の延長は2.8mを測る。最も高位にある杭頂部の標高は7.5mであり、杭の長さは56～85㎝を測る。河道の分岐部に設けられており、流路にほぼ直交する杭列であることから、井堰の機能が推定される。

㈦ 杭列E（図版14・19・20　写真図版63～65）

杭列Ｅは、旧河道の北半中央に位置する、多数の杭および横木の一群を一括したものである。多数の杭および横木が明示的に分離できなかったため、一括して杭列Ｅとしたが、本来は複数の杭列であった可能性がある。また、東側に隣接する杭列Ｇとの境界は明瞭ではない。

少なくとも並行する２列 17 本の杭と、方位を異にする１列 14 本の杭、および５本の横木から構成されている。横木の直径は最大約 10㎝を測る。最も高位にある杭頂部の標高は 8.4 ｍであり、杭の長さは最大で約 130㎝を測る。並行する２列の杭列は河道に平行し、他の１列はほぼ直交する。前者については護岸であった可能性が、後者については井堰の機能が推定される。

㈥　杭列Ｆ（図版 14・18）

杭列Ｆは、旧河道の北半部に位置する。１列７本の杭と、最大径 8㎝、長さ 103㎝を測る丸太材の横木から成り、杭列の延長は 1.8 ｍを測る。最も高位にある杭頂部の標高は 7.75 ｍであり、杭の長さは 82㎝～ 100㎝を測る。流路にほぼ直交する杭列であることから、井堰の機能が推定される。

㈦　杭列Ｇ（図版 14・19・20　写真図版 63）

杭列Ｇは、旧河道北東側に位置し、杭列Ｅとの境界は不鮮明である。12 本の杭と、最長２ｍを測る 10 数本の丸太材から成り、杭列の延長は 3.6m を測る。丸太材は杭列とは接しておらず、本来、杭列の構造物であったのか否か、判断に苦しむ。最も高位にある杭頂部の標高は 7.9 ｍであり、杭の長さは 56 ～ 100㎝を測る。杭列は河道の縁辺にほぼ平行しており、堰としての機能と判断することはできない。むしろ導水施設的な機能を果たしていた可能性も指摘しうる。また杭列Ｇの位置する河道の北東縁辺では、河道底が大きく凹んでいることから、貯水に伴う施設であった可能性もあろう。この凹部から土師器甕、須恵器瑳、馬歯等が出土している。

㈧　杭列Ｈ（図版 14・21）

杭列Ｈは、旧河道の北半に位置し、２列４本の杭から成ると考えた。杭列の延長は 2.2 ｍを測る。最も高位にある杭頂部の標高は 7.82 ｍ、杭の長さは 68 ～ 97㎝を測る。しかし、２列の杭列の間が１ｍ以上離れていることから、これらが同時にひとつの杭列を構成していたものかどうか、疑問が残る。

東側の２本の杭には、樹木の枝とともに草本遺体が多量に覆いかぶさった状態であった。流路にほぼ直交するように見えるが、全体の構成に疑問の余地があり、機能の推定は困難である。

㈨　埋設杭群（図版 14・21　写真図版 66）

旧河道南部の下底の凹部で、杭５本がまとまって出土した。厳密な意味で遺構と言えるか否か議論の余地はあるが、杭の一括保存であった可能性を考慮して、ここで記載する。

杭は旧河道下底の凹部に、折り重なるように置かれており、1.2 ～ 1.4 ｍのもの３本と、2.1 ～ 2.2 ｍのもの２本から成る。いずれも丸太杭であるが、先端は丁寧に加工されて尖り、いずれも使用可能の状態であった。太さや長さ等の要素が、河道内の杭列と共通することから、余剰の杭を保存するために河道底で水没させていた可能性があろう。

㈩　須恵器設置遺構（図版 14・21　写真図版 67）

旧河道３南部の杭列Ｂに接する河道底で、完形を保った大型の須恵器甕（127）が、設置された状況で出土した。甕は、河道底をわずかに掘り窪めた中に、ほぼ直立の状態で置かれており、器体の大部分は河道内に堆積した砂で埋没していた。須恵器内部も砂で充填されており、内部からの出土遺物は見られなかった。出土状況から、甕は、河道底に意図して設置されたものと考えられる。

127 は体部外面にタタキを施した後、体部中位～頸部にかけてカキメ調整を施し、内面は同心円タタ

キを施している。肩部から体部上半に濃密な自然釉が流れ、他の小型須恵器が複数融着するほか、火脹れが多数見られる。底部外面には3箇所円形の変色部分が認められ、これは焼台痕と考えられる。

なお、この甕の内部を充填していた堆積物を水洗選別した結果、多数の種子が得られた。これらについては同定を委託し、その結果は本書第4章に掲載している。同定結果によれば、甕内部より出土した種実類は、ヤマモモ、ブナ科、カジノキ、クスノキ科、サンショウ属、ノブドウ、ブドウ属、ブドウ科、クマノミズキ、ホタルイ属、スゲ属、タデ属、キンポウゲ属などがある。可食部をもつ木本類の種実が含まれてはいるものの、全体の構成は多様であり、湿地性の草本種子までを含むことから、人為的に甕とともに埋設された可能性はきわめて低いと判断される。

イ　遺物

(ア)　土器

旧河道からは多量の土器が出土しているが、大部分は洪水による堆積物中に遊離したものであり、原位置を保つものはごくわずかである。以下では、各河道ごとに記述を進める。なお器種名については『平城宮発掘調査報告ⅩⅥ』(2005)に準拠している。

a 旧河道1 (図版32～34　写真図版76～81)

38～60は土師器あるいは土師質の土器である。38～42は皿である。38・39は端部を内側に巻き込むようになでるもので、内面に暗文が認められる精製品である。40～42は端部を丸くおさめ、指頭圧痕が残るものもある。

43は杯Aである。44は椀で平底から内湾して立ち上がる口縁部を持つ。

45は精製高坏の脚部である。面取りした脚柱部を持つ。

46～49は甕である。46は小型のもので、当遺跡では出土数が限られている。47～49は中型の長胴甕でハケを多用する。48は外面に煤が付着している。

50はカマド片である。51は把手の破片で鍋またはカマドの一部と思われる。

52～60は製塩土器と考えているもので、いくつかの形態が認められる。52はやや薄手で直線的に立ち上がる体部を持つ。53～56はやや厚手の椀形のものである。57は逆円錐形の体部を持つもので、丸底である。内外面に指ナデの痕が顕著である。58・59は口縁部片のみであるが、椀形あるいは57に似た形状である可能性を持つ。60は甕に近い形態を持つもので、粘土紐の接合痕が明瞭である。

61～79は須恵器である。61・62は杯G身と思われる。61は底部外面に平行するヘラ書き沈線が認められる。63～67は杯Aである。68・69は杯B身である。69は見込み部に工具痕跡が認められる。70は皿の底部と考えられ、外面に「福家」と墨書されている。

71～77は壺と考えられる。71は短く立ち上がる口縁と肩の張った体部を持つ壺Cである。72・73は斜めに立ち上がる頸部に外反する口縁部を持つ壺Lである。74は大きく開く口縁部を持ち、口縁端部を直立させる。75から77は壺の底部である。75・76は輪高台が付くもので、77は平底である。75は高台内部にヘラ記号が認められる。78は外反する短い口縁部を持つ鉢Dである。

79は甕である。肩の張った体部に外反する口縁部を持つ。端部は内側に拡張している。

80・81は瓦である。80は丸瓦で凸面の調整は不明だが、凹面には布目とヘラケズリの痕跡が残る。凹面端部は肥厚し面取りされている。81は平瓦で凹面に布目、凸面に縄目タタキが認められる。

82～93は律令期以外に属すると思われる遺物である。82は縄文土器口縁部片である。表面に沈線文が施されている。

83 ～ 87 は弥生土器、88 は土師器である。83 は体部に三条の張り付け凸帯が残る壺の体部である。前期のものと考えられる。84 は平底を持つ壺の底部である、85 は小型の広口壺で中期に属すると考えられる。86 は底部穿孔を持つ鉢である。外面に連続タタキを施す。87 は蓋形土器と判断した。外面にタタキが残る。86・87 は後期に属すると思われる。88 は浅い椀形の坏部を持つ高坏で、古墳時代のものと考えられる。

89 ～ 93 は古墳時代に属する須恵器である。89 ～ 91 は杯Ｈ蓋で 89・90 は天井部の回転ヘラケズリが残るが、91 は回転ヘラ切りの後ナデである。92 は杯Ｈ身で底部は回転ヘラ切りになっている。93 は瑳である。体部の穿孔部周辺を打ち欠いている。

b 旧河道 2（図版 38 ～ 41　写真図版 86 ～ 92）

147 ～ 170 は土師器である。147 ～ 149 は杯 A である。147 は口縁端部を強くなでて、巻き込み傾向にある。150 は皿Ａである。口縁部を内側に巻き込む。151 は鉢Ａである。内面に工具痕跡がある。152 も形態は鉢Ａと思われるが粘土紐接合痕が明瞭であり、用途は別である可能性がある。153 ～ 177 は鉢である。153 は内外面とも被熱している。154 も被熱、変色しており、153・154 は製塩土器である可能性を持つ。155 は平底で浅い形態で、ナデ調整で仕上げる。内面にスス、炭化物が付着しており、灯火具の可能性がある。

156 は平底で胴の張らない形態である。外面にススが付着するため甕としておく。157 は口縁端部を外側に巻き込む。小型の甕と考えられる。158 は口縁の外反が弱い甕である。159 ～ 168 は口縁が大きく外反する甕である。長胴のものが殆どであるが、162 が鍋である可能性もある。161・162 を除いて外面にススが付着する。169 は鍔甕である。頸部に鍔を貼り付けている。体部外面にススが付着している。

170 は甕の低い鍔あるいはタガ状の突起であると思われる。169 は河内地方からの搬入品である可能性がある。

171 ～ 189 は須恵器である。171・172 は平底から直線的に伸びる体部を持つ杯 A である。173 ～ 176 は杯 B である。176 は底部で、高台の剥離痕があり「□守ヵ」の墨書がある。177･178 は杯Ｂ蓋である。

178 は内面に墨が付着しており、転用硯である。

179・180 は高坏の脚部である。短い形態のため、若干時期がさかのぼる可能性もある。

181 は鉢Ａである。口縁端部は内側に面を持つ。

182 ～ 184 は肩の張る体部に大きく開く口縁部を持つ壺Ｋである。185 は体部のみであるが、壺Ｌと考える。体部上半にカキ目を施す。火脹れが多く、内外面に自然釉が付着する。186 は平瓶である。体部は丸みを帯び、外面調整が簡略化されている。7 世紀後葉まで遡るものであろう。

187 は短径直口の口縁部である。188・189 は甕の口頸部である。188 は端部を直立させる。189 は口縁体部を肥厚させ、外側に面を持つ。

190 ～ 204 は律令期以外の遺物である。190 は縄文土器深鉢の口縁部片である。波状口縁の頂部で口唇部に縄文を施し、体部は沈線で区画文を施している。後期に属すると考えられる。

191 ～ 193 は弥生土器である。191 は壺の底部と考えられる。192 は高坏で、屈曲する杯部を持つ。後期のものと考えられる。193 はミニチュア土器で甕である。口縁部に指オサエが残る。

194 ～ 204 は古墳時代に属する須恵器である。194 は高坏蓋である。

195 ～ 198 は杯Ｈの蓋で、天井部にはヘラケズリが残っている。ヘラケズリの範囲、天井部と口縁部の形態から若干の型式差は認められる。6 世紀後葉から 7 世紀前葉のものと思われる。199 ～ 201 は杯

Ｈ身である。底部は回転ヘラケズリが残る。蓋と同時期のものと思われる。202･203 は瓶の体部である。203 は手持ちの粗いヘラケズリを施している。

204 は有蓋高坏である。長脚二段透かしのもので、脚部は若干焼きひずみがある。6 世紀後半のものと思われる。

c 旧河道 3（図版 35 ～ 38　写真図版 82 ～ 86）

94 ～ 112 は土師器である。94 は杯Ａで粘土紐と指痕跡が明確に残る。95・96 は椀である。95 は内面にヘラ記号があり、外面は二次焼成が認められる。96 は 95 より深い形状で粘土紐の痕跡も明瞭である。97 は椀Ａあるいは皿Ａ、98 は皿Ａである。口縁部をヨコナデし、底部には指オサエが残る。

99 は鉢Ｂである。体部内外面にヘラミガキを施す。100 は短く外反する口縁を持つ丸底の鉢である。

101 は底部片である。尖り気味で外面に指オサエの痕が残る。102 は薄手の製塩土器片である。外面に指オサエが顕著に残る。

103 ～ 112 は甕である。いずれも大きく開く口縁部を持つ。103 は小型の球胴甕である。当遺跡での出土数は希少である。外面にスス、内面に炭化物が付着する。104・105 は体部の残りがよくないが、球胴甕あるいは鍋Ａと考えられる。106 ～ 112 は長胴甕である。109 は内外面の調整にハケを用いる。110 ～ 112 は外面にハケ調整、内面はケズリ調整を多用する。４点とも外面にススが付着している。

113 ～ 127 は須恵器である。121・122 は時期が古くなるため、後述する。

113 は杯 A である。底部はヘラ切りである。114 は口縁部直下と体部と底部の境界に沈線を施す金属器写しの杯である。115 ～ 117 は杯Ｂである。直線的に伸びる体部に外側に踏ん張る高台が付く。118 は平底から内湾して立ち上がる体部を持つ。119･120 は杯Ｂ蓋と考えられる。120 は天井部に墨書「十」がある。

123・124 は壺Ｋの範疇に入るものと考えられる。頸部中央付近に２条の沈線をめぐらせる。

125 ～ 127 は甕である。125 は肩の張らない器形で内面には当て具痕が残り、外面のタタキはカキ目で消す。外面全体に自然釉がかかり、別個体の破片が融着している。126 は口縁部のみで、端部を上下に肥厚させる。127 はほぼ完形である。体部上半に自然釉が濃密にかかり、内面底部にも溜まっている。肩部を中心に別個体の破片が多数融着している。底部外面に円形の変色部分が３箇所あり、杯状の個体を焼台として使った際の痕跡と考えられる。

128 ～ 133 は弥生土器・土師器である。128 は広口壺の頸部で、多条沈線文を施す。弥生時代中期のものである。129･130 は壺の底部と考えられる。131 はミニチュアの甕である。132 は高坏の脚部である。弥生時代後期のものと思われる。133 は高坏の坏部から脚柱部である。古墳時代初頭のものと思われる。

121・122、135 ～ 146 は古墳時代の須恵器である。121・122 は高坏のものと思われる蓋である。天井部につまみが付き、天井部と口縁部の境界に沈線をめぐらせる。

134 ～ 137 は杯Ｈ蓋である。134 は天井部と口縁部が明確なもので、天井部にヘラ記号がある。135 ～ 137 は天井部が丸みを帯び、天井部と口縁部の境界が不明瞭になりはじめたものである。いずれも 6 世紀代のものである。138 はつまみが欠損しているが杯Ｇ蓋である。7 世紀まで下るものと考えられる。139 ～ 143 は杯Ｈ身である。141 は底部外面にヘラ記号がある。139 ～ 142 はいずれも 6 世紀代のものである。143 は平底で小型化したもので、7 世紀まで下るものと考えられる。

144 は提瓶である。肩部の把手が形骸化している。145・146 は瓶の体部である。いずれも底部外面にヘラ記号が認められる。いずれも 7 世紀代のものと思われる。

㈠　木製品（図版 46 ～ 58　写真図版 97 ～ 109）

旧河道より出土した木製品は、祭祀遺物と杭を含む構造材に大別される。祭祀遺物には、人形、舟形、鋤形等の形代、斎串、皿を中心とした挽物、および曲物等の容器類が認められる。斎串のうち３点は、木簡を二次加工したものであるため、本稿では木簡として取り扱う。

また構造材には、杭、横木等の堰の構造材と、その他の部材が含まれる。以下では、河道ごとに記載を進めるが、それに先立ち、本稿で用いる人形の形態分類について述べる。

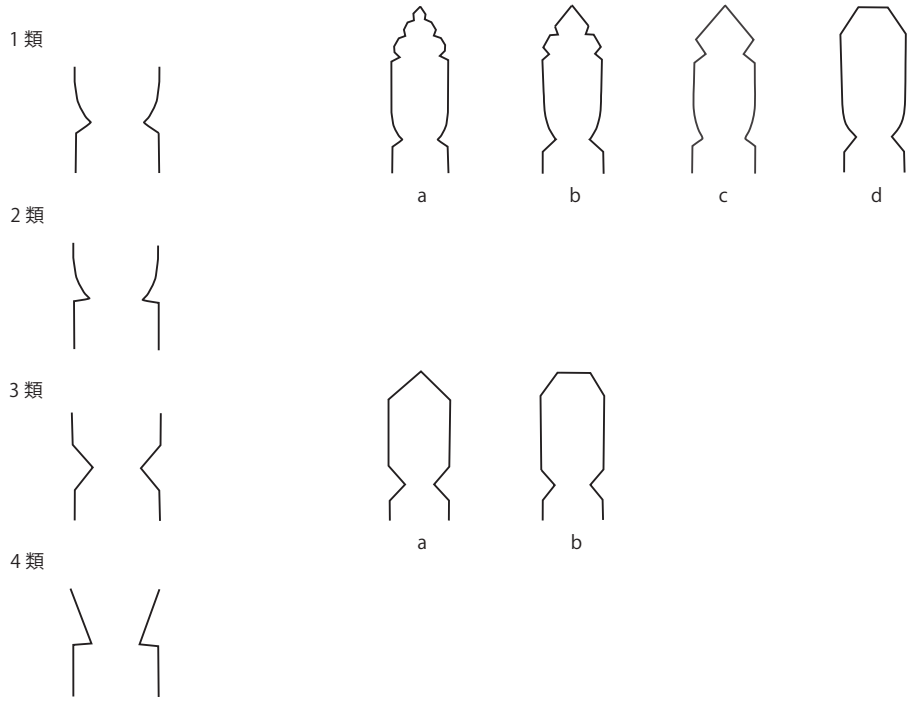
人形の形態分類（第２図）

田井Ａ遺跡で出土した人形は、頭部の作出方法によって３形態に分類可能である。丸みをおびた頭部を作り、肩部が傾斜するものを１類、同様に丸みをおびた頭部を作り、肩部がほぼ直角をなすものを２類、板材の側面にＶ字形の切り込みを行って頭部と体部を作出したものを３類、逆台形状の頭部と、ほぼ直角をなす肩部を作るものを４類とする。

１類は、さらに冠の表現を含む頭部の形態によりａ～ｄの４形態に、３類も同様にａ、ｂの２形態に細分される。

ａ 旧河道１

旧河道１からは、人形･斎串、木簡（？）、および祭祀遺物と思われる器種不明の製品が出土したほか、皿、曲物、槽等の容器類、薄板、棒状製品、付け木、建築物の部材（？）、杭等が出土している。



第２図　人形の分類

【祭祀遺物】

人形は、1 ～ 4 類のすべての形態が見られる（W1 ～ W27）。形態組成のうち、1b 類（W3 ～ W7）および 1d 類（W9 ～ W11）が相対的に多数を占める。人形のうち 9 点に、墨書により冠の文様、顔、衣服等が描かれている。冠には、鱗状、縦曲線、横線、黒塗り等の多様な表現が見られる。また衣服の表現では、衣服の合わせ目ないしは装飾の紐、および帯と思われる表現が特徴的である（W1・W8・W12・W13・W17・W22）。W12 と W13 は、衣服表現の筆致が酷似しており、本来は同一個体であった可能性がある。

また W18 は、表面に顕著な削り痕をとどめていること、断面形が片凸レンズ状を呈すること等から、未製品の可能性がある。

W28 ～ W36 は、人形か斎串か判断しがたい断片であるが、W29 は上部に 1 孔が穿たれていることから、木簡の可能性が残る。W37 は薄板状に加工されたもの、W38・W39 は薄板に多数の切り込みが見られるもので、如何なる器種に分類されるか判断しがたい。

W40 は上部に 2 孔が認められ、うち 1 孔は貫通している。片面に格子状の墨書が見られるが、上半と下半では方向が異なる。この両者の境界線に切り込みを入れ、墨書面が内側になるように折られた状態で出土した。何らかの祭祀、あるいは呪術に関連するものと推察される。

【容器類】

W41 ～ W44 は皿である。W41・W42 には多数の刃物痕が見られるほか、W41 の内面には、パッチ状の焦げ跡が認められる。W43 の中央には方形の穴が穿たれ、その角部分に 2 個の円孔、さらに離れて 2 個が一対となった円孔 4 孔が穿たれている。皿を再利用したものであろう。W44 は摩耗が著しく、加工・使用痕等は不明である。

W45 ～ W49 は、曲物の蓋および側板である。W45 と W48 では、樹皮による綴じ皮（桜か）が遺存している。W49 は長方形の容器の側板であろう。

W67 は槽である。大型の材を刳り抜いて作られており、本来は舟形あるいは長楕円形を呈していたものであろう。底面はほぼ平坦に作られている。

【板・棒状製品】

W50 ～ W66 は、板状ないしは棒状製品である。いずれも器種を判断しがたい。板状製品には、人形ないしは斎串のような祭祀具の断片である可能性が捨象できないものが含まれる（W51 ～ W54・W65）。また W63・W64 は、箱の側板の可能性が想起される。棒状製品（W56 ～ W60）には、断面が方形ないしは長方形をなすものと、円形をなすものとが見られる。いずれも断片的資料であり、器種を判断できない。

W61 は、丸棒の一端に抉りを入れ、その先端を球形に近い形状に加工したものである。図下端を折損するため断定はできないが、紡績具の一部であった可能性を考慮したい。

【部材および杭】

W68 ～ W76 は部材および杭である。W68 は長方形の孔を穿つ。両面ともに器表面の加工痕が顕著である。W69 は、長方形の板の一端を凸字形に加工し、凸部の基部に貫通しない正方形の孔を穿っている。W70 ～ W76 は杭である。杭の出土数は多いため、代表的事例のみを図示している。杭はいずれも芯持ちの丸木であり、樹皮が残存するものが多い。杭の太さが比較的揃っている点は、里山林の管理育成という点から注目される。

b 旧河道２

旧河道２からは、木簡、人形・斎串・鋤形、檜扇、および祭祀遺物と思われる器種不明の製品が出土したほか、皿、曲物、槽等の容器類、薄板、棒状製品、付け木、建築部材（？）、杭等が出土している。

【木簡】

木簡は３点が出土した（図版52　W77 ～ W79）。そのすべてが、木簡としての機能を喪失した後に斎串として再加工されている。これらについては、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の、山本崇氏に釈読を依頼した。

W77は上下、左右共に折れた資料である。器表面の文字は依存状態が劣悪で、６文字があると判断されたものの、判読には至らなかった。裏面は無文字である。

W78は斎串に加工された後、上端を折損している。上部に２行にわたって文字が存在する。左行は遺存状態が悪く、ほとんど判読不能であるが、右行は７文字分が識別された。「□□□□□五把」と判読され、３文字目は「卅」、５文字目は「束」の可能性がある。さらに、この行の下に割書があり、右行は「上□一束五」、左行は「未□二□□」と判読された。これらの内容から、当該木簡は出挙にかかる稲の出納を示すと判断された。裏面は無文字である。

W79は斎串に加工された後、上端を折損する。器表面の遺存状況は良好で墨痕も明瞭であるが、再加工により３文字分の偏の部分しか残されておらず、判読できない。裏面は無文字である。

【祭祀遺物】

人形は、２類（W80）、3a類（W82）が見られるほか、１類に属する可能性が高い個体（W83）が含まれている。出土総数は少ないものの、いずれも墨書により顔面ないしは冠が表現されている。W81は本遺跡出土の人形としては、きわめて細身の作りである。

W84 ～ W86、W90は、人形か斎串か判断しがたい断片である。W87・W88は、１類ないしは３類の人形である。

W91は鋤形と判断したが、一部が破損していることから、別の祭祀具である可能性も捨象できない。柄の部分は丁寧に作られているが、鋤の身部は切削痕が顕著に残されている。W92は檜扇の柄である。基部付近に、１孔を設けている。

W89・W93・W94は、直径数cmの枝を縦割にし、その一端を薄く削ったもので、加工度の低い斎串の可能性も推測されるが、機能を確定しがたい資料である。

W103 ～ W110は、斎串である。またW111 ～ W114も、斎串の可能性があると考えられる。

W103 ～ W107は、薄い板状の素材に切り込みを入れて上端部を作出し、両側面に薄い毛羽状の切り込みを重ねている。W108 ～ W110は、斎串の下端部である。またW111 ～ W114・W117・W120も、同様の斎串であろう。

【板・棒状製品】

W115・W116・W118・W119・W121・W122は、棒状の資料である。いずれも器種を判断しがたい。しかし、W116・W118・W119・W122は先端が尖るように加工されており、何らかの祭祀的機能を担っていた可能性を推定している。またW121は、中心に小孔を貫通させた特異な資料である。

【容器類】

W142は曲物の蓋であろう。側板を留めた孔が６か所に設けられていたと思われる。W143は曲物の底板である。W144は曲物の底板を再利用したものであろう。約1/3を欠くが、残る部分には18か所

の小孔が穿たれている。W145 は曲物の側板である。W146 は皿である。W147 は曲物底板であろう。

【その他の祭祀遺物（不明資料を含む）】

W123 ～ W132 および W135 ～ W141 は、祭祀遺物の可能性があるもの、断定しがたいものを列挙した。W141 は W89・W94・W95 同様の製品であり、加工度の低い斎串であった可能性が考慮される。

W133・W134 は付け木である。下端部に強い炭化が認められる。

【部材および杭】

W148 ～ W150 は杭および大型の板材である。W148 は芯持ち丸木材の杭である。上端部の一部に加工痕が認められる。W149 は板材である。全体に炭化している。W150 は、樹皮に近い部分を板状に加工した資料である。

c 旧河道 3

【祭祀遺物】

W100 は舟形である。芯持ちの丸木から削り出しによって作出している。平坦な船底と、強く持ち上がった舳先、艫を表現し、中央には平坦な屋根をもつ方形の船室が設けられている。準構造船を表現した可能性が高い資料である。

W95 は幅の狭い薄板に、現状で確認できる限りでは 14 本の刻みを入れた資料である。中央には、縦方向に蛇行するような木質の隆起があり、墨書の痕跡であった可能性が考慮される。

W96 ～ W99 は斎串である。W99 は、上端部の 2 か所に切り込みを入れ、下端部を尖らせるように加工している。W96・W98 も、側面の 2 か所に切り込みを入れる。

【容器】

W101 は曲物の底板である。片面に、多数の刃物痕が認められる。

【部材】

W102 は中央に方形の孔を穿った部材である。形態は W68 に類似している。

第４節　平安時代の遺構と遺物

１　遺構（図版 22　写真図版 24 ～ 26）

掘立柱建物、柱穴、土坑、溝などを検出した。以下では、遺構の種別ごとに遺構ならびに遺物の記載をおこなう。

⑴　掘立柱建物

調査区東南隅で８棟の掘立柱建物を検出した。検出状況から考え、調査区の南側まで広がるものと思われる。建物を構成する柱穴以外にも複数の柱穴が存在することから、本来は抽出した以上に建物が存在していたものと思われる。

SB01（図版 23・24　写真図版 27・32）

梁行２間×桁行３間の総柱建物である。すべての柱穴を検出しており、梁行、桁行とも柱の通りは良い。桁行方向を基準にした棟軸は N42° W である。柱穴の心心間で梁行 3.5m、桁行 5.45m を測り、それに基づいた面積は約 19.1㎡である。SD26 に切られているため、一部の柱穴が削平されているが、柱穴は円形でその規模は直径 30㎝、検出面からの深さ 30㎝と揃っている。

SB02（図版 23 ～ 25　写真図版 28・32）

梁行２間×桁行３間の側柱建物である。すべての柱穴を検出しており、梁行、桁行とも柱の通りは良い。桁行方向を基準にした棟軸は N42° W である。柱穴の心心間で梁行 4.8m、桁行 6.2m を測り、それに基づいた面積は約 29.8㎡である。一部の柱穴が SB03 を構成する柱穴に切られている。柱穴はほとんどが円形で一部に楕円形のものがある。直径は 35 ～ 65㎝、検出面からの深さは 40 ～ 65㎝である。

P68 から土師器小皿（2）、P72 から黒色土器椀（3）、P86 柱痕からは土師器小皿（4・5・6）と土師器台付椀（7）が重なって出土した。

SB03（図版 23・25　写真図版 28・29・32）

梁行１間×桁行２間の総柱建物である。北西隅の柱穴が SD26 に切られているものの、すべての柱穴を検出しており、梁行、桁行とも柱の通りは良い。桁行方向を基準にした棟軸は N53° E である。柱穴の心心間で梁行 2.2m、桁行 5.4m を測り、それに基づいた面積は約 11.9㎡である。柱穴は円形で直径は 25 ～ 45㎝、検出面からの深さは 20 ～ 30㎝である。

P67 から土師器小皿（8）が出土している。

SB04（図版 23・25　写真図版 29）

梁行２間分だけを検出した。大半は調査区外に存在するものと思われる。柱穴の心心間で梁行 4.2m を測る。推測される棟軸は N37° W で柱の通りは良い。柱穴は長径 20 ～ 40㎝の楕円形で、深さは 32 ～ 34㎝である。

SB05（図版 23・25　写真図版 29・33）

梁行２間分だけを検出した。大半は調査区外に存在するものと思われる。柱穴の心心間で梁行 4.5m を測る。推測される棟軸は N42° W で柱の通りは良い。柱穴は長径 20 ～ 40㎝の楕円形で、深さは 24 ～ 30㎝である。

P31 から土師器小皿（9）須恵器椀（11・12）、P32 から土師器椀（10）が出土している。

SB06（図版 23・26　写真図版 30・34・35 ～ 39）

梁行２間×桁行３間の総柱建物で、北半中央の１間には半間の位置にも柱がある。添柱は間仕切りに伴うものと考え建物北半には床があり、南半は土間であったと思われる。南半西端にはよく焼けた土坑

と水平な面を上にして据えた石塊が南北に並んでおり、この建物に伴うものと考えている。

SD102・SD114・SD135 に切られているものの、SD135・SD136 との先後関係は明確ではない。すべての柱穴を検出しており、梁行、桁行とも柱の通りは良い。桁行方向を基準にした棟軸は N50° E である。柱穴の心心間で梁行 4.7 ～ 4.9m、桁行 6.5m を測り、それに基づいた面積は約 31.2㎡である。柱穴は円形で直径は 25 ～ 30㎝、検出面からの深さは 30 ～ 40㎝である。

土坑（SK109）は直径 40 ～ 45㎝のやや歪んだ円形で、すり鉢状の断面形を持ち、検出面からの深さは 30㎝である。内部がよく焼けた上、錆びた鉄分が付着した土壌や扁平な石片が内部に充填しており、鍛冶炉である可能性が高い。

横に据えられた石塊は長辺 33㎝、短辺 30㎝、厚さ 25㎝に整えられたものである。隣接する鍛冶炉内から出土した石片はこの石塊と同質のもので、これの一部である可能性が高い。直径 40㎝、検出面から深さ 15㎝の浅い土坑に上面が水平になるように据えられ、上面は検出面より 10㎝ほど突出している。

据えられた石塊の機能を推定するため、周辺の土壌を 50㎝メッシュでサンプリングし、鉄分の付着しているものと付着していないものとの割合を確認した。その結果は、炉自体を含む区画では 67.1 ポイント、石塊自体を含む区画では 28.7 ポイントであるのに対し、他の区画ではほとんど認められないというものであり、鍛造砕片や飛沫が石塊周辺に散布していたかどうかは確証が得られなかったが、この石塊が鉄床の一部である可能性は指摘しておきたい。

P119 から土師器椀（13）が出土している。

SB07（図版 23・27　写真図版 30・31）

梁行２間×桁行３間で東面に半間の庇が付く。SD114・SD135 に切られているものの、東から２間目の棟持柱が検出されていないが総柱建物と思われる。SD135･SD136 との先後関係は明確ではない。梁行、桁行とも柱の通りは良く、桁行方向を基準にした棟軸は N50° E である。柱穴の心心間で梁行 4.0 ～ 4.1m、桁行 6.6 ～ 6.7m を測り、それに基づいた面積は約 26.9㎡である。柱穴は円形で直径は 20 ～ 30㎝、検出面からの深さは 25 ～ 40㎝である。SD06 の南に接しており、棟軸も同一であるため、同時に存在していた可能性がある。

SB08（図版 23・27　写真図版 31・34）

１間×１間の建物である。柱の配置は歪んだ平行四辺形になっている。南辺を基準にした棟軸は N50° E である。北辺 2.3m、南辺 2.2m、東西辺は 2.0m で、それに基づいた面積は約 4.5㎡である。柱穴はやや歪んだ円形で直径 30 ～ 40㎝である。P144 から須恵器椀（14）が出土している。

⑵　溝

最上層で４条、上層でおおむね南東から北西に流れる溝を複数検出している。掘立柱建物と軸線は近似するが、多くが掘立柱建物を切っていることから、同一の土地区画上に営まれたものではあるが、建物群廃絶後のものと考えられる。

SD19 ～ SD22（図版 23　写真図版 42）

平成 24 年度調査区の西端近くに位置する。最上層のものである。長さ 2.7m から 7.2m、幅 25㎝前後、深さ 5㎝程度の浅い溝である。検出状況は平行に走る４条の短い溝であるが、いずれも暗褐色シルト混じり細砂をベースに営まれ、埋土がベースの混じる褐灰色細砂混じりシルトであることから、ほぼ平行する２条の溝であったと考えられる。いわゆる、畝状遺構が部分的に遺存したものである可能性が高い。

SD23・SD24（図版 23　写真図版 42）

上記溝の東側に位置する。最上層のものである。ほぼ南北に流れる長さ 1.5m と 1.8m、幅 25㎝、深さ 5㎝の短い溝である。本来同じ溝であった可能性が高い。埋土は褐灰色細砂混じりシルトで SD19 ～ SD22 と同じである。

SD26（図版 23　写真図版 43）

平成 24 年度調査区のほぼ中央部、掘立柱建物群の西端に位置する。南東から北西に流れる検出長 20m、幅 30㎝、深さ 10㎝の直線的な溝である。SB01 と SB03 を切っている。黒褐色シルトを掘り込み、埋土は褐灰色シルトである。土師器（26）が出土している。

SD101（図版 23・28　写真図版 43）

平成 24 年度調査区の中央東寄り、掘立柱建物群の中心に位置する。南東から北西に流れる検出長 20 m、幅 40㎝、深さ 9㎝の直線的な溝である。黒褐色シルトを掘り込み、埋土は褐灰色シルトである。

SD102（図版 23・28　写真図版 43）

SD101 の東隣に位置し、流れる方向も同じくする。検出長 8 m、幅 80㎝、深さ 10㎝の直線的な溝である。SB06 と SB07 を切っている。営まれているベース、埋土とも SD101 と同じである。他の溝と比較して、幅が２倍となっており、土地を区画するための溝であった可能性がある。

SD114（図版 23　写真図版 43）

SB06・SB07、SD115・SD116 を切り、SK105 に切られる。検出長 20.5 m、幅 40㎝、深さ 8㎝の直線的な溝である。黒褐色のベースに掘り込まれ、埋土は褐灰色細砂混じりシルトが主体である。

SD115・SD116（図版 23）

調査区南東隅で検出した溝である。ほとんど削平されており、痕跡をとどめるだけである。SD102・SD114･SD135 に切られる。位置的に重なる掘立柱建物との先後関係は不明で、上面から土師器小皿（27）が出土している。

SD135（図版 23　写真図版 43）

SD115・SD116 を切り、SD114 の東をほぼ平行して流れる。検出長 13 m、幅 20㎝、深さ 5㎝の直線的な溝である。黒褐色のベースに掘り込まれ、埋土は褐灰色細砂混じりシルトが主体である。羽釜片（28）が出土している。

⑶　土坑

SK01（図版 22・28　写真図版 40）

調査区西端で検出した。長軸 1.35m、短軸 1m、深さ 11㎝を測る隅丸方形の土坑である。埋土は灰色シルトである。遺物は出土していないが、埋土から見て近世以降のものと考えられる。

SK02（図版 22・28　写真図版 40）

調査区西端で検出した。長軸 1.15m、短軸 0.95m、深さ 15㎝を測る歪な楕円形の土坑である。埋土は灰色粗砂～シルトである。遺物は出土していないが、埋土から見て近世以降のものと考えられる。

SK78（図版 23・28　写真図版 40）

調査区北端のわずかに低くなった場所に位置する。南から延びてきた溝がすべて消失することから、もともと溝や掘立柱建物より一段低い場所に営まれた可能性がある。長軸 2.7m、短軸 2.0m の不整形な土坑である。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは 30㎝である。底面には炭を含んだ黒色シルト層が堆積し、そこから土師器小皿（21）瓦器椀（22）須恵器鉢（22）が出土した。

SK105（図版 23・29　写真図版 41）

調査区北東部に位置する。SD114 を切り、長軸 1.4m、短軸 1.0m の楕円形を呈する土坑である。断面は椀状を呈し、検出面からの深さは 45㎝である。

SK147（図版 23・29　写真図版 41）

調査区北東部に位置する。長軸 1.65m、短軸 0.7m の長楕円形を呈する土坑である。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは 15㎝である。黒褐色のベースに掘り込まれ、埋土は褐灰色細砂混じりシルトが主体である。

SK148（図版 23・29　写真図版 41）

調査区東辺のほぼ中央付近に位置する。一辺約 0.7m の隅丸方形を呈する土坑である。断面は深い皿状を呈し、検出面からの深さは最大で 35㎝である。黒褐色のベースに掘り込まれ、埋土は褐灰色細砂混じりシルトが主体である。須恵器甕（25）が出土している。

1　遺物

⑴　掘立柱建物出土遺物（図版 30　写真図版 73 ～ 75）

1 は土師器の小皿である。底部は回転ヘラ切り、SB01 の P34 掘方から出土した。

2 ～ 7 は SB02 を構成する柱穴から出土した。2 は土師器の小皿で底部は回転ヘラ切り、P68 から出土した。3 は黒色土器Ａ類で輪高台が付く。P72 から出土した。4 ～ 6 は土師器の小皿で 5 ・ 6 の底部は回転ヘラ切りである。7 は土師器の台付椀でヘラ切りされた底部に高い高台が付く。

8 は土師器の小皿で底部は糸切りである。SB03 の P67 から出土した。

9 ～ 12 は SB05 を構成する柱穴から出土した。9 は土師器の小皿で底部は回転ヘラ切りである。10 は土師器の椀で底部は回転ヘラ切りである。11・12 は須恵器の椀で底部は回転糸切りである。9 ・11・12 は P31 から、10 は P32 から出土した。

13 は土師器の椀で底部は回転糸切り、SB06 の P119 から出土した。

14 は東播系須恵器椀で見込みがあり、底部は回転糸切りの平底である。SB08 の P144 から出土した。

14 以外の土器は土師器小皿がほとんどを占めるため時期比定が困難であるが、土師器台付椀や須恵器椀の形態から見て 10 世紀代のものと考えておきたい。14 については 11 世紀まで下る資料と考えられる。

⑵　柱穴出土遺物（図版 30　写真図版 74・75）

15 は黒色土器Ａ類の椀である。内側に水平方向のヘラミガキが残る。P60 から出土した。

16 は土師器の小皿で底部は回転ヘラ切りである。17 は平瓦の破片で内面に布目、外面に縄目タタキの痕跡が残る。いずれも P40 から出土している .

18 は須恵器の杯Ｈ身である。口縁部の立ち上がりは弱く、平底傾向である。P70 から出土した。

19 は土師器の甕である。長胴で内外面ともハケ調整、口縁部は端部に面を持つ。外面に煤の付着と二次焼成があり、使用痕が明瞭である。20 は平瓦である。凹面に布目、凸面に縄目タタキの痕跡が残る。いずれも P70 から出土している。

⑶　土坑出土遺物（図版 31　写真図版 75）

21 は土師器の小皿である。底部は回転ヘラ切りである。22 は和泉型の瓦器椀である。見込み部の暗文は平行線状で外面下半には指頭圧痕が目立つ。23 は須恵器の鉢底部である。魚住窯跡の鉢Ｃに含まれるものと思われる。24 は須恵器の鉢体部である。21 ～ 24 は SK78 から出土した。

25 は須恵器の甕口縁部である。外反する口縁で端部を外側に肥厚させる。SK148 から出土した。

⑷　溝出土遺物（図版 31　写真図版 76）

26 は土師器の底部である。托ではないかと思われる。SD26 から出土した。

27 は土師器の小皿である。底部はヘラ切り。SD115 から出土した。

28 は土師器羽釜の鍔部分である。SD135 から出土した。

⑸　溝状遺構出土遺物（図版 42　写真図版 92）

205 は平瓦片である。凹面には布目が残り、凸面は縄目タタキとナデを施している。SD183 から出土した。

206 ～ 208 は SD185 から出土した。206 は土師器の甕である。頸部の屈曲が弱い。207 は須恵器の杯Ａである。底部はヘラ切りである。208 は脚付きの瑟である。穿孔部の上下に沈線をめぐらせ、内側にクシによる刺突文を施す。穿孔時の粘土塊が内側に残ったまま焼成され、土鈴様にもなっている。

第５節　包含層出土の遺物

図版 42 ～ 45 に、各時期包含層出土の遺物を一括して掲載した。

１　包含層出土土器（図版 42 ～ 44　写真図版 92・94・95）

209 ～ 235 は調査区西半で包含層などから出土した遺物である。

209・210 は縄文土器である。209 は沈線による区画文が認められる。210 は端部を内側に巻き込む浅鉢の口縁部片と思われる。外面に沈線、内面に条痕が認められる。

211 ～ 213 は弥生土器である。211 は広口壺の口縁部である。212 は壺の底部と考えられる。213 は外反する口縁部をもつ甕である。中期から後期のものと思われる。

214・215 は土師器の高坏である。古墳時代はじめのものと考えられる。

223 ～ 228・231・232 は律令期の須恵器である。223 は杯Ａである。底部は回転ヘラ切りである。224･225 は杯Ｂ蓋､226 ～ 228 は杯Ｂ身と考えられる。231 は甕Ａの口縁部､232 は甕Ｂの口縁部であろう。

229 は製塩土器と考えられる粗い胎土の鉢である。229 は器壁が薄く、指オサエの痕跡が残る。

233 は黒色土器Ａ類の椀である。見込み部に工具痕が残る。

236 ～ 258 は調査区東半で包含層などから出土した遺物である。236・237 は弥生土器である。236 は大型鉢で把手が１箇所に残る。237 は多重沈線を施す甕の体部片である。いずれも前期に属すると考えられ、断ち割りトレンチから出土している。

239 は須恵器の杯Ｈである。体部が浅くなり、平底化している。7 世紀まで下るものと思われる。

241 ～ 243 は土師器である。241 は平底の鉢で体部外面に工具痕があり二次焼成を受けている。製塩土器の可能性がある。242・243 は鍔甕の体部片である。

244 ～ 247 は須恵器である。244･245 は杯Ｂで､244 は身､245 は蓋である。246 は壺の底部と考えられる。247 は甕の口縁部片である。

248 ～ 251 は土師器小皿である。248・249 は底部をナデ調整で仕上げる。250 は底部を回転糸切り、251 は回転ヘラ切りである。

252 は和泉型瓦器椀である。体部下半に指オサエが明瞭で、見込み部に平行する暗文を施す。12 世紀後半のものと考えられる。

253 は東播系の須恵器椀で口縁部に重ね焼きの痕跡が認められる。

254 ～ 256 は白磁碗の破片である。254 は碗口縁部で端部を肥厚させる。255 はケズリ出しの蛇の目を持つ底部、256 は輪高台を持つ底部である。双方とも高台は露胎である。

257 は施釉陶器である。ケズリ出し高台で畳付は露胎である。見込み部に目跡がある。

258 は土師質の土錘である。外面をナデ調整を行う。

２　石器・金属器（図版 45　写真図版 96）

S1 はわずかに基部がくぼむ凹基の打製石鏃である。先端を欠く。包含層から出土した。S2 は被熱した亜角礫で、平坦面には磨り痕が認められる。旧河道１から出土した。S3 は円礫である。使用痕跡は認められないが全体に赤化し、被熱している。包含層から出土した。

M1 は面径 4cmの小型素文鏡である。2012 年度調査において、調査区中央の南東壁際付近で、洪水砂中より出土した。M2 は鉄砲の弾と考えられる金属球である。第Ⅱ層から出土した。M3 は頭部を折り曲げた角釘である。包含層から出土した。

第４章　自然科学的分析

第１節　田井Ａ遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

田井Ａ遺跡は、兵庫県淡路市志筑（北緯 34° 26′ 19.7″、東経 134° 53′ 41″）に所在する。測定対象試料は、堰に関連する杭等から採取された木片 17 点、深掘トレンチで採取された土壌３点の合計 20 点である（第３表）。

２　測定の意義

木片試料１～ 17 の測定により、堰の使用年代を特定する。土壌試料 18 ～ 20 の測定により、遺跡が立地する地形の形成年代を明らかにする。

３　化学処理工程

⑴　木片の化学処理

１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

２）酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第３表に記載する。

３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

⑵　土壌の化学処理

１）メス・ピンセット、ふるいを使い、石や根などの混入物を取り除く。

２）酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用い、第３表に「HCl」と記載する。

以下、（１）３）以降と同じ。

４　測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

⑴　δ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第３表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

⑵　^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、

1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 3 表に、補正していない値を参考値として第 4 表に示した。^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

⑶ pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を第 3 表に、補正していない値を参考値として第 4 表に示した。

⑷ 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ = 68.2％）あるいは 2 標準偏差（2 σ = 95.4％）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第 4 表に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を第 3, 4 表に示す。

堰に関連する杭等の木片試料 17 点の ^{14}C 年代は、1580 ± 20yrBP（試料 1）から 1270 ± 20yrBP（試料 10）の間にあり、誤差（± 1 σ）の範囲で一致するものも含まれる。同じ遺構に属する試料はおおむね近い年代となるものが多いが、旧河道 1 の 1 と 2 の年代値の間にはかなりの差がある。暦年較正年代（1 σ）は、最も古い 1 が 1522 ～ 1416cal BP の間に 3 つの範囲、最も新しい 10 が 1261 ～ 1184cal BP の間に 2 つの範囲で示され、全体として古墳時代中期から古代頃に相当する（佐原 2005）。試料の炭素含有率はすべて 50％を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

深掘トレンチで採取された土壌試料の ^{14}C 年代は、10 層出土の 18 が 3950 ± 30yrBP、12 層出土の 19 が 3180 ± 30yrBP、19 層出土の 20 が 2920 ± 30yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は、18 が 4499 ～ 4299cal BP、19 が 3445 ～ 3371cal BP、20 が 3139 ～ 3002cal BP の間に各々複数の範囲で示され、18 が縄文時代中期末葉から後期初頭頃、19 が後期後半から晩期初頭頃、20 が晩期初頭から前葉頃に相当する（小林編 2008）。これら 3 点の年代値の前後関係は層位の上下関係に対して逆転している。試料の炭素含有率はいずれも 1％前後で、土壌としても高い値ではない。これらの土壌の堆積・埋没環境等を考慮し、測定結果について検討する必要がある。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51（1）, 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55（4）, 1869-1887

佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学　上　ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19（3）, 355-363

第３表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）（AMS）	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-133169	1（2012085-14）	旧河道１	木片（付木）	AAA	-25.74 ± 0.48	1,580 ± 20	82.17 ± 0.25
IAAA-133170	2（2012085-19）	旧河道１	木片（板）	AAA	-26.40 ± 0.37	1,320 ± 20	84.84 ± 0.24
IAAA-133171	3（2012085-205）	旧河道２　杭列Ａ　杭５	木片（杭）	AAA	-27.92 ± 0.41	1,350 ± 20	84.58 ± 0.24
IAAA-133172	4（2012085-220）	旧河道２　杭列Ｂ　杭５	木片（杭）	AAA	-29.74 ± 0.57	1,410 ± 20	83.87 ± 0.24
IAAA-133173	5（2012085-228）	旧河道２　杭列Ｃ　杭１	木片（杭）	AAA	-28.97 ± 0.33	1,350 ± 20	84.56 ± 0.24
IAAA-133174	6（2012085-281）	旧河道２　杭列Ｃ　杭 54	木片（杭）	AAA	-26.99 ± 0.31	1,370 ± 20	84.31 ± 0.24
IAAA-133175	7（2012085-330）	旧河道２　杭列Ｃ　横木５	木片（横木）	AAA	-28.02 ± 0.53	1,360 ± 20	84.45 ± 0.25
IAAA-133176	8（2012085-337）	旧河道３　北半　杭列Ｄ　杭２	木片（杭）	AAA	-26.69 ± 0.31	1,360 ± 20	84.47 ± 0.24
IAAA-133177	9（2012085-354）	旧河道３　杭列Ｅ　杭 10	木片（杭）	AAA	-26.77 ± 0.50	1,360 ± 20	84.40 ± 0.25
IAAA-133178	10（2012085-413）	旧河道３　杭列Ｅ　杭 74	木片（杭）	AAA	-29.81 ± 0.49	1,270 ± 20	85.37 ± 0.25
IAAA-133179	11（2012085-420）	旧河道３　杭列Ｆ　杭４	木片（杭）	AAA	-26.53 ± 0.47	1,290 ± 20	85.12 ± 0.25
IAAA-133180	12（2012085-432）	旧河道３　杭列Ｇ　杭６	木片（杭）	AAA	-27.70 ± 0.66	1,330 ± 20	84.74 ± 0.24
IAAA-133181	13（2012085-471）	旧河道３　杭列Ｈ　杭３	木片（杭）	AAA	-28.83 ± 0.52	1,280 ± 20	85.31 ± 0.25
IAAA-133182	14（2012085-475）	旧河道３　杭列Ｉ　杭３	木片（杭）	AAA	-26.96 ± 0.59	1,330 ± 20	84.76 ± 0.24
IAAA-133183	15（2012085-485）		木片（杭）	AAA	-24.78 ± 0.56	1,410 ± 20	83.92 ± 0.25
IAAA-133184	16（2012085- サンプル５）	旧河道２　南１区	木片（根株）	AAA	-29.17 ± 0.60	1,390 ± 20	84.07 ± 0.26
IAAA-133185	17（2012085- サンプル 13）	旧河道３　杭列Ｈ	木片（腐植体サンプル）	AAA	-30.66 ± 0.61	1,350 ± 20	84.55 ± 0.26
IAAA-133186	18（2012085- サンプル 17）	深掘トレンチ　10 層	土壌	HCl	-23.39 ± 0.73	3,950 ± 30	61.19 ± 0.21
IAAA-133187	19（2012085- サンプル 18）	深掘トレンチ　12 層	土壌	HCl	-24.32 ± 0.59	3,180 ± 30	67.35 ± 0.23
IAAA-133188	20（2012085- サンプル 19）	深掘トレンチ　19 層	土壌	HCl	-25.54 ± 0.45	2,920 ± 30	69.53 ± 0.22

第４表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age　(yrBP)	pMC　(%)			
IAAA-133169	1,590 ± 20	82.05 ± 0.23	1,577 ± 23	1522calBP - 1514calBP (6.5%) 1504calBP - 1478calBP (21.2%) 1464calBP - 1416calBP (40.5%)	1530calBP - 1409calBP (95.4%)
IAAA-133170	1,340 ± 20	84.60 ± 0.23	1,320 ± 22	1291calBP - 1261calBP (59.1%) 1199calBP - 1190calBP (9.1%)	1295calBP - 1235calBP (77.5%) 1207calBP - 1185calBP (17.9%)
IAAA-133171	1,390 ± 20	84.08 ± 0.23	1,345 ± 22	1296calBP - 1276calBP (68.2%)	1305calBP - 1260calBP (93.0%) 1200calBP - 1190calBP (2.4%)
IAAA-133172	1,490 ± 20	83.06 ± 0.21	1,412 ± 22	1329calBP - 1298calBP (68.2%)	1349calBP - 1291calBP (95.4%)
IAAA-133173	1,410 ± 20	83.87 ± 0.23	1,347 ± 22	1296calBP - 1277calBP (68.2%)	1305calBP - 1260calBP (93.6%) 1199calBP - 1190calBP (1.8%)
IAAA-133174	1,400 ± 20	83.97 ± 0.23	1,371 ± 22	1303calBP - 1285calBP (68.2%)	1325calBP - 1270calBP (95.4%)
IAAA-133175	1,410 ± 20	83.93 ± 0.23	1,357 ± 23	1300calBP - 1280calBP (68.2%)	1311calBP - 1262calBP (95.4%)
IAAA-133176	1,380 ± 20	84.18 ± 0.23	1,355 ± 22	1299calBP - 1280calBP (68.2%)	1308calBP - 1264calBP (95.4%)
IAAA-133177	1,390 ± 20	84.09 ± 0.23	1,362 ± 23	1301calBP - 1282calBP (68.2%)	1312calBP - 1266calBP (95.4%)
IAAA-133178	1,350 ± 20	84.53 ± 0.23	1,270 ± 23	1261calBP - 1228calBP (40.6%) 1211calBP - 1184calBP (27.6%)	1275calBP - 1178calBP (95.4%)
IAAA-133179	1,320 ± 20	84.85 ± 0.23	1,294 ± 23	1277calBP - 1240calBP (43.6%) 1205calBP - 1186calBP (24.6%)	1285calBP - 1224calBP (61.8%) 1213calBP - 1182calBP (33.6%)
IAAA-133180	1,370 ± 20	84.27 ± 0.21	1,330 ± 23	1294calBP - 1263calBP (68.2%)	1300calBP - 1237calBP (84.0%) 1206calBP - 1186calBP (11.4%)
IAAA-133181	1,340 ± 20	84.65 ± 0.23	1,275 ± 23	1264calBP - 1230calBP (39.0%) 1209calBP - 1184calBP (29.2%)	1275calBP - 1180calBP (95.4%)
IAAA-133182	1,360 ± 20	84.42 ± 0.22	1,327 ± 22	1293calBP - 1263calBP (68.2%)	1298calBP - 1238calBP (83.0%) 1205calBP - 1186calBP (12.4%)
IAAA-133183	1,410 ± 20	83.95 ± 0.23	1,408 ± 24	1330calBP - 1296calBP (68.2%)	1347calBP - 1289calBP (95.4%)
IAAA-133184	1,460 ± 20	83.35 ± 0.23	1,394 ± 24	1316calBP - 1289calBP (68.2%)	1340calBP - 1285calBP (95.4%)
IAAA-133185	1,440 ± 20	83.57 ± 0.23	1,348 ± 24	1298calBP - 1276calBP (68.2%)	1307calBP - 1259calBP (92.6%) 1201calBP - 1189calBP (2.8%)
IAAA-133186	3,920 ± 30	61.39 ± 0.19	3,946 ± 27	4499calBP - 4487calBP (6.1%) 4440calBP - 4400calBP (40.7%) 4369calBP - 4354calBP (7.8%) 4327calBP - 4299calBP (13.6%)	4515calBP - 4475calBP (13.0%) 4446calBP - 4294calBP (82.4%)
IAAA-133187	3,160 ± 30	67.45 ± 0.21	3,175 ± 27	3445calBP - 3425calBP (22.3%) 3409calBP - 3371calBP (45.9%)	3450calBP - 3360calBP (95.4%)
IAAA-133188	2,930 ± 20	69.45 ± 0.21	2,919 ± 25	3139calBP - 3128calBP (6.4%) 3109calBP - 3094calBP (9.0%) 3079calBP - 3002calBP (52.8%)	3158calBP - 2974calBP (95.4%)

第２節　横入遺跡と田井Ａ遺跡の地形環境

青　木　哲　哉（立命館大学非常勤講師）

１　はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形とそれを構成する堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が行える。このため、堆積物ごとの細かいオーダーで地形環境を復原し、その変化を辿ることができる。しかも、堆積物には編年された考古遺物がしばしば含まれる。復原された地形環境の時期はそれを通して明確にすることが可能となる。他方で調査区においては、人間活動の痕跡である遺構が検出され、過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりをも考察できるのである。

本稿では、横入遺跡と田井Ａ遺跡における地形環境を明らかにし、それと人間活動との関係について考察したい。調査では、両遺跡の調査区付近における地形の分類と堆積物の把握を試みた。地形分類では、まず１万分の１空中写真の判読と現地踏査によって調査区周辺の地形面を区分した。ついで、調査区付近における微地形の分類を、5,000 の１空中写真の判読と調査区での地質調査や発掘調査の成果にもとづいて行った。堆積物に関しては、主に調査区での地質断面を詳細に観察した。堆積物の観察は、遺構検出面より上位だけでなく、各調査区において掘削したトレンチ断面で遺構検出面以深についても行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査区付近における地形環境、及びそれと人間活動との係わりを考察した。

２　調査区付近の地形分布

⑴　調査区周辺の地形面について

横入遺跡と田井Ａ遺跡の調査区は淡路島東部の小規模な平野に位置する。この平野では、志筑（しづき）川と宝珠（ほうじゅ）川が南東へ流れ、大阪湾に注ぎ込む。これらの河川は、上・中流部でそれぞれ狭長な平野を形成するものの、下流部では１つの平野を流下し、河口付近で合流する。調査区はこうした下流部につくられた平野の北西部に位置している。平野の周囲には山地と丘陵がみられる。山地は、調査区の北東に分布し、標高およそ 125m の低いものである。他の平野周辺には、大阪層群からなる丘陵が広がる。これは、標高 50m 前後のなだらか地形で、多数の谷に刻まれている。

これらに囲まれた下流部の平野は、完新世段丘、現氾濫原、及び支流性扇状地に分けられ、海岸付近には砂堆が認められる（第３図）。各地形の特徴は次のとおりである。

〔完新世段丘〕　これは平野で最もよく発達する。段丘面はほぼ平坦で下流へ緩やかに傾斜し、段丘崖は 50㎝前後の比高をもつ。田井Ａ遺跡の調査区はこの段丘上に位置する。

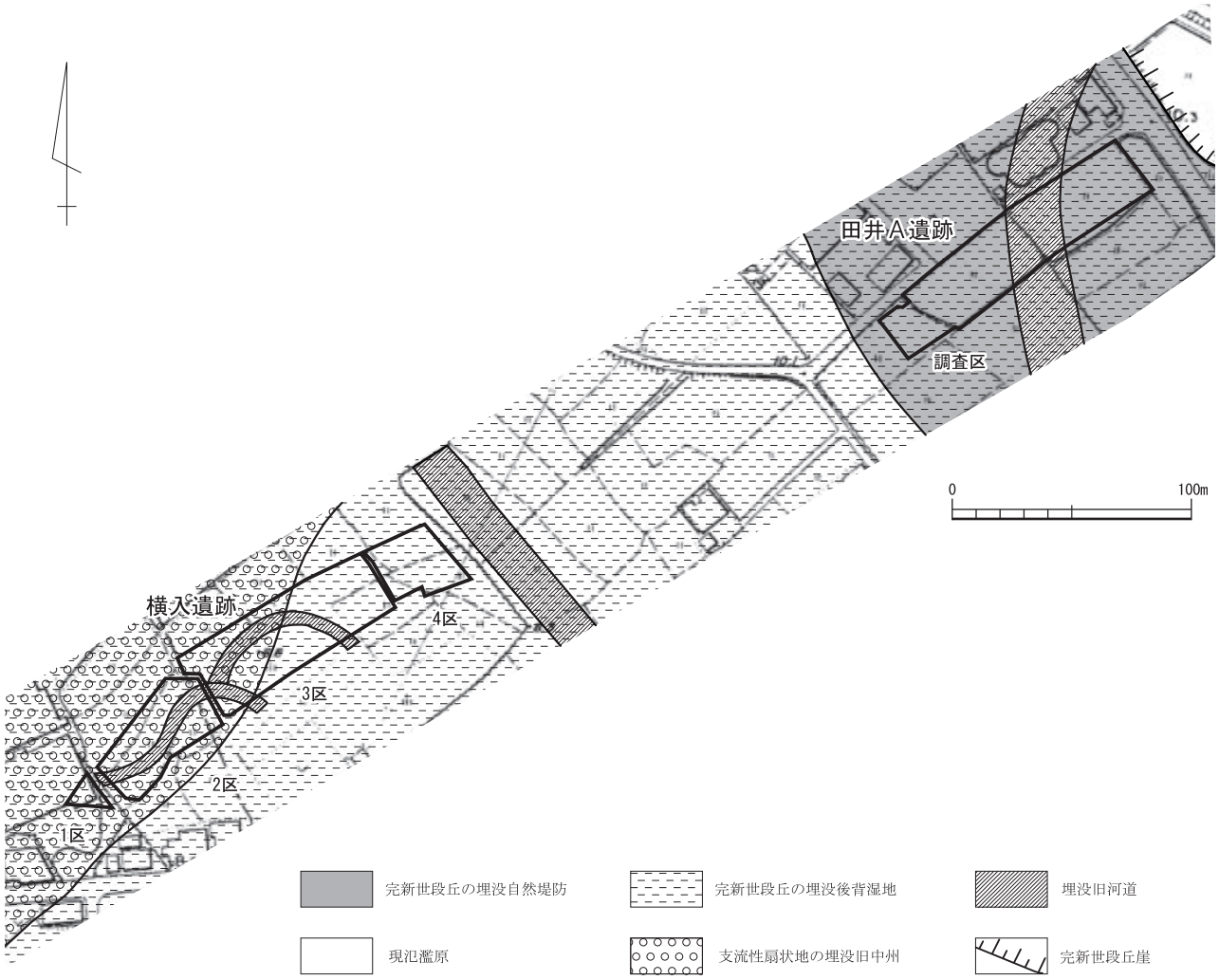
〔現氾濫原〕　この地形面は、志筑川と宝珠川の流路沿いに細長くみられ、断続的に分布する個所もあ

る。これは、最も低い地形面で、洪水の際に冠水する危険性が高い。志筑川の最下流部は市街地化されているため、現氾濫原が不明瞭となっている。

〔砂堆〕 これは、海岸付近に２列存在し、海岸線と平行に延びる。それぞれが300～500mの幅を有し、平野の面積に比して大規模なものである。比高は1.0～1.5mで２列の間付近を志筑川が流れる。砂堆の多くは市街地化されており、海寄りの砂堆末端は人為的な埋め立てによって改変されている。

〔支流性扇状地〕 この扇状地は、背後の山地や丘陵から堆積物が供給されてできたもので、平野の縁辺に点々と認められる。多くは、丘陵を刻む谷の中から麓にかけて発達し、複合扇状地をなしている。地表傾斜は10％前後と大きく、完新世段丘と傾斜変換線で接する。横入遺跡の調査区は支流性扇状地と完新世段丘の境界付近にみられる。

第３図　調査区周辺の地形分類図



第４図　調査区付近における微地形の分布

⑵　調査区付近の微地形について

a）横入遺跡の調査区付近

調査区は完新世段丘の自然堤防帯と支流性扇状地の境界付近に位置する。調査区の南西およそ 130m には志筑川が流れ、約 50m 北西には丘陵が迫る。調査区でみられる支流性扇状地はこの丘陵を刻む谷から発達したものである。調査区付近では、自然堤防帯の微地形である埋没後背湿地や埋没旧河道と、支流性扇状地の埋没旧中州や埋没旧河道が重層した状態で認められる（第４図）。

埋没後背湿地は上下に２つみられ、これらは２区から４区にかけてのほぼ全域に広がる。３区では、これらのうち下位の埋没後背湿地に埋没旧河道が分布する。これは、志筑川の流路跡と考えられ、南西から北東に向かった後南東へ蛇行して延びる。またこの埋没後背湿地では、３区東半部や４区において水田跡が検出されている。中でも、３区東半部の水田跡は弥生時代前期から中期前半のものであり[1)]、層位からみて弥生時代前期の可能性が高い。他方、上位の埋没後背湿地では弥生時代中期から８世紀の畦畔や溝、土坑などが検出されている。とくに３区と４区では水田跡が検出されており、３区のそれは弥生時代中期から古墳時代の水田跡にあたる[2)]。

支流性扇状地は上下の埋没後背湿地間に認められる。１区から４区には、南東へ発達する支流性扇状地の末端がみられ、埋没した旧中州と旧河道が分布する。２区では、この扇状地を流れた弥生時代前期

ころの旧河道が杭列（堰）とともに検出されている[3]。これは、調査区北西の丘陵から流れ出す志筑川支流の流路跡にあたり、おおむね西から東へやや蛇行して延びる。こうした扇状地末端の埋没旧中州上と埋没旧河道上では、1区から3区西半部において弥生時代中期から8世紀の溝や土坑などが検出されている。溝（環濠）は弥生時代中期前半のものであり[4]、2区ではその一部が埋没旧河道に沿って延びる。また、土坑は祭祀に使われた古墳時代中期のもので、2区の埋没旧中州上で認められている[5]。

b）田井A遺跡の調査区付近

調査区は完新世段丘の自然堤防帯に位置する。ここは、横入遺跡の調査区より北東に約210m離れており、およそ60m東には宝珠川が流れる。調査区付近では、自然堤防、後背湿地、及び旧河道が埋没した状態で分布し（第4図）、横入遺跡の調査区と同様に重なっている。埋没後背湿地は上下にみられ、間には埋没自然堤防と埋没旧河道が存在する。これらのうち、埋没後背湿地は調査区のほぼ全域に広がる。下位の埋没後背湿地では、7世紀の水田跡が調査区の広い範囲で検出され、調査区南西部ではその下から7世紀より古い水田跡が認められている。

埋没旧河道は、宝珠川の流路跡に該当し、調査区中央部をほぼ南北に延びる。そこでは、少なくとも3本の旧河道が堰を伴って検出されており、これらはいずれも8世紀から9世紀初頭の流路跡にあたる。このような埋没旧河道の両側には、埋没自然堤防が認められる。東西2つの埋没自然堤防は南北に比較的長く延び、それぞれに調査区東半部と西半部の多くが位置する。調査区西半部の埋没自然堤防上では8世紀の水田跡が検出され、調査区西端には10世紀の溝がみられる。また、調査区東半部の埋没自然堤防上からは10世紀の柱穴群や土坑などが検出されている。

3　調査区における堆積物の特徴

(1)　横入遺跡調査区の堆積物について

調査区では、大きく5層の堆積物が観察される（第5図～第9図）。これらは、3層の後背湿地堆積物と2層の支流性扇状地堆積物にあたり、交互に重なって認められる。最下位で観察される後背湿地堆積物は、灰黒色や黒灰色のシルト（第7図の堆積物23・26・28、第8図の堆積物43・46・47・49・51、第9図の堆積物19・21）と主に青灰色の砂質シルトやシルト（第7図の堆積物25、第8図の堆積物42・44・48・50、第9図の堆積物20・22）の互層である。各堆積物の多くは10～30cmの厚さをもち、間には灰色や青灰色の砂とシルト質砂（第7図の堆積物24・27、第8図の堆積物45）が挟まれる。灰黒色と黒灰色のシルトは5層観察され、それぞれは洪水によるシルトの堆積後にその上部またはすべてが低湿な環境下で土壌化されたものである。これらのうち、中位に位置する灰黒色のシルト（第7図の堆積物26）は縄文時代中期後葉ころに相当する4,110 ± 30yrBP（2,761calBC － 2,576calBC）の^{14}C年代値を示す[6]。こうした後背湿地堆積物は3区と4区で確認されている。

この上位に位置する支流性扇状地堆積物は青灰色の砂礫、砂、及びシルト質砂（第9図の堆積物14～18）からなる。これらはマサ土に該当し、厚さは1.1m前後である。砂礫は上部にみられ、含まれる礫は径0.5～2cmの亜角礫～亜円礫を主体とする。このような支流性扇状地堆積物は主に4区で認められる。3区では、これが青灰色の砂質シルトやシルト（第7図の堆積物22、第8図の堆積物41）に変化し、南西に向かって徐々に薄くなる。

これを覆う後背湿地（2－(2)－a）で示した下位の埋没後背湿地）堆積物は、灰黒色や黒灰色のシルト（第5図の堆積物33・35・38、第6図の堆積物22・24・26・28、第7図の堆積物11・14・16・

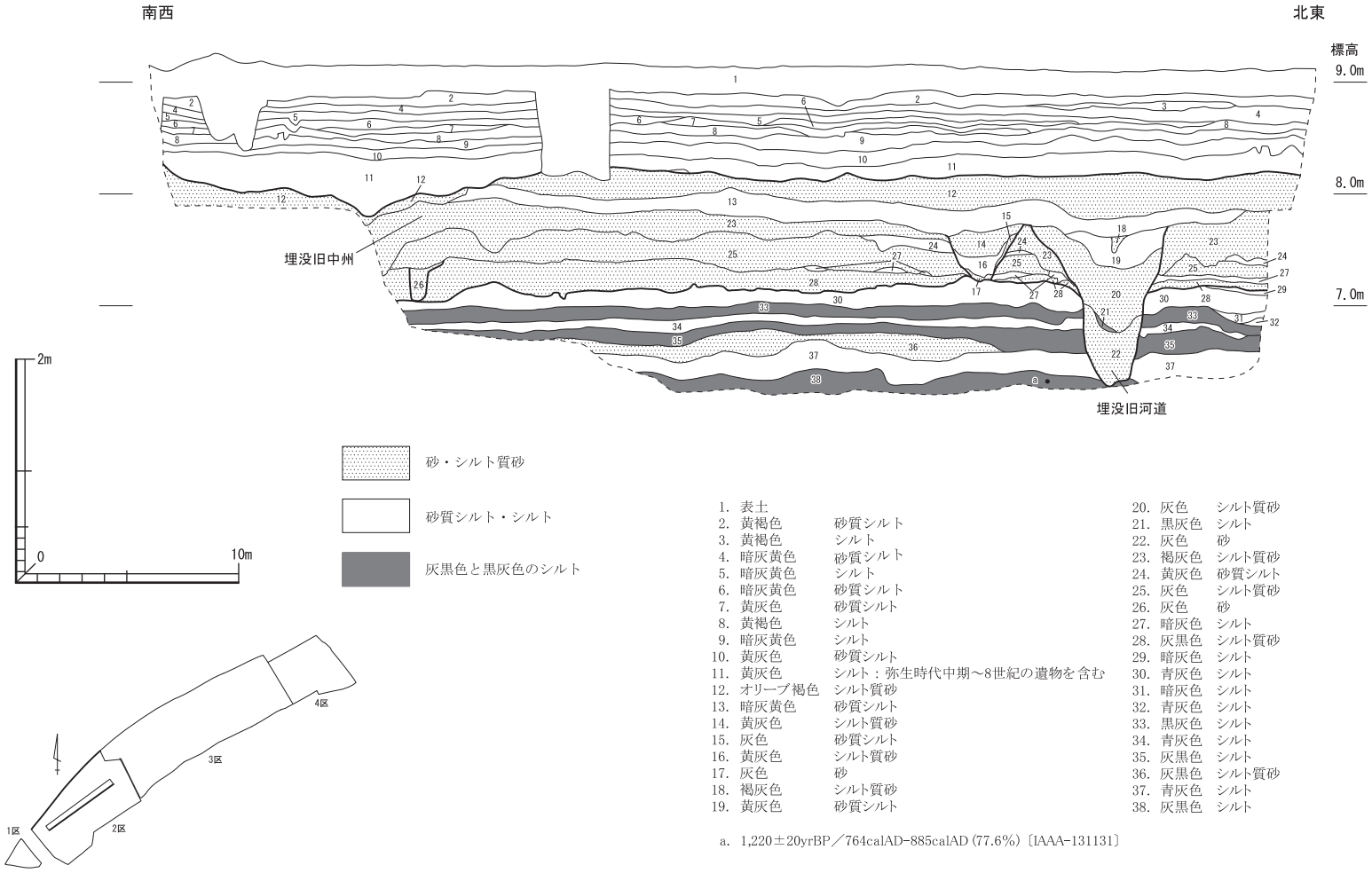
18・21、第8図の堆積物24・30・33・35・39、第9図の堆積物13）と青灰色の砂質シルトやシルト（第5図の堆積物30～32・34・37、第6図の堆積物21・23・25・27、第7図の堆積物10・13・15・17・20、第8図の堆積物28・29・32・34・36、第9図の堆積物12）の互層である。間には、灰黒色や暗灰色のシルト質砂（第5図の堆積物36、第8図の堆積物31）がレンズ状に挟まれる。全体の厚さは50㎝～1mで、4区では2区や3区と比べて薄い。このような後背湿地堆積物には、低湿な環境下で生成された灰黒色と黒灰色のシルトが5層認められ、それぞれ10～30㎝の厚さをもつ。これらのうち3区でみられる黒灰色のシルト（第8図の堆積物35）からは、縄文時代後期初頭ころに該当する3,870 ± 30yrBP（2,464calBC － 2,284calBC）の ^{14}C年代値が得られている[7)]。また、3区東半部で最上位に位置する灰黒色と黒灰色のシルト（第8図の堆積物24）は弥生時代前期ころの水田土壌にあたる。

3区では、こうした後背湿地堆積物の上部に旧河道（2－(2)－a）で示した埋没旧河道）堆積物が認められる。旧河道は、志筑川の流路跡で、幅がおよそ2m、深さが70～80㎝の小規模なものである。旧河道堆積物は主に青灰色の砂（第7図の堆積物12、第8図の堆積物26）や暗灰色のシルト質砂（第8図の堆積物27）で、これらは弥生時代前期ころの水田土壌に覆われる。旧河道堆積物（第7図の堆積物12）に混入する木片の ^{14}C年代値は、縄文時代後期前葉ころに相当する3,790 ± 30yrBP（2,296calBC － 2,140 calBC）である[8)]。なお、この調査区ではおおむね北西－南東方向に延びる正断層が観察される。これは後背湿地堆積物の最下位にみられる黒灰色のシルト（第8図の堆積物39）を切り、それ以深の堆積物は断層の北東側で約30㎝落ちている。

後背湿地堆積物の上位には、再び支流性扇状地（2－(2)－a）で示した支流性扇状地）堆積物がみられる。これは、2区で約1mの厚さをもつものの、東に向かって薄くなる。この支流性扇状地堆積物もマサ土に該当し、4層程度に細分される。これらは灰色や褐灰色などを呈する砂とシルト質砂（第5図の堆積物12・23・25・28、第6図の堆積物11・15・17・18・20、第7図の堆積物2・4・5・7・9、第8図の堆積物16･19･21･23、第9図の堆積物10･11）で、青灰色や黄灰色などの砂質シルトとシルト（第5図の堆積物13・24・27、第6図の堆積物12・16、第7図の堆積物3・6・8、第8図の堆積物17・18・20･22）を薄く挟む。砂とシルト質砂は、主に極粗砂や粗砂からなり、径2㎝以下の礫を含むことが多い。これらのうち下部と中部にみられるもの（第5図の堆積物23・25・28、第6図の堆積物15・17・18・20、第8図の堆積物19・21・23）は、2区から3区西半部に分布し、旧中州堆積物にあたる。

2区では、この旧中州堆積物を切る旧河道（2－(2)－a）で示した埋没旧河道）堆積物がみられる。この旧河道は、弥生時代前期ころに流れた志筑川支流の流路跡で、約4mの幅と1m前後の深さをもつ。旧河道の下部から中部には灰色の砂とシルト質砂（第5図の堆積物20・22、第6図の堆積物13・14）、上部には黄灰色の砂質シルト（第5図の堆積物19）が堆積する。

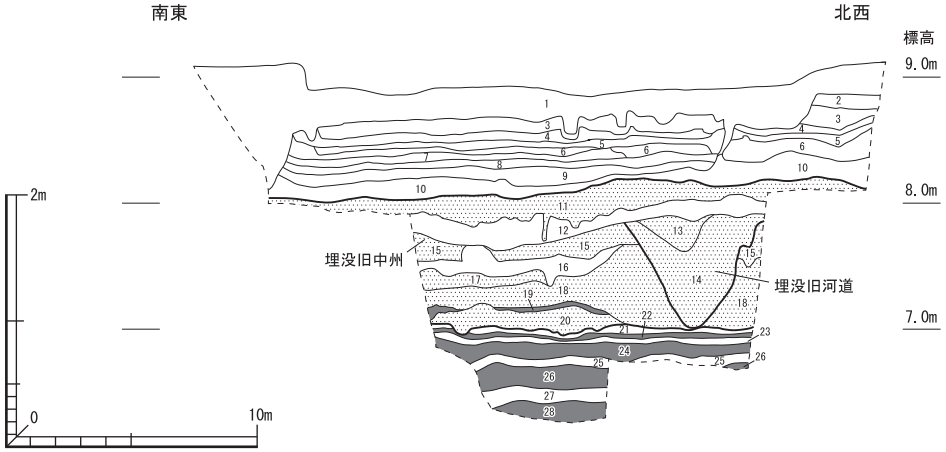
最も上位に位置する後背湿地（2－(2)－a）で示した上位の埋没後背湿地）堆積物は2区から4区に60～80㎝の厚さで認められる。これは10層前後に分けられ、多くが灰黄色や灰色などの砂質シルトとシルト（第5図の堆積物2～11、第6図の堆積物2～10、第8図の堆積物2～4・7～12・14・15、第9図の堆積物2～9）である。各堆積物は5～20㎝の厚さでほぼ水平に堆積し、支流性扇状地を被覆する。これらのうち2区と3区の下部に位置する黄灰色や黒褐色などの砂質シルトやシルト（第5図の堆積物11、第6図の堆積物10、第8図の堆積物12）には、弥生時代中期から8世紀の遺物が含まれる。2区と3区ではそれらの下面で弥生時代中期から古墳時代の遺構が検出され、4区では最下位にみられる暗褐色のシルト（第9図の堆積物9）が水田土壌に相当する。

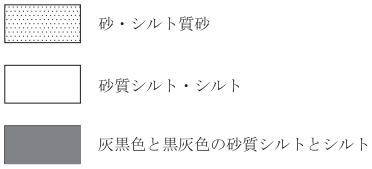


1. 表土
2. 黄褐色　砂質シルト
3. 黄褐色　シルト
4. 暗灰黄色　砂質シルト
5. 暗灰黄色　シルト
6. 暗灰黄色　砂質シルト
7. 黄灰色　砂質シルト
8. 黄褐色　シルト
9. 暗灰黄色　シルト
10. 黄灰色　砂質シルト
11. 黄灰色　シルト：弥生時代中期～8世紀の遺物を含む
12. オリーブ褐色　シルト質砂
13. 暗灰黄色　砂質シルト
14. 黄灰色　シルト質砂
15. 灰色　砂質シルト
16. 黄灰色　シルト質砂
17. 灰色　砂
18. 褐灰色　シルト質砂
19. 黄灰色　砂質シルト
20. 灰色　シルト質砂
21. 黒灰色　シルト
22. 灰色　砂
23. 褐灰色　シルト質砂
24. 黄灰色　砂質シルト
25. 灰色　シルト質砂
26. 灰色　砂
27. 暗灰色　シルト
28. 灰黒色　シルト質砂
29. 暗灰色　シルト
30. 青灰色　シルト
31. 暗灰色　シルト
32. 青灰色　シルト
33. 黒灰色　シルト
34. 青灰色　シルト
35. 灰黒色　シルト
36. 灰黒色　シルト質砂
37. 青灰色　シルト
38. 灰黒色　シルト

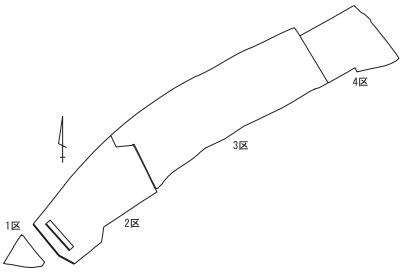
a. 1,220±20yrBP／764calAD-885calAD (77.6%)〔IAAA-131131〕

第５図　横入遺跡２区における南西－北東方向の地質断面図（上半部は北西壁断面・下半部はトレンチ断面）

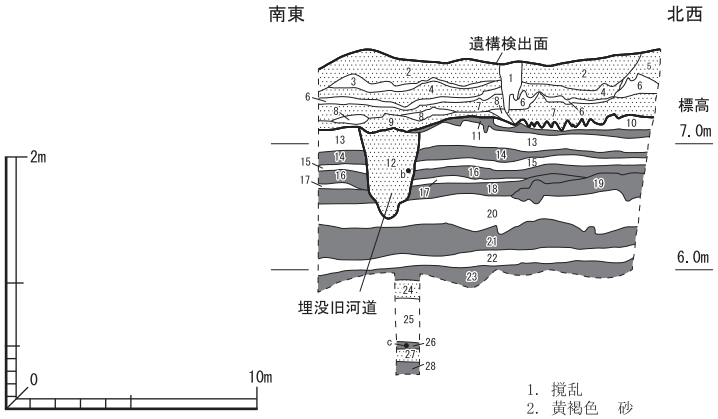


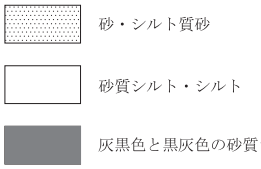


1. 表土
2. 黄褐色　砂質シルト
3. 暗灰黄色　砂質シルト
4. 黄褐色　砂質シルト
5. 黄褐色　シルト
6. 暗灰黄色　砂質シルト
7. 黄灰色　シルト
8. 灰黄褐色　砂質シルト
9. 褐灰色　シルト
10. 灰黄褐色　砂質シルト：弥生時代中期～8世紀の遺物含む
11. 黄褐色　シルト質砂
12. 黄褐灰色　砂質シルト
13. 褐灰色　シルト質砂
14. 灰色　砂
15. 灰黄色　シルト質砂
16. 青灰色　砂質シルト
17. 灰色　砂
18. 灰色　シルト質砂
19. 黒灰色　砂質シルト
20. 灰色　シルト質砂
21. 緑灰色　シルト
22. 黒灰色　シルト
23. 緑灰色　シルト
24. 黒灰色　シルト
25. 暗緑灰色　シルト
26. 灰黒色　シルト
27. 緑灰色　シルト
28. 灰黒色　シルト



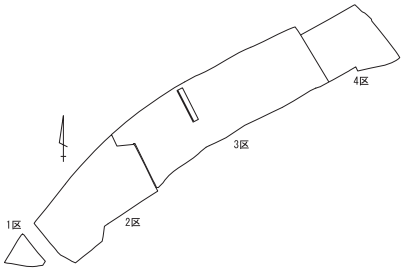
第６図　横入遺跡２区における南東 - 北西方向の地質断面図（上半部は南西壁断面・下半部はトレンチ断面）



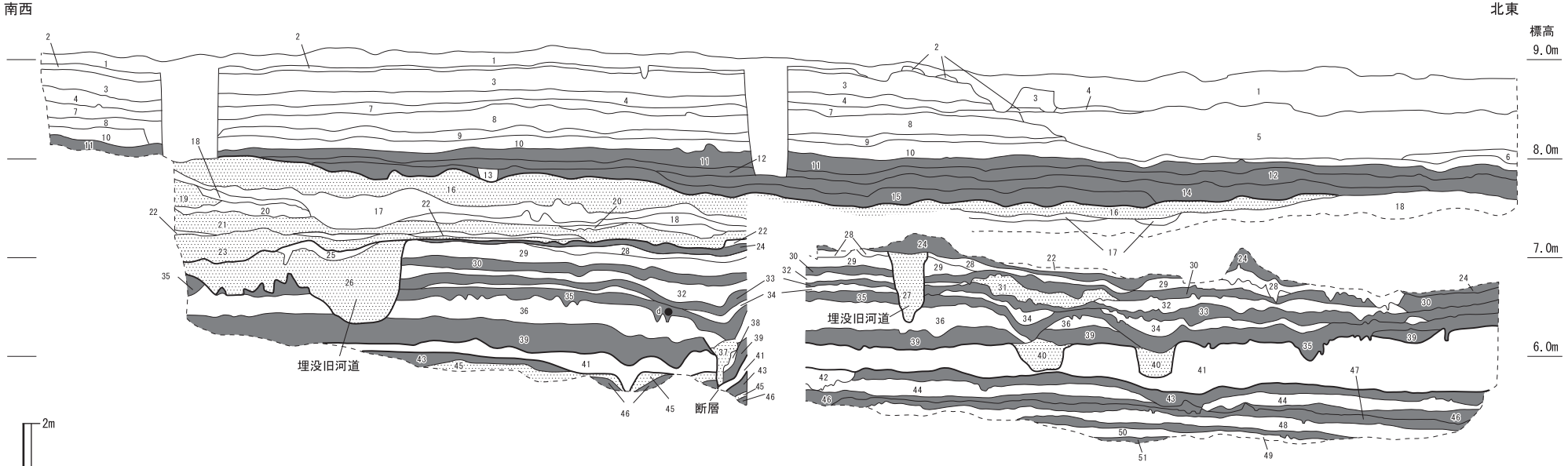


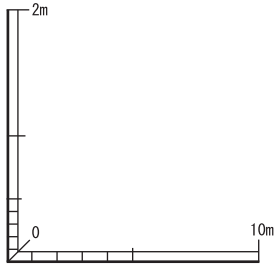
1. 撹乱
2. 黄褐色　砂
3. 黄褐色　シルト
4. 黒褐色　シルト質砂
5. 青灰色　シルト質砂
6. 青灰色　砂質シルト
7. 青灰色　シルト質砂
8. 青灰色　砂質シルト
9. 青灰色　シルト質砂
10. 青灰色　シルト
11. 灰黒色　シルト：弥生時代前期～中期前半の水田土壌
12. 青灰色　砂
13. 青灰色　シルト
14. 黒灰色　シルト
15. 青灰色　シルト
16. 黒灰色　シルト
17. 青灰色　シルト
18. 黒灰色　シルト
19. 黒灰色　砂質シルト
20. 青灰色　シルト
21. 黒灰色　シルト
22. 青灰色　シルト
23. 黒灰色　シルト
24. 青灰色　シルト質砂
25. 青灰色　シルト
26. 灰黒色　シルト
27. 青灰色　砂
28. 黒灰色　シルト

b. 3,790±30yrBP／2296calBC-2140calBC (95.4%)〔IAAA-131130〕
c. 4,110±30yrBP／2761calBC-2576calBC (70.8%)〔IAAA-131133〕



第７図　横入遺跡３区における南東 - 北西方向のトレンチ断面図

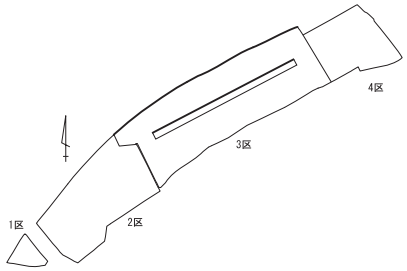




砂・シルト質砂

砂質シルト・シルト

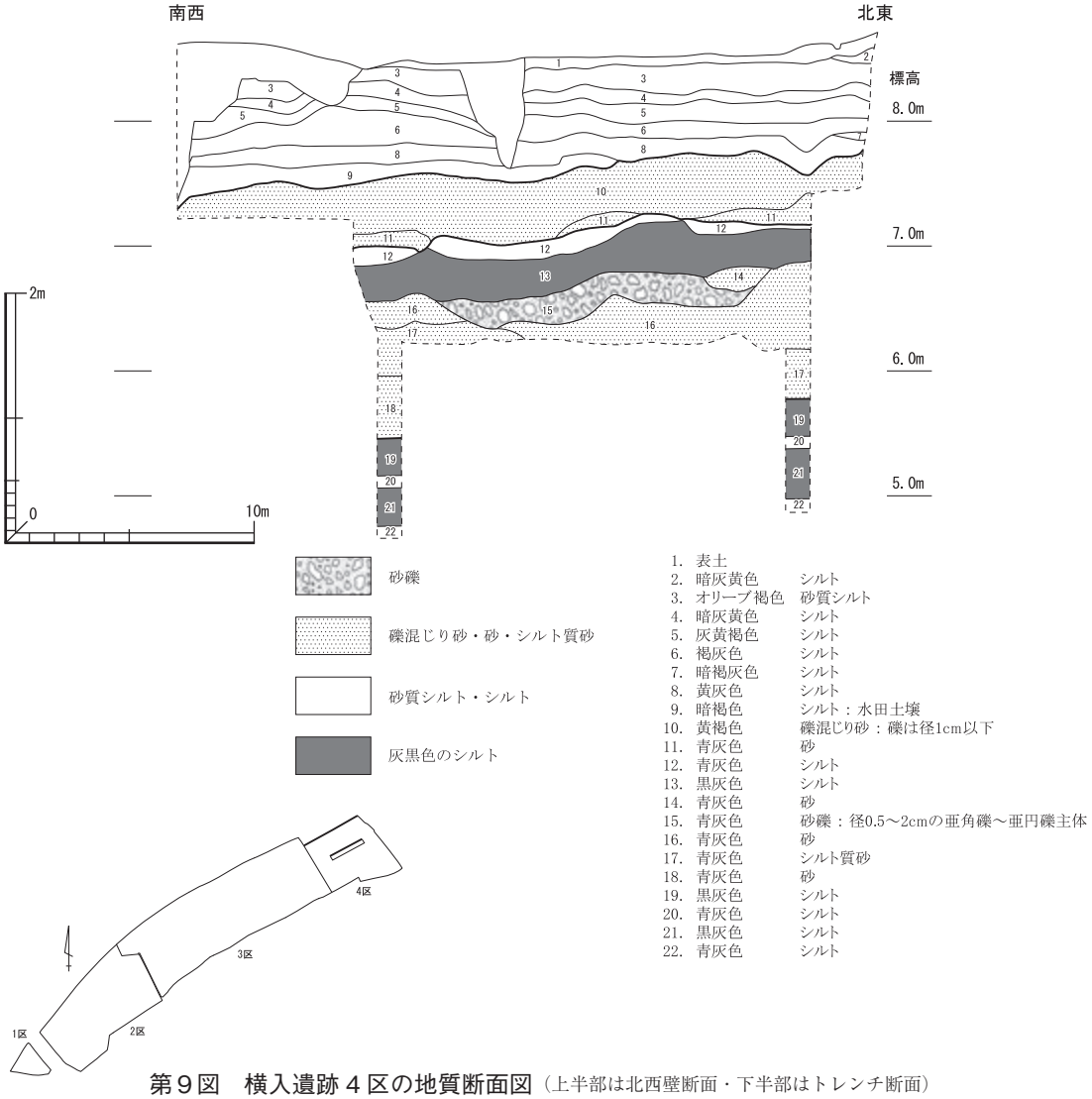
黒色や灰黒色、黒灰色、黒褐色のシルト



1. 表土
2. 暗灰黄色　砂質シルト
3. 灰オリーブ色　砂質シルト
4. 灰色　砂質シルト
5. 暗灰黄色　シルト
6. 褐灰色　シルト
7. 灰黄色　シルト
8. 黄灰色　シルト
9. 灰色　砂質シルト
10. 暗灰黄色　シルト
11. 黒褐色　シルト
12. 黒褐色　砂質シルト：弥生時代中期～8世紀の遺物を含む
13. 黒色　シルト：遺構埋土
14. 黒褐色　シルト
15. 黒色　シルト
16. 灰色　シルト質砂
17. 黄褐色　砂質シルト
18. 青灰色　シルト
19. 黄灰色　シルト質砂
20. 青灰色　砂質シルト
21. 青灰色　砂
22. 青灰色　砂質シルト
23. 青灰色　シルト質砂
24. 黒灰色　シルト：弥生時代前期～中期前半の水田土壌
25. 青灰色　砂質シルト
26. 青灰色　砂
27. 暗灰色　シルト質砂
28. 青灰色　砂質シルト
29. 青灰色　シルト
30. 黒灰色　シルト
31. 暗灰色　シルト質砂
32. 青灰色　シルト
33. 黒灰色　シルト
34. 青灰色　シルト
35. 黒灰色　シルト
36. 青灰色　シルト
37. 灰色　砂
38. 青灰色　シルト
39. 黒灰色　シルト
40. 暗灰色　シルト質砂
41. 青灰色　砂質シルト
42. 暗灰色　砂質シルト
43. 黒灰色　シルト
44. 青灰色　シルト
45. 灰色　シルト質砂
46. 黒灰色　シルト
47. 灰黒色　シルト
48. 青灰色　シルト
49. 黒灰色　シルト
50. 青灰色　シルト
51. 黒灰色　シルト

d. 3,870±30yrBP／2464calBC-2284calBC (93.3%)〔IAAA-131132〕

第８図　横入遺跡３区における南西 - 北東方向の地質断面図（上半部は北西壁断面・下半部はトレンチ断面）

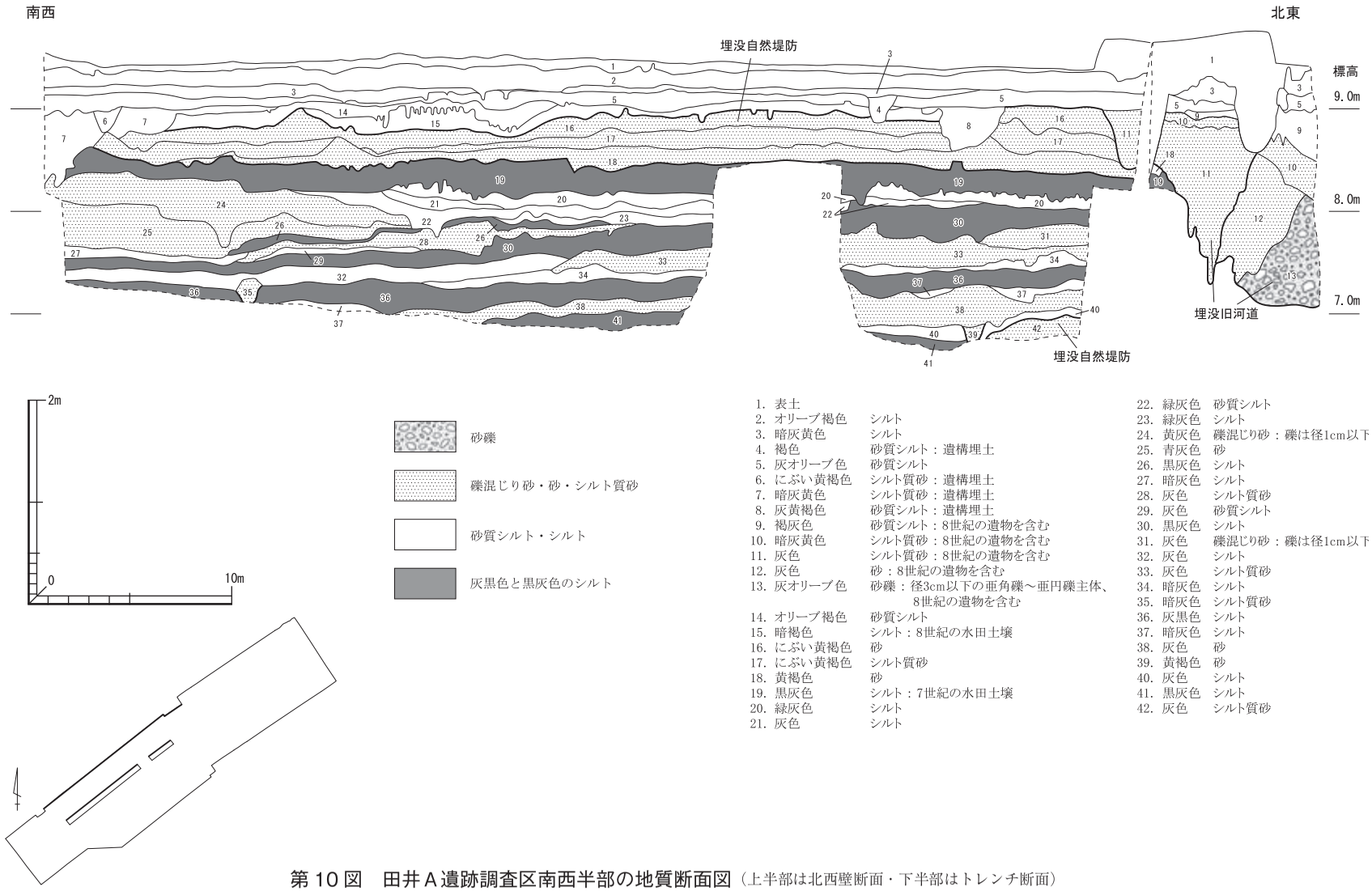


第９図　横入遺跡４区の地質断面図（上半部は北西壁断面・下半部はトレンチ断面）

⑵　田井 A 遺跡調査区の堆積物について

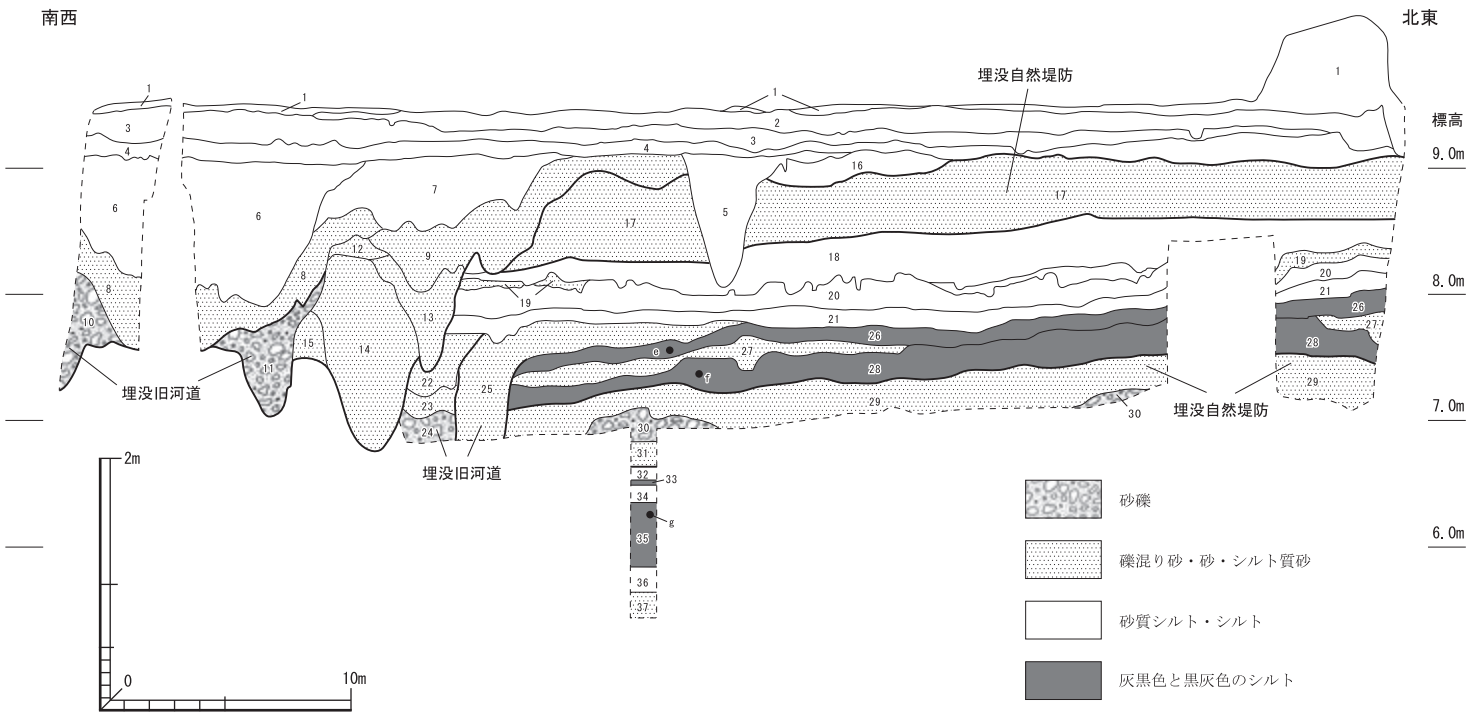
調査区では、大きくみて５層の堆積物が認められる（第 10 図・第 11 図）。これらは、３層の後背湿地堆積物と２層の自然堤防堆積物であり、交互に重なっている。最下位で観察される後背湿地堆積物は、約 1m の厚さがあり、５層に分けられる。これらは暗灰色や灰色のシルト（第 11 図の堆積物 32・34・36）と灰黒色や黒灰色を呈するシルト（第 11 図の堆積物 33・35）の互層で、低湿な環境下で土壌化した後者の堆積物は２層みられる。その上位に位置する自然堤防堆積物は調査区東半部で観察される。厚さは約 90cmで、上面は南西へ高度を下げる。これは主に灰色の砂とシルト質砂（第 10 図の堆積物 42、第 11 図の堆積物 29・31）からなり、間には灰色の砂礫（第 11 図の堆積物 30）が挟まれる。砂礫は 20 ～ 25cmの厚さで認められ、礫は径 1cm以下の亜角礫～亜円礫を主体とする。

自然堤防堆積物の上位には、後背湿地（２－(2)－ b）で示した下位の埋没後背湿地）堆積物がみられる。これは、調査区東半部で下位の自然堤防を約 1.1m の厚さで覆い、自然堤防の上面高度が下がる調査区西半部では 1.5m 以上の厚さを有する。調査区西半部ではこの堆積物が 15 層前後に細分される。これらは基本的に灰黒色や黒灰色のシルト（第 10 図の堆積物 19・26・30・36・41、第 11 図の堆積物 26・28）と緑灰色や灰色などの砂質シルトやシルト（第 10 図の堆積物 20 ～ 23・29・32・34・37・40、第 11 図



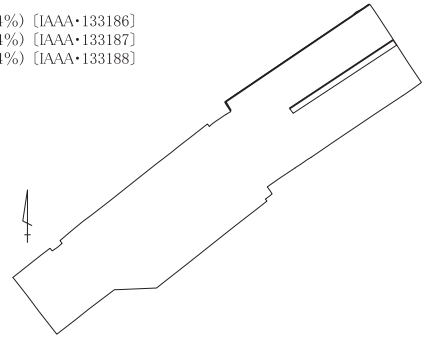
1. 表土
2. オリーブ褐色　シルト
3. 暗灰黄色　シルト
4. 褐色　砂質シルト：遺構埋土
5. 灰オリーブ色　砂質シルト
6. にぶい黄褐色　シルト質砂：遺構埋土
7. 暗灰黄色　シルト質砂：遺構埋土
8. 灰黄褐色　砂質シルト：遺構埋土
9. 褐灰色　砂質シルト：8世紀の遺物を含む
10. 暗灰黄色　シルト質砂：8世紀の遺物を含む
11. 灰色　シルト質砂：8世紀の遺物を含む
12. 灰色　砂：8世紀の遺物を含む
13. 灰オリーブ色　砂礫：径3cm以下の亜角礫～亜円礫主体、8世紀の遺物を含む
14. オリーブ褐色　砂質シルト
15. 暗褐色　シルト：8世紀の水田土壌
16. にぶい黄褐色　砂
17. にぶい黄褐色　シルト質砂
18. 黄褐色　砂
19. 黒灰色　シルト：7世紀の水田土壌
20. 緑灰色　シルト
21. 灰色　シルト
22. 緑灰色　砂質シルト
23. 緑灰色　シルト
24. 黄灰色　礫混じり砂：礫は径1cm以下
25. 青灰色　砂
26. 黒灰色　シルト
27. 暗灰色　シルト
28. 灰色　シルト質砂
29. 灰色　砂質シルト
30. 黒灰色　シルト
31. 灰色　礫混じり砂：礫は径1cm以下
32. 灰色　シルト
33. 灰色　シルト質砂
34. 暗灰色　シルト
35. 暗灰色　シルト質砂
36. 灰黒色　シルト
37. 暗灰色　シルト
38. 灰色　砂
39. 黄褐色　砂
40. 灰色　シルト
41. 黒灰色　シルト
42. 灰色　シルト質砂

第10図　田井Ａ遺跡調査区南西半部の地質断面図（上半部は北西壁断面・下半部はトレンチ断面）



1. 表土
2. 黄褐色　シルト
3. 黄灰色　シルト
4. 灰黄褐色　シルト：10世紀の遺物を含む
5. オリーブ褐色　砂礫：径2cm以下の亜角礫～亜円礫主体、8世紀の遺物を含む
6. 褐灰色　砂質シルト：8世紀の遺物を含む
7. 褐灰色　砂：8世紀の遺物を含む
8. 暗灰黄色　シルト質砂：8世紀の遺物を含む
9. 灰オリーブ色　砂：8世紀の遺物を含む
10. 灰オリーブ色　砂礫：径3cm以下の亜角礫～亜円礫主体、8世紀の遺物を含む
11. 灰色　砂礫：径1cm以下の亜角礫～亜円礫主体、8世紀の遺物を含む
12. 黄灰色　砂：8世紀の遺物を含む
13. 灰オリーブ色　砂：8世紀の遺物を含む
14. 灰色　シルト質砂：8世紀の遺物を含む
15. 黄灰色　シルト質砂：8世紀の遺物を含む
16. 灰黄褐色　砂：8世紀の遺物を含む
17. 黄灰色　シルト質砂
18. 暗灰色　砂質シルト：7世紀の水田土壌
19. 灰色　シルト質砂
20. 緑灰色　シルト
21. 暗灰色　砂質シルト
22. 灰色　礫混じり砂：礫は径1cm以下
23. 灰色　砂
24. 灰色　砂礫：径1cm以下の亜角礫～亜円礫主体
25. 灰色　シルト質砂
26. 黒灰色　シルト：北東端で弥生時代前期の遺物を含む
27. 黒灰色　シルト質砂
28. 灰黒色　シルト
29. 灰色　シルト質砂
30. 灰色　砂礫：径1cm以下の亜角礫～亜円礫主体
31. 灰色　砂
32. 灰色　シルト
33. 黒灰色　シルト
34. 灰色　シルト
35. 灰黒色　シルト
36. 暗灰色　シルト
37. 緑灰色　シルト質砂

e. 3,950±30yrBP／4446calBC-4294calBC（82.4%）〔IAAA・133186〕
f. 3,180±30yrBP／3450calBC-3360calBC（95.4%）〔IAAA・133187〕
g. 2,920±30yrBP／3158calBC-2974calBC（95.4%）〔IAAA・133188〕



第11図　田井A遺跡調査区東半部の地質断面図（上半部は北西壁断面・下半部はトレンチ断面）

の堆積物 18・20・21）からなり、灰色や青灰色などの砂とシルト質砂（第 10 図の堆積物 24・25・28・31・33・38、第 11 図の堆積物 19・27）がレンズ状に挟まれる。堆積物の多くは 5 ～ 30cmの厚さをもつ。

このような後背湿地堆積物には、灰黒色や黒灰色を呈するシルトが 5 層認められ、それらのうち 3 層（第 10 図の堆積物 19・36・41、第 11 図の堆積物 18・26・28）が調査区東半部の自然堤防上にほぼ連続的にみられる。ただし、最上位に位置する黒灰色のシルト（第 10 図の堆積物 19）は調査区東半部で暗灰色のシルト（第 11 図の堆積物 18）に変化する。調査区中央部では、こうした 3 層のうち中位の黒灰色シルト（第 11 図の堆積物 26）を切る旧河道が 2 本認められる。これらは、ほぼ南北に延びる宝珠川の流路跡で、多くが侵食によって残されていない。また、最も下位の灰黒色シルト（第 11 図の堆積物 28）は、縄文時代後期後半から晩期初頭ころに該当する 3,180 ± 30yrBP（3,450calBC － 3,360calBC）の ^{14}C 年代値を示す[9)]。中位の黒灰色シルト（第 11 図の堆積物 26）には、調査区北東端で弥生時代前期の遺物が混入し、上位に位置する黒灰色と暗灰色のシルト（第 10 図の堆積物 19、第 11 図の堆積物 18）はともに 7 世紀の水田土壌である。

その上位には再び自然堤防（２－(2)－b）で示した埋没自然堤防）堆積物が認められる。この堆積物は、黄褐色や黄灰色の砂とシルト質砂（第 10 図の堆積物 16 ～ 18、第 11 図の堆積物 17）からなり、調査区の広範囲に分布する。ただし、厚さは 50 ～ 70cmしかなく、これは調査区西半部が北から発達する自然堤防、東半部が南へ延びる自然堤防の末端付近に位置するためである。

最も上位にみられる後背湿地（２－(2)－b）で示した上位の埋没後背湿地）堆積物は、40 ～ 80cmの厚さをもつ。これは 5 層前後に分けられ、それぞれは黄褐色や灰オリーブ色などの砂質シルトやシルト（第 10 図の堆積物 2・3・5・14・15、第 11 図の堆積物 2 ～ 4）である。これらのうち最下位の暗褐色シルト（第 10 図の堆積物 15）は、調査区西半部に分布し、8 世紀の水田土壌にあたる。調査区中央部では、このシルトを切る旧河道（２－(2)－b）で示した埋没旧河道）堆積物が認められる。そこには、少なくとも 3 本の流路跡が重複してみられる。いずれも宝珠川の流路跡に相当し、5 ～ 25m の幅と 1.4 ～ 2 m の深さである。旧河道堆積物は、主に灰色や褐灰色、灰オリーブ色などの砂礫、砂、及びシルト質砂で、流路によっては上部に砂質シルトが認められる。これらの堆積物には主として 8 世紀の遺物が含まれ、遅くとも 9 世紀初頭には流路の埋積が終了したと考えられている。旧河道堆積物より上位にみられる後背湿地堆積物のうち、調査区西半部で観察される灰オリーブ色の砂質シルト（第 10 図の堆積物 5）と東半部における灰黄褐色のシルト（第 11 図の堆積物 4）には 10 世紀の遺物が含まれる。とくに調査区東半部では、灰黄褐色のシルト下面で同時期の遺構が検出されている。

4　調査区付近における地形環境の変遷

調査区付近の地形環境は、これまで述べた事柄からみて次のように考察される。

〔ステージ 1〕　縄文時代中期後葉前後、横入遺跡の 2 区から 4 区では、主にシルトが洪水に伴って幾度も堆積し、後背湿地が発達した。そこでは、堆積したシルトの上部が低湿な環境の下で土壌化し、灰黒色や黒灰色のシルトが生成された。

〔ステージ 2〕　縄文時代中期後葉から後期初頭までに、横入遺跡 4 区を中心に砂や砂礫が堆積し、支流性扇状地が発達した。これらの堆積物は調査区北西の丘陵から数度の洪水によってもたらされた。

〔ステージ 3〕　横入遺跡の 2 区から 4 区では、支流性扇状地の形成後に後背湿地が発達した。低湿な後背湿地では、洪水堆積の度に灰黒色や黒灰色のシルトが土壌化によって生成された。このような後背

湿地の形成開始期から縄文時代後期初頭までのある時期には、調査区付近で地震が発生した。その際、3区では正断層が形成され、断層の北東側が約30㎝相対的に沈んだ。縄文時代後期前葉ころになると、3区付近に広がる後背湿地を志筑川が流下し、この流路は間もなく砂とシルト質砂に埋積された。一方、田井A遺跡の調査区でも後背湿地の形成がみられた。そこでは、横入遺跡と同様に低湿な環境が現出し、細粒堆積物の土壌化が行われた。その後、調査区東半部では宝珠川の氾濫に伴って砂やシルト質砂などがもたらされ、縄文時代後期中ごろまでに自然堤防が形成された。

〔ステージ4〕 横入遺跡の調査区では、縄文時代後期前葉以降洪水のほとんど起こらない安定した環境が続き、弥生時代前期ころになると3区東半部の後背湿地で水田稲作が営まれた。その後、1区から3区西半部には極粗砂や粗砂が北西からの洪水によって供給され、支流性扇状地の形成がはじまった。2区では、扇状地をつくる志筑川の支流が東西に流れ、その両側に中州が形成された。この流路では、弥生時代前期ころに堰がつくられ、さらに砂などによる埋積がなされた。これに対して、田井A遺跡の調査区東半部では、縄文時代後期後半から弥生時代前期にかけてシルト質砂やシルトなどの洪水堆積が自然堤防上でみられた。その結果、自然堤防は浅く埋没した。

〔ステージ5〕 横入遺跡の調査区には弥生時代前期から中期前半にも砂がもたらされ、支流性扇状地の3区東半部と4区への発達がみられた。さらにこの扇状地が砂質シルトやシルトの被覆によって浅く埋没した後、比較的安定した環境が8世紀まで続いた。こうした環境の下、埋没した支流性扇状地上では人間活動がみられた。扇状地の末端には弥生時代中期前半に環濠が掘られ、埋没旧中州上には古墳時代中期に祭祀用の土坑がつくられた。他方、田井A遺跡の調査区では弥生時代前期以降に宝珠川が調査区中央部を2度南北に流れた。これらの埋積後には、砂質シルトやシルトなどが7世紀までに堆積し、後背湿地が発達した。7世紀にはこの後背湿地に水田がつくられた。

〔ステージ6〕 田井A遺跡の調査区では、7世紀から8世紀への遷移期に比較的大規模な洪水が発生した。その際、砂とシルト質砂が堆積し、自然堤防が形成された。調査区西半部の自然堤防は、その後すぐにシルトに覆われ、浅く埋没した。8世紀にはこの埋没自然堤防上で水田が経営された。

〔ステージ7〕 その後、田井A遺跡の調査区では宝珠川が調査区中央部を南北に流下した。これは少なくとも3度なされ、その度に流路の形成と埋積が繰り返された。人間は流路が形成されるごとに堰を築き、水を利用した。こうした流路の埋積は遅くとも9世紀初頭までに終わった。

〔ステージ8〕 9世紀から10世紀にかけて、田井A遺跡の調査区では砂質シルトとシルトが洪水によってもたらされ、後背湿地が形成された。そのため調査区東半部の自然堤防は浅く埋没し、10世紀にはこの埋没自然堤防上で人間が居住した。このころ横入遺跡の調査区でも後背湿地の発達がみられた。

〔ステージ9〕 横入遺跡と田井A遺跡の調査区では、10世紀以降にも洪水に伴って砂質シルトやシルトが堆積した。洪水は数度及び、その度に後背湿地は発達していった。

〔ステージ10〕 後背湿地の発達後、志筑川と宝珠川が下方侵食を行った。その結果、横入遺跡と田井A遺跡の調査区が位置する平野は段丘化し、各河川に沿って現氾濫原が形成された。

5　おわりに

横入遺跡と田井A遺跡の調査区は、志筑川と宝珠川が形成した平野の完新世段丘上に位置する。これは自然堤防帯が10世紀以降に段丘化したものである。横入遺跡の調査区では後背湿地と支流性扇状地、田井A遺跡の調査区では自然堤防と後背湿地が埋没した状態で認められ、各調査区には埋没旧河

道が分布する。横入遺跡の調査区では、支流性扇状地が上下に２つみられ、４区に存在する下位の支流性扇状地は縄文時代中期後葉から後期初頭までに、また１区から４区に発達するそれは縄文時代後期前葉から弥生時代中期前半までに形成されたものである。旧河道は２本分布し、３区のそれは縄文時代後期前葉ころにつくられた志筑川の流路跡で、２区の旧河道は弥生時代前期ころに形成・埋没した志筑川支流のものにあたる。これらはそれぞれの形成後に後背湿地堆積物によって埋没した。

他方、田井Ａ遺跡の調査区では、自然堤防が上下に２つ分布する。ひとつは調査区東半部に縄文時代後期後半以前に、他の１つは調査区のほぼ全域に７世紀から８世紀に遷移する時期に形成されたものである。旧河道は少なくとも５本が調査区中央部に重複してみられる。いずれも南北に流下した宝珠川の流路跡にあたり、そのうち２本は弥生時代前期から７世紀、残る３本は８世紀から９世紀初頭に形成・埋積されたものである。これらも横入遺跡と同様にそれぞれの形成後に後背湿地堆積物に被覆された。

両遺跡の調査区では、こうした地形の変化過程で人間活動がみられた。横入遺跡１区から３区西半部では、埋没した支流性扇状地の末端に弥生時代中期前半に環濠がつくられ、扇状地上が生活空間となった。これは、支流性扇状地が後背湿地に比べて高燥で排水されやすいことに起因する。また、３区と４区の後背湿地では、弥生時代前期ころや弥生時代中期から古墳時代に水田稲作が営まれた。後背湿地が水田に利用された主因は、そこが低湿でほぼ平坦な地表をなすことにある。このように人間活動は弥生時代中期から古墳時代までみられた。これは、その間調査区付近が洪水のほとんど及ばない比較的安定した環境であったことに係わると考えられる。

一方、田井Ａ遺跡の調査区では、東半部の埋没自然堤防上で弥生時代前期と10世紀に人間が活動し、10世紀にはそこが居住域として利用された。調査区東半部では、縄文時代後期後半以前と７世紀から８世紀への遷移期に自然堤防が形成され、10世紀にはそれらが上下に重なって埋没していた状況であった。そのため調査区東半部は、かなり高燥で排水の便がよく、居住に適していたと考えられる。また水田稲作は、７世紀に下位の自然堤防上に発達した後背湿地でなされ、８世紀には調査区西半部で浅く埋没した上位の自然堤防上で営まれた。とくに、後者が居住域とならず水田に利用された一因は、その直前に比較的大規模な洪水が発生し、人間が水害の危険性を認識していたことにあると推定される。横入遺跡と田井Ａ遺跡の調査区では、以上のような地形環境と人間活動の関係が認められるのである。

注

1）兵庫県教育委員会「第3章 遺構」、『横入遺跡』（兵庫県教育委員会）所収、2014年
2）前掲1）
3）前掲1）
4）前掲1）
5）前掲1）
6）（株）加速器分析研究所「第5章 自然科学分析　第2節 横入遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）」、『横入遺跡』（兵庫県教育委員会）所収、2014年
7）前掲6）
8）前掲6）
9）この^{14}Ｃ年代値は（株）加速器分析研究所の測定によるものである。

第３節　田井Ａ遺跡の花粉およびプラント・オパール分析

森　将志（(株) パレオ・ラボ）

１　花粉分析

兵庫県淡路市に所在する田井Ａ遺跡において、弥生時代前期の堆積層である深掘10層から分析試料が採取された。以下では、試料に対して行った花粉分析の結果を示し、考察した。

２　試料と方法

分析試料は、深掘10層から採取された黒色（7.5YR1.7/1）粘土１点である。試料の堆積時期は弥生時代前期と考えられている。この試料について、以下の手順で分析を行った。

試料(湿重量約3g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。作製したプレパラートは全面を検鏡し、その間に現れる花粉・胞子を全て数えた。

３　結果

検鏡した結果、分析試料には十分な量の花粉化石が含まれていなかった。検出された花粉は、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属１点と、シダ植物胞子の単条溝胞子が１点、三条溝胞子が10点である。これらの花粉・胞子の一覧表を第５表に示した。なお、今回の分析試料は、十分な量の花粉化石が得られなかったため、分布図は示していない。

第５表　産出花粉胞子一覧

学名	和名	
樹木		
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	1
シダ植物		
monolete type spore	単条溝胞子	1
trilete type spore	三条溝胞子	10
Arboreal pollen	樹木花粉	1
Spores	シダ植物胞子	11
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	12

４　考察

今回の分析試料には花粉化石がほとんど含まれていなかった。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉化石が残りにくい。分析試料には花粉化石がほとんど含まれていないため、深掘10層は、堆積時あるいはその後の環境において非常に乾燥した時期があったと思われる。その中、シダ植物胞子は分解に強いため、比較的多く産出したと思われる。ちなみに、以前に行ったプラント・オパール分析の結果では、ネザサ節型やキビ族、ウシクサ族の機動細

胞珪酸体が産出しているが、特に湿潤な環境を示しているものではなかった。今回は十分な量の花粉化石が得られなかったため、花粉分析から古植生について言及するのは難しい。

5　プラント・オパール分析

兵庫県淡路市の田井 A 遺跡において、弥生時代前期の堆積層である深掘 10 層から分析試料が採取された。この層における水田跡の存否を確認するため、プラント・オパール分析を行った。以下では、プラント・オパール分析の結果を示し、水田やイネ科植生について述べた。

6　試料と方法

分析試料は、深掘 10 層から採取された黒色（7.5YR1.7/1）粘土 1 点である。試料の堆積時期は弥生時代前期と考えられている。この試料について、以下の手順で分析を行った。

秤量した試料を乾燥後､再び秤量する（絶対乾燥重量測定)。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント･オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。

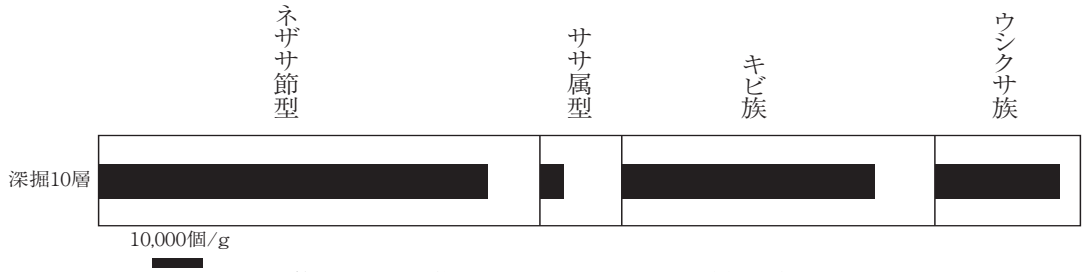
7　結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント･オパール個数を求め（第 6 表)､分布図に示した（第 12 図)。以下に示す各分類群のプラント･オパール個数は、試料 1g 当りの検出個数である。

検鏡の結果、ネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の 4 種類の機動細胞珪酸体が確認できた。各分類群の産出量は、ネザサ節型機動細胞珪酸体が 76,900 個、ササ属型機動細胞珪酸体が 1,300 個、キビ族機動細胞珪酸体が 50,000 個、ウシクサ族機動細胞珪酸体が 24,400 個である。その他に、棒状植物珪酸体が 2,600 個産出している。

第6表　試料１g当りのプラント・オパール個数

	ネザサ節型（個/g）	ササ属型（個/g）	キビ族（個/g）	ウシクサ族（個/g）	棒状植物珪酸体（個/g）
深掘10層	76,900	1,300	50,000	24,400	2,600



第 12 図　田井 A 遺跡における植物珪酸体分布図

8　考察

検鏡の結果、深掘 10 層にはイネ機動細胞珪酸体が含まれていなかった。水田跡であってもイネ機動細胞珪酸体が産出しない例もあるが（杉山・松田，2010)、今回の結果から深掘 10 層が水田跡である可

能性は低いと判断される。

その他の機動細胞珪酸体ではネザサ節型が最も多く産出した。よって、遺跡周辺の開けた場所や林縁部に、ケネザサやゴキタケなどのネザサ節型のササ類が生育していたと思われる。次いでキビ族の産出が目立つが、キビ族にはアワやヒエ、キビといった栽培種とエノコログサやタイヌビエなどの野生種の両方が含まれる。これらを機動細胞珪酸体の形態から両者を区別するのは難しいため、ここではキビ族が遺跡周辺に生育していたと指摘するに留める。さらに、ウシクサ族の産出も見られるが、ウシクサ族にはオギなどの湿地的環境に生育する種とススキやチガヤなどの乾燥的環境に生育する種の両方が含まれる。今回はヨシ属の産出が見られず、湿地的環境の存在を示す状況が希薄なため、弥生時代前期の田井 A 遺跡周辺には主にススキやチガヤなどの乾燥的環境に生育する種が生育していたと思われる。また、ササ属型機動細胞珪酸体の産出も見られ、遺跡周辺に広がる森林の下草としてミヤコザサなどのササ属型のササ類も生育していたであろう。

引用文献

杉山真二・松田隆二（2010）沓形遺跡のプラントオパール分析（平成19年度調査）．仙台市教育委員会編「沓形遺跡」: 181-186，仙台市教育委員会.

第４節　田井Ａ遺跡出土木製品等の樹種同定

パリノ・サーヴェイ（株）・（株）古環境研究所

１　はじめに

田井Ａ遺跡出土木製品の樹種同定については、平成25・26年度の２年度にわたって実施した。平成25年度にはパリノ・サーヴェイ（株）に46点、平成26年度には（株）古環境研究所に53点をそれぞれ委託して分析した。

本節では、両者から提出された分析結果について記載するが、それぞれの分析手法は概ね類同であるため、重複を避け、ここでは各年度の分析結果と同定結果に対する考察のみを記載し、分析手法および両社の報告に引用された参考文献については割愛する。第２項以下は、両社の同定結果報告書からの転載である。

２　田井Ａ遺跡出土木製品の樹種（パリノ・サーヴェイ（株））

⑴　結果

樹種同定結果を第８表に示す。木製品は、針葉樹４分類群（モミ属・スギ・ヒノキ・ヒノキ科）と広葉樹４分類群（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クスノキ・クスノキ科）に同定された。

⑵　考察

木製品は、容器や祭祀具を主体として、服飾具（檜扇）等がある。これらの木製品には、合計８種類が認められた。確認された各種類の材質をみると、針葉樹のモミ属、スギ、ヒノキ、ヒノキ科は、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。このうち、モミ属は保存性が低いとされるが、ヒノキやヒノキ科は耐水性が比較的高い。また、スギは晩材部が広く、早材部と晩材部の材質差が大きいが、ヒノキやヒノキ科は晩材部が薄く、比較的均質である。広葉樹のクヌギ節とコナラ節は、比較的重硬で強度が高い。クスノキは、やや軽軟～中庸で、耐朽性・防虫性が高い。クスノキ科は多くの種類があり、材質もやや重硬～軽軟な種類まで材質に幅がある。

第７表　田井Ａ遺跡出土木製品の器種別種類構成

種類＼器種	容器				服飾	祭祀具			施設・器具		土木	合計
	曲物		挽物	刳物	檜扇	斎串	形代		板状	棒	杭	
	側板	蓋・底	皿	槽	－	－	舟形	人形	－	－	－	
針葉樹												
モミ属						1		10	9			20
スギ								1				1
ヒノキ	5	2	1		1			3	4	1		17
ヒノキ科									1			1
広葉樹												
クヌギ節						2			1		1	4
コナラ節											1	1
クスノキ				1								1
クスノキ科							1					1
合　計	5	2	1	1	1	3	1	14	15	1	2	46

1）種別が空白の資料は、杭を土木材、板を施設材・器具材とした。
2）種別と器種が空白の資料は、施設材・器具材の板と棒に含めた。
3）（長方形）曲物の側板、曲物の蓋の側板、曲物の側板は、曲物の側板に一括した。W55,W53も形状から曲物の側板に含めた。また、W45とW147は曲物の蓋・底とした。
4）祭祀具?は、祭祀具に含めた。

木製品の器種別種類構成を第７表に示す。なお､器種分類が空白の資料については､伊東･山田（2012）を参考にして、板を施設材・器具材、杭を土木材とした。また、器種が空白の資料は、板状を呈する資料が多く、他に分割棒状の資料があることから、施設材・器具材の板と棒に含めて集計した。全体的にモミ属やヒノキを中心とした針葉樹材の利用が多く、広葉樹の利用は少ない。器種別に見ると、容器は、曲物と挽物に大きく分けられる。曲物は、側板、蓋・底の全てがヒノキに同定され、モミ属は１点も認められない。このことから、曲物には、加工性の他、耐水性も考慮した木材利用が推定される。挽物は、高台の無いタイプの皿１点でヒノキに同定された。このタイプの皿は、畿内を中心とした地域に一般的な形態とされる。木皿については、国単位で形態や木材利用に特徴があり、畿内に近い摂津国や山城国では高台の無いヒノキの木皿が多い傾向があるとされる（藤田・阿刀 ,2012）。淡路については調査事例が少ないが、今回の資料の形態および木材利用は、畿内に近い地域の事例に似ている。なお、今回の皿は、中央付近などに穿孔が見られることから、別の用途に転用されたことが推定される。刳物は大型の槽１点であり、クスノキに同定された。クスノキの材質を考慮すれば、高い耐朽性を考慮した木材利用が推定される。また、大型の資料であることから、大径材が得易い点もクスノキが利用された背景に考えられる。

服飾具では、檜扇の破片１点があり、ヒノキに同定された。檜扇は、ヒノキの板目板を利用することが多く、その点で今回の資料は既存の事例とも調和的である。

祭祀具は、斎串と形代に分けられる。斎串は、板目板状の資料（W114）にモミ属、ミカン割状の資料（W141,W93）にクヌギ節が認められ、木取りや形状によって樹種が異なる傾向がある。形代は、人形あるいは人形？が 14 点、舟形が１点である。人形は板目板の資料が 13 点を占めており、柾目板は１点のみである。樹種をみると、板目板となる資料はモミ属が 10 点、ヒノキが３点で、モミ属に利用が偏る傾向がある。兵庫県内の人形の事例をみると、但馬でスギ、播磨でヒノキの利用が見られ、他の資料と同じく、日本海側でスギ、瀬戸内側でヒノキが利用される傾向がある。モミ属に偏った用材傾向は、兵庫県内の他地域では見られないことから、本地域に特有の木材利用の可能性がある。周辺地域をみると、距離は離れるが、下川津遺跡（香川県）の人形にヒノキと共にモミ属やツガ属が多く利用される結果が報告されており（伊東・山田 ,2012）、木材利用の類似性という点で注目される。一方、柾目板となる資料１点はスギであった。兵庫県内の資料では、主に日本海側の但馬や丹後でスギの利用が多いが、瀬戸内側の地域ではヒノキの利用が多い（藤田・阿刀 ,2012）。このような状況を考えれば、スギの人形については、スギの利用が多い日本海側や琵琶湖周辺地域との関連性も考えられる。舟形は、芯持丸木で舟体中央部に構造物が表現される。本資料はクスノキ科に同定され、他の祭祀具とは木材利用が異なる。同様の舟形については、樹種に関する資料がほとんど無いため、木材利用の傾向などは不明である。今後、芯持丸木を使った舟形の木材利用については注視していく必要がある。

施設材・器具材は、器種は不明であるが、板状の資料が多く、他に棒状の資料が１点ある。板状の資料をみると、針葉樹のモミ属やヒノキの利用が多い。器種が明瞭な資料と比較すれば、モミ属は祭祀具など、ヒノキは容器などに木材利用が似ている。なお、クヌギ節に同定された資料は、やや厚い柾目板状の資料で、中央に四角のホゾ穴があることから、別材と組み合わせて使用したことが推定される。クヌギ節の材質や資料の形状を考慮すれば、農具など、強度を要する用途が推定される。

杭は、いずれも芯持丸木であり、クヌギ節とコナラ節に同定された。いずれも二次林等に普通に見られる種類であり、遺跡周辺に生育していた樹木を杭に利用した可能性がある。

第８表　田井Ａ遺跡の樹種同定結果（2011 年度調査）

№.	報告番号	種別	器種	ネーミング№.	出土遺構	層位	木取り	種類
1	W113			登 004	旧河道２		板目	ヒノキ
2	W120		板材	登 005	旧河道２		柾目	ヒノキ
3	W15	祭祀具	人形	登 006	旧河道１	アゼ	板目	モミ属
4	W14	祭祀具	人形	登 007	旧河道１南西半		板目	モミ属
5	W4	祭祀具	人形	登 008	旧河道１南西半	極細砂～シルト	板目	モミ属
6	W100	祭祀具	舟形	登 009	旧河道３南壁際	腐食質細砂～極細砂	芯持丸木	クスノキ科
7	W141	祭祀具	斎串	登 011 登 012		旧トレンチ埋土を含む	ミカン割	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
8	W20	祭祀具？	人形？	登 014	旧河道１	北半　砂レキ	板目	ヒノキ
9	W56			登 015	旧河道１	北半　砂レキ	分割棒状	ヒノキ
10	W55	容器	曲物	登 023	旧河道１北東	埋土上部	柾目	ヒノキ
11	W53	容器	曲物	登 024	旧河道１北東	埋土上部	柾目	ヒノキ
12	W43	容器	皿	登 028 登 029	旧河道１	アゼ	柾目	ヒノキ
13	W87	祭祀具	人形	登 035	旧河道２ 杭列 C2 脇		板目	ヒノキ
14	W33			登 039	旧河道１南西半		板目	モミ属
15	W39			登 040	旧河道１南西半		板目	ヒノキ
16	W70		杭	登 041	旧河道１南西半		芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
17	W26			登 042	旧河道１南西半		板目	モミ属
18	W3	祭祀具	人形	登 044	旧河道１南西半	西側下底砂層	板目	モミ属
19	W65			登 045	旧河道１南西半		板目	モミ属
20	W50			登 047	旧河道１南西半		板目	ヒノキ科
21	W83,W84, W85,W86	祭祀具	人形	登 048	旧河道２西側		板目	モミ属
22	W80	祭祀具	人形	登 049	旧河道２西側		板目	モミ属
23	W90			登 050	旧河道２西側		板目	モミ属
24	W90			登 050	旧河道２西側		板目	モミ属
25	W90			登 050	旧河道２西側		板目	モミ属
26	W88	祭祀具	人形	登 051	旧河道２西側		板目	モミ属
27	W92	服飾具	檜扇	登 053	旧河道２西側		板目	ヒノキ
28	W8	祭祀具	人形	登 054	旧河道１東肩		板目	モミ属
29	W16	祭祀具	人形	登 055	旧河道１東肩		板目	モミ属
30	W17	祭祀具	人形	登 056	旧河道１東肩		板目	ヒノキ
31	W114	祭祀具	斎串	登 057	旧河道２西側		板目	モミ属
32	W45	容器	曲物の蓋	登 059	旧河道１南西半		板目	ヒノキ
33	W45	容器	曲物の蓋の側板	登 059	旧河道１南西半		板目	ヒノキ
34	W57		板材	登 063	旧河道１南西半		分割材	モミ属
35	W151		板材	登 064	旧河道２東側	堤防状遺構東側護岸	板目	モミ属
36	W67	容器	槽	登 065	旧河道１	南側	板目	クスノキ
37	W71		杭	登 069	旧河道１南西半		芯持丸木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
38	W93	祭祀具	自然木 斎串	登 086	旧河道１・２交差部	下層　砂レキ層	ミカン割	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
39	W7	祭祀具	人形	登 087	旧河道１南西半	下層　砂層	板目	モミ属
40	W68			登 091	旧河道１南西半	下層　砂層	柾目	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
41	W64			登 092	旧河道１南西半	下層　砂層	板目	モミ属
42	W46	容器	曲物	登 093	旧河道１南西半	下層　細砂	柾目	ヒノキ
43	W147			登 099	旧河道２		板目	ヒノキ
44	W49	容器	（長方形） 曲物の側板	登 101	旧河道１	シルト～細砂（南壁）	板目	ヒノキ
45	W48	容器	曲物の側板	登 102	旧河道１	シルト～細砂（南壁）	板目	ヒノキ
46	W18	祭祀具	人形	登 103	旧河道１	シルト～細砂（南壁）	柾目	スギ

３　田井Ａ遺跡における樹種同定（(株) 古環境研究所）

⑴　結果

第９表に結果を示し、器種と樹種の相関について第13図に表す。

⑵　考察

同定の結果、田井Ａ遺跡の木製品は、ヒノキ14点、モミ属８点、コナラ属クヌギ節７点、マツ属複維管束亜属５点、クリ３点、ヤナギ属２点、シイ属２点、ヤマグワ２点、カヤ１点、スギ１点、コナラ属コナラ節１点、ヌルデ１点、モチノキ属１点、ハイノキ属１点、トネリコ属１点、広葉樹２点、草本１点であった。

最も多いヒノキは、曲物、曲物底板、人形、皿、木簡、斎串などに使用されており、木理通直で肌目緻密、大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高い。続くモミ属は温帯性のモミと考えられ、人形、杭に使用されており、木理は概ね通直で肌目は粗い。耐久性、保存性は低いが、軽軟な事から加工が容易な木材である。コナラ属クヌギ節は、杭に使用されており、概して弾力に富んだ強い材である。マツ属複維管束亜属は横木、杭などに使用されており、木理概ね通直で、肌目は粗く、水湿に良く耐える材である。クリは横木、杭に使用されており、重硬で保存性が良い材である。ヤナギ属は、株、根株であった。耐朽性、保存性は低く、切削、加工の容易な材である。ヤマグワは、杭、横木に使用されており、やや堅硬で靱性に富んだ材である。スギは、板に使用されており、木理通直で肌目は粗い。加工工作が容易で、大きな材がとれる良材である。シイ属、カヤ、コナラ属コナラ節、ヌルデ、モチノキ属、ハイノキ属、トネリコ属は、杭に使用されている。シイ属はやや重硬で耐朽性、保存性は低い材である。カヤは木理通直で緻密、やや重硬で弾力のある材で、耐朽性、保存性高く、水湿に耐える。コナラ属コナラ節は、強靭で弾力に富む材である。ヌルデは概して強さ中庸の材である。モチノキ属、ハイノキ属は概してやや堅硬な材である。トネリコ属は概して強靭で堅硬な材である。広葉樹と草本は、杭付着物（編物？網代？）、腐植体サンプルであった。

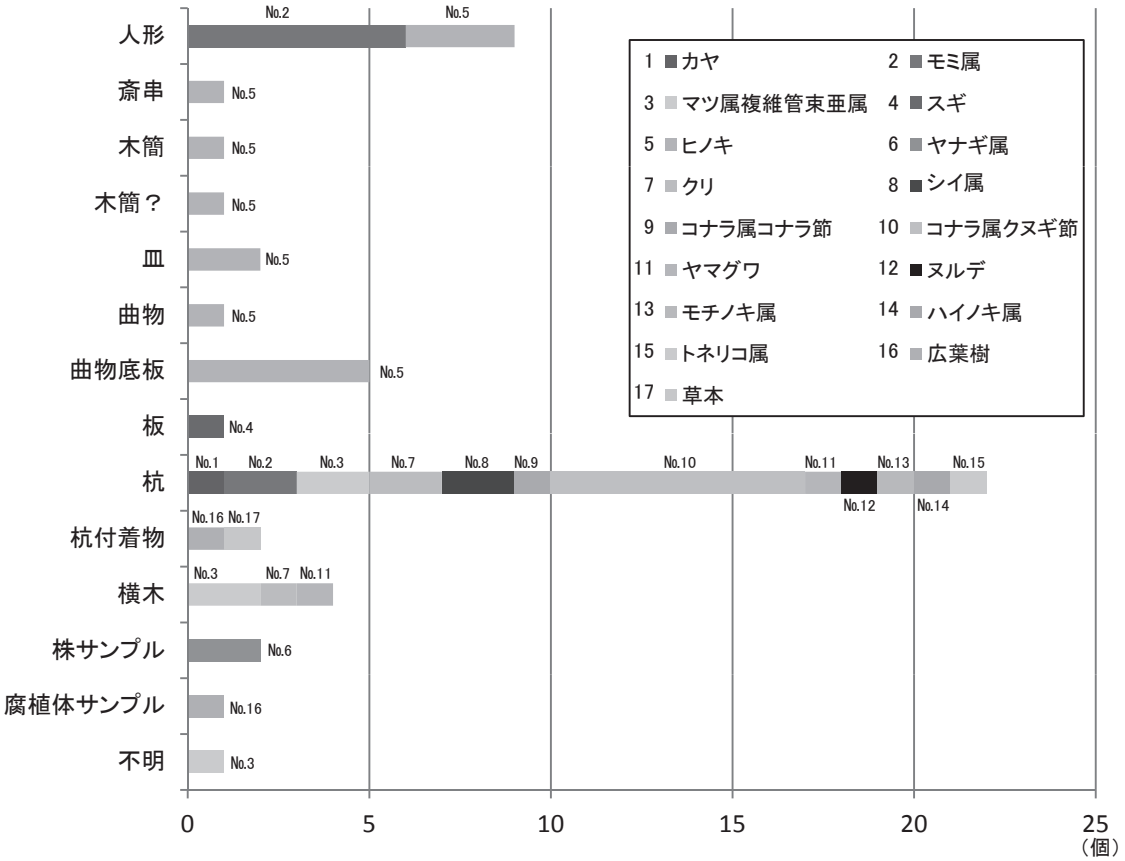
多い器種を見ると、杭22点ではコナラ属クヌギ節７点、モミ属２点、マツ属複維管束亜属２点、クリ２点、シイ属２点、カヤ１点、コナラ属コナラ節１点、ヤマグワ１点、ヌルデ１点、モチノキ属１点、ハイノキ属１点、トネリコ属１点であった。人形９点では、モミ属６点、ヒノキ３点であった。曲物底板５点は、全てヒノキであった。横木４点では、マツ属複維管束亜属２点、クリ１点、ヤマグワ１点であった。

ヒノキ、モミ属、マツ属複維管束亜属、カヤ、スギは温帯に広く分布する針葉樹であり、いずれも高木となる。広葉樹の内、コナラ属クヌギ節、クリ、ヤナギ属、コナラ属コナラ節、ヤマグワ、フジキ、ヌルデは落葉高木、シイ属は常緑高木であり、モチノキ属、ハイノキ属、トネリコ属には落葉性と常緑性の樹種がある。いずれの樹種も温帯に分布する樹種ばかりであり、田井Ａ遺跡の木製品の樹種は、当時遺跡の近隣に生育していたか流通によってもたらされたとみなされよう。

第９表　田井Ａ遺跡における樹種同定結果（2012 年度調査）

番号	報告番号	器種など	結果（学名／和名）	
1	W47	曲物	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
2	W12	人形	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
3	W69	板	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
4	W5	人形	*Abies*	モミ属
5	W10	人形	*Abies*	モミ属
6	W1	人形	*Abies*	モミ属
7	W11	人形	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
8	W2	人形	*Abies*	モミ属
9	W6	人形	*Abies*	モミ属
10	W42	皿	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
11	W41	皿	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
12	W25	人形	*Abies*	モミ属
13	W108	木簡？	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
14	W142	曲物底板	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
15	W145	曲物底板	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
16	W82	人形	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
17	W143	曲物底板	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
19	W152	不明	*Pinus subgen. Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
20	W78	木簡	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
21	W144	曲物底板	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
22	W101	曲物底板	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
23	W99	斎串	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
24	W153	杭	*Castanopsis*	シイ属
25	W154	杭	*Abies*	モミ属
26	W155	杭	*Ilex*	モチノキ属
27	W156	杭	*Abies*	モミ属
28	W157	杭	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
29	W158	杭	*Symplocos*	ハイノキ属
30	W159	杭	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
31	W160	杭	*Morus australis Poiret*	ヤマグワ
32	W161	杭	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
33-①	W162	横木	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
33-②	W163	横木	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
34	W164	横木	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
35	W165	杭	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
36	W166	横木	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
37	W167	杭	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
38	W168	杭	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
39	W170	杭	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
40	W169	杭	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
41-①	W171	杭	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
41-②	W172	杭付着物（編物？網代？）	broad-leaved tree	広葉樹
41-③	W173	杭付着物（編物？網代？）	grass	草本
42	W174	杭	*Castanopsis*	シイ属
43	W175	杭	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
44	W176	杭	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
45	W177	杭	*Rhus javanica* L.	ヌルデ
46	W178	杭	*Fraxinus*	トネリコ属
47	W179	杭	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
48	W180	杭	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.	カヤ
49	W181	株１サンプル	*Salix*	ヤナギ属
50	W182	根株５サンプル	*Salix*	ヤナギ属
51	W183	腐植体サンプル	broad-leaved tree	広葉樹

※ W152 ～ W183 は樹種同定のみ



第 13 図　木製品の器種と樹種の相関図

第５節　田井Ａ遺跡における種実同定

（株）古環境研究所

１　はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

２　試料

試料は以下の通りである。

第 10 表　試料一覧

登録番号	遺構名	層位	備考
2012085　486			北側側溝
2012085　487	旧河道１南半	砂層	検出面－ 50 ～ 80cm
2012085　488	旧河道１南半	砂層	検出面－ 50 ～ 80cm
2012085　489	旧河道１南半	粗砂～シルト混極細砂	検出面－ 50 ～ 80cm
2012085　490	旧河道１		畦、人形付近
2012085　491	旧河道１北半		検出面－ 50 ～ 80cm
2012085　492	旧河道１北半		検出面－ 50 ～ 80cm
2012085　493	旧河道１畦の下		人形周辺の土壌
2012085　494	旧河道２		検出面－ 50cm
2012085　496	旧河道２南１区	砂～砂礫層	畦断面 23・24 層
2012085　497	旧河道２南１区	砂～砂礫層	畦断面 23・24 層
2012085　498	旧河道２南２区	粗砂～砂礫層	
2012085　499	旧河道２南２区	粗砂	立木株検出時
2012085　500	旧河道１北半	暗灰色細砂	
2012085　501	旧河道２北半	砂～砂礫層	
2012085　502	旧河道２北半西側	暗灰色極細砂～細砂	検出面－ 80cm
2012085　503	旧河道２北半	砂～砂礫層	
2012085　504	旧河道 1-2 北半		台風による流出
2012085　505	旧河道３		断面検出作業時
2012085　506			大甕の中から出てきた種子

３　方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4　結果

⑴　分類群

樹木 14、草本 4 の計 18 分類群が同定された。主要な分類群を第 14 図に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、第 14 図に示したもののサイズを記載する。

〔樹木〕

マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　毬果　マツ科　長さ×幅：5.65㎜× 3.06㎜

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平 5 角形であり、その中央にはへそがある。

ヤマモモ　*Myrica rubra* S. et Z.　核　ヤマモモ科　長さ×幅：6.60㎜× 4.82㎜

茶褐色で楕円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* Schotty.　果皮（破片）　ブナ科

堅果は広卵形を呈し、先端に花柱が見られる。

ブナ科　Fagaceae　果皮（破片）

黒褐色で楕円形を呈し、表面は平滑である。この分類群はつき部、殻斗が欠落し破片のため、科レベルの同定までである。

カジノキ　*Broussonetia papyrifera* Vent.　種子（破片）　クワ科

黄褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面にはいぼ状の隆起がある。

ヤマグワ　*Morus australis* Poir.　種子（破片）　クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

クスノキ　*Cinnamomum camphora* S.　種子　クスノキ科　長さ×幅：6.79㎜× 6.64㎜

黒褐色で球形を呈す。一条の稜線が走りその中央が突起する。

クスノキ科　Lauraceae　種子（破片）

茶褐色で球形（5mm ～ 15mm）を呈し、一条の稜線が走りその中央が突起する。ここでは破片だったため、科レベルの同定までである。

モモ　*Prunus persica* Batsch　核（完形・半形・破片）　バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

サンショウ属　*Zanthozylum*　種子（破片）　ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面にへそがある。表面には網目模様がある。この分類群はへそが欠落し破片のため、属レベルの同定までである。

ノブドウ　*Ampelopsis brevipedunculata* var. *heterophylla* Hara　種子　ブドウ科　長さ×幅：4.45㎜× 4.05㎜

茶褐色で広卵形を呈す。腹面に「ハ」字状の孔が 2 つあり、背面のカラザは長く伸びる。

ブドウ属　*Vitis*　種子　ブドウ科　長さ×幅：5.06㎜× 3.65㎜

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

ブドウ科　Vitaceae　種子（破片）ブドウ科

この分類群は破片でカラザの部分が欠損しているものである。

クマノミズキ　*Cornus brachypoda* C. A. Mey.　核（破片）　ミズキ科　長さ×幅：2.70㎜× 3.00㎜

淡褐色で球形を呈す。表面に一本の広い溝がめぐり、数本の細い縦筋が走る。

〔草本〕

ホタルイ属　*Scirpus*　果実　カヤツリグサ科　長さ×幅：2.04㎜× 1.65㎜、1.97㎜× 1.87㎜

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に４～８本の針状の付属物を持つ。

スゲ属　*Carex*　果実　カヤツリグサ科　長さ×幅：2.47㎜× 2.11㎜

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

タデ属　*Polygonum*　果実　タデ科　長さ×幅：2.83㎜× 2.20㎜

黒褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

キンポウゲ属　*Ranunculus*　果実　キンポウゲ科　長さ×幅：2.69㎜× 1.92㎜

淡褐色で楕円形を呈す。表面はやや粗く、コルク質である。

⑵　種実群集の特徴

１）旧河道１（登録番号 2012085-487 ～ 493、500）

全て樹木種実で、ヤマモモ１、ツブラジイ１、ブナ科４、ヤマグワ１、クスノキ１、クスノキ科１、モモ８、不明種実２が同定された。

２）旧河道２（登録番号 2012085-494 ～ 499、501 ～ 503）

全て樹木種実で、マツ属複維管束亜属１、モモ 14 が同定された。

３）旧河道 1- 旧河道２（2012085-504）

全て樹木種実で、マツ属複維管束亜属１、モモ３が同定された。

４）旧河道３（2012085-505）

樹木種実のモモ１が同定された。

５）2012085-486（北側側溝）

樹木種実のモモ２が同定された。

６）2012085-506（大甕　報告番号 127　内）

樹木種実のヤマモモ２、ブナ科３、カジノキ１、クスノキ科２、サンショウ属１、ノブドウ１、ブドウ属１、ブドウ科１、クマノミズキ１、草本種実のホタルイ属６、スゲ属２、タデ属２、キンポウゲ属１が同定された。

５　考察

旧河道１（登録番号 2012085-487 ～ 493、500）はモモを主に、ヤマモモ、ツブラジイ、ブナ科、ヤマグワ、クスノキ、クスノキ科が、旧河道２（登録番号 2012085-494 ～ 499、501 ～ 503）と旧河道 1- 旧河道２（2012085-504）、旧河道３（2012085-505）、2012085-486（北側側溝）もモモが主であり、他にマツ属複維管束亜属が同定された。栽培植物のモモが中心となり、他に食用になるのはヤマモモである。ヤマグワやツブラジイも食べられるが、周囲に生育していて反映されたのか、食用に採取されたものの残渣かは不明である。ツブラジイは二次林種だが、クスノキとともに照葉樹林の構成要素でもある。ヤマグワは二次林種で水路際等に生育する。マツ属複維管束亜属（アカマツ、クロマツは含まれる）も二次林であり、遺跡周囲が二次林化していたことが推定される。

2012085-506（大甕 127 内）の種実類は、多様な種実が同定され、食用にもなるヤマモモ、ブドウ属、二次林種であるカジノキ、サンショウ属、クマノミズキ、ノブドウ、草本のホタルイ属、スゲ属、タデ属、キンポウゲ属などの雑草にあたる水生植物から構成される。この種実類の構成は人為的な有用植物の集積ではなく自然堆積によると考えられ、大甕の埋没時に堆積物とともに入り込んだと考えられる。周囲

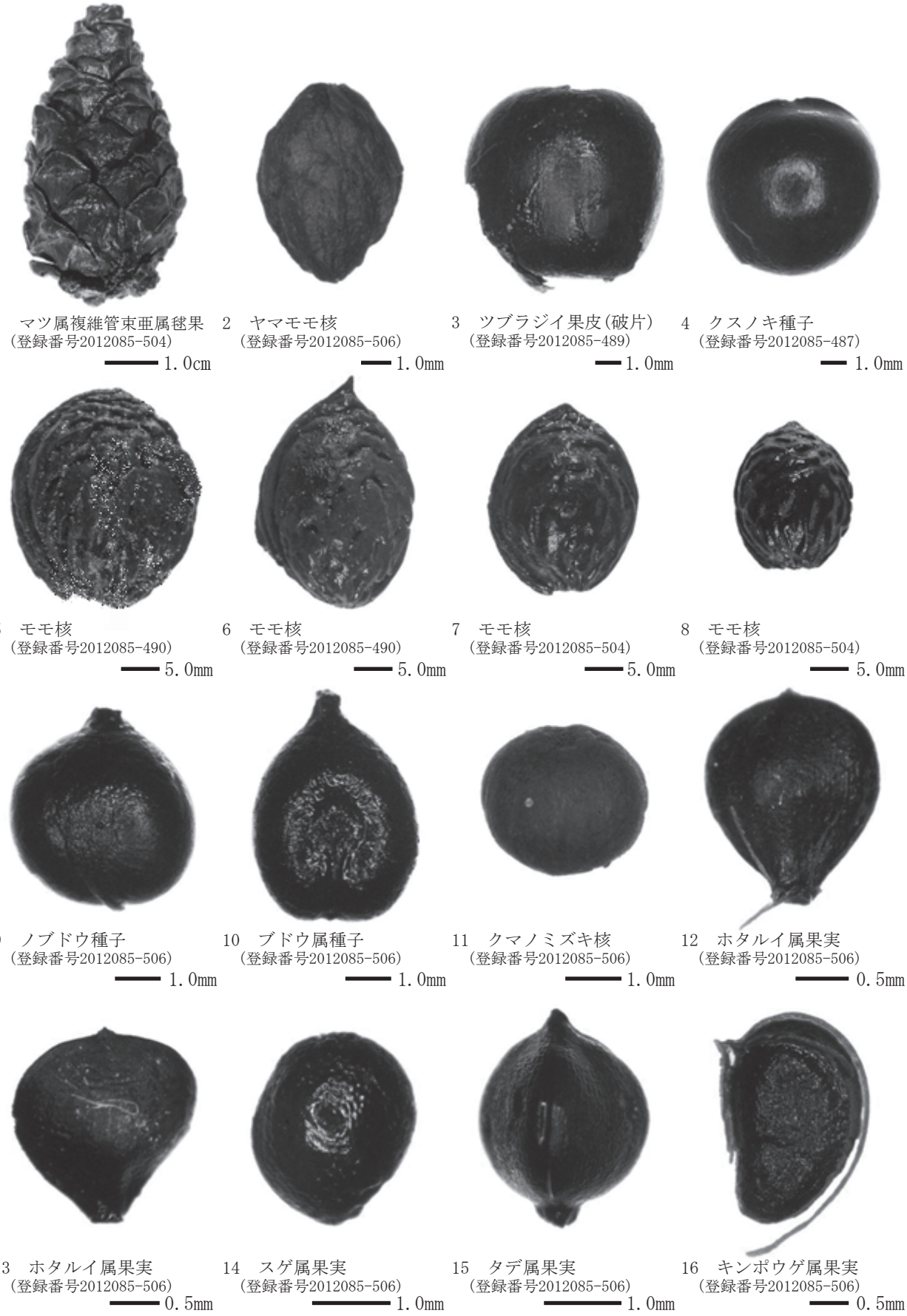
にはカジノキ、サンショウ属、クマノミズキ、ノブドウの二次林種が生育し、大甕の出土地点ないし出土層準ではホタルイ属、スゲ属、タデ属、キンポウゲ属の水生植物が生育し、浅く滞水環境であったと推定される。

6　まとめ

田井Ａ遺跡における種実同定の結果、樹木種実のマツ属複維管束亜属、ヤマモモ、ツブラジイ、ブナ科、カジノキ、ヤマグワ、クスノキ、クスノキ科、モモ、サンショウ属、ノブドウ、ブドウ属、ブドウ科、クマノミズキ、草本種実のホタルイ属、スゲ属、タデ属、キンポウゲ属が同定された。樹木種実では栽培植物ないし二次林種がほとんどで、周辺が二次林化していたことが推定される。2012085-506（大甕 127 内）の種実類は周囲の植生を反映し、大甕埋没時に周囲から堆積物とともに流入した種実類とみなされる。

参考文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂,494p.
笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣　出版，p.131－139.
金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナルNo.409，ニューサイエンス社，p.15－19.
南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実．月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p.18－22.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276－283.



第14図　田井A遺跡の種実

第６節　田井Ａ遺跡における昆虫遺体同定

（株）古環境研究所

１　はじめに

昆虫の上翅や前胸背板などは比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存することがある。堆積物から昆虫遺体を検出しその群集の構成要素を明らかにすることで、過去の植生や古環境の推定、さらに自然改変などの情報を得ることができる。また出土した単体試料等を同定し、トイレ遺構などの特定にも利用される。

ここでは、田井Ａ遺跡で出土した昆虫遺体を同定し、当時の堆積環境及び地理環境を推定する。

２　試料

試料は、SR170 の砂礫層より出土した昆虫片である。いずれも水洗選別されたものである。

３　方法

同定は、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって科、属、種などの階級で示す。

４　結果

⑴　分類群および出現部位

コウチュウ目１分類群が同定された。試料はいずれも節片に分離しており、破片の状態であった。出現部位は､前胸背板破片と前腿節（右？）破片の２部位である。出現した分類群の写真を第 15 図に示す。

コウチュウ目　Coleoptera　コガネムシ上科　Scarabaeoidea

コガネムシ科　Scarabaeidae　ヒメコガネ　*Anomala rufocuprea Motschulsky*

〔出現部位〕

前胸背板　Prothorax　破片３点、前腿節（右）　Femnr　１点

５　所見とまとめ

検出された昆虫片は、点刻等の表面構造や形状、色彩等からコガネムシ科のヒメコガネ *Anomala rufocuprea Motschulsky* と同定された。前胸背板破片３点、前腿節（右？）破片１点はいずれも重複がなく、部分的に分離部の形状が合致することなどから同一個体に由来する可能性が高いと思われる。前胸背板の破片下面には部分的に前胸側板も認められる。ヒメコガネは食葉性のコガネムシで、６～８月頃に成虫が現れ、クズやイタドリ、ワラビ、クリなど幅広い草や木の葉を食べる。さらに現在では農林業害虫としても知られ、ダイズやラッカセイ、ブドウなどの葉を食害する他、幼虫は土中で様々な植物の根を食べ、シバやスギ、ヒノキなどの苗木などにも被害を及ぼす。

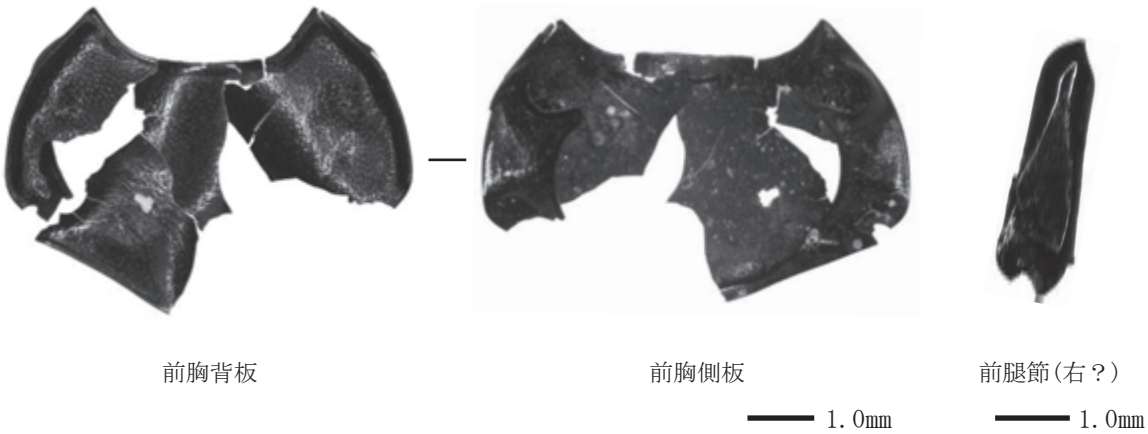
今回、１個体のヒメコガネから遺跡全体の古環境に言及することは難しいが、草地など人間の介在を受けた植物が広がっていた可能性が指摘できる。

参考文献

森　勇一（1995）静岡県川合遺跡（八反田地区）より得られた昆虫群集について．静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書（第63集）川合遺跡（八反田地区Ⅱ），静岡県埋蔵文化財調査研究所,327-329.
岡島秀治、1983、日本の甲虫、自然観察シリーズ15生態編、小学館.

日本昆虫学会、1955、原色日本昆虫図鑑甲虫編、保育社.

・ヒメコガネ



第 15 図　田井Ａ遺跡の昆虫遺体

第７節　田井Ａ遺跡から出土した動物遺存体

（株）古環境研究所

１　はじめに

日本の国土は火山灰性の酸性土壌に広く覆われ、動物遺存体の保存状態には恵まれないのが一般的である。そのため動物遺存体が出土するのは貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰などが代表的で、近年では湿地環境の遺跡や遺構からも多くの動物遺存体が報告されている。報告する試料は、全身骨格のなかで最も保存状態に恵まれる歯である。なお、同定に際しては、丸山真史博士にご協力いただいた。

２　試料

試料は、旧河道２から出土した歯２点、旧河道３から出土した歯 12 点、計 14 点である。

３　方法

試料は、肉眼で観察し、現生骨格標本と形態的特徴を比較して種類を同定した。

４　結果

旧河道２から出土した試料はウマ（*Equus caballus*）の切歯と臼歯の破片、旧河道３から出土した試料はウマの左右の第２・３・４前臼歯、第１・２・３後臼歯である。

旧河道２の馬歯は、破損が著しく、上下、左右を特定できない。旧河道３の馬歯の左右は同一個体かどうか定かではないが、それぞれの第２前臼歯から第３後臼歯までは同一個体である。出土したすべての臼歯を計測した（第 12 表）。第２前臼歯から第３後臼歯まで並べた状態で咬合部における全臼歯列長が、それぞれ 159.64mm、164.24mm を測る（第 12 表）。顎骨に植立していないため、精密な臼歯列長の計測値ではないが、おおよそ体高 130 ～ 135cm の日本在来の御崎馬や木曽馬に相当する大きさと推定される（註）。また、歯冠高の計測値に基づいた年齢を推定した（註）。各臼歯で求められる推定年齢に幅があり、左が生後６～ 11 年、右が生後６～ 10 年と推定され、いずれも若齢から壮齢の馬と考えられる。

５　まとめ

出土した動物遺存体は、いずれも顎骨から遊離したウマの歯である。旧河道２から出土した歯について、歯種を特定することは困難である。旧河道３から出土した歯は、左右の第２前臼歯から第３後臼歯までであり、いずれも働き盛りの年齢で死亡したウマと考えられる。

註　西中川駿編（1991）に掲載される日本在来馬の計測値と比較した。また、歯冠高による推定年齢は、推定式に倣った。

参考文献

西中川駿編1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告

第 11 表　田井Ａ遺跡における馬歯一覧

No.	調査番号	年月日	地区	遺構	土層	備考	大分類	小分類	部位	部分	左右
1	2012085	20120905		旧河道 2	検出面		哺乳綱	ウマ	切歯	破片	-
2	2012085	20120905		旧河道 2	検出面		哺乳綱	ウマ	臼歯	破片	-
3	2012085	20121026	南 1 区東側	旧河道 3	粗砂		哺乳類	ウマ	臼歯	下顎 P2-M3	右
4	2012085	20121029		旧河道 3	黄褐色粗砂		哺乳類	ウマ	臼歯	下顎 P2-M3	左

第 12 表　田井Ａ遺跡における馬歯計測値

	歯種	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	推定年齢	臼歯列長	
No. 3	P2	31.29	12.4	33.42	8 ～ 9	84.33	159.64
	P3		14.32	39.69	8 ～ 9		
	P4		15.37	47.95	7 ～ 8		
	M1		14.15	40.16	9 ～ 10	75.46	
	M2	25.5	12.8	54.26	7 ～ 8		
	M3			59.65	6 ～ 7		
	歯種	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	推定年齢	臼歯列長	
No. 4	P2	30.19	12.91	34.75	7 ～ 8	85.28	164.24
	P3		14.63	36.77	8 ～ 9		
	P4	28.23	16.16	47.89	7 ～ 8		
	M1		14.02	38.75	10 ～ 11	79.88	
	M2	24.73	13.28	53.02	7 ～ 8		
	M3	30.46	12.1	57.2	6 ～ 7		

咬合面の計測（歯槽部計測は不可）

No. 3　ウマ　臼歯　下顎P2-M3（右）　1.0cm

No. 4　ウマ　臼歯　下顎P2-M3（左）　1.0cm

第 16 図　田井Ａ遺跡の動物遺存体

第５章　結　　語

第１節　遺跡の変遷

今回の本発掘調査区では、縄文時代晩期・弥生時代前期から平安時代に至る、４段階の遺構・遺物が検出された。遺跡内の堆積物の様相からは、いずれの時期においても調査区付近は比較的低湿で、洪水の影響を受けやすい環境であったものと思われる。

【第１段階】 縄文時代晩期～弥生時代前期に相当する。調査区内に広く堆積した粘土層中に遺物が包含されるが、明確な遺構は検出されなかった。遺物の分布も局部的であり、この段階では、調査区内で継続的に人の活動が行われたとは言い難いが、低湿地における何らかの活動が存在したことは確実である。隣接する横入遺跡において、弥生時代前期の水田、堰などが検出されている点が参考となろう。なお、調査区南西端で検出された時期不明の水田畦畔（第２段階の水田より下位）が、この段階に属する可能性も捨象できない。

【第２段階】 飛鳥時代（7 世紀代）を中心とする時期には､調査区内は広く水田化された（下層水田)。水田を被覆する洪水砂中には、8 世紀代以降の遺物は含まれない。調査区を北東 - 南西に 90 m以上にわたって縦断する大畦畔と、これに直交して取りつく小畦畔によって形成されており、現在の地表で観察される条里型地割と、ほぼ同様の方向性をもつ点が注目される。

【第３段階】 奈良時代（8 世紀代）から、平安時代初頭までを含む段階である。第２段階の水田面が洪水により埋没した後、調査区中央部付近において、正南北方向の畦畔をもつ水田面が形成された（上層水田)。上層水田面は、第３章で記載したとおりさらに細分される。調査区北東側では、この段階の古土壌層は厚い洪水砂によって浸食を受けており、遺構は検出されなかった。この段階にはさらに、上層水田面を浸食してほぼ南北方向にのびる複数の河道が、調査区中央部に形成された。この旧河道の堆積物には、奈良時代の土器・木製品が多量に包含されており、上流部における官衙的遺跡の存在が推定できる。また、旧河道内には８か所の堰が構築されており、河道周辺に水田等が存在したことを示している。

【第４段階】 平安時代中期の集落が形成された段階である。調査区北東部に、掘立柱建物跡群が形成され、これらは調査区の南東外へと広がっている。調査区中央部～南西部にかけては、当該時期の遺構は検出されなかったが、調査区壁面における地層断面の検討からは、この段階の古土壌層が調査区全域に広がっていると判断された。より標高の高い調査区北東側に集落が、低い南西側に耕地が形成されていたと推測される。

第２節　各段階の遺構・遺物の評価

第１段階の遺物は、調査区全体での検出量がわずかであり、その評価は難しい。志筑川下流域における縄文時代晩期～弥生時代前期の人の活動は、横入遺跡での確実な事例があり、今回の田井Ａ遺跡での事例も、その一部を示すものであろう。

第２段階の下層水田面は、完全な条里型地割とは言えないものの、調査区内で 100 m近くを直線的に延びる大畦畔は規格性の高さを示しており、地形に沿って形成される、小区画で不定型な水田とは異質なものと言えよう。現地表に見られる条里型地割とほぼ同一方向を示すことから、本地域における条里

型地割形成の基礎となった可能性も推測しうる。

下層水田面の形成時期は、水田面を被覆する洪水砂内から出土した遺物から、7世紀代と思われる。この段階には、田井A遺跡の西約500mに位置する志筑廃寺が造営されており、このような規格性の高い水田を形成する政治・経済的背景が本地域に存在したことは間違いなかろう。

水田面からは、多数の人および偶蹄類の足跡が検出された。この偶蹄類については、現在のところ牛であったと推定している。なお下層水田面を被覆する洪水砂層より出土した小型青銅鏡については、弥生時代ないしは古墳時代に属する遺物であろうが、調査地内では当該時期の遺構面は認められず、調査地近隣の包含層中あるいは古墳にあったものが、洪水により流出したものか、あるいは祭祀的な意味をもって、河道内、あるいは河道付近で使用された結果であるのかは断じがたい。

第3段階の上層水田面については、ほぼ正方位の畦畔が検出されている。これは、下層水田が洪水により埋没した後、田井A遺跡周辺において、新たに正方位の区画をもつ水田が整備された可能性を示唆するものである。しかしながら、8世紀代に形成されたと思われる旧河道群によって浸食をうけていることから、上層水田面の存続期間はごく短いものであったと思われる。

少なくとも3回にわたって形成された旧河道からは、多量の土器とともに、祭祀遺物を中心とした木製品が多数出土した。注目されるのは、木簡3点と人形・斎串等の祭祀遺物である。

木簡のうち2点の文字は判読できないが、1点は「□□□□□五把」と判読され、三文字目は「卅」、五文字目は「束」の可能性があるとされた。さらに、この行の下に割書があり、右行は「上□一束五」、左行は「未□二□□」と判読された。これらの内容から、当該木簡は出挙にかかる稲の出納を示すと考えられる。出挙には、官が行うものと私的なものとがあるが、いずれにせよ、相当の経済的基盤を有さなければ実施しえないものであろう。

こうした文字資料と、旧河道内から出土した木簡および木製祭祀具を合わせ考えるならば、旧河道上流部に、当該時期の官衙ないしは有力豪族の拠点施設等が存在した可能性は極めて高いと言わねばならない。田井A遺跡が所在する津名郡の郡衙は、約4㎞西に所在する郡家長谷遺跡が推定地となっているが、田井A遺跡の旧河道上流部には、郡衙に匹敵する施設が存在した可能性が高いと言えよう。木製品・土器類の水磨が進行していないことから、上流部の遺跡は、田井A遺跡にごく近接して存在すると推定される。なお、今回出土した木簡は、奈良時代のものとしては淡路島内初の事例である。

また人形には墨書で冠帽、顔、衣服等を表現した事例が多く見られるが、このように表現が多彩な事例は県下でも稀有のものであり、この点からも注目されてよい遺跡である。

第4段階にあたる平安時代中期に属する建物跡群は、当該時期の一般的な集落の規模を超えるものではない。しかし、掘立柱建物跡内に鍛冶炉が設けられた事例はきわめて数少ないものと思われることから、平安時代の集落内における小鍛冶の実態を示す好資料と言えよう。

第3節　自然科学的分析の評価

既述のように田井A遺跡の周辺は、古代に至るまで低地環境が継続していたと考えられている。今回の調査において、青木哲哉氏（立命館大学）の指導の下に実施した深掘調査においても、遺構面より下位の堆積物は、灰色～青灰色粘土層と黒色粘土層の互層状を呈する部分が認められ、低湿地環境であったことを示唆している。加速器質量分析計による放射性炭素年代測定（AMS）によれば、このような環境は、調査地周辺では縄文時代後期～晩期ごろまで継続していたと思われる。ただし、この間の植生

を明らかにするために実施した花粉分析では、残念ながら良好な結果は得られなかった。

下層水田面にかかる試料による年代測定（AMS）では、概ね古墳時代後期～飛鳥時代の年代が示されており、これは、下層水田面を被覆する洪水砂中の遺物による判断と整合的である。

旧河道内に構築された堰の杭の樹種同定では、コナラ属が優勢であることが示された。１ｍ～２ｍという長く、ほぼ同じ太さの杭を多数準備することは、自然林の伐採のみでは困難だと思われる。このようなサイズの杭を多数準備するために、最も効果的なのは、かつて近畿の里山の風景であった薪炭林のような管理法であろう。コナラ属の雑木の幹を一定の高さで伐採し、そこから派生する枝を、一定年数ごとに伐採利用するという方法である。この方法に拠れば、比較的直線的に伸びた一定の太さの枝を、多数確保することが可能である。奈良時代前後、田井Ａ遺跡周辺においても、このような里山林の管理が行われていた可能性があろう。

人形を中心とした祭祀遺物の樹種同定では、調査時の予測どおり、モミ属が卓越し、ヒノキがこれに次ぐことが明らかとなった。このような樹種の素材が、一元的に供給されていたのか、在地で個別的な素材確保が行われていたのか、今後、注目されてよいだろう。

旧河道２・３中で検出された根株の樹種は、ヤナギ属であった。ヤナギ属には湿地を好むものがあり、現在の河畔林でもそのような景観は珍しくない。旧河道２・３は河畔林が成立しうる程度の期間は、河道として機能していたと判断できる。これは、堰を構築して水利を図るという営為が一定期間おこなわれていたという考古学的判断と整合的である。

旧河道中および洪水砂中より出土した動物歯は、すべて壮齢の馬歯と同定された。奈良時代の旧河道ないしはこれを被覆する洪水砂であり、当該期に田井Ａ遺跡周辺で馬の利用が盛んであったことを示すものだろう。壮齢での死亡が、自然死であるのか屠殺であるのかは不明だが、祭祀遺物を多く出土していることとの関連については、今後の調査で注意すべきであろう。

旧河道中より検出された甲虫の鞘翅は、ヒメコガネと同定された。ヒメコガネはマメ類、ブドウ、クリなどの葉を食害することが知られている。こうした植物は、人為的な環境において相対的に優勢であることから、河道形成時期には、遺跡周辺に畑地、里山といった人為環境が成立していた可能性がある。昆虫類は、植物よりも鋭敏に環境変化を示すことが多く、遺跡出土の昆虫遺体には、今後、さらなる注意がはらわれる必要があるだろう。

遺物一覧表

出土土器一覧表１

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土遺構	法量（cm）				残存状況	色調	焼成	胎土	調整	備考	実測番号	調査番号
						口径	器高	最大径	底径								
1	30	73	土師器	小皿	P34（SB01）掘方	9.9	1.3		6.2	口縁部1/4、底部2/3	にぶい黄橙～黄灰	良好	径1㎜以下の石英、赤色粒、長石少し含む	外面：口縁部～体部回転ナデ、体部強い回転ナデ、底部回転ヘラ切りの後板ナデ 内面：回転ナデの後、底部に板ナデ		345	2012085
2	30	73	土師器	小皿	P68（SB02）	8.9	1.9		6.4	口縁部5/9、底部完存	浅黄橙	やや不良	微砂～細砂、径0.5～1㎜礫（石英、長石、雲母）含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部摩滅のため調整不明、底部回転ヘラ切り 内面：摩滅のため調整不明（回転ナデ）		337	2012085
3	30	73	黒色土器	椀	P72（SB02）掘方、柱痕		2.35		7.8	底部2/3	黒、橙	良好	径0.5㎜以下の石英少量、径1㎜以下の赤色粒多く含む	外面：体部回転ナデ、底部高台貼り付け、摩滅 内面：摩滅のため調整不明		347	2012085
4	30	73	土師器	小皿	P86（SB02）柱痕	9.8	2.3		7.0	口縁部1/6、底部1/2	にぶい黄橙	不良	0.5～3㎜粗砂・細礫（石英、長石、雲母）多く含む	外面：口縁部から体部ヨコナデ、底部摩滅のため調整不明 内面：口縁端部強いナデ、他は摩滅のため調整不明		339	2012085
5	30	73	土師器	小皿	P86（SB02）柱痕	10.2	2.3		7.0	口縁部1/5、底部9/10	にぶい褐～にぶい黄橙	やや良	0.5～2㎜粗砂、3～7㎜礫（石英、長石、雲母）若干含む	外面：口縁部から体部摩滅のため調整不明、底部回転ヘラ切り 内面：摩滅のため調整不明		340	2012085
6	30	73	土師器	小皿	P86（SB02）柱痕	11.1	2.2		8.1	口縁部約1/2、底部完存	にぶい橙～橙	やや良	0.5～3㎜粗砂・細礫（石英、長石、雲母）多く含む	外面：口縁部から体部摩滅のため調整不明、底部回転ヘラ切り 内面：摩滅のため調整不明		338	2012085
7	30	73	土師器	台付椀	P86（SB02）柱痕	16.0	5.0		8.5	椀部4/7、高台部4/5	橙	やや不良	細砂、0.5～1.5㎜粗砂（石英、長石）含む	外面：口縁部から体部摩滅のため調整不明、底部回転ヘラ切り、高台貼り付け 内面：摩滅のため調整不明		341	2012085
8	30	75	土師器	小皿	P67（SB03）	8.8	1.5		5.0	口縁部1/6、底部1/3	明赤褐	良好	径0.5～1.5㎜、径5㎜の礫（石英、長石）を含む	外面：口縁部から体部ナデ、糸切りの後横ハケ 内面：口縁部から体部ヨコナデ、底部ナデ		336	2012085
9	30	73	土師器	小皿	P31（SB05）土器4	9.0	2.0		6.8	完形	にぶい黄橙～にぶい橙、にぶい黄褐～暗灰黄	良好	細砂～粗砂（石英、長石、赤色粒）中量含む	外面：口縁部から体部ヨコナデ、底部回転ヘラ切りの後ナデ 内面：ヨコナデ		332	2012085
10	30	73	土師器	椀	P32（SB05）柱痕	14.8	3.7		9.05	口縁部1/4、底部2/3	浅黄	良好	径1.5㎜以下の石英、チャートを中量含む	外面：口縁部～体部回転ナデ、体部下半に指オサエ痕跡、底部回転ヘラ切りの後ナデ 内面：回転ナデ		346	2012085
11	30	74	須恵器	椀	P31（SB05）土器2	14.7	4.88		6.6	約1/3	灰	良好	粗砂（石英、長石）、細礫含む	外面：口縁部から体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ		331	2012085
12	30	74	須恵器	椀	P31（SB05）	14.5	5.3		6.4	ほぼ完形	灰	良好	粗砂（石英、長石）含む	外面：口縁部から体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ		330	2012085
13	30	74	土師器	椀	P119（SB06）柱痕		2.6		8.25	底部のみ	浅黄～橙	良好	径1.5㎜以下の石英、赤色粒少量含む	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ		348	2012085
14	30	74	須恵器	椀	P144（SB08）	15.7	5.4		6.3	約2/5	灰白～灰	やや不良	径1.5㎜以下の石英・チャート少量含む	外面：口縁部から体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	口縁部に重ね焼き痕跡、森田編年１期第２段階	349	2012085
15	30	75	黒色土器	椀	P60	18.0	3.4			口縁部1/7	黒、にぶい黄橙	良好	微砂、径0.5㎜粗砂若干、雲母含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリの後、ミガキかナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ		335	2012085
16	30	74	土師器	小皿	P40	8.1	1.9		5.8	完形	橙	良好	径3㎜以下の細砂～粗砂（石英、長石、赤色粒）中量含む	外面：口縁部から体部ヨコナデ、底部回転ヘラ切り 内面：ヨコナデ		333	2012085
17	30	75	瓦	平瓦	P40　柱根		長さ 8.0	幅 8.8	厚さ 2.9	若干	灰	良好	径2㎜以上の細礫（長石、石英）多量に含む	外面：布目 内面：縄目		334	2012085
18	30		須恵器	杯身	P70	9.5	2.9		6.0	約1/3	青灰	良好	0.5～2㎜粗砂含む	外面：口縁部から体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ		342	2012085
19	30	74	土師器	甕 口D	P70	23.2	18.7	22.2		口縁部1/5、体部1/8	暗灰黄	良好	0.5～2㎜粗砂（石英、長石、金雲母多く）含む	外面：口縁端部ヨコナデ、口縁中央凹部に縦ハケ残り、頸部はヨコナデ。体部は縦方向のハケ、一部にナデ 内面：口縁端部ヨコナデ、口縁上半横ハケ、下半横ハケの後ナデ。体部上半横と斜め方向のハケの後ナデ、下半ヘラケズリの後縦ハケ	外面スス付着、２次焼成	343	2012085
20	30	75	瓦	平瓦	P70		長さ 18.4	幅 10.0	厚さ 1.7		灰	やや不良	0.5～2㎜粗砂非常に多く、3～5㎜礫（石英多い）多く含む	外面：布目圧痕 内面：タタキの縄目残る		344	2012085
21	31	75	土師器	小皿	SK78　西半	7.7	1.4		6.1	口縁部1/6、底部1/4	にぶい黄～にぶい黄褐	良好	径1㎜以下の細砂（長石、石英、赤色粒）多量に含む	外面：口縁部から体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り 内面：回転ナデ		326	2012085
22	31	75	瓦器	椀	SK78　西半	14.8	5.75		4.9	口縁部若干、体部1/6、底部完存	灰～暗灰	良好	極細砂を少量含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部指押オサエの後ナデ、底部ナデの後高台貼り付け 内面：口縁部ヨコナデ、体部から底部ヘラミガキ	和泉型Ⅱ－２	324	2012085
23	31	75	須恵器	鉢	SK78　西半		4.5		11.6	底部1/3	灰白	良好	0.2㎜以下の細砂中量含む	外面：回転ナデ、底部ナデ 内面：一方向の仕上げナデ、指オサエ残る	魚住の鉢C	325	2012085
24	31	75	須恵器	鉢	SK78	28.8	10.1			口縁部若干	灰	良好	径7㎜以下の礫（長石、石英）中量含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ		327	2012085
25	31		須恵器	甕	SK148	30.4	5.0			口縁部若干	灰白	良好	径3㎜以下の粗砂（長石）少量含む	外面：口縁端部ヨコナデ、口縁部回転ナデ 内面：口縁端部ヨコナデ、口縁部回転ナデ		328	2012085
26	31	76	土師器	？（底部）	SD26		2.45		5.4	底部のみ	にぶい橙	良好	0.5～2㎜程度の粗砂（石英、長石、赤色粒）を含む	外面：底部側面は摩滅のため調整不明、底面はヘラ切り 内面：摩滅のため調整不明		316	2012085
27	31	76	土師器	小皿	SD115　上面	8.5	2.1		6.15	完形	橙	良好	0.5～1㎜程度の粗砂（石英、長石、赤色粒）、径5㎜の細礫を含む	外面：口縁部から体部は摩滅のため調整不明、底部はヘラ切り 内面：摩滅のため調整不明（ヨコナデ）		317	2012085
28	31	76	土師器	羽釜	SD135		4.25			鍔部分1/8以下	にぶい橙	良好	0.5～2㎜程度の粗砂（石英、長石、赤色粒）を多く含む	外面：鍔部分ヨコナデ、体部ナデ 内面：ヨコナデ		318	2012085

出土土器一覧表２

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土遺構	法量（cm）				残存状況	色調	焼成	胎土	調整	備考	実測番号	調査番号
						口径	器高	最大径	底径								
29	31	76	土師器	椀	SR04	16.8	4.0			1/8強	にぶい黄橙～橙		細かな砂粒含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部はナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部はヘラミガキ		156	2011185
30	31	76	黒色土器	椀	SR04		2.5		8.2	底部完存	黒～灰白	良	細かな砂粒含む	外面：体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ切りの後ナデ、高台貼り付け 内面：炭素吸着、不整方向の暗文		158	2011185
31	31	76	須恵器	杯A	SR04	13.5	3.6		8.4	口縁部1/2、体部1/2、底部完存	灰白	不良	細かな砂粒含む	外面：口縁部～体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ切りののちナデ 内面：回転ナデ		157	2011185
32	31	76	土師器	甕	SD01	15.6	2.65			口縁部小片	にぶい褐		粗砂～細砂を含む	外面：ヨコナデ 内面：ハケの後ヨコナデ		5	2009225
33	31	76	土師器	甕	SD05		3.95			口縁部小片	にぶい褐～にぶい黄橙		極細砂を少量含む	外面：体部縦方向のハケ、口縁部ヨコナデ 内面：口縁部横方向のハケの後ヨコナデ		3	2009225
34	31	76	須恵器	甕	SD05	20.8	4.0			口縁部小片	灰	普通	極細砂を少量含む	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ		2	2009225
35	31	76	須恵器	杯蓋	SD08	14.15	1.25			口縁部1/9	灰	普通	極細砂を少量含む	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ		4	2009225
36	31	76	須恵器	甕	P3	13.3	3.15			口縁部1/9	灰白	普通	細砂を少量含む	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	自然釉付着	1	2009225
37	31	76	土師器	甕	上層水田面　土器集中部	26.05	28.15	24.95		口縁部1/2、体部1/2	にぶい赤褐色～褐色		粗砂～径3mm程度の小礫を多く含む	外面：口縁部はヨコナデ、体部は縦方向のハケ 内面：口縁部は横方向のハケの後ヨコナデ、体部上半は横方向のハケの後ナデ、下半は縦方向のハケ		52	2009225
38	32	77	土師器	皿	旧河道1　北東半	15.4	2.85		13.0	口縁部1/6、底部1/4	灰～灰オリーブ	やや不良	径5mm以下のチャート・長石を若干含む	外面：口縁部～体部はヨコナデ、底部は指オサエの後ナデ 内面：口縁端部ヨコナデ、見込み部はナデ。体部に暗文		142	2011185
39	32	77	土師器	皿	旧河道1　南西半	21.7	3.6		14.2	口縁部1/12	灰黄	良	径0.3mm以下の石英・長石微量含む	外面：口縁部ヨコナデ、底部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、底部から体部ヨコナデ、暗文		132	2011185
40	32	77	土師器	杯A	旧河道1　北東半	15.4	3.2		12.2	口縁部1/5、体部～底部若干	にぶい黄橙～灰黄		径0.5 ～ 1mmのチャート・長石を少量含む	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ		141	2011185
41	32	77	土師器	皿	旧河道1　北東半	21.8	3.0		15.0	1/6	にぶい黄橙～灰黄褐	良	粗砂含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部下半指オサエと一部にヘラケズリ、体部は磨滅して不明 内面：ヨコナデ		121	2011185
42	32	77	土師器	皿	旧河道1　南西半	17.7	2.95		13.4	口縁部1/14、底部1/5	にぶい黄橙～にぶい赤褐		径1mm以下の赤色粒多く含む	外面：口縁部から体部は回転ナデ、口縁端部は強いナデ、底部ヘラ切りの後ナデ 内面：口縁部から体部は回転ナデ、底部はナデ		137	2011185
43	32	77	土師器	杯A	旧河道1　南西半	14.4	3.0		10.3	完形	にぶい黄橙～にぶい褐		径4mm以下の長石含む	外面：口縁部は回転ナデの後コテ状工具による整形、底部はヘラ切りの後ナデ 内面：回転ナデ		116	2011185
44	32	77	土師器	椀	旧河道1　南西半	11.3	5.05			3/4	にぶい黄橙～灰黄褐	良	径1.5mm以下の石英・赤色粒・長石やや多く含む	外面：口縁部はヨコナデ、体部から底部は不明 内面：口縁部はヨコナデ、体部から底部は縦方向のナデ		130	2011185
45	32	77	土師器	高坏	旧河道1　南西半		13.1		12.5	脚柱部完存、裾部2/3	にぶい黄橙		径2mm以下のクサリ礫を含む	外面：脚柱部は縦方向のヘラケズリ、一部にハケ目残存、裾部はヨコナデとヘラミガキ、3条の暗文圏線 内面：脚柱部上端はヨコナデ、中央はしぼり痕、裾部はヨコナデ	面取り高坏	152	2011185
46	32	77	弥生土器	甕	旧河道1　南西半	12.5	6.65	13.0		口縁部1/5	にぶい黄褐		径7mm以下のチャート・石英・長石を多量に含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部縦方向のハケ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部下は縦方向の板ナデの後ナデ、体部は縦方向のハケ		149	2011185
47	32	78	土師器	甕 口D	旧河道1　南半	25.4	26.4	23.8		口縁部約1/6	にぶい黄橙	良好	細礫混じり、径1 ～ 2mm礫多く含む。石英、長石、チャート	外面：口縁部ヨコナデ、体部は縦ハケ 内面:口縁部横ハケの後ナデ、体部上半横方向、中位斜めの粗雑なナデ、底部斜めの強いナデ		203	2012085
48	32	78	土師器	甕 口D	旧河道1　北東半	26.5	17.2	23.1		口縁部～体部1/3	にぶい黄褐～暗灰黄		8mm以下のチャート、長石、石英、雲母を多く含む	外面：口縁部はヨコナデ、体部は縦方向のハケ 内面：口縁部はハケの後ヨコナデ、体部はヘラケズリの後ヘラナデ	外面に黒斑	153	2011185
49	32	78	土師器	甕	旧河道1　北東半	26.8	21.3	25.7		口縁部～体部1/4強	にぶい黄褐～黄灰		4mm以下のチャート、長石、雲母を多く含む	外面：口縁部はヨコナデ、体部は縦方向のハケ 内面：口縁部はヨコナデ、頸部下に横方向のナデ、体部は縦方向のハケ		154	2011185
50	32	78	土師器	カマド	旧河道1　南半	15.9	6.5			口縁部1/4、把手1	にぶい黄橙～にぶい橙		径5mm以下のチャート・石英・長石を多量に含む	外面：板ナデの後ナデ 内面：口縁部は横方向のナデ		150	2011185
51	32	78	土師器	鍋またはカマド	旧河道1　上面		5.8			把手付近のみ	にぶい黄褐	良	径4mm以下の長石、石英等非常に多く含む	外面：粘土を下方に折り曲げ把手を作る		129	2011185
52	32	78	土師器	製塩土器	旧河道1　北東半	9.75	5.6	11.0		口縁部1/6	灰白～浅黄		径2mm以下のチャート・石英・長石を多量に含む	外面：磨滅のため調整不明 内面：磨滅のため調整不明		147	2011185
53	32	78	土師器	製塩土器	旧河道1	11.6	5.1			約1/2	橙～にぶい黄橙	やや不良	細礫混じり、径1 ～ 2.5mm礫多く含む。石英、長石、雲母	外面：ナデ 内面：ナデ	粘土紐痕跡残る	202	2012085
54	32	78	土師器	椀	旧河道1　北東半	13.8	5.5			1/2	にぶい黄～黄灰	良	径2mm以下の砂粒含む	外面：口縁部はナデ、体部から底部は指オサエの後ナデ 内面：ヨコナデ	見込み部に被熱による赤変	122	2011185
55	33	78	土師器	製塩土器	旧河道1　北東半	12.8	4.15	14.0		口縁部1/7	黄灰～浅黄		径2mm以下のチャート・石英・長石を多量に含む	外面：指オサエの後ナデ 内面：指オサエの後ナデ		146	2011185
56	33	78	土師器	製塩土器(鉢)	旧河道1	13.2	5.6			口縁部片	橙～灰黄褐	良	小礫を多く含む	外面：指オサエの後ナデ 内面：指オサエの後ナデ		119	2011185

出土土器一覧表３

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土遺構	法量（cm）				残存状況	色調	焼成	胎土	調整	備考	実測番号	調査番号
						口径	器高	最大径	底径								
57	33	79	土師器	製塩土器	旧河道1	16.8	18.7			口縁部～体部2/3、底部完存	灰白～にぶい黄橙		径3㎜以下のチャート・石英・長石・クサリ礫を多量に含む	外面：ナデと指オサエ 内面：口縁部はナデ、板ナデ、体部は縦方向のナデ、底部は横方向のナデ		151	2011185
58	33	78	土師器	製塩土器(鉢)	旧河道1　南西半	17.3	4.95			口縁部1/7	暗灰黄	良	径2㎜以下の石英・長石・雲母多く含む	外面：ナデ 内面：指ナデ		131	2011185
59	33	78	土師器	製塩土器	旧河道1　南西半	14.6	5.35			口縁部1/6	にぶい黄橙～灰黄褐	良	径2㎜以下の石英・赤色粒・長石・チャートやや多く含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部指オサエのちナデ		136	2011185
60	33	78	土師器	甕	旧河道1　北東半	23.6	6.0			口縁部1/9	にぶい黄橙～にぶい赤褐	良	径1.5㎜以下の石英・赤色粒・長石・チャートやや多く含む	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ		135	2011185
61	33	79	須恵器	杯A	旧河道1　北半	9.3	2.9		6.4	口縁～底部1/3	灰～暗灰	良好	細礫混じり、径1～1.5㎜礫多く含む。石英	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリの後ナデ、底部回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	底部外面にヘラ刻線	205	2012085
62	33	79	須恵器	杯G身	旧河道1　北東半	10.6	3.3			1/2弱	灰	良	径1㎜以下の砂粒含む	外面：口縁部から体部は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ		123	2011185
63	33	79	須恵器	杯A	旧河道1　北半	13.4	3.7		9.0	約1/3	灰白～灰黄	やや不良	細砂混じり、径1～1.5㎜礫若干含む	外面：口縁から体部回転ナデ、体底部境界ヘラケズリの後ナデ、底部ヘラ切りの後ナデ 内面：回転ナデ	内面に火襷	206	2012085
64	33	79	須恵器	杯A	旧河道1　北半	12.4	3.3		9.0	約2/5	灰	良好	細礫混じり、径0.5～1.5㎜礫かなり含む	外面：口縁から体部回転ナデ、体底部境界強いナデ、底部ヘラ切り 内面：回転ナデ		207	2012085
65	33	79	須恵器	杯A	旧河道1　北半	11.6	3.8		6.6	約1/3	灰	良好	細砂混じり、径0.5～1.5㎜礫多く含む	外面：口縁から体部回転ナデ、底部ヘラ切り 内面：回転ナデ		208	2012085
66	33	79	須恵器	杯A	旧河道1・旧河道2　排土中	11.0	3.3		7.0	口縁部1/6、底部1/3	灰	良好	径1㎜程度の細礫含む	外面：口縁から体部回転ナデ、底部ヘラ切り 内面：回転ナデ	底部外面灰被り	210	2012085
67	33	79	須恵器	杯A	旧河道1　アゼ北側	11.8	3.6		9.0	ほぼ完形	灰黄～暗灰	不良	径1㎜以下の砂粒を含む	外面：口縁部と体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ切り 内面：回転ナデ		128	2011185
68	33	79	須恵器	杯B	旧河道1　東側掘り下げ	11.2	3.45		9.4	口縁部3/4～底部完存	灰～青灰		径0.5㎜以下のチャート・長石を少量含む	外面：口縁部～体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ切りの後高台貼り付け 内面：回転ナデ		140	2011185
69	33	79	須恵器	杯B身	旧河道1　南西半	15.4	3.95		10.9	口縁部・体部1/10、底部3/4	灰～黒	良	径1㎜以下の砂粒を多く含む	外面：口縁部から体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ切りの後ナデ、高台貼り付け、高台内側に工具痕 内面：回転ナデ、見込み部に工具痕		126	2011185
70	33	80	須恵器	皿	旧河道1		0.45		9.15	底部1/2弱	灰白	やや不良	細かな砂粒含む	外面：ヘラケズリ 内面：回転ナデ	外面に墨書「福家」	155	2011185
71	33	80	須恵器	壺C	旧河道1　北東半	7.35	5.95	15.0		口縁部1/12、肩部1/4	褐灰～灰	良好	径5㎜以下のチャート・長石を少量含む	外面：回転ナデ、肩部に重ね焼き痕と灰被り 内面：回転ナデ		144	2011185
72	33	80	須恵器	壺	旧河道1　南西半	8.0	5.8			口縁部5/6、頸部完存	灰	良	径0.5㎜前後の砂粒を少量含む	外面：口縁部から頸部回転ナデ。一部灰かぶり 内面：口縁部回転ナデ、頸部はめ込み	頸部径5.05cm	134	2011185
73	33	80	須恵器	壺L	旧河道1　22層中位	6.9	11.65	13.7		口頸部1/3、体部1/2	灰白～灰	良好	細砂含む	外面：口頸部付加後回転ナデ、体部上半回転ナデ、下半回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	自然釉、他個体破片付着	209	2012085
74	33		須恵器	甕	旧河道1　南西半	11.8	4.8			小片	灰	良	径1㎜以下の砂粒を多く含む	外面：口縁部端部に強いヨコナデ、口縁部回転ナデ。 内面：口縁部端部に強いヨコナデ、口縁部回転ナデ。		125	2011185
75	33	80	須恵器	壺	旧河道1　南西半		3.5		11.7	底部のみ完存	灰～灰白	良	径1㎜以下の砂粒を多く含む	外面：回転ナデ、底部は回転ヘラ切りの後ナデ、高台貼り付け、高台内にヘラ記号 内面：回転ナデ	内面見込み部に自然釉付着	127	2011185
76	33		須恵器	壺（底部）	旧河道1・旧河道2　排土中		3.35		9.9	底部1/3	灰	良好	径1～3㎜程度の細礫含む	外面：体底部境界回転ヘラケズリ、底部ヘラ切り、高台貼り付けナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	底部内面灰被り	211	2012085
77	33	80	須恵器	壺（Ｃ？）	旧河道1　南半(東)		4.0	12.9	10.9	底部4/5	灰	良好	細砂混じり、径2～3㎜礫若干含む	外面：体部ヘラケズリの後ナデ、底部ヘラ切りの後ナデ 内面：回転ナデ	極端に扁平。別器種の可能性あり	204	2012085
78	33	80	須恵器	鉢D	旧河道1　北東半	18.8	8.0		19.7	口縁部～体部小片	灰～黄灰	やや不良	径3㎜以下のチャート・長石を少量含む	外面：口縁部は回転ナデ、体部はカキ目 内面：口縁端部は回転ナデ、口縁部カキ目、体部は回転ナデ		143	2011185
79	34	80	須恵器	甕	旧河道1～旧河道3	22.9	10.75			口縁部1/4	灰	不良	径1㎜以下の石英、長石、黒色砂若干多く含む	外面：口縁部はヨコナデ、体部は焼成時の破裂により不明 内面：焼成時の破裂により不明		109	2011185
80	34	81	瓦	丸瓦	旧河道1　北東半		長さ 21.4	幅 10.8	厚さ 1.5～2.2	筒部1/2	灰白～にぶい黄橙	やや不良	径6㎜以下のチャート・石英・長石を若干含む	外面：磨滅のため調整不明 内面：横方向と縦方向のケズリ、布目残る		148	2011185
81	34	81	瓦	平瓦	旧河道1					1/10	黒	不良	小礫を多く含む	外面：タタキ 内面：ナデの後布目		120	2011185
82	34		縄文土器		旧河道1		4.5			口縁部片	黒褐～灰黄褐		径2.5㎜の砂粒多く含む	外面：沈線文		118	2011185
83	34		弥生土器	広口壺	旧河道1～旧河道3		9.85			肩部1/8	灰黄褐	良	径4㎜以下のチャート、石英、長石多く含む	外面：断面三角貼付突帯が３＋α、磨滅により調整不明 内面：ナデ		110	2011185
84	34		弥生土器	壺	旧河道1　南西半		10.4		9.75	体部下半～底部1/3	黄灰～にぶい黄橙	良	径3㎜以下の石英・長石やや多く含む	外面：磨滅して不明 内面：磨滅して不明		139	2011185
85	34		弥生土器	壺	旧河道1　北東半	8.9	5.1			口縁部1/4	灰白～浅黄橙	やや不良	径0.5㎜以下のチャートを少量含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部はナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部の一部にハケ目		145	2011185
86	34		弥生土器	鉢	旧河道1		2.5		2.5	底部完存	にぶい黄橙	良	径2㎜の砂粒多く含む	外面：斜め方向のタタキ 内面：磨滅により不明。穿孔は内外から	底部穿孔	117	2011185

出土土器一覧表４

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土遺構	法量（cm）				残存状況	色調	焼成	胎土	調整	備考	実測番号	調査番号
						口径	器高	最大径	底径								
87	34		弥生土器	甕蓋	旧河道1	つまみ径 5.4	5.2			上半部のみ	にぶい橙～にぶい黄橙	やや不良	0.5 ～ 3㎜の礫多く含む。7㎜の礫若干含む。石英、長石、チャート	外面：つまみ部はナデ、天井部境界ヘラケズリの後ナデ、体部はタタキ 内面：摩滅のため、調整不明		201	2012085
88	34		土師器	高坏	旧河道1　南西半	14.0	5.4			口縁部1/2弱	にぶい黄橙～橙	やや不良	径2㎜以下の石英・赤色粒・長石やや多く含む	外面：磨滅して不明 内面：縦方向のヘラミガキか		138	2011185
89	34		須恵器	杯蓋	旧河道1	14.4	3.2			口縁部1/8	灰	良好	細砂含む	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部から口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ		319	2012085
90	34		須恵器	杯蓋	旧河道1　南西半	13.05	4.45			口縁部若干、底部完存	灰	良	径3.5㎜以下の石英・長石・チャートやや多く含む	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ		133	2011185
91	34		須恵器	杯蓋	旧河道1　南西半	10.8	3.8			1/2	灰白～灰	良	径1㎜以下の砂粒含む	外面：天井部は回転ヘラ切りの後ナデ、口縁部は回転ナデ 内面：回転ナデ		124	2011185
92	34		須恵器	杯身	旧河道1　上部	9.3	3.8	10.2	6.0	口縁部2/5、体部～底部完存	灰	良	径1㎜以下の石英、長石を少量含む。径5㎜の石英、黒色粒若干含む	外面：口縁部～体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ切り 内面：回転ナデ、若干灰を被る		111	2011185
93	34	81	須恵器	瓶	旧河道1・旧河道2　サブトレンチ		12.3	9.7		口頸部2/3、体部完存	灰	良好	径1 ～ 2㎜程度の細礫（石英・長石）含む	外面：口頸部から体部上半回転ナデ、体部下半回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ		212	2012085
94	35		土師器	杯A	旧河道3　北半	11.8	3.45		7.6	口縁部1/6、底部1/8	浅黄橙～灰白	良好	径0.5 ～ 2㎜の粗砂、5㎜の細レキ含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部下半指オサエとナデ、底部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、底部ナデ		284	2012085
95	35	82	土師器	椀E	旧河道3　南1区西岸	13.7	4.85			口縁部3/7、底部7/8	にぶい褐～灰黄褐	良好	径0.5 ～ 1.5㎜の長石、石英、赤色粒を含む	外面：口縁部ヨコナデ、後は摩滅のため調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、体部から底部は不定方向のナデ	内面にヘラ記号、2次焼成、スス付着	270	2012085
96	35		土師器	椀C	旧河道3　南2区西側	10.2	3.4			口縁部1/3	にぶい黄橙～黄灰	良好	径1.5㎜以下の石英、長石、赤色粒多く含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部指オサエの後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ		283	2012085
97	35	82	土師器	皿Aまたは杯C	旧河道2・旧河道3　杭列C	14.6	2.78		9.2	口縁部から体部1/4、底部1/6	にぶい橙～橙	良好	長石、極少量含む（精製された胎土）	外面：口縁部強いヨコナデ、体部ヨコナデ、底部ナデ 内面：口縁部強いヨコナデ、体部ヨコナデ、底部ナデ（平滑）		308	2012085
98	35	82	土師器	皿A	旧河道3　杭列G周辺	22.0	2.7	16.8		口縁部1/12、底部1/2	橙～明赤褐	良好	微細な雲母、1㎜以下の赤色粒多く含む	外面：口縁部ヨコナデ、底部指オサエの後ナデ 内面：ヨコナデ	被熱？	303	2012085
99	35	82	土師器	鉢B	旧河道3　南1区中央	19.0	6.55		15.8	口縁～体部1/3、底部欠く	灰黄～明黄褐	良好	径3㎜以下の細礫、長石、石英含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部は粗いヘラミガキ、一部にヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、体部は斜め方向のヘラミガキ		314	2012085
100	35		土師器	鉢	旧河道3　北半	14.1	8.95	15.6		口縁部1/8以下、底部1/3	にぶい橙～灰白	良好	径0.5 ～ 1.5㎜の石英、長石など含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部はナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部～底部はナデ		287	2012085
101	35		土師器	底部	旧河道3　北半西側		2.9			底部のみ	にぶい黄褐～にぶい橙	良好	径1㎜以下の長石、石英、赤色粒多く含む	外面：指オサエの後ナデ 内面：ハケ	尖底	304	2012085
102	35		土師器	製塩土器	旧河道3　南3区		4.2			口縁部1/6	にぶい黄橙	良好	2㎜以下の長石少量、赤色粒含む	外面：指オサエとナデ 内面：ナデ		282	2012085
103	35	82	土師器	甕 全A口D	旧河道3　杭列G・E周辺	15.6	15.3	15.6		口縁部1/2、体部1/3	にぶい橙	良好	細砂混じり、径0.5 ～ 2㎜礫（石英、長石、雲母）	外面：口縁部斜め方向のハケの後ヨコナデ、体部上半は縦ハケ、下半は斜めと横方向のハケ 内面：口縁部横方向のハケの後ヨコナデ、体部上半はナデ、下半は強い指オサエによるナデ	外面スス付着、内面炭化物付着	295	2012085
104	35	82	土師器	甕 口B	旧河道3　北半東側	29.0	4.75			口縁部1/8以下	灰黄	良好	径0.5㎜の黒色粒など含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部は縦方向のハケ 内面：口縁部ヨコナデと横方向のハケ、体部はナデ		292	2012085
105	35	82	土師器	甕 口D	旧河道3　南3区西側	28.7	7.0			口縁部1/6	褐灰～灰黄	良好	径0.5 ～ 1.5㎜の石英、長石など含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部は斜め方向のハケ 内面：口縁部ヨコナデと横方向のハケ、体部は横方向のハケ		290	2012085
106	35	82	土師器	甕 口K	旧河道2・旧河道3　杭列C	37.0	5.5			口縁部若干	にぶい黄～明黄褐	良好	径3㎜以下の石英、長石他、多量に含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ		309	2012085
107	35	82	土師器	甕 口E	旧河道3　南3区	26.2	8.0			口縁部1/5	灰黄褐～灰黄	良好	径0.5 ～ 1.5㎜の石英、長石など含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部は縦方向のハケ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部下にハケ、体部はナデ		288	2012085
108	35	82	土師器	甕 口D	旧河道3　南3区西側	26.4	11.9			口縁部僅か	灰黄褐～にぶい黄橙	良好	径0.5 ～ 3㎜の石英、長石など多く含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部は斜め方向のハケ 内面：口縁部ヨコナデと横方向のハケ、体部は指オサエとナデ		291	2012085
109	35	83	土師器	甕 全B口E	旧河道3　北半・南1区、旧河道2　南1区	25.1	28.7	23.2		口縁部1/5、体部2/3	にぶい橙～赤橙	良好	細砂混じり、径0.5 ～ 2㎜礫（石英、雲母、長石）	外面：口縁部ヨコナデ、体部上半は粗い縦ハケ、下半は横・斜めのハケ、底部は縦ハケ 内面：口縁端部ヨコナデ、口縁部横ハケ、体部はナデ、底部には指頭圧痕	外面スス付着。内面も被熱	296	2012085
110	36	83	土師器	甕 全B口C	旧河道3　西岸南2区	27.15	30.35	24.6		底部の一部欠	にぶい褐～灰黄褐	良好	径2㎜以下の砂粒（石英、長石、チャート）中量、雲母含む	外面：口縁部ヨコナデ、頸部沈線状の工具痕跡、体部は縦方向のハケ 内面：口縁部横方向のハケの後ヨコナデ、体部上半は横方向のハケの後縦方向の板ナデあるいはヘラケズリ、下半は縦方向のヘラケズリの後ハケ	外面にスス、内面に炭化物付着	271	2012085
111	36	83	土師器	甕 全B口C	旧河道3　杭列G付近	27.6	31.0	25.3		体部下半1/5欠	にぶい褐	良	径2.5㎜以下の石英、長石中量含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部縦方向のハケ目 内面：口縁部横方向のハケの後ヨコナデ、体部頸部下に横方向のハケが残り、その後で縦方向のヘラケズリ。一部縦方向のナデ、底部付近に横方向のナデ	出土状況図あり、外面にスス付着	307	2012085
112	36	83	土師器	甕 全B口C	旧河道3　杭列G付近	27.1	28.3	24.4		底部欠	橙～灰褐	良	径2㎜以下の石英、長石やや多い	外面：口縁部ヨコナデ、体部縦方向のハケ目 内面：口縁部横方向のハケの後ヨコナデ、体部頸部下に横方向のハケが残り、その後で縦方向のヘラケズリ。上半部は最後にナデ。底部付近は板ナデ	外面にスス付着	306	2012085
113	36	83	須恵器	杯A	旧河道3　南1区東側	11.0	3.1		6.8	口縁部1/8以下、底部1/4	灰白～褐灰	良好	細砂含む	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部ヘラ切り 内面：回転ナデ		263	2012085

出土土器一覧表５

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土遺構	法量（cm）				残存状況	色調	焼成	胎土	調整	備考	実測番号	調査番号
						口径	器高	最大径	底径								
114	36	83	須恵器	杯F	旧河道3　南3区	15.6	4.0	9.9		口縁部1/9、高台1/4	灰白～灰	良好	微細な長石含む	外面：口縁部～体部は回転ナデの後ヘラミガキ、口縁直下と体部底部境界に沈線、底部回転ヘラ切りの後高台貼り付け 内面：回転ナデ		281	2012085
115	36	83	須恵器	杯B	旧河道3　南1区中央	14.8	4.85		11.2	口縁部1/5、底部2/3	灰	良好	径0.5 ～ 1mmの長石、黒色粒を含む	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部ヘラ切り、高台貼り付け 内面：回転ナデ、底部仕上げナデ		266	2012085
116	36	84	須恵器	杯B	旧河道3　南3区	16.4	5.15		12.4	口縁部1/3、底部1/2	灰白～灰	良好	径0.5 ～ 1mmの長石、黒色粒など含む	外面：口縁部から体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、高台貼り付け 内面：回転ナデ		289	2012085
117	36		須恵器	杯B	旧河道3　南2区東側		2.5		10.4	底部2/3	灰白～灰	良好	1mm以下の砂少量含む	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切りの後高台貼り付けナデ 内面：回転ナデ		277	2012085
118	36	84	須恵器	杯E？	旧河道3　北半	11.9	4.6		7.6	口縁部1/5、底部1/3	灰白	良好	径0.5mmの長石多く含む	外面：口縁部から体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り 内面：回転ナデ		285	2012085
119	36	83	須恵器	杯B蓋	旧河道3　南1区東側	16.1	1.55			口縁部1/8	灰	良好	微細な長石含む	外面：天井部回転ヘラケズリ、つまみ貼り付けナデ、体部～口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ、天井部仕上げナデ		261	2012085
120	36	83	須恵器	杯B蓋	旧河道3　南1区西側		1.7			つまみ完存、天井部1/5弱	灰白	良好	径1mm以下の長石、黒色粒少量含む	外面：天井部回転ヘラケズリの後、つまみ貼り付け、体部回転ナデ 内面：回転ナデ	天井部外面に墨書「十」？	274	2012085
121	36	84	須恵器	高坏蓋	旧河道3　北半	16.3	5.6			口縁1/4、天井部1/2弱	灰	良好	径0.5 ～ 2mmの長石、石英を含む	外面：天井部回転ヘラケズリの後回転ナデ、口縁部回転ナデ、つまみ貼り付け 内面：回転ナデ		302	2012085
122	36		須恵器	蓋	旧河道3　南1区		4.8			天井部1/4	灰白	良好	径0.5 ～ 1mmの長石、石英、黒色粒を含む	外面：天井部回転ヘラケズリ、つまみ貼り付け、体部回転ナデ 内面：回転ナデ		267	2012085
123	36	84	須恵器	壺K	旧河道3　北半		12.5			頸部完存、体部上半1/7	灰、灰オリーブ（釉）	良好	径0.5 ～ 1mmの長石、石英、チャートを含む	外面：回転ナデ、頸部はめ込み 内面：回転ナデ	外面と口縁部内面に自然釉	298	2012085
124	36	84	須恵器	壺K	旧河道3　北半東側		14.1			頸部1/2	灰白	良好	径0.5 ～ 1mmの石英、長石など含む	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ		294	2012085
125	37	84	須恵器	甕	旧河道3　北半		12.6			頸部1/3、体部5/12	灰、灰オリーブ（釉）	良好	径1 ～ 5mmの長石少量含む	外面：頸部回転ナデ、体部タタキの後カキ目 内面：頸部回転ナデ、体部タタキの後ナデ（当て具痕跡ナデ消す）	外面全体に自然釉、土器片融着	297	2012085
126	37		須恵器	甕	旧河道3　南1区西半	24.0	5.3			口縁部1/7	灰白～灰	良好	径1mm以下少量、径2.5mm極少量の石英、長石含む	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ		279	2012085
127	37	85	須恵器	甕	旧河道3　南3区西岸	22.5	47.1	44.55		ほぼ完形	灰～暗灰、暗オリーブ灰（釉）	良好	粗砂（長石など）多く含む、	外面:口縁部回転ナデ、体部タタキの後カキ目、底部付近はタタキ目残る 内面：口縁部回転ナデ、体部は前面に当て具痕跡（同心円文）	上半に濃密な自然釉、他個体複数融着、火脹れ多数。底部外面に3箇所円形の変色部分（焼台痕？）、底部内面に灰被り、位置から見て焼成時に傾けて設置	315	2012085
128	37	84	弥生土器	壺（頸部）	旧河道3　南2区		7.8			口頸部下半1/9	にぶい黄～にぶい橙	普通	径3mm以下の石英、長石、赤色粒多く含む。径4mm石英極少量含む	摩滅のため調整不明、外面に沈線7条以上		276	2012085
129	37		弥生土器	壺（底部）	旧河道3　南1区西側		6.5		6.5	底部のみ1/2	灰黄～黄灰	普通	径2 ～ 3mmの石英、長石、赤色粒多く含む。径5mm石英含む	摩滅のため調整不明		275	2012085
130	37		弥生土器	壺（底部）	旧河道3　西岸南2区		8.2		14.3	底部のみ1/4	にぶい橙～にぶい黄橙～褐灰	良好	径3mm以下の長石、石英、赤色粒多く含む	外面：体部は縦方向のハケの後ナデ、底部はナデ 内面：ハケ	底部外面に籾痕	273	2012085
131	37	84	土師器	ミニチュア甕	旧河道3　南1区東岸	7.5	8.0	8.7		口縁部～体部1/7	にぶい橙	良好	径0.5 ～ 2mmの長石、石英を含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部指オサエの後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデとナデ		269	2012085
132	37	85	土師器	高坏	旧河道3　北半		7.3		10.8	脚部ほぼ完存	にぶい黄橙	良好	径0.5 ～ 1mmの長石、石英、赤色粒を含む	外面：縦方向のハケ 内面：脚柱部にシボリ痕、斜め方向・横方向のケズリ、脚裾付近は横方向のハケ		299	2012085
133	37	84	土師器	高坏	旧河道3　南1区東側		9.4			坏底部1/10、脚部1/3	にぶい黄橙～明黄橙	良好	径0.5 ～ 1mmの長石、石英、チャート、赤色粒を含む	摩滅のため調整不明		262	2012085
134	38	85	須恵器	杯蓋	旧河道3　北半東側	14.1	3.9			口縁部1/7	灰白	良好	径0.5 ～ 1mmの石英、長石など含む	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部～口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ、天井部仕上げナデ		293	2012085
135	38	85	須恵器	蓋	旧河道3　南1区東岸	13.4	3.7			天井部～口縁部1/2	灰	良好	径0.5 ～ 2mmの長石、石英を含む	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部回転ナデ 内面：回転ナデ、天井部仕上げナデ		268	2012085
136	38	85	須恵器	杯H蓋	旧河道3　南1区東側	11.2	3.8			口縁部1/3	灰	良好	径0.5 ～ 1mmの粗砂を含む	外面：天井部ヘラ切り、体部～口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ		260	2012085
137	38	85	須恵器	杯蓋	旧河道3　南2区東側	12.6	4.0			口縁部1/3、天井部3/4	灰	良好	径1 ～ 2mmの石英、長石を少量、径3.5 ～ 5mmの石英を極少量含む	外面：天井部回転ヘラケズリ、体部～口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ		278	2012085
138	38	86	須恵器	杯G蓋	旧河道3　南1区東側	9.0	2.5			つまみ欠落、口縁部7/8残存	灰白	良好	径0.5 ～ 1mmの長石、石英、黒色粒を含む	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ		264	2012085
139	38	85	須恵器	杯身	旧河道3　北半	11.9	3.6			約1/4	灰	良好	径0.5mmの長石含む	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：口縁部～体部回転ナデ、底部ナデ		286	2012085
140	38	85	須恵器	杯身	旧河道3　杭列C　断ち割り	12.0	4.2			約1/4	橙～明オリーブ灰	やや不良	径3mm以下の石英、長石他、多く含む	外面：口縁部から体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ		310	2012085

出土土器一覧表６

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土遺構	法量（cm）				残存状況	色調	焼成	胎土	調整	備考	実測番号	調査番号
						口径	器高	最大径	底径								
141	38	85	須恵器	杯身	旧河道3　西岸南2区	11.6	3.7			約1/3	灰	良好	径1.5㎜以下の粗砂、長石、黒色粒を含む	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	底部にヘラ記号	272	2012085
142	38	85	須恵器	杯身	旧河道3　南1区中央	11.8	3.4		9.9	口縁部1/5、底部2/5	灰	良好	径0.5 ～ 1㎜の長石、黒色粒を含む	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部ヘラ切りの後ナデ 内面：回転ナデ		265	2012085
143	38		須恵器	杯H身	旧河道3　北半	8.6	2.9		3.3	口縁部1/4、体部1/4弱	灰～灰白	良好	径1㎜以下の粗砂含む	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：口縁部から底部回転ナデ、底部仕上げナデ		301	2012085
144	38	86	須恵器	提瓶	旧河道3　北半	7.5	9.5			口頸部2/3、体部若干	灰白～灰	良好	径1.5㎜以下の長石など少量含む	外面：口頸部回転ナデ、体部回転ナデの後カキ目、把手貼り付け 内面：回転ナデ		300	2012085
145	38		須恵器	甕	旧河道3　南1区西半		6.4	8.2		体部1/2弱	灰～暗青灰	良好	径5㎜以下の石英、長石含む	外面：肩部は回転ナデ、胴部から底部は回転ヘラケズリ 内面：肩部はナデ、底部から胴部は回転ナデ	肩部外面にヘラ記号	280	2012085
146	38	86	須恵器	甕	旧河道3　杭列E		9.2	9.4		頸部1/2、体部ほぼ完存	灰	良好	径1.5㎜以下の石英、長石含む	外面：頸部から体部上半回転ナデ、体部下半回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ		305	2012085
147	38	86	土師器	杯A	旧河道2　南1区	13.1	3.9		6.6	口縁部1/5、底部1/3	暗灰黄～灰黄褐	良好	径1 ～ 2㎜程度の細礫（石英・長石）を多く含む	外面：口縁部強いヨコナデ、体部ヨコナデ、体底部境界指ナデ、底部ヘラ切りの後ナデ 内面：ヨコナデ		213	2012085
148	38	86	土師器	杯A	旧河道2　南2区	14.0	4.0		8.35	口縁部1/5、底部完存	褐～にぶい褐	良好	径1 ～ 3㎜程度の砂粒多く含む	外面：口縁部から体部上半ヨコナデ、底部はヘラ切りの後ナデ 内面：口縁部から体部ヨコナデ、底部はナデ	全体に被熱、内面に炭化物付着	224	2012085
149	38	86	土師器	杯A	旧河道2　南1区	13.4	4.2		7.3	口縁部～底部1/4	褐灰～灰黄褐	良好	径1㎜程度の細礫（石英・長石）を多く含む	外面：口縁部強いヨコナデ、体部指オサエの後ヨコナデ、体底部ナデ 内面：口縁部強いヨコナデ、体部ヨコナデ、底部ナデ	口縁部軽く外反	214	2012085
150	38	86	土師器	皿A	旧河道2　南1区	15.0	2.5		12.3	口縁部2/7、底部1/7	にぶい黄橙	良好	径0.5 ～ 2㎜程度の細礫（長石）を含む	外面：口縁部から体部ヨコナデ、底部ヘラ切りの後ナデ 内面：口縁部～体部回転ナデ		216	2012085
151	38	86	土師器	鉢A	旧河道2　南3区	17.2	7.3	18.7		口縁部1/6	橙	良好	径2㎜以下の砂粒（石英、長石）含む	外面：口縁部ヨコナデ、摩滅のため調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、摩滅のため調整不明		248	2012085
152	38		土師器	製塩土器(鉢)	旧河道1・旧河道2（旧河道3）	13.1	9.5	15.6		口縁部若干、体部1/3	浅黄～灰黄	良	径3㎜以下の石英、チャート若干多く含む	外面：ナデ 内面：口縁部は横方向のナデ、体部は斜め方向のナデ		108	2011185
153	38	86	土師器	椀C ？	旧河道2　北半	14.0	5.1			口縁部～体部1/4	にぶい褐～黒	良好	径3㎜以下の砂粒（長石）中量含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部指オサエの後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデの後ナデ	内外面とも被熱、製塩土器？	242	2012085
154	38	87	土師器	椀	旧河道2　南3区	6.8	4.6	7.1		口縁部1/3、底部完存	にぶい黄橙～にぶい橙	良好	径1㎜前後の石英、チャートやや多く含む	外面：口縁部横方向のナデ、体部板ナデ 内面：口縁部～底部横方向のナデ	被熱、変色	237	2012085
155	38	87	土師器	椀	旧河道2　南3区北側	7.1	2.9		3.7	1/2強	灰黄	良好	径3㎜以下の石英、長石、チャートを少量含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	内面に墨付着スス付着。灯火具か？	236	2012085
156	38	86	土師器	壺B	旧河道2　南2区	13.1	10.3	13.0	4.2	口縁部1/5、体部1/2	灰黄～褐灰	良好	径0.5 ～ 1㎜程度の砂粒含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部縦方向のハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部はナデ	外面スス付着、内面炭化物付着	223	2012085
157	38		土師質	甕	旧河道2　北半	13.8	5.1			口縁部1/6	浅黄橙	良好	極細砂、中量含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部縦ハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	時期不明、近世？	243	2012085
158	39	87	土師器	甕 口C	旧河道2　南3区	17.55	11.0	19.7		約1/6	にぶい黄～黄灰	良好	径1.5㎜以下の石英、チャート中量含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部は縦ハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部は縦のヘラケズリの後ナデ、一部に格子状の当て具痕跡	外面にスス付着	234	2012085
159	39	87	土師器	甕 口D	旧河道2　北半	27.2	8.9			口縁部1/5	橙	良好	径2㎜以下の細砂粒、長石多量に含む	外面：口縁部ヨコナデ、口縁端部は強いヨコナデ、体部は縦方向のハケ 内面：口縁端部強いヨコナデ、口縁部から頸部下にかけて粗いハケ、体部は斜め方向のハケ		241	2012085
160	39	87	土師器	甕 口E	旧河道2　北半	25.06	10.6	11.5		口縁部～体部上半1/4	灰黄褐	良好	4㎜以下の砂粒（長石：多、石英）非常に多く含む	外面：口縁部ヨコナデ、頸部下ハケの後横方向のナデ、体部縦方向のハケ 内面：横方向のハケの後ヨコナデ、体部横方向のハケの後縦方向のヘラケズリ	外面スス付着	250	2012085
161	39	87	土師器	甕	旧河道2　上層杭列上まで	25.5	6.4			口縁部1/10	橙	良	径2.5㎜以下の粗砂を多く含む	外面：口縁部はヨコナデ、体部は斜め方向のハケ 内面：表面の剥離により不明		101	2011185
162	39	87	土師器	甕 口C	旧河道2　アゼ南側トレンチ	28.1	6.8			口縁部1/5	灰黄	良好	径0.5 ～ 2㎜程度の細礫（石英・長石・クサリ礫）を含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部は摩滅、一部にハケ 内面：口縁部横ハケの後ヨコナデ、体部は摩滅のため調整不明		218	2012085
163	39	88	土師器	甕 口D	旧河道2　南1区	24.35	24.8	23.7		3/4、底部欠損	灰黄褐～にぶい黄橙	良好	径2.5㎜以下の石英、長石チャートを多く含む	外面：口縁部から頸部下ヨコナデ、体部縦方向のハケ 内面：口縁部から頸部下ヨコナデ、体部斜め方向のヘラケズリ	外面に分厚くスス付着、内面有機物付着	220	2012085
164	39		土師器	甕 口A	旧河道2　北半	28.3	24.7			口縁部7/8、体部若干	灰白～褐灰	良好	径0.5 ～ 1㎜の砂粒含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部縦ハケ、一部帯状の横ハケ、底部斜め方向のハケ 内面：口縁部横ハケの後ヨコナデ、頸部下に横ハケ、体部はナデ	外面スス付着。口縁部、体部歪む	246	2012085
165	39	87	土師器	甕	旧河道2　巨木材脇	25.5	20.1	23.8		口縁部1/2弱	灰黄褐～褐灰		径4㎜以下の雲母、長石、チャート、石英含む	外面：口縁部はヨコナデ、体部は縦方向のハケ 内面：口縁部はハケの後ヨコナデ、体部は縦方向のヘラケズリの後縦方向のナデ	頸部外面にスス付着	114	2011185
166	39	88	土師器	甕 全B口E	旧河道2　アゼ、北半	26.0	27.8	22.5		口縁部4/5、底部欠	にぶい黄褐	良好	細砂、細礫（0.5 ～ 3㎜）混じり。径4㎜台の礫（石英、雲母、長石）多量に含む。	外面：口縁部ヨコナデ、体部上半縦方向のハケ、下半斜め方向のハケ、底部不定方向のハケ 内面：口縁部横方向のヘラケズリ、ハケの後ヨコナデ、体部ヘラケズリの後板ナデ、底部付近はヘラケズリの後強いナデ	外面スス付着	239	2012085
167	39	87	土師器	甕 口E	旧河道2　北半	28.0	12.3			口縁部1/5	橙～明赤褐	良好	径5㎜以下の砂粒、長石多量に含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部縦ハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部横ハケ、一部縦ハケ	外面スス付着	244	2012085

出土土器一覧表７

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土遺構	法量（cm）				残存状況	色調	焼成	胎土	調整	備考	実測番号	調査番号
						口径	器高	最大径	底径								
168	40		土師器	甕 口E	旧河道2　北半	27.1	13.1			口縁部～体部1/12	褐	良好	径5㎜以下の砂粒（石英、長石、チャート、雲母）含む	外面：口縁部ヨコナデ、一部に指頭圧痕、体部縦方向のハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部縦方向のハケ（板ナデ）の後ナデ	外面スス付着	247	2012085
169	40	88	土師器	羽釜 全B	旧河道2（旧河道3）	21.1	22.7	19.8		口縁部完存、体部2/3	にぶい褐～灰黄褐		径5㎜以下の長石、チャート含む	外面：口縁部はヨコナデ、鍔貼り付け、体部は縦方向のハケ 内面：縦方向のヘラケズリの後ナデ	体部外面にススが付着、鍔部径25.2cm	115	2011185
170	40		土師器	鍔甕（羽釜）	旧河道2　北半		2.8	28.8		鍔1/6	灰黄～にぶい黄橙	良好	径1.5㎜以下の石英・長石・チャートをやや多く含む	外面：強いナデ 内面：縦ハケ		253	2012085
171	40	88	須恵器	杯A	旧河道2（旧河道3）	9.2	3.75		5.95	1/3	灰	良	径0.1㎜以下の砂粒を少量含む	外面：口縁部から体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ切り 内面：回転ナデ		103	2011185
172	40	88	須恵器	杯A	旧河道2　南2区	13.0	4.4		7.2	口縁部1/3	灰～灰白	良好	径0.5 ～ 3㎜程度の砂粒含む	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り 内面：回転ナデ	外面に重ね焼き痕跡	222	2012085
173	40	88	須恵器	杯B	旧河道2　南1区	13.1	4.0		8.8	口縁部3/8、底部1/3	灰	良好	径0.5㎜程度の細礫（長石）を含む	外面：口縁部から体部回転ナデ、底部ヘラ切り、高台貼り付け 内面：口縁部～体部回転ナデ、底部はナデ		215	2012085
174	40	88	須恵器	杯B	旧河道2　北半		4.3	11.0		口縁部～体部1/4、底部1/2弱	黄灰～灰白	やや不良	微細砂粒（長石）多く、径5㎜程度の砂粒（長石、石英など）少量含む。	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラ切りの後ナデ、高台貼り付け 内面：回転ナデ		251	2012085
175	40	88	須恵器	杯B	旧河道2　南2区	18.8	4.85		13.5	口縁部1/7、底部1/4	灰白	良好	径0.5 ～ 1㎜程度の砂粒含む	外面：口縁部から体部回転ナデ、底部ヘラ切り、高台貼り付け 内面：口縁部～体部回転ナデ、底部はナデ		225	2012085
176	40	88	須恵器	杯B	旧河道2　南側杭列付近				厚さ 0.75	底部の一部	灰	良	径0.2㎜前後の砂粒を少量含む	外面：ナデ、高台剥離痕跡、墨書あり 内面：ナデ	墨書土器	102	2011185
177	40	89	須恵器	蓋（転用硯）	旧河道2　水田被覆砂層	16.1	1.6			口縁若干欠損	灰白	良好	径3㎜以下の石英・チャート少量含む	外面：天井部ヘラケズリの後つまみ貼り付けナデ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデの後仕上げナデ	内面に墨付着	228	2012085
178	40		須恵器	蓋	旧河道2　南2区		2.2			つまみ若干	灰白	良好	径0.5 ～ 1㎜程度の砂粒含む	外面：回転ナデとケズリ 内面：回転ナデの後ナデ		227	2012085
179	40	89	須恵器	脚部	旧河道2　南1区		2.5		6.85	脚部3/4	灰白～灰黄	不良	径0.5 ～ 2㎜程度の細礫（長石）を含む	外面：脚部回転ナデ 内面：脚端部回転ナデ、上部ナデ		217	2012085
180	40	89	須恵器	高坏	旧河道2（旧河道3）	3.45			8.9	底部3/4	灰白～にぶい黄橙	やや不良	径0.5㎜以下の砂粒を少量含む。径3㎜のチャート混じる	外面：回転ナデ、裾端部は強い回転ナデ 内面：回転ナデ		104	2011185
181	40	88	須恵器	鉢A	旧河道2　南2区	16.2	6.65	18.2		口縁部1/6	灰白	良好	径0.5 ～ 1㎜程度の砂粒含む	外面：口縁部から体部上半は回転ナデ、体部下半はケズリ 内面：回転ナデ		226	2012085
182	40	89	須恵器	壺K	旧河道2　南2区	15.1	21.7	21.1		口縁部3/4、底部欠損	灰	良好	径3㎜以下の石英、長石中量含む	外面：口縁部～肩部回転ナデ、体部ゆるいケズリの後回転ナデ 内面：頸部継ぎ目はナデ、他は回転ナデ	口縁内部から肩部に自然釉。肩部に別個体融着痕跡	219	2012085
183	40	89	須恵器	長頸壺	旧河道2（旧河道3）		10.2	14.9	8.6	体部～底部完存	灰	良	細かい長石含む	外面：肩部から体部上半は回転ナデ、体部下半は回転ヘラケズリ、底部に高台貼り付けナデとナデ 内面：回転ナデ	肩部外面と内面見込み部に自然釉	113	2011185
184	40	89	須恵器	壺K	旧河道2　北半		12.6	18.6	11.4	体部完存	灰	良好	径2㎜以下の石英少量含む	外面：肩部まで回転ナデ、体部下半は回転ヘラケズリ、底部は回転ナデの後高台貼り付け 内面：回転ナデ	口頸部を綺麗に打ち欠く	259	2012085
185	40	90	須恵器	壺L	旧河道2　南2区		14.6	15.7	9.6	口頸部欠損	灰～灰白	良好	径1㎜程度の砂粒、長石含む	外面：体部上半にカキ目、底部付近以外は回転ナデ、底部付近は回転ヘラケズリ、高台貼り付けのナデ 内面：回転ナデ	肩部を中心に自然釉、内面にも自然釉。内外面に火脹れ。口頸部打ち欠き、底部穿孔の可能性あり	221	2012085
186	41	90	須恵器	平瓶	旧河道2　北半	5.9	14.6	17.1		口縁部1/3欠、体部ほぼ残存	灰白～灰	良好	径1㎜以下の石英・長石中量含む	外面：口縁部回転ナデ、肩部回転ナデ、体部中央弱い回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ		254	2012085
187	41	90	須恵器	壺？	旧河道2　北半	13.1	5.5			口頸部4/5	灰	良好	極細砂、長石含む	外面：回転ナデ、口縁端部強いヨコナデ 内面：回転ナデ		240	2012085
188	41		須恵器	甕	旧河道2（旧河道3）	17.55	5.55			口縁部1/5	灰	良	径1㎜以下の砂粒を少量含む	外面：口縁部は回転ナデ、体部に平行タタキ 内面：口縁部は回転ナデ、体部に当て具痕跡		105	2011185
189	41	90	須恵器	甕	旧河道2　北半	33.7	10.2			口縁部1/4	灰	良好	極細砂含む	外面：口縁端部強いヨコナデ、口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ		245	2012085
190	41		縄文土器	深鉢	旧河道2　北半		6.7			口縁部若干	にぶい黄橙～褐灰	良好	径4㎜以下の石英、長石多く含む	剥離のため調整不明		252	2012085
191	41	90	弥生土器	壺（底部）	旧河道2　南3区		4.2		12.3	底部1/3	にぶい黄～黄灰	良好	径2㎜以下の石英、長石、チャートを非常に多く含む	外面：縦方向のケズリ、底部は横方向のナデ 内面：ナデ		235	2012085
192	41	90	弥生土器	高坏	旧河道2　北半	20.4	4.5			口縁部1/6	橙～にぶい橙	良好	2.5㎜以下の砂粒（石英、長石、赤色粒）含む	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ		249	2012085
193	41	91	ミニチュア土器	甕	旧河道2（旧河道3）	4.1	4.8	4.8		ほぼ完形	灰～暗灰黄		径2㎜以下の長石、チャート含む	外面：口縁部は指オサエの後ヨコナデ、体部はナデ 内面：口縁部はヨコナデ、体部は横方向のナデ		107	2011185
194	41	90	須恵器	高坏蓋	旧河道2　北半	15.2	4.1			1/4　つまみ欠	灰	良好	径1㎜以下の石英・砂粒少量含む	外面：天井部丁寧な回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデ 内面：回転ナデ		258	2012085
195	41	91	須恵器	杯H蓋	旧河道2　南3区	13.3	4.1			口縁部1/4欠損	灰	良好	径3㎜以下の石英、長石中量含む	外面：天井部ヘラケズリ、口縁部回転ナデ、口縁・天井境界を凹線状に深く削る 内面：回転ナデ		230	2012085
196	41	91	須恵器	杯H蓋	旧河道2　北半	14.0	4.3			完形	灰	良好	径4㎜以下の石英、長石やや多く含む。タール状黒色粒子含む	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ		257	2012085
197	41	91	須恵器	杯H蓋	旧河道2　北半・アゼ	14.65	4.5			口縁部1/3、天井部完存	灰黄	やや不良	径3 ～ 7㎜、0.5㎜程度のチャート、石英、長石含む	外面：天井部ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ、口縁端部直上に沈線1条		229	2012085

出土土器一覧表８

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土遺構	法量（cm）				残存状況	色調	焼成	胎土	調整	備考	実測番号	調査番号
						口径	器高	最大径	底径								
198	41	91	須恵器	杯H蓋	旧河道2　南3区	12.2	3.45			約1/2	灰	良好	径1.5㎜以下の石英、長石少量含む	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ、天井部ナデ		233	2012085
199	41	91	須恵器	杯H身	旧河道2（旧河道3）	11.8	4.1	14.2		ほぼ完形	灰		径2㎜以下の長石含む	外面：口縁部から体部は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、見込み部に一方向の仕上げナデ		106	2011185
200	41		須恵器	杯H身	旧河道2　南3区北側	11.8	3.6			約1/4	灰白	やや不良	径2.5㎜以下の石英、長石少量含む	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部仕上げナデ		231	2012085
201	41		須恵器	杯H身	旧河道2　南3区	13.5	4.3			約1/5	灰	良好	径2㎜以下の石英、長石少量含む	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部仕上げナデ		232	2012085
202	41	91	須恵器	甕	旧河道2　北半		8.4	9.5		体部1/2強	灰	良好	径2㎜以下の石英・長石少量含む	外面：回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ		255	2012085
203	41	91	須恵器	甕	旧河道2　北半		8.7	8.6		口縁部欠損	灰	良好	径1㎜以下の石英・長石少量含む	外面：回転ナデ、底部は手持ちヘラケズリの後ナデ 内面：おそらく回転ナデ	底部焼成後穿孔	256	2012085
204	41	92	須恵器	有蓋高坏	旧河道2　北半	13.7	19.5		14.5	坏部7/10、脚部3/4	灰	良好	細砂混じり。径0.5 ～ 1.5㎜、3㎜台の礫若干含む。石英、長石	外面：口縁～受部ヨコナデ、坏部回転ヘラケズリ、接合部ヨコナデ、脚部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、坏部回転ヘラケズリの後ナデ、脚部ヨコナデ、絞り痕跡		238	2012085
205	42	92	瓦	平瓦	SD183　北半		長さ 13.0	幅 12.25	厚さ 2.6		灰	良好	0.5 ～ 2㎜程度の粗砂（石英、長石）多く含む	外面：布目 内面：縄目、ナデ		320	2012085
206	42		土師器	甕	SR185　南半	14.4	9.7			口縁部若干	黒褐	良好	径2 ～ 10㎜の礫少量含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部付着物が多く不明 内面：口縁部ヨコナデ、体部付着物が多く不明		313	2012085
207	42	92	須恵器	杯A	SR185　下層	13.0	3.63		9.5	口縁部1/4、底部1/3	灰白～黄灰	不良	極細砂、中量含む	外面：口縁部から体部回転ナデ、底部回転ヘラ切りの後ナデ 内面：回転ナデ		311	2012085
208	42	92	須恵器	甕（台付）	SR185　南3区		8.9	9.5		口縁部、高台を欠く	灰～暗灰	良好	極細砂、少量含む	外面：体部上半、回転ナデ、中央部は沈線で上下を区画し、クシ刺突、下半は回転ナデ、高台貼り付け 内面：体部回転ナデ	穿孔部の粘土塊が内部に残存、結果として土鈴状になる。	312	2012085
209	42		縄文土器		SD06　サブトレ					小片	にぶい黄橙		粗砂を大量に含む	沈線		6	2009225
210	42		縄文土器	浅鉢	褐灰色土		2.7			口縁部小片	褐		粗砂を多量に含む	外面：沈線 内面：条痕		16	2009225
211	42		土師器	壺	Ⅰ区　遺構面上	21.4	7.3			口縁部1/6	灰黄褐～にぶい黄橙		径3㎜以下の粗砂を多く含む	外面：縦方向のハケの後、ヨコナデ 内面：ヨコナデ		35	2009225
212	42		弥生土器	壺	暗緑灰色シルト中		4.7		11.3	底部1/3強	にぶい橙～橙		径7㎜以下の粗砂を多く含む	外面：縦方向のハケ 内面：ナデ？		37	2009225
213	42		弥生土器	甕	Ⅰ区　褐灰色土	15.4	5.5			口縁部小片	にぶい橙～橙		粗砂を少量含む	摩耗により調整不明		23	2009225
214	42		土師器	高坏	Ⅲ区　下層水田まで	12.8	5.4			口縁部	橙～淡橙		径2㎜以下の粗砂を多く含む	摩耗により調整不明、坏部底に穿孔（残存1か所）		31	2009225
215	42	92	土師器	高坏	流路		8.4		12.4	脚柱部、脚裾部1/4	にぶい橙～橙		極細砂～細砂を多く含む	外面：脚柱部は横方向の荒いハケの後縦方向の幅広いヘラミガキ、脚裾部はヨコナデ 内面：脚柱部にシボリ痕、脚裾との境界にヘラケズリ、ヨコナデ	Ⅰ区　東トレンチ南半	53	2009225
216	42		須恵器	杯H蓋	Ⅲ区　下層水田直上まで	12.9	3.7			口縁部1/7	灰	普通	径2㎜以下の粗砂を含む	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ		30	2009225
217	42	93	須恵器	杯H蓋	Ⅲ区　黄灰色粗砂	12.6	4.2			ほぼ完形	灰	普通	径5㎜以下の粗砂～極細砂を含む	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ。天井部にヘラ記号 内面：回転ナデ、天井部一方向のナデ		7	2009225
218	42		須恵器	杯H身	Ⅲ区　下層水田まで（黄色粗砂）	9.5	2.8	11.5	6.5	口縁部1/4、体部1/4	灰～灰白	やや良	径1㎜以下の粗砂を含む	外面：口縁部から体部は回転ナデ、底部はヘラ切り未調整 内面：回転ナデ		28	2009225
219	42		須恵器	杯H身	Ⅲ区　下層（粗砂）	11.75	2.95	14.0		口縁部から底部1/9	灰	普通	極細砂～細砂を少量含む	外面：底部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ 内面：回転ナデ		12	2009225
220	42		須恵器	杯H身	Ⅱ区　第1面ベース	9.45	3.25	11.3		口縁部から底部1/2	灰白	普通	極細砂を少量含む	外面：口縁部から体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリの後ナデ 内面：見込み部ナデ、口縁部から体部回転ナデ		8	2009225
221	42		土師器	高坏	Ⅲ区　下層（粗砂）	14.9	3.4			口縁部小片	灰白		粗砂を少量含む	外面：口縁端部ヨコナデ、体部は指オサエの後ナデ 内面：ヨコナデ		21	2009225
222	42		土師器	皿	Ⅲ区　下層水田直上まで	12.6	2.0			1/4弱	灰白～浅黄橙		径1.5㎜以下の粗砂を含む	外面：口縁端部ヨコナデ、体部ナデ 内面：ヨコナデ		34	2009225
223	42		須恵器	杯A	側溝、下層包含層	10.4	3.3		7.1	1/2弱	灰	良好	径1㎜以下の砂粒（長石など）若干含む	外面：口縁部回転ナデ、体部下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り 内面：回転ナデ		354	2012085
224	42		須恵器	杯B蓋	包含層	14.2	1.45			口縁部1/5強	灰白	普通	粗砂を少量含む	外面:天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ内面:天井部多方向ナデ、口縁部回転ナデ		17	2009225
225	42		須恵器	杯B蓋	褐灰色土	13.8	1.25			口縁部小片	灰	普通	極細砂を多く含む	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ		15	2009225
226	42		須恵器	杯B身	Ⅲ区　下層（暗灰シルト）		1.6		9.0	底部1/3強	灰白	普通	極細砂を少量含む	外面：底部は回転ヘラ切りの後ナデ、体部は回転ナデ、高台貼り付け 内面：見込み部ナデ、他は回転ナデ	転用硯か？	11	2009225
227	42		須恵器	杯B身	褐灰色土		1.5		7.5	底部1/4弱	灰	普通		外面：底部回転ヘラ切りの後、高台貼り付け 内面：見込み部ナデ、他は回転ナデ		14	2009225

出土土器一覧表９

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土遺構	法量（cm）				残存状況	色調	焼成	胎土	調整	備考	実測番号	調査番号
						口径	器高	最大径	底径								
228	42		須恵器	杯B身	褐灰色土		2.5		7.1	底部のみ完存	灰白	普通	粗砂を少量含む	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切りの後ナデ、高台貼り付け 内面：回転ナデ		9	2009225
229	43		土師器	製塩土器（鉢）	Ⅰ区下層　流路（灰色粗砂）	17.2	7.0			口縁部1/9	灰黄褐～にぶい黄橙		径3㎜以下の粗砂を多く含む	外面：指オサエの後、指ナデ 内面：指オサエの後、指ナデ		33	2009225
230	43		土師器	製塩土器（鉢）	水田面上の砂層	15.5	4.9	17.0		1/3弱	にぶい黄橙～橙	良	径1㎜以下の石英、チャート、長石をやや多く含む。	外面：ナデ 内面：ナデ		112	2011185
231	43		須恵器	甕	褐灰色土	19.2	3.1			口縁部小片	灰	普通	粗砂～極細砂を少量含む	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ		10	2009225
232	43		須恵器	壺	Ⅲ区　包含層	19.6	7.6			口縁部から頸部1/4	灰	普通	細砂を少量含む	外面：口縁部回転ナデ、体部はタタキの後カキ目 内面：口縁部回転ナデ、体部頸部下に当て具痕跡	外面に自然釉付着	22	2009225
233	43		黒色土器	椀	褐灰色土		2.35		7.25	底部1/2	にぶい黄橙		細砂を少量含む	外面：回転ヘラケズリの後ナデ 内面：多方向のナデ、炭素沈着		13	2009225
234	43	93	土製品	土馬	Ⅰ区　緑灰色粘土		6.75	3.55		脚部のみ	灰黄～にぶい黄		粗砂を多量に含む	外面：ヘラケズリとナデ。孔は貫通している		24	2009225
235	43	93	土製品	土馬	Ⅰ区　第1面		8.1	3.5	3.5	脚部のみ	橙～灰白		径4㎜以下の粗砂を多く含む	外面：ヘラケズリとナデ。上下から穿孔、孔は貫通していない		38	2009225
236	43	94	弥生土器	鉢	深堀トレンチ　東端	47.5	31.75		13.0	口縁部1/4、体部1/2、底部完存	にぶい黄橙～橙	良	径6㎜以下の石英、長石、チャート、赤色粒を多く含む	外面：口縁部直下指オサエ、体部上半摩滅（ハケか）、下半は縦方向のハケ、底部側面横方向のミガキの後ナデ 内面：摩滅	把手付き	371	2012085
237	43	94	弥生土器	甕	旧河道 サブトレンチ東側		6.65			若干	にぶい黄橙	良好	0.5 ～ 2㎜程度の粗砂（石英、長石）多く含む	外面：ナデ、ヘラ描き沈線 内面：ナデ		322	2012085
238	43	94	須恵器	杯H蓋	下層水田被覆粗砂層	15.3	4.2			約1/2	灰	良好	径2.5㎜以下の砂粒（石英・長石）少し含む	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	内面口縁部直上に段を持つ	350	2012085
239	43	94	須恵器	杯H身	旧河道上部	12.0	3.7		8.0	約1/4	灰	良好	細砂含む	外面：口縁部から体部回転ナデ、底部ヘラ切り 内面：回転ナデ		321	2012085
240	43		須恵器	杯H身	下層包含層	11.8	3.2	14.2		約1/4	灰白	良好	径1.5㎜以下の石英少量含む	外面：口縁部から受け部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部一方向の仕上げナデ		351	2012085
241	44	94	土師器	椀	№1 ～№1+4 側溝掘削	12.3	5.75		5.7	口縁部若干欠損	褐灰～橙	良好	径1.5㎜以下の石英、長石、チャートを多く含む	外面：口縁部ヨコナデ、体部摩滅のため調整不明、底部回転ヘラ切り？ 内面：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	二次焼成、製塩用？	365	2012085
242	44		土師器	羽釜	上面遺構面精査		4.8	27.8		体部破片	橙～にぶい黄橙	良好	径2.5㎜以下の石英、長石、チャートを多く含む	外面：ナデ、ハケ 内面：ハケ、ナデ		363	2012085
243	44		土師器	羽釜	SK149		2.0	19.2		鍔部若干	橙～灰黄褐	良好	6㎜以下の粗砂・細礫（長石、石英）多量に含む	外面：鍔部ヨコナデ 内面：ナデ		329	2012085
244	44		須恵器	杯B身	北側側溝	16.9	5.05		11.8	口縁部若干、底部1/2弱	灰	良好	径1㎜以下の石英、長石、微量含む	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り、高台貼り付け 内面：回転ナデ		368	2012085
245	44		須恵器	杯B蓋	下層包含層	15.15	2.5			約1/4	灰白～暗灰	不良	径1.5㎜以下の石英・チャート若干含む	外面：天井部回転ヘラ切りの後回転ナデ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	口縁部に重ね焼きの痕跡	353	2012085
246	44		須恵器	壺	下層包含層（調査区南半）		4.7		7.7	底部のみ完存	灰	良好	径2㎜以下の石英・長石少し含む	外面：体部回転ヘラケズリと回転ナデ、底部回転ヘラ切りの後回転ナデ、高台貼り付け 内面：強い回転ナデ		352	2012085
247	44	95	須恵器	甕	北側　側溝	41.2	7.7			口縁部1/5	灰～灰白	良好	0.5 ～ 3㎜程度の粗砂・細礫（石英、長石）含む	外面：口縁部回転ナデ、体部タタキの後カキ目 内面：口縁部回転ナデ、頸部下回転ナデ、体部当て具痕跡		323	2012085
248	44	95	土師器	小皿	上面遺構面精査	7.7	1.3		6.45	約3/4	浅黄橙～にぶい橙	良好	径0.1㎜以下の赤色粒多く含む	外面：口縁部ヨコナデ、底部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、底部ナデ		362	2012085
249	44	95	土師器	小皿	上面遺構面精査	8.0	1.4		6.8	口縁1/4、底部1/2	浅黄～にぶい橙	良好	径0.2㎜の石英、チャートを少量含む	外面：口縁部ヨコナデ、底部指オサエの後ナデ 内面：ヨコナデ		361	2012085
250	44	95	土師器	小皿	上面遺構面精査	8.45	1.3		5.7	口縁部1/3、底部完存	にぶい黄橙～褐灰	良好	径1㎜以下の石英、赤色粒少量と、径3㎜チャート含む	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ		359	2012085
251	44	95	土師器	小皿	上面遺構面精査　東南隅	8.5	1.7		6.6	口縁部3/7、底部1/2	にぶい黄橙～にぶい橙	良好	径0.5 ～ 1㎜の石英、長石、赤色粒含む	外面：口縁部～体部摩滅のため調整不明、底部回転ヘラ切り 内面：摩滅のため調整不明		355	2012085
252	44	95	瓦器	椀	上面遺構面精査	14.0	4.4		4.5	口縁部1/5、底部完存	黄灰～黒褐	やや不良	微砂混じり	外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部は指オサエの後ナデ、高台貼り付け 内面：口縁部ヨコナデ、体部はナデ、暗文		358	2012085
253	44	94	須恵器	椀	上面遺構面精査　東南隅	14.5	5.0			口縁部1/6	灰白	良好	径0.5 ～ 2㎜の石英、長石含む	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口縁部に重ね焼きの痕跡	356	2012085
254	44	94	白磁	碗	機械掘削	16.7	2.8			口縁部1/8	灰白	良好	微砂混じり	内外面とも施釉		366	2012085
255	44	94	白磁	碗	機械掘削		2.1		7.2	底部1/2	灰白	良好	砂粒ほとんどなし	外面：体部高台境界露胎、高台ケズリ出し。高台露胎 内面：施釉		367	2012085
256	44	94	白磁	碗	上面遺構面精査		3.3		5.8	底部1/2	白～灰白	良好	0.5㎜前後の砂粒わずかに含む	外面：体部施釉、高台ケズリ出し。高台露胎 内面：施釉		364	2012085
257	44	94	施釉陶器	皿	上面遺構面精査		1.5		4.0	底部1/3	浅黄	良好	細砂含む	外面：施釉、高台ケズリ出し、畳み付け露胎 内面：施釉、目跡		357	2012085
258	44	95	土製品	土錘	上面遺構面精査	3.0	5.8	5.2		約2/3	灰	良好	径1.5㎜以下の石英、長石、チャートを中量含む	外面：ナデ 内面：不調整		360	2012085

出土石器一覧表

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土遺構	法量（mm,g）				備考	調査番号	実測番号
						長さ	幅	厚さ	重量			
S1	45	96	石器	石鏃	包含層	18.0	18.4	3.3	1.0		159	2011185
S2	45	96	石器	被熱礫	旧河道1　北東半	47.8	66.5	38.0	147.9		160	2011185
S3	45	96	石製品	円礫	機械掘削	84.5	77.5	76.5	634.9	赤化、被熱か	369	2012085

出土金属器一覧表

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土遺構	法量（mm,g）				備考	調査番号	実測番号
						長さ	幅	厚さ	重量			
M1	45	96	銅製品	鏡	上層遺構面精査	面径 40.0	面厚 3.0	紐高 2.5	15.2		鉄 1	2011185
M2	45	96	鉄製品	鉄砲玉	包含層		直径 10.7		7.1		鉄 2	2011185
M3	45	96	鉄製品	釘	上層遺構面精査	長さ 51.5	幅 6.5	厚さ 6.0	2.1		鉄 3	2012085

出土木器一覧表１

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	出土遺構	法量（cm）						残存	木取り	分析番号		樹種	備考
					口径・蓋径	器高	底径	長さ	幅	厚さ			2011185	2012085		
W1	46	97	祭祀具	旧河道1　北半				28.6	4.7	0.7	頭部+体部上半	板目		6	モミ属	墨書あり
W2	46	97	祭祀具	旧河道1　北半				11.3	4.5	0.7	頭部	板目		8	モミ属	
W3	46	97	祭祀具	旧河道1　南西半				43.8	4.2	0.7	頭部+体部	板目	18		モミ属	墨書あり
W4	46	97	祭祀具	旧河道1　南西半				10.5	4.6	0.6	頭部	板目	5		モミ属	
W5	46	97	祭祀具	旧河道1　北半				50.2	5.3	1.1	頭部+体部	板目		4	モミ属	
W6	46	97	祭祀具	旧河道1　北半				42.8	3.8	0.5	頭部+体部+脚部	板目		9	モミ属	
W7	46	97	祭祀具	旧河道1　南西半				23.5	4.3	0.8	頭部+体部上半	板目	39		モミ属	
W8	46	98	祭祀具	旧河道1　東肩				74.8	5.7	1.1	ほぼ残存(手のみ欠損)	板目	28		モミ属	墨書あり
W9	46	98	祭祀具	旧河道1　あぜ下				7.4	4.1	0.4	頭部の一部	板目				墨書あり
W10	46	98	祭祀具	旧河道1　北半				37.1	4.1	0.7	頭部+体部+脚部の一部	板目		5	モミ属	墨書あり
W11	46	98	祭祀具	旧河道1　北半				21.1	4.3	0.5	頭部+体部上半	板目		7	ヒノキ	
W12	47	99	祭祀具	旧河道1				9.5	3.2	0.2	頭部～肩部の一部	板目		2	ヒノキ	墨書あり W13と同一個体の可能性あり
W13	47	99	祭祀具	旧河道1　南半				11.5	8.5	0.3	体部の一部 2箇所穿孔 一方の孔には有機物？が詰まる	板目				下端は斜めに切り込みを入れたあと折っている墨書あり W12と同一個体の可能性あり
W14	47	99	祭祀具	旧河道1　南西半				21.5	4.9	0.9	頭部+体部	板目	4		モミ属	
W15	47	99	祭祀具	旧河道1				18.0	5.7	1.3	頭部下半+体部上半	板目	3		モミ属	
W16	47	99	祭祀具	旧河道1　東肩				57.1	3.9	0.9	頭部+体部+脚部上半	板目	29		モミ属	
W17	47	99	祭祀具	旧河道1　東肩				43.0	3.3	0.3	ほぼ残存(手のみ欠損)	板目	30		ヒノキ	墨書あり
W18	47	99	祭祀具	旧河道1				38.7	4.6	0.9	頭部+体部+脚部の一部	柾目	46		スギ	未製品か
W19	47	99	祭祀具	旧河道1　北半				21.5	3.7	0.5	体部の一部+脚部の一部	板目				墨書あり
W20	47	99	祭祀具	旧河道1				7.9	3.7	0.5	体部上半	板目	8		ヒノキ	
W21	47	99	祭祀具	旧河道1				14.5	4.8	0.6	体部上半	板目				
W22	47	99	祭祀具	旧河道1　南半				28.4	4.5	0.3	体部下半+脚部の一部	柾目				墨書あり
W23	47	99	祭祀具	旧河道1　南半				10.7	1.8	0.2	体部？	柾目				
W24	47	99	祭祀具	旧河道1　南半				12.8	1.4	0.3	脚部？	柾目				
W25	47	99	祭祀具	旧河道1　あぜ下				38.8	6.2	0.7	体部（手は欠損）	板目		12	モミ属	
W26	47	99	祭祀具	旧河道1　南西半				7.4	1.4	0.5	脚部の一部？	板目	17		モミ属	
W27	47	99	祭祀具	旧河道1				16.3	1.3	0.9	脚部の一部？ 全周割れ	板目				
W28	48	100		旧河道1				13.3	1.9	0.4		板目				下端斜めに加工
W29	48	100	木簡？	旧河道1				7.6	2.0	0.5	1箇所孔あり	柾目				上端切断か
W30	48	100		旧河道1　あぜ下				9.0	2.4	0.7		板目				
W31	48			旧河道1				9.3	1.9	0.7		板目				
W32	48		祭祀具？	旧河道1・旧河道2付近				8.3	2.3	0.6	下端折れ	柾目			針葉樹	
W33	48	100		旧河道1　南西半				12.7	3.3	0.9	全周折れ	板目	14		モミ属	
W34	48			旧河道1　南半				14.0	1.5	1.0		板目				
W35	48	100		旧河道1　南西半				13.0	2.4	0.7		板目				
W36	48	100		旧河道1　あぜ				14.3	4.0	0.5		板目				
W37	48			旧河道1　南半				10.9	3.8	0.8		板目			針葉樹	表面に加工痕
W38	48			旧河道1　南半				7.0	2.2	0.5		板目			針葉樹	切り込みあり
W39	48	100		旧河道1　南西半				17.2	2.5	0.8		板目	15		ヒノキ	両面とも多数の刃物痕あり
W40	48	100	木簡	旧河道1　北半				14.7	4.2	0.45～0.5	２箇所孔あり　１箇所のみ貫通	板目				中央で切り込みを入れ折っている 格子状に墨書あり
W41	48	100	容器	旧河道1　南半	(21.0)	1.5	19.7	20.7	10.7		1/2強	柾目		11	ヒノキ	焦げ跡あり 両面とも刃物痕多数あり
W42	48	100	容器	旧河道1　南半		1.5		18.5	10.9		1/2弱	柾目		10	ヒノキ	両面とも刃物痕多数あり

出木土器一覧表２

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	出土遺構	法量（cm）						残存	木取り	分析番号		樹種	備考
					口径・蓋径	器高	底径	長さ	幅	厚さ			2011185	2012085		
W43	48	100	容器	旧河道1	(19.8)	1.4	(17.2)				1/2（口縁部はわずかに残存） 中央に方形の孔 周辺に６箇所円形の孔あり	柾目	12		ヒノキ	皿を再利用したもの
W44	48	100	容器	旧河道1　南西半				16.5	9.2	0.6	1/5程度	柾目				
W45	49	101	容器	旧河道1　南西半	17.4					0.4	1/3程度 とじ皮残存	板目	32		ヒノキ	同一個体
W45	49	101	容器	旧河道1　南西半				15.7	9.9	0.4	側板の皮留めのある部分	板目	33		ヒノキ	同一個体 内面黒色塗布あり
W46	49	101	容器	旧河道1　南西半	(20.0)					0.9	1/4	柾目	42		ヒノキ	
W47	49	101	容器	旧河道1　南西半	19.5			17.8	12.8	0.5	1/2	柾目		1	ヒノキ	焦げ跡あり
W48	49	101	容器	旧河道1				14.9	4.8	0.4		板目	45		ヒノキ	同一個体
W48	49	101	容器	旧河道1				14.5	4.9	0.3	とじ皮残存	板目				同一個体
W49	49	101	容器	旧河道1				46.3	8.3	1.2	３箇所とじ皮残存 他にも破片あり	板目	44		ヒノキ	
W50	50	102		旧河道1　南西半				9.9	5.2	0.2	２箇所孔あり	板目	20		ヒノキ科	
W51	50	102		旧河道1　南西半				8.8	5.6	0.5		柾目				
W52	50	102		旧河道1				9.6	3.7	0.6		柾目				
W53	50	102	容器	旧河道1　北東				6.8	3.0	0.5		柾目	11		ヒノキ	
W54	50	102	容器	旧河道1　北東				2.9	2.2	0.5		板目				
W55	50	102	容器	旧河道1　北東				16.2	5.0	0.7	底(?)板の一部	柾目	10		ヒノキ	
W56	50	102		旧河道1				13.2	1.8	1.5		分割棒状	9		ヒノキ	
W57	50	102		旧河道1　南西半				11.5	2.5	1.3		分割材	34		モミ属	下端表裏から加工しているか
W58	50	102		旧河道1　南西半				4.1	2.9	0.6		柾目				下部斜めに加工
W59	50	102		旧河道1　南西半				4.9	1.5	1.0	全周折れ	柾目				
W60	50	102		旧河道1				24.6	1.1	0.9		板目				下端は斜めに数回加工
W61	50	102		旧河道1　南半				38.0	2.3	2.0		心持丸木				樹皮を剥いで平滑に仕上げる 頭部に抉りを入れて球状に仕上げる
W62	50			旧河道1　南半（東）				20.4	3.9	1.3		板目				
W63	50			旧河道1・旧河道2				25.6	2.5	1.0	上方に孔１箇所 下方に孔２箇所（もう１箇所？）あり	板目				下端は斜めに加工
W64	50	102		旧河道1　南西半				32.9	6.1	1.3		板目	41		モミ属	
W65	50	102	祭祀具？	旧河道1　南西半				22.7	5.1	1.0		板目	19		モミ属	下端は斜めに加工か
W66	50	102		旧河道1				17.7	1.4	1.1		柾目				焦げ跡あり
W67	50	102	容器	旧河道1		11.2		79.2	35.4	3.6		板目	36		クスノキ	
W68	51	103		旧河道1　南西半				17.9	5.9	1.9	1箇所長方形の孔あり（貫通している）	板目	40		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	両面に加工痕
W69	51	103		旧河道1				21.1	4.3	2.0	全周ほぼ残存 1箇所方形の孔あり（貫通しない）	柾目		3	スギ	
W70	51	103	土木材	旧河道1　南西半				13.8	2.5	2.6	頭部欠 樹皮残存	心持丸木	16		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
W71	51	103	土木材	旧河道1　南西半				26.2	6.2	5.9		心持丸木	37		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
W72	51	103	土木材	旧河道1　南西半				29.8	6.1	6.4	樹皮残存	心持丸木				
W73	51	103	土木材	旧河道1　南西半				25.0	9.3	8.0		心持丸木				
W74	51	103	土木材	旧河道1　南西半				37.0	6.9	6.0		心持丸木				
W75	51		土木材	旧河道1				54.5	3.8	3.3	樹皮残存	心持丸木				下端を斜め切り
W76	51	103	土木材	旧河道1　南西半				107.6	6.9	6.8	樹皮残存	心持丸木				
W77	52		木簡	旧河道2　南3区				8.1	0.9	0.3	上下両端折れ 左右両辺割れ	板目				墨書あり

出土木器一覧表３

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	出土遺構	法量（cm）						残存	木取り	分析番号		樹種	備考
					口径・蓋径	器高	底径	長さ	幅	厚さ			2011185	2012085		
W78	52		木簡	旧河道2　南3区				13.2	2.4	0.2	上端折れ 下端削り 左右両辺割り	柾目		20	ヒノキ	墨書あり 斎串に転用
W79	52		木簡	旧河道2　南3区				23.2	1.1	0.3	上端折れ 下端削り 左右両辺割り 斎串としてはほぼ完形	柾目				墨書あり 斎串に転用
W80	53	104	祭祀具	旧河道2　西側				39.3	6.1 4.4	0.9 1.1	頭部+体部の一部	板目	22		モミ属	墨痕あり
W81	53	104	祭祀具	旧河道2				42.3	2.7	0.7	体部+脚部ごく一部(手は欠損)	柾目				
W82	53	104	祭祀具	旧河道2　南2区				12.6 17.6	3.2 4.1	0.3 0.3	頭部の一部　体部の一部	板目		16	ヒノキ	墨痕あり
W83	53	104	祭祀具	旧河道2　西側				9.9	4.3	0.5	頭部の一部	板目	21		モミ属	わずかに墨痕あり
W84	53	104	祭祀具	旧河道2　西側				9.3	1.6	0.5	体部の一部？	板目			モミ属	
W85	53	104	祭祀具	旧河道2　西側				9.5	1.8	0.4	体部の一部？	板目			モミ属	
W86	53	104	祭祀具	旧河道2　西側				7.5	1.9	0.5	体部の一部？	板目			モミ属	
W87	53	104	祭祀具	旧河道2　南側大型材 東側杭列脇				11.2	4.4	0.9	体部上半	板目	13		ヒノキ	
W88	53	104	祭祀具	旧河道2　西側				22.3	5.8	0.9	肩部+体部の一部	板目	26		モミ属	
W89	53	104	祭祀具	旧河道1・旧河道2交差部				15.7	1.7	2.6		ミカン割				一方の側面に加工痕あり 下端は斜めに加工
W90	53	104		旧河道2　西側				28.2	4.7	0.6		板目	23		モミ属	
W90	53	104		旧河道2　西側				12.1	2.7	0.5	１箇所孔か？	板目	24		モミ属	
W90	53	104		旧河道2　西側				8.5	2.3	0.5		板目	25		モミ属	
W91	53	104	祭祀具	旧河道2　南2区				19.5	2.9	1.1		板目				
W92	53	104	服飾具	旧河道2　西側				11.0	2.5	0.5	要の部分	板目	27		ヒノキ	
W93	53	104	祭祀具	旧河道1・旧河道2交差部				24.6	1.8	2.0		ミカン割	38		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	一方の側面に加工痕あり 下端は斜めに加工
W94	53	104	祭祀具	旧河道1・旧河道2交差部				10.2	1.6	2.3		ミカン割				下端は斜めに加工 中心部面取り
W95	54		祭祀具	旧河道3 南区東側				18.2	1.9	0.4		柾目				墨書あり？ ４本+10本の刻みあり
W96	54	105	祭祀具	旧河道3 南3区				29.9	0.8	0.2	ほぼ完形	柾目				２箇所切り込みありか
W97	54	105	祭祀具	旧河道3 杭列C				20.6	2.0	0.4		板目				下部は斜めに加工
W98	54	105		旧河道3 南3区				16.8	1.0	0.2		柾目				２箇所切り込みありか
W99	54	105	祭祀具	旧河道3 南3区				60.5	1.1	0.2	ほぼ完形	柾目		23	ヒノキ	
W100	54	105	祭祀具	旧河道3　南壁際				17.7	5.6	4.4	船尾の一部欠損	心持丸木	6		クスノキ科	
W101	54	105	容器	旧河道3 東岸南1区				17.3	5.1	0.5	1/4程度	板目		22	ヒノキ	外面刃物痕あり
W102	54		農具？	旧河道3 西岸南2区				24.2	6.5	2.4	1/3程度	板目				方形の孔あり
W103	55	106	祭祀具	旧河道2　南2区				12.5	2.1	0.3	上半（切り掛けは欠損）	板目				
W104	55	106	祭祀具	旧河道2　南2区				22.5	2.3	0.4	上半（切り掛けは欠損）	板目				
W105	55	106	祭祀具	旧河道2　南2区				38.5	2.2	0.2	切り掛け欠損	柾目				
W106	55	106	祭祀具	旧河道2　南2区				14.7	1.7	0.3	上半（切り掛けは欠損）	板目				
W107	55	106	祭祀具	旧河道2　あぜ				29.3	2.1	3.5	ほぼ完形	柾目				焼けたことにより上半の形状は不明瞭
W108	55	106	祭祀具	旧河道2　北半				16.1	3.9	0.4	下端	柾目		13	ヒノキ	下端は斜めに加工

出木土器一覧表４

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	出土遺構	法量（cm）						残存	木取り	分析番号		樹種	備考
					口径・蓋径	器高	底径	長さ	幅	厚さ			2011185	2012085		
W109	55	106	祭祀具	旧河道2　南3区				22.5	2.3	0.2	下半	柾目				下部は斜めに加工
W110	55	106	祭祀具	旧河道2　南2区				23.1	2.3	0.6	下半	板目				
W111	55	106		旧河道2				23.7	4.3	0.7	全周折れ	柾目				
W112	55			旧河道2				8.6	1.8	0.5		板目				
W113	55	106		旧河道2				24.9	3.4	0.9		板目	1		ヒノキ	上端は直線的に切断
W114	55	106	祭祀具	旧河道2　西側				29.7	1.6	0.6		板目	31		モミ属	
W115	55	106		旧河道2　西側				8.0	0.6	0.4		板目				
W116	55			旧河道2　南3区北側				12.0	1.3	0.9		柾目				
W117	55			旧河道2　北半				10.7	5.7	0.6		板目				
W118	55	106		旧河道2　南3区				29.2	1.6	0.9		柾目				
W119	55			旧河道2　南3区				18.3	1.1	0.7		ミカン割				下端は斜めに加工
W120	55	106		旧河道2				21.3	2.0	0.5		柾目	2		ヒノキ	上端は２方向から切断
W121	55	106		Ⅰ区　トレンチ				10.4	1.3	1.1	中心に孔あり	心持丸木				
W122	55	106	祭祀具？	Ⅰ区　旧河道 杭列中				31.8	1.4	1.2		板目				
W123	56			旧河道2 南3区北側				6.6	4.2	1.0		板目				
W124	56			旧河道2　北半				6.1	1.6	0.5		板目				
W125	56			旧河道2 南3区北側				8.6	2.4	1.0		板目				
W126	56			旧河道2　南2区				6.4	3.5	0.7		板目				
W127	56	107		旧河道2　南2区				19.7	2.8	1.5		ミカン割				樹皮あり
W128	56	107	祭祀具？	旧河道2　南2区				10.1	1.6	0.3	切り掛け欠損	柾目				線刻あり
W129	56	107		旧河道2　南側大型材東側杭列脇				5.2	3.0	0.5		柾目				
W130	56			旧河道2　南1区				7.7	4.5	0.8		板目			針葉樹？	両端削ぎ切り
W131	56	107		旧河道2　南側大型材東側杭列脇				11.2	3.0	0.7		柾目				
W132	56	107		旧河道2　南2区				6.8	2.9	0.4		柾目				先端を削って2次加工したもの
W133	56			旧河道2　南3区				23.6	1.2	1.1		板目				焦げ跡あり
W134	56			旧河道2　南2区				12.5	3.2	1.2		板目				焦げ跡あり
W135	56			旧河道2　北半				19.5	2.2	2.3		心持丸木				樹皮を剥いで平滑に仕上げている 樹皮下の虫害痕あり
W136	56			旧河道2 南3区北側				11.5	2.7	2.3		板目				
W137	56	107		旧河道2　南2区		3.2		23.1	3.4	0.8		柾目				上端は斜めに切断
W138	56	107		旧河道2				3.7	1.7	0.5	小片	柾目				
W139	56			旧河道2　南2区				10.1	1.7	1.5		柾目				
W140	56	107		旧河道2				6.8	1.8	0.6	小片	柾目				
W141	56	107	祭祀具	旧河道				23.0	2.3	1.2		ミカン割	7		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	上端は斜めに削ぐ
W142	57	108	容器	旧河道2　南2区				21.1	20.9	0.7	7/8 １箇所とじ皮残存	板目		14	ヒノキ	
W143	57	108	容器	旧河道2　南2区				15.1	15.8	0.8	わずかに欠損 ４箇所木釘穴残存 内２箇所木釘残存	板目		17	ヒノキ	内面わずかに加工痕あり
W144	57	108	容器？	旧河道2 南3区 杭列C内	30.8			30.8	19.8	1.2	2/3 18箇所孔あり 木釘穴5箇所残存	柾目		21	ヒノキ	曲物の底板を再利用したもの 両面とも加工痕が明瞭
W145	57	108	容器	旧河道2　南2区				20.8	3.4	0.5		板目		15	ヒノキ	

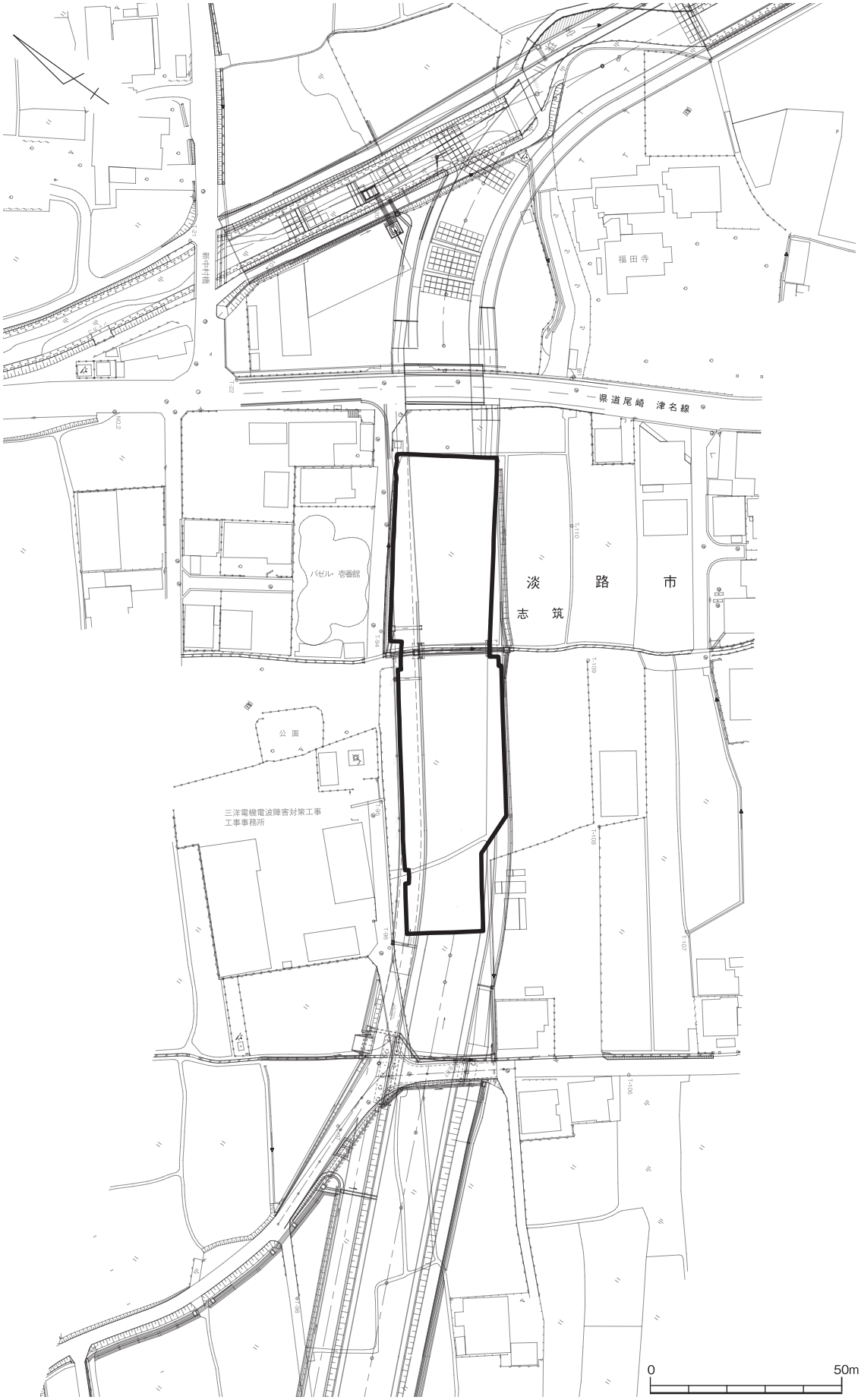
出土木器一覧表５

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	出土遺構	法量（cm）						残存	木取り	分析番号		樹種	備考
					口径・蓋径	器高	底径	長さ	幅	厚さ			2011185	2012085		
W146	57	108	容器	旧河道2		0.8		12.9	4.0			板目				焦げ跡あり
W147	57	108		旧河道2				31.3	12.4	0.9	2/5	板目	43		ヒノキ	加工痕あり
W148	58	109	土木材	旧河道2　杭①				48.9	6.3	4.7	ほぼ残存	心持丸木				上端一部加工 下端斜めに加工
W149	58	109		旧河道2				50.5	11.5	2.6	ほぼ残存	板目				全体に火を受けている
W150	58	109		旧河道2　東側				81.7	14.5	2.7		板目				樹皮に近い部位 上端は片面斜めに加工
W151	58	109		旧河道2　東側				197.5	23.0	3.9	長さは残存　長辺の片側一部欠損	板目	35		モミ属	
W152				旧河道2　南2区				91.0	23.0	3.5				19	マツ属複維管束亜属 実測なし	
W153				旧河道2 杭列A				81.0	9.0	9.0				24	シイ属 実測なし	
W154				旧河道2 杭列A				93.5	7.0	7.0				25	モミ属 実測なし	
W155				旧河道2 杭列A				45.5	4.3	3.7				26	モチノキ属 実測なし	
W156				旧河道2 杭列B				78.0	6.0	5.5				27	モミ属 実測なし	
W157				旧河道2 杭列B				31.0	5.0	4.5				28	コナラ属クヌギ節 実測なし	
W158				旧河道2 杭列C1				39.0	6.5	6.5				29	ハイノキ属 実測なし	
W159				旧河道2 杭列C				230.0	7.0	6.0				30	コナラ属クヌギ節 実測なし	
W160				旧河道2 杭列C				152.0	5.5	4.5				31	ヤマグワ 実測なし	
W161				旧河道2 杭列C				110.0	5.0	4.5				32	コナラ属クヌギ節 実測なし	
W162 W163				旧河道2 杭列C				453.0	12.0	12.0				33① 33②	①②ともマツ属複維管束亜属 実測なし	
W164				旧河道2 杭列C				12.0	24.0	16.7				34	ヤマグワ 実測なし	
W165				旧河道3 北半 杭列D				66.0	10.0	9.0				35	クリ 実測なし	
W166				旧河道3 杭列D				203.0	11.0	10.5				36	クリ 実測なし	
W167				旧河道3 杭列E				127.0	8.0	8.0				37	コナラ属クヌギ節 実測なし	
W168				旧河道3 杭列E				116.0	7.0	6.0				38	マツ属複維管束亜属 実測なし	
W169				旧河道3 杭列E				147.0	7.5	6.0				40	マツ属複維管束亜属 実測なし	

出木土器一覧表６

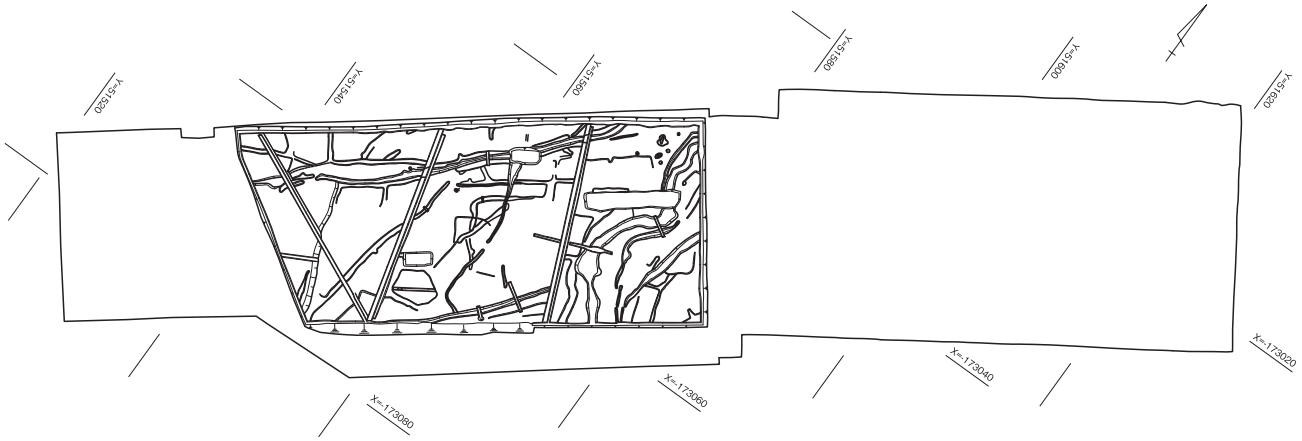
報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	出土遺構	法量（cm）						残存	木取り	分析番号		樹種	備考
					口径・蓋径	器高	底径	長さ	幅	厚さ			2011185	2012085		
W170				旧河道3 杭列E				224.0	10.0	9.0				39	コナラ属クヌギ節 実測なし	
W171				旧河道3 杭列E				100.0	5.0	4.0				41①	コナラ属クヌギ節 実測なし	
W172				旧河道3 杭列E										41②	広葉樹 実測なし	編物？網代？
W173				旧河道3 杭列E										41③	草本 実測なし	編物？網代？
W174				旧河道3 杭列F				96.0	5.0	5.0				42	シイ属 実測なし	
W175				旧河道3 杭列G				75.0	6.6	6.0				43	コナラ属クヌギ節 実測なし	
W176				旧河道3 杭列G				73.0	6.0	5.5				44	コナラ属コナラ節 実測なし	
W177				旧河道3 杭列G				170.0	7.0	6.0				45	ヌルデ 実測なし	
W178				旧河道3 杭列H				97.0	7.0	6.0				46	トネリコ属 実測なし	
W179				旧河道3 杭列I				97.0 23.0	8.0 4.5	7.0 3.0				47	クリ 実測なし	
W180				不明				198.0	10.0	10.0				48	カヤ 実測なし	
W181														49	株1サンプル ヤナギ属	
W182														50	根株5サンプル ヤナギ属	
W183														51	腐植体サンプル 広葉樹	
W183														51	腐植体サンプル 広葉樹	

図　版

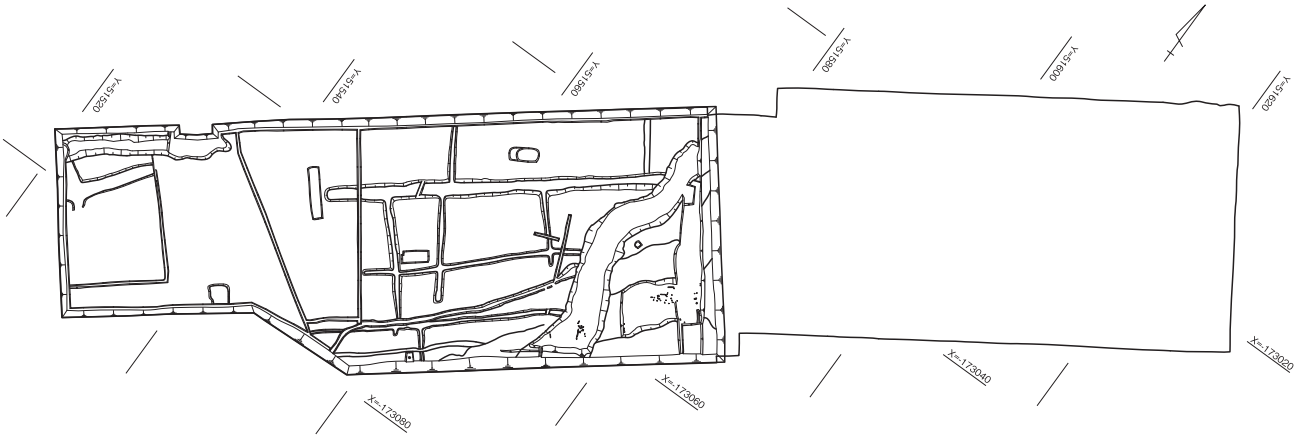


調査区位置図

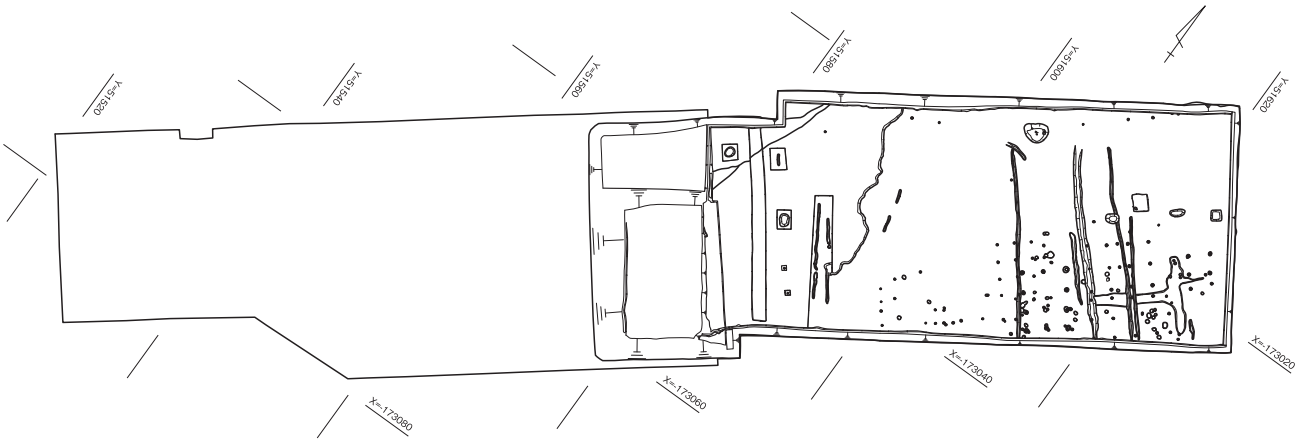
図版 2



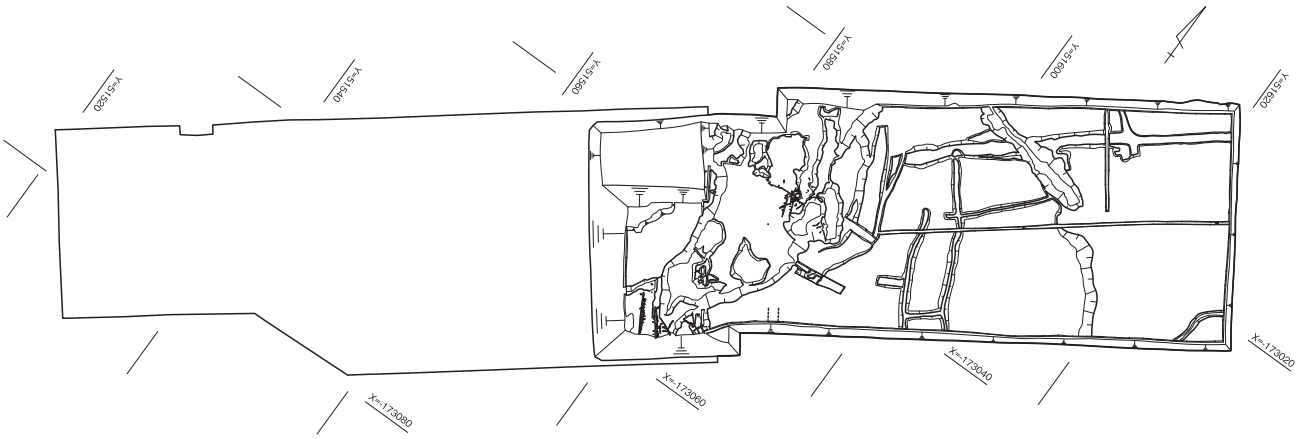
調査区西側上層水田面（2009 年度調査）



調査区西側下層水田面（2011 年度調査）



調査区東側上層遺構面（2012 年度調査）

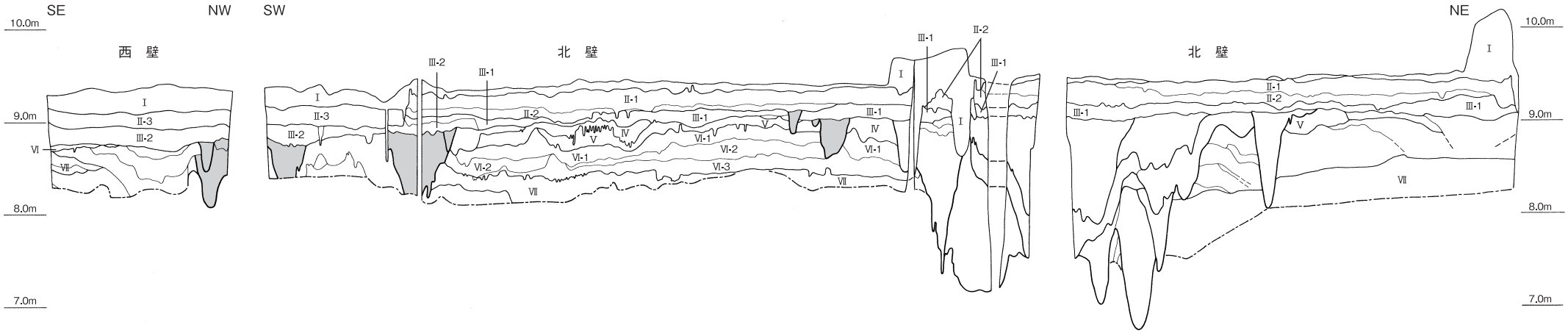


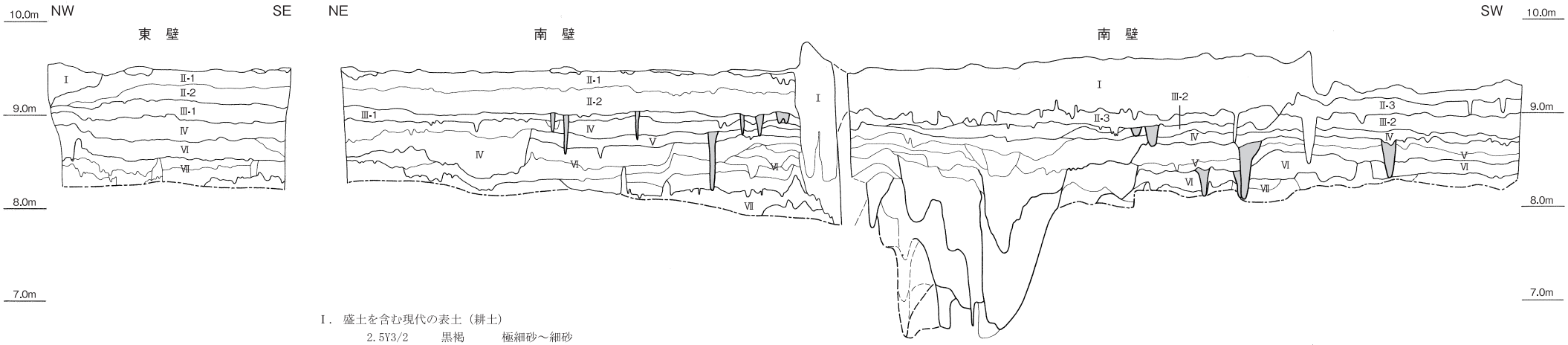
0　20m

調査区東側下層水田面（2012 年度調査）

各年度の調査区

調査区断面図（1）





Ⅰ．盛土を含む現代の表土（耕土）
　　2.5Y3/2　黒褐　極細砂～細砂

Ⅱ．近世～近代の耕土
Ⅱ-1　2.5Y5/3　黄褐　シルト質極細砂～2.5Y4/1　黄灰　極細砂
Ⅱ-2　2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト質極細砂～2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂
Ⅱ-3　2.5Y4/2　暗黄灰　シルト質極細砂～2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト

Ⅲ．中世の古土壌（遺物包含層）
Ⅲ-1　2.5Y4/1　黄灰　シルト混極細砂・細砂～10YR4/2　灰黄褐　細砂～粗砂
Ⅲ-2　2.5Y4/2　黄灰　シルト質極細砂～2.5Y4/3　オリーブ褐　シルト混極細砂

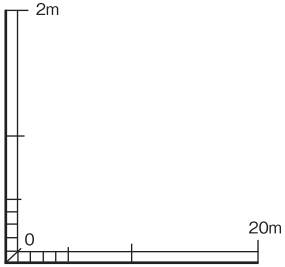
Ⅳ．洪水砂層
　　2.5Y4/3～4/4 オリーブ褐 シルト混極細砂～細砂　級化が見られる部分では、
　　下部はφ2cm以下の礫を含む粗砂～極粗砂となる
　　調査区北東部では、10YR4/2　灰黄褐　極細砂～粗砂
　　ないしは細礫を含むシルト混極細砂～細砂

Ⅴ．奈良時代の古土壌（上層水田）
　　10YR3/3 暗褐　シルト質極細砂　土壌化している

Ⅵ．洪水砂層
Ⅵ-1　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂
Ⅵ-2　10YR3/1 オリーブ黒　シルト～極細砂　一部に砂のブロック・レンズを挟む
Ⅵ-3　2.5Y5/4 黄褐　細砂～中砂

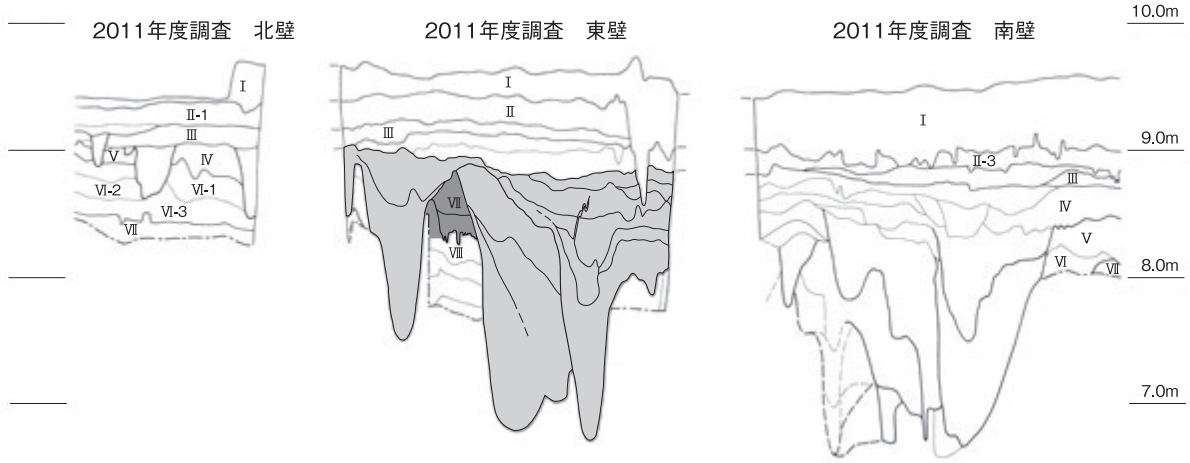
Ⅶ．飛鳥時代の古土壌（下層水田）
　　10YR4/1 褐灰～10YR3/2　黒褐　粘土～シルト質極細砂

Ⅷ．縄文時代晩期～弥生時代前期の古土壌（遺物包含層）
　　5Y3/2　オリーブ黒　砂質シルト～7.5Y3/2　オリーブ黒　シルト

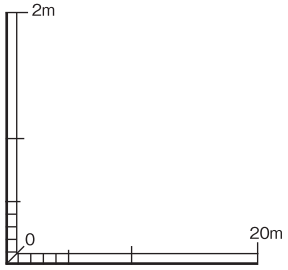


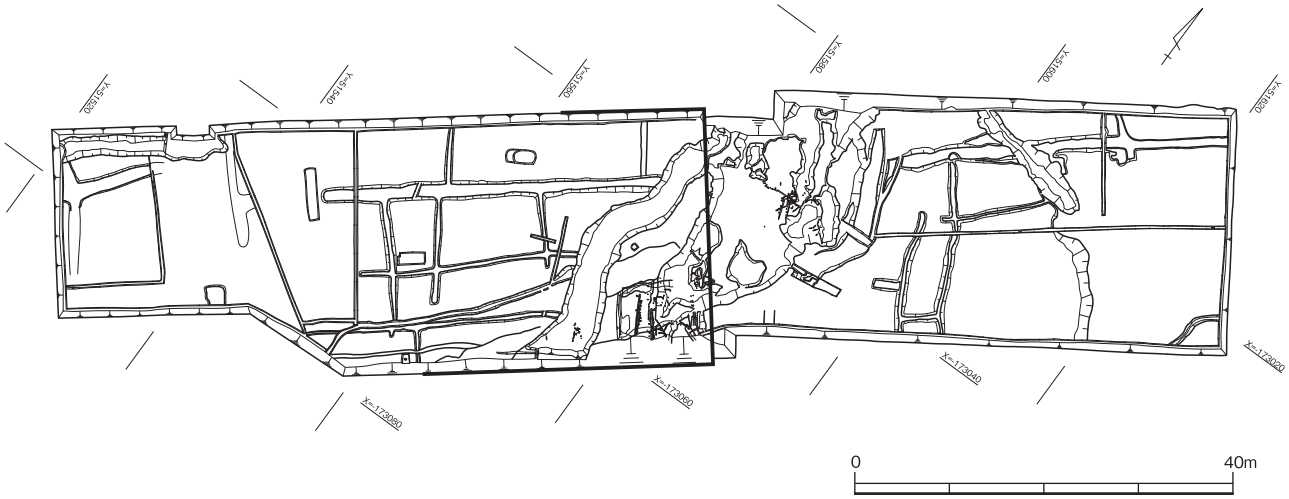
図版3

図版 4

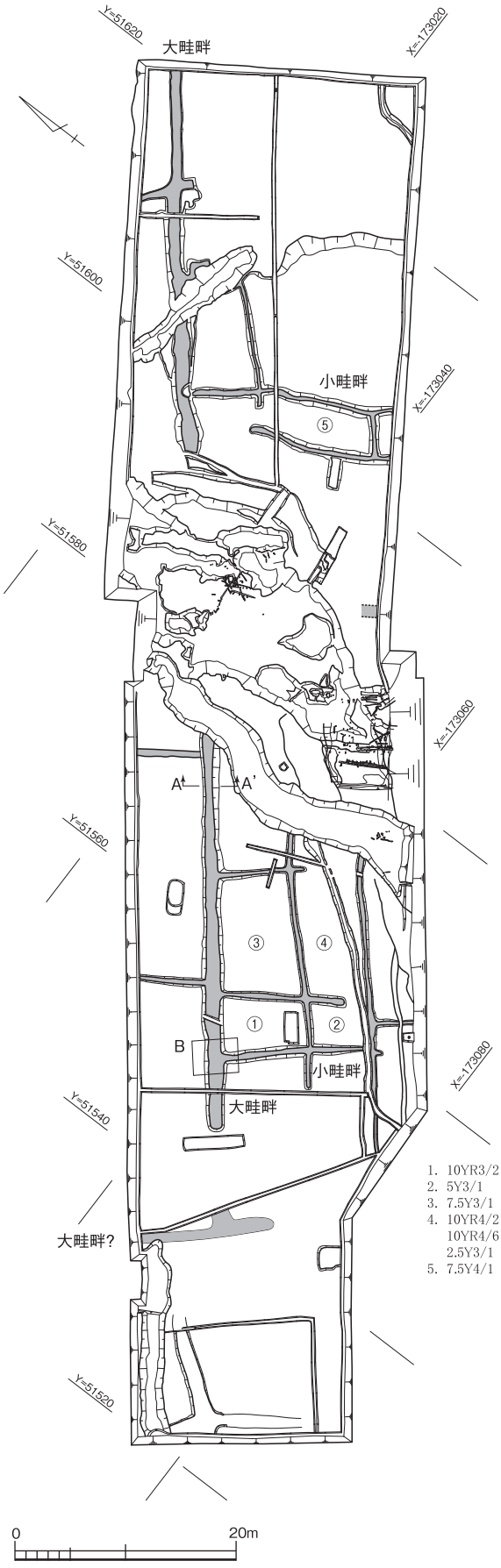


Ⅰ.　盛土を含む現代の表土(耕土)
　　2.5Y3/2　黒褐　極細砂～細砂
Ⅱ.　近世～近代の耕土
Ⅱ-1　2.5Y5/3　黄褐　　シルト質極細砂～2.5Y4/1　黄灰　極細砂
Ⅱ-3　2.5Y4/2　暗黄灰　シルト質極細砂～2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト
Ⅲ.　中世の古土壌(遺物包含層)
　　2.5Y4/1　黄灰　シルト混極細砂・細砂～10YR4/2　灰黄褐　細砂～粗砂
Ⅳ.　洪水砂層
　　2.5Y4/3～4/4　オリーブ褐　シルト混極細砂～細砂　級化が見られる部分では、
　　下部はφ2cm以下の礫を含む粗砂～極粗砂となる
　　調査区北東部では、10YR4/2　灰黄褐　極細砂～粗砂ないしは
　　細礫を含むシルト混極細砂～細砂
Ⅴ.　奈良時代の古土壌(上層水田)
　　10YR3/3　暗褐　シルト質極細砂　土壌化している
Ⅵ.　洪水砂層
Ⅵ-1　10YR5/3　にぶい黄褐　細砂
Ⅵ-2　10YR3/1　オリーブ黒　シルト～極細砂　一部に砂のブロック・レンズを挟む
Ⅵ-3　2.5Y5/4　黄褐　細砂～中砂
Ⅶ.　飛鳥時代の古土壌(下層水田)
　　10YR4/1　褐灰～10YR3/2　黒褐　粘土～シルト質極細砂
Ⅷ.　縄文時代晩期～弥生時代前期の古土壌(遺物包含層)
　　5Y3/2　オリーブ黒　砂質シルト～7.5Y3/2　オリーブ黒シルト

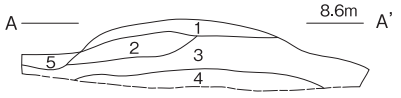




調査区断面図(2)

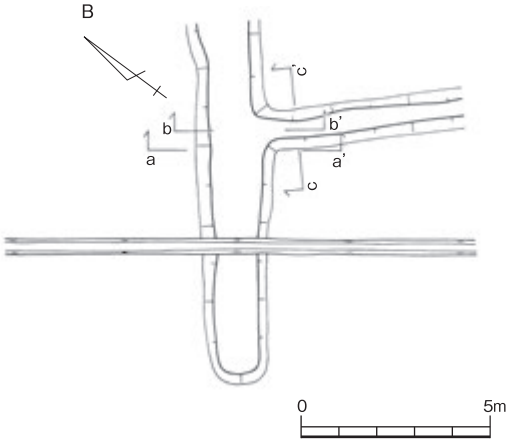


大畦畔東側

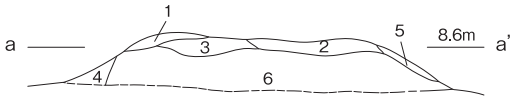


1. 2.5Y3/2　黒褐　砂質シルト　雨だれ状にFe
2. 10YR3/1　黒褐　粘土　粘性強い
3. 10YR3/1　黒褐　砂混り粘土　中～粗砂粒を含む
4. 10YR2/1　黒　砂質シルト～粘土　中～粗砂を多く 含む
5. 5Y3/2　オリーブ黒　シルト(水田耕土と考えられる)

0　1m



大畦畔西側

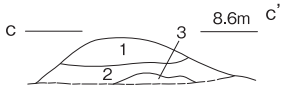


1. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂～細砂　土壌化している
2. 10YR3/2　黒褐　シルト～極細砂質シルト　土壌化している
3. 2.5Y3/2　黒褐　砂混りシルト　極細砂をレンズ状に挟む
4. 10YR3/2　黒褐　砂混りシルト　5Y4/1灰　細砂～中砂をブロック状に含む
5. 10Y4/1　灰　シルト　2.5Y5/4黄褐　極細砂～細砂をブロック状に含む
6. 7.5Y3/1　オリーブ黒　粘土　上部に雨だれ状のFe

大畦畔・小畦畔取りつき部

1. 10YR3/2　黒褐　シルト～極細砂質シルト　土壌化している
2. 5Y3/1　オリーブ黒　粘土　上部に雨だれ状のFe　一部に10GY4/1暗緑灰　粘土のブロックを含む
3. 7.5Y3/1　オリーブ黒　粘土　上部に雨だれ状のFe
4. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂～細砂　指頭大～拳大のブロック状　人為的盛土か
   10YR4/6　褐　中砂～粗砂　指頭大～拳大のブロック状　人為的盛土か
   2.5Y3/1　黒褐　シルト～極細砂　指頭大～拳大のブロック状　人為的盛土か
5. 7.5Y4/1　灰　粘土　5Y5/2灰オリーブ　細砂のレンズを挟む

小畦畔



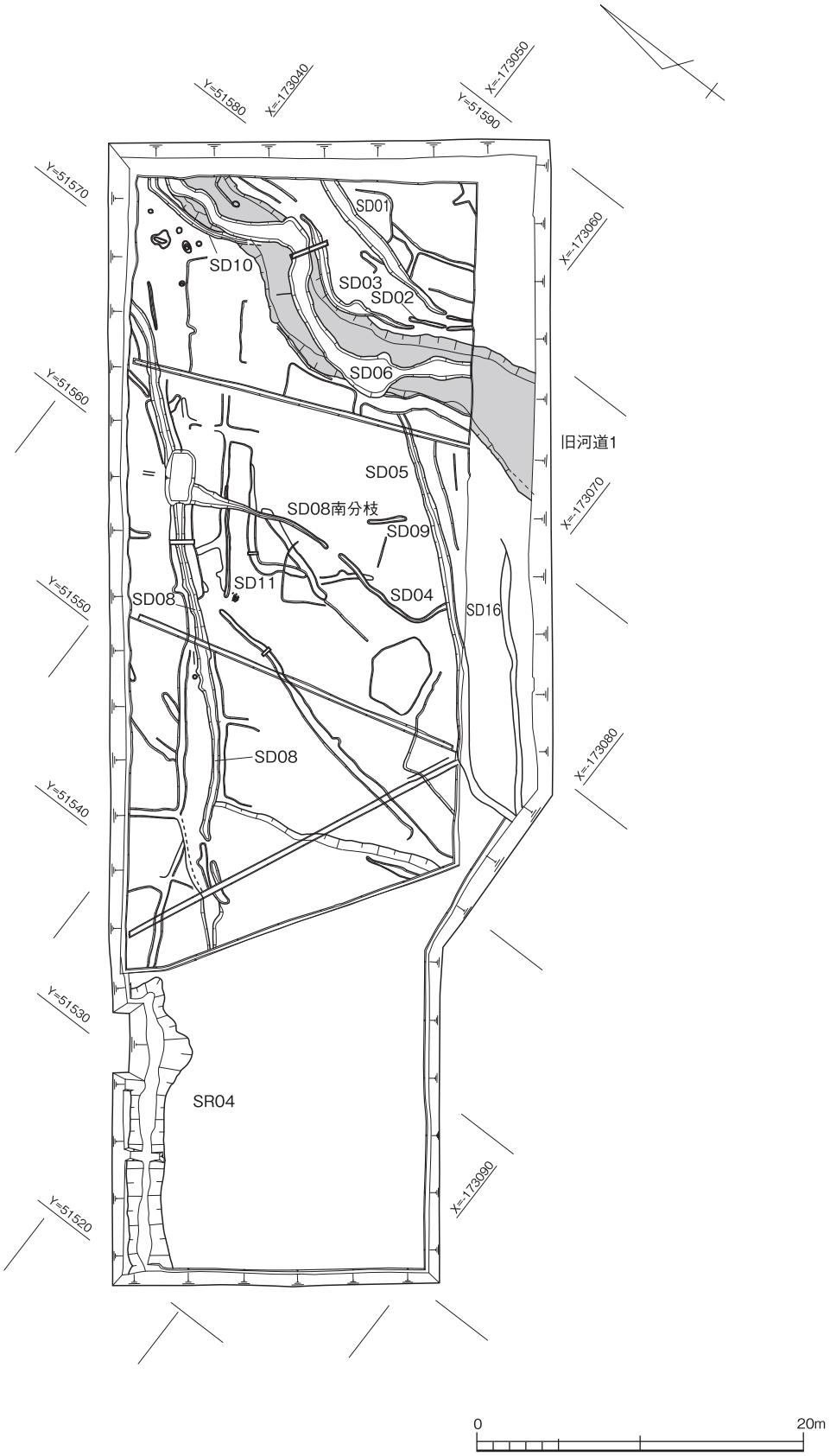
1. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂～細砂　指頭大～拳大のブロック状　人為的盛土か
   10YR4/6　褐　中砂～粗砂　指頭大～拳大のブロック状　人為的盛土か
   2.5Y3/1　黒褐　シルト～極細砂　指頭大～拳大のブロック状　人為的盛土か
2. 7.5Y4/1　灰　粘土　5Y5/2灰オリーブ　細砂のレンズを挟む
3. 2.5Y3/1　黒褐　粘土
   7.53/1　オリーブ黒　粘土　上部に雨だれ状のFe

0　1m

下層水田面平面図・畦畔断面図

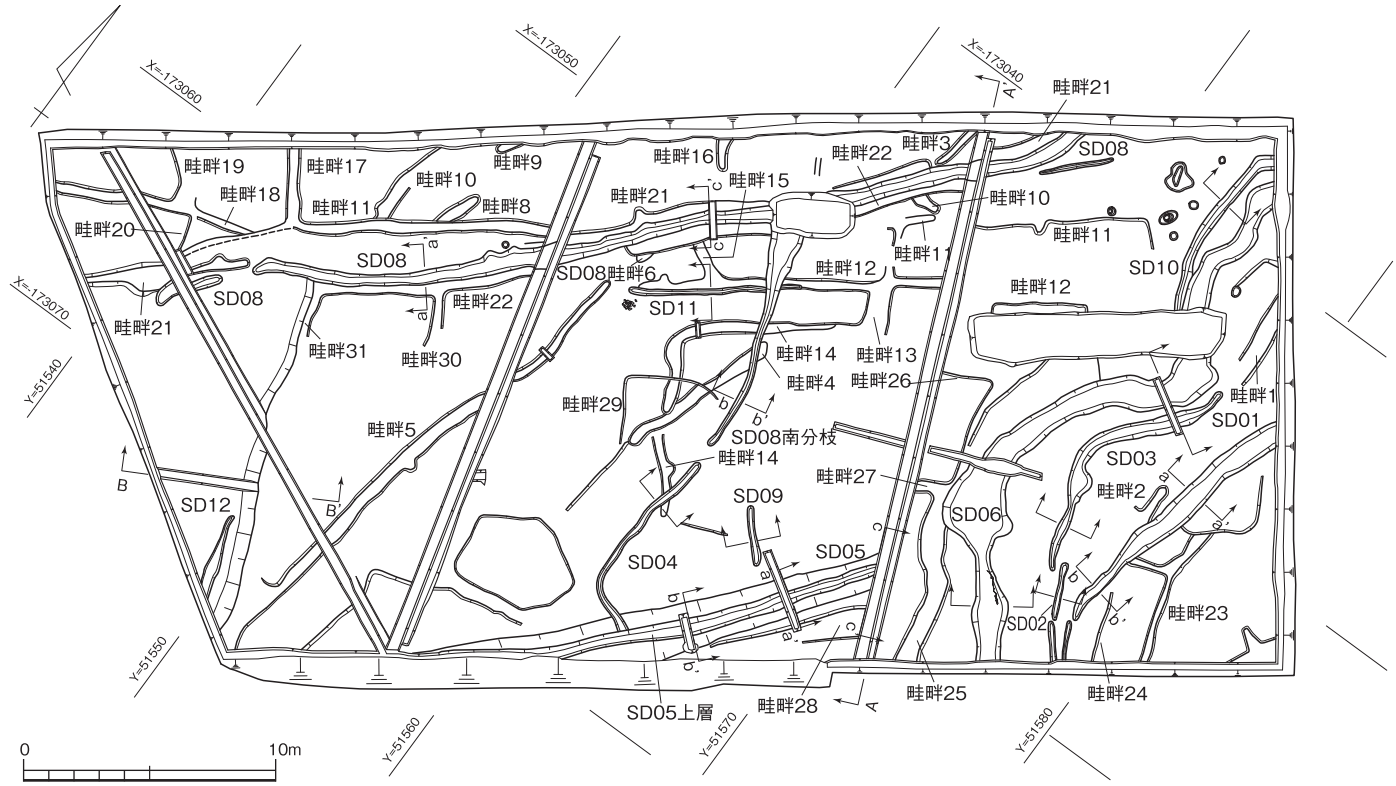
図版 6

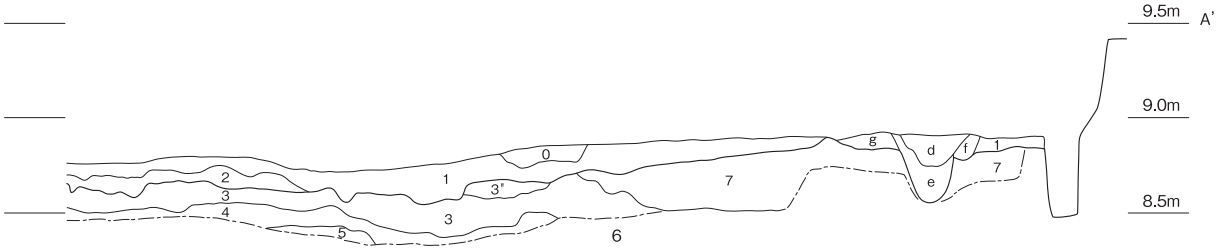
下層水田面足跡検出状況

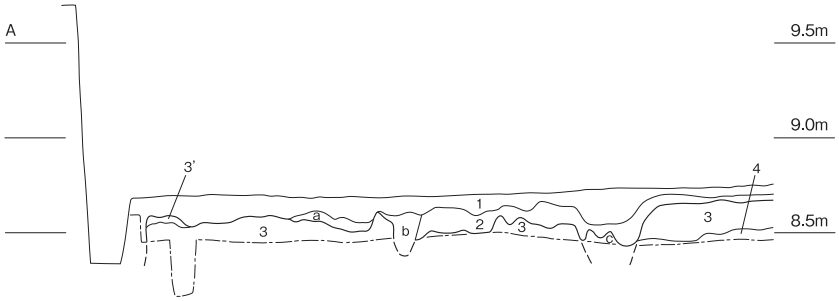

Y=51580
X=-173040
X=-173050
Y=51590
Y=51570
X=-173060
Y=51560
X=-173070
Y=51550
X=-173080
Y=51540
Y=51530
X=-173090
Y=51520
SD01
SD10
SD03
SD02
SD06
旧河道1
SD05
SD08南分枝
SD09
SD11
SD04
SD08
SD16
SD08
SR04
0
20m

上層水田面全体図

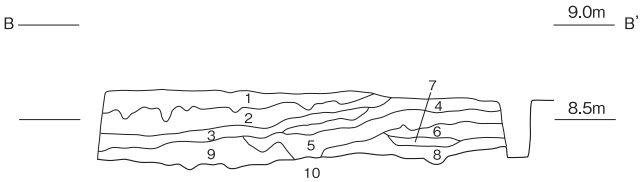
図版 8



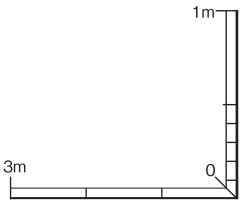




0. 5Y4/3　暗オリーブ　極細砂～細砂　畦畔の痕跡？
1. 10YR5/1　褐灰　極細砂～細砂　全体に淡くFeが集積
2. 2.5Y4/2　暗灰黄　細砂～粗砂
3. 2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂～細砂
3'　3層とほぼ同じだが、やや土壌化が進む
3''. 2.5Y5/1　黄灰　極細砂～細砂
4. 2.5Y4/2　暗灰黄　極細砂
5. 2.5Y4/3　オリーブ褐　シルト混極細砂
6. 2.5Y4/1　黄灰　砂混じりシルト　炭化物片含む
7. 2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂～極粗砂　下半部はFeが強く 集積
a. 10YR4/2　灰黄褐　中砂～粗砂　溝埋土の一部
b. 2.5Y4/3　オリーブ褐　細砂～粗砂　細礫混じり　下部はシルト化する　溝の埋土
c. 10YR4/4　褐　極細砂
d. 2.5Y5/2　暗灰黄　細砂～粗砂　グレイディングが見られる　溝埋土
e. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐　シルト質極細砂　細砂をラミナ状に挟む　溝埋土
f. 2.5Y3/2　黒褐　砂混じりシルト　畔の残りか？
g. fと同じ

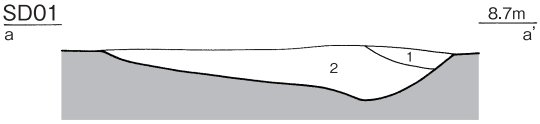


1. 10YR3/3　暗褐　シルト質砂　粗砂～極粗砂粒を多く 含む
2. 10YR3/2　黒褐　シルト質細砂～極細砂　極粗砂粒を散漫に含む
3. 2.5Y4/2　暗灰黄　細砂～中砂　やや土壌化している
4. 2.5Y5/3　黄褐　中砂～粗砂　やや土壌化している　3層と同一層か
5. 10YR5/4　にぶい黄褐　粗砂～極粗砂　径1cmほどの礫を散漫に含む
6. 2.5Y5/4　黄褐　細砂～中砂　全体にFeの集積が強い
7. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質中砂～粗砂
8. 10YR5/6　黄褐　中砂～粗砂　全体にFeの集積が強い
9. 5Y5/2　灰オリーブ　中砂～粗砂　下面付近は極粗砂粒が多い
8層と同一層か　Feの集積はない
10. 10YR2/2　黒褐　粘土～シルト　水田土壌

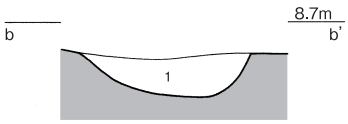


上層水田面　平面・断面図

SD01



1. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質砂　Feが集積している
2. 2.5Y5/1　黄灰　粗砂



1. 2.5Y5/1　黄灰　粗砂

SD02

1. 2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂～細砂

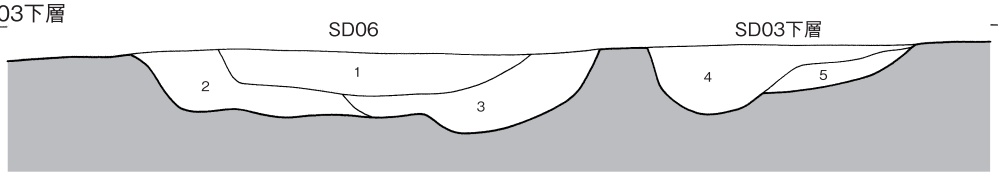
SD03

1. 2.5Y5/2　暗灰黄　細砂～中砂

SD04

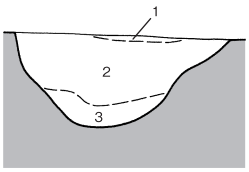
1. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質細砂

SD06,SD03下層

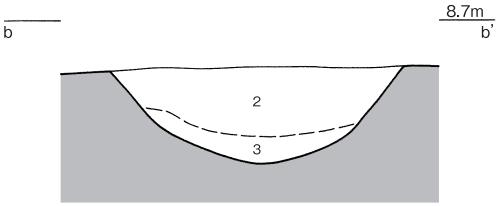


1. 10YR3/2　黒褐　極細砂質シルト
2. 2.5Y4/1　黄灰　シルト質極細砂～細砂
3. 10YR4/1　褐灰　シルト質粘土
4. 10YR4/2　灰黄褐　極細砂
5. 2.5Y5/2　暗灰黄　細砂

SD05上層

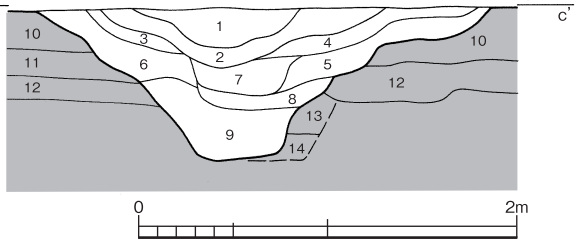


1. 2.5Y5/3　黄褐　極細砂～細砂
2. 2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂　極細砂～細砂と互層状のラミナを見せる
3. 10YR6/2　灰黄褐　極細砂～細砂



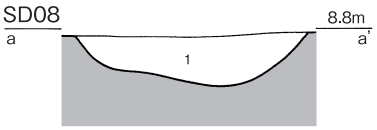
2. 2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂　極細砂～細砂と互層状のラミナを見せる
3. 10YR6/2　灰黄褐　極細砂～細砂

SD05下層

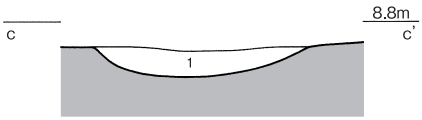


1. 10YR4/3　にぶい黄褐　極細砂～細砂　粗砂のレンズを挟む
2. 2.5Y3/2　黒褐　極細砂～細砂　上部では10YR3/4　暗褐
3. 10YR4/2　灰黄褐　細砂～中砂
4. 10YR3/3　暗褐　極細砂～細砂
5. 2.5Y3/2　黒褐　シルト
6. 2.5Y3/2　黒褐　シルト
7. 2.5Y5/2　暗灰黄　細砂　シルト～極細砂～細砂　粗砂のレンズを挟む
8. 2.5Y5/2　暗灰黄　細砂～粗砂　シルトのレンズを挟む
9. 5Y3/2　オリーブ黒　シルト質極細砂　細砂をラミナ状に挟む
10. 10YR4/4　褐　細砂　Feの集積が進む
11. 2.5Y4/1　黄灰　細砂～中砂　グレーディングが見られる
12. 7.5Y4/1　灰　細砂　粗砂のレンズを挟む
13. 2.5Y3/1　黒褐　シルト　飛鳥時代の水田
14. 10Y4/1　灰　シルト～粘土

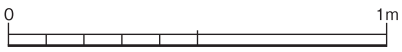
SD08



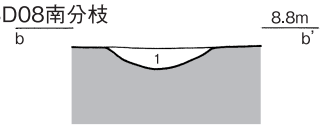
1. 2.5Y4/2　暗灰黄　細砂　全体にラミナが見られる



1. 10YR4/2　灰黄褐　細砂～中砂

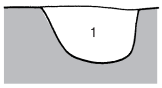


SD08南分枝



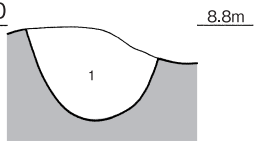
1. 2.5Y5/2　暗灰黄　細砂～粗砂

SD09



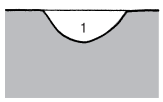
1. 2.5Y5/2　暗灰黄　シルト質細砂～中砂
全体にMnの集積が見られる

SD10



1. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質細砂～粗砂
極粗砂粒を少量含む

SD11



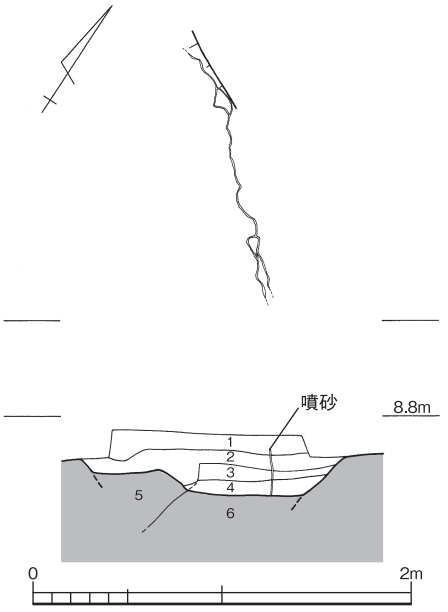
1. 2.5Y5/2　暗灰黄　細砂～粗砂
極粗砂粒を含む

上層水田面遺構断面図

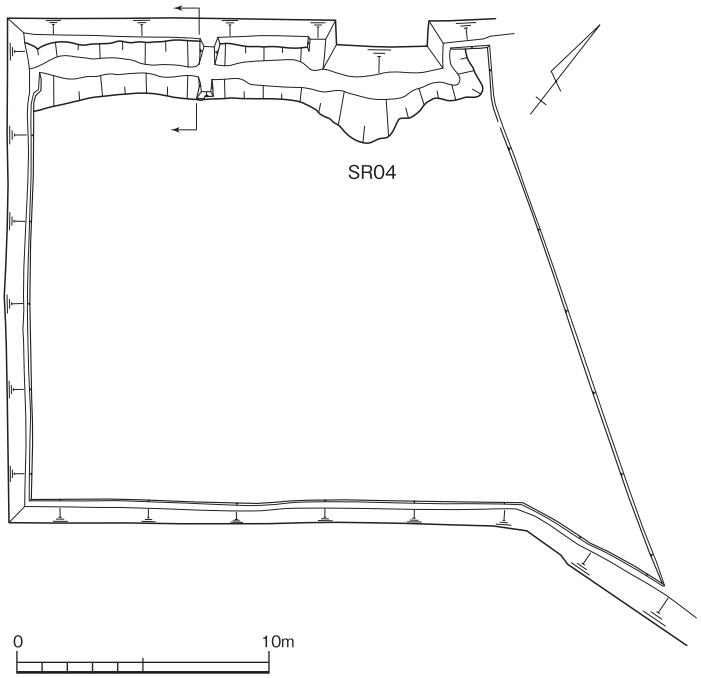
図版 10

土師器甕(37)

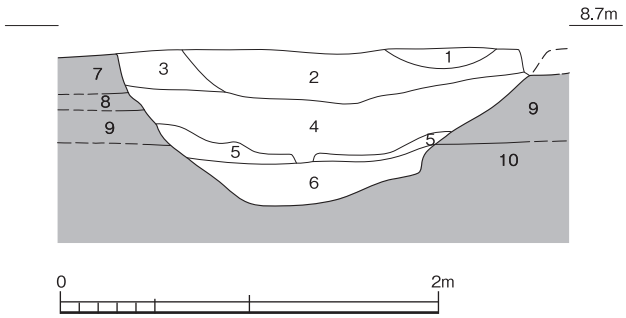
SD06上面　噴砂



1. 2.5Y4/2　暗灰黄　砂質シルト　粗砂～極粗砂粒を多く含む　全体にFeが集積
2. 2.5Y4/2　暗灰黄　砂質シルト　1層より粗砂粒子が少ないが、基質は逆に砂っぽい　全体にFeが集積
3. 5Y5/1　灰　シルト　全体にFeが集積
4. 5Y5/1～4/1　灰　シルト～粘土　雨だれ状のFe集積が見られる
5. 10YR5/2　灰黄褐　シルト質極細砂　上半にFe集積
6. 2.5Y6/1　黄灰　細砂～粗砂

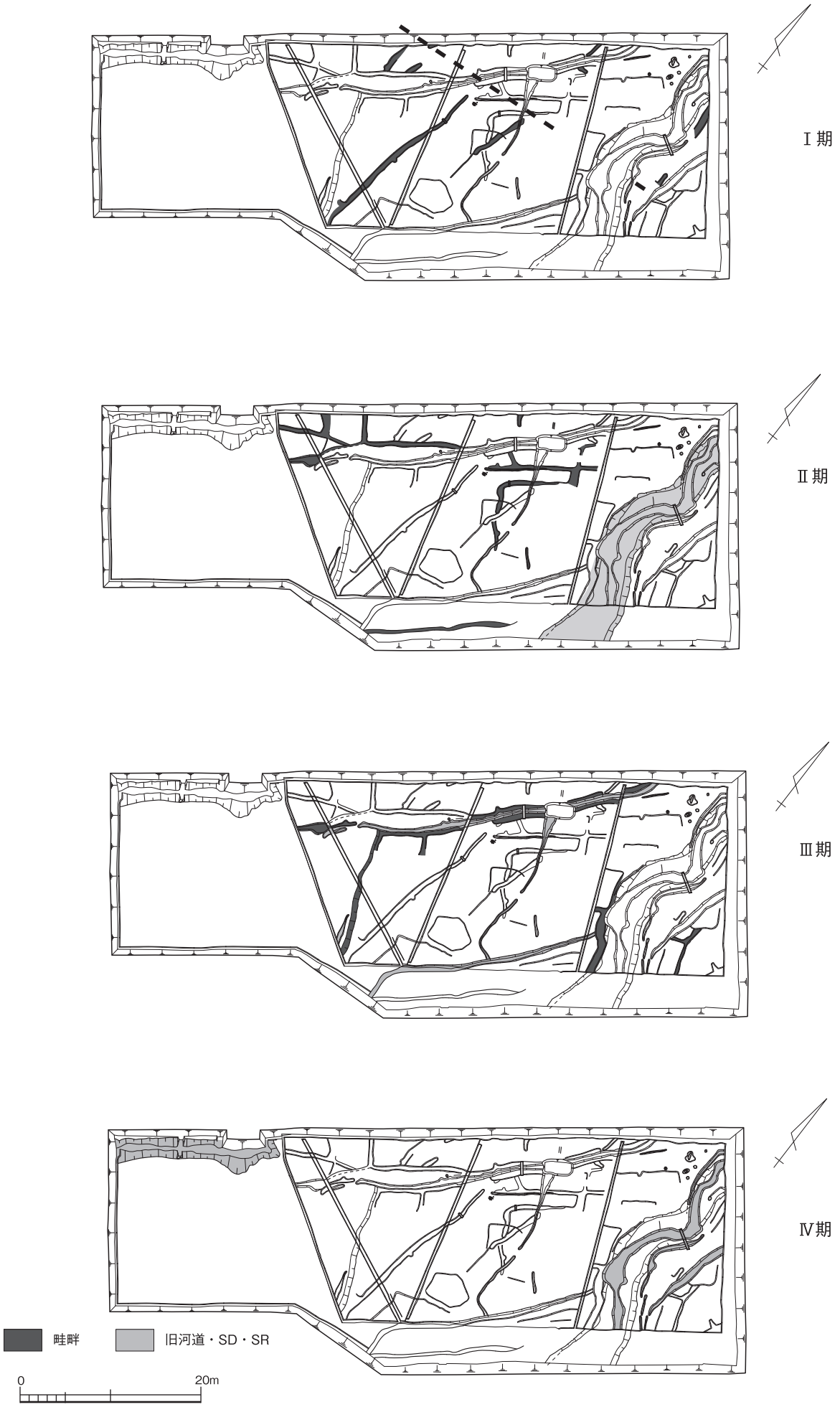


SR04



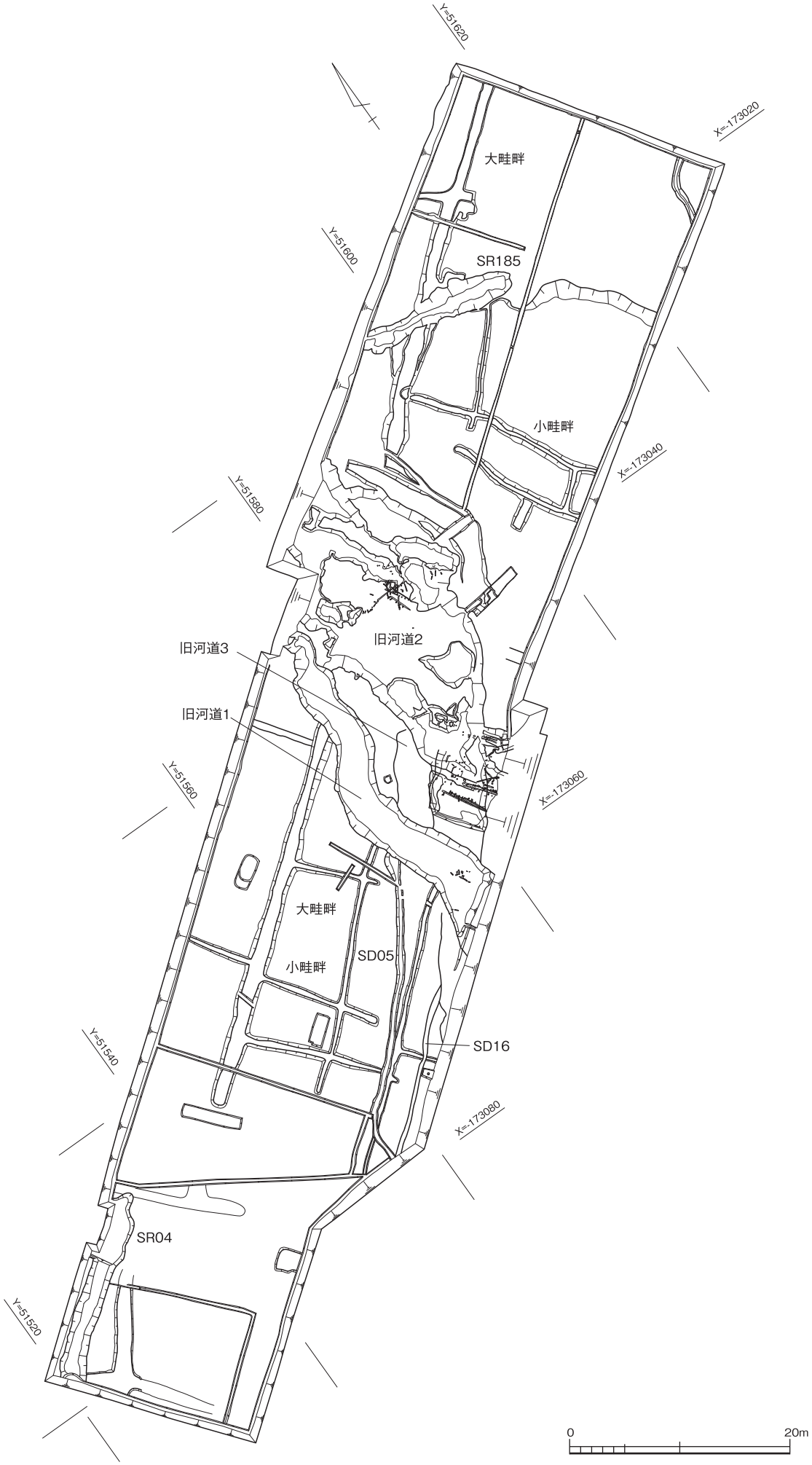
1. 10YR4/2　褐灰色　シルト質細砂
2. 10YR5/2　灰黄褐　粗砂　極細砂のレンズはさむ、上半はFeの集積が著しい
3. 7.5Y4/1　灰色　極細砂質シルト　上半はFe
4. 2.5Y6/2　灰黄色　粗砂～極粗砂　極細砂を含むラミナが見られる
5. 2.5Y3/1　黒褐色　シルト　極細砂のラミナをはさむ　腐植質含む
6. 2.5Y6/2　灰黄色　粗砂～極粗砂　黒褐色シルトのレンズをはさむ
7. 10YR4/1　褐灰色　シルト　上部はFe
8. 2.5Y4/1　黄灰色　極細砂～細砂　ラミナが見られる
9. 10YR3/1　黒褐色　砂質シルト
10. 7.5Y4/1　灰色　細砂～粗砂(中砂主体)

上層水田面遺構平面・断面図

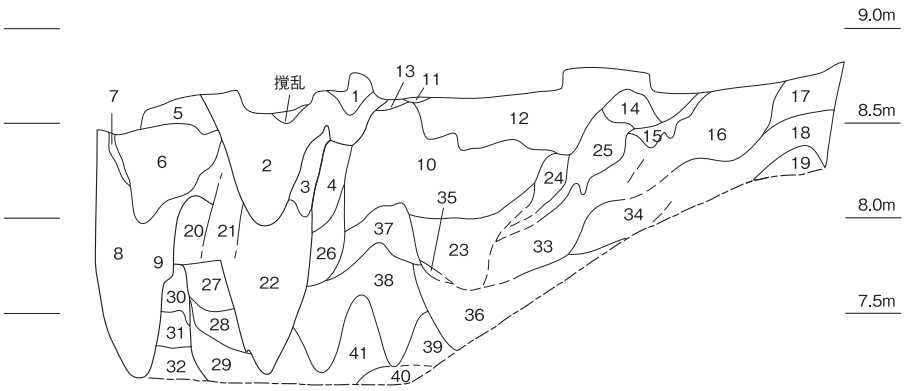


上層水田面遺構変遷図

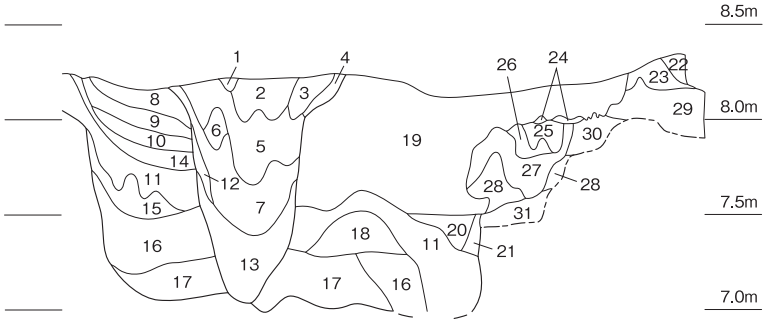
図版 12



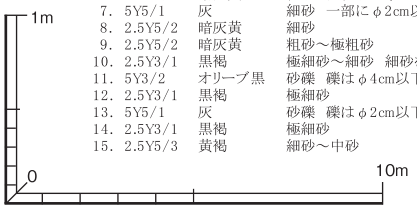
下層水田面全体図

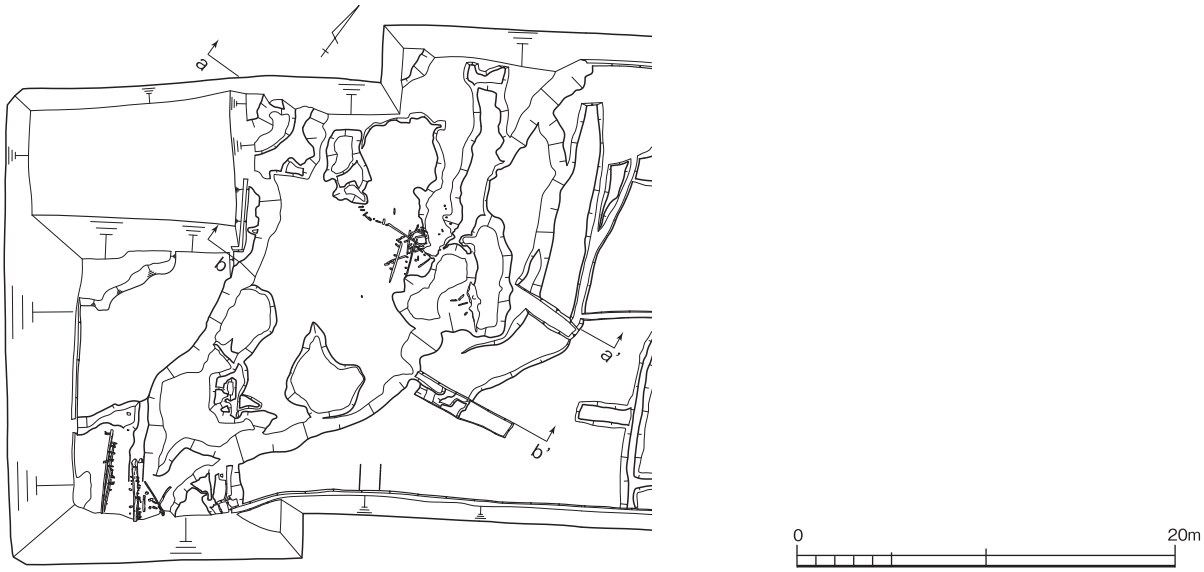


1.	2.5Y4/1	黄灰	極細砂～細砂　上半部は土壌化して酸化鉄も 集積する
2.	10YR4/1	褐灰	細砂　4～6m付近では、粗砂～細礫のレンズを挟む
3.	2.5Y4/1	黄灰	極細砂～細砂　木製品出土層
4.	5Y5/1～4/1	灰	細砂～粗砂　木製品出土層
5.	2.5Y4/2	暗灰黄	細砂～中砂　比較的均質
6.	2.5Y5/1	黄灰	細砂～中砂
7.	2.5Y4/1	黄灰	極細砂～細砂
8.	2.5Y4/1	黄灰	細砂　粗砂～極粗砂のレンズを挟む
9.	2.5Y4/1	黄灰	極細砂～細砂　8,9層は同一層の可能性大
10.	5Y4/1	灰	細砂　粗砂～細礫のレンズを挟む
11.	10YR4/1	褐灰	極細砂　多分1層と同じ
12.	5Y5/1	灰	細砂～中砂　粗砂～細礫のレンズを挟む
13.	2.5Y4/2	暗灰黄	粗砂～極粗砂
14.	2.5Y6/3	にぶい黄	粗砂　φ1cm程の礫を含む上半はFeが集積
15.	2.5Y4/2	暗灰黄	細砂～中砂
16.	2.5Y6/3	にぶい黄	粗砂～極粗砂　φ1cm以下の礫を含む
17.	10YR5/4	にぶい黄褐	細砂～中砂　全体にFeが集積している
18.	2.5Y4/2	暗灰黄	極細砂～細砂
19.	2.5Y4/1	黄灰	細砂～中砂
20.	5Y5/2	灰オリーブ	粗砂　φ1cm以下の礫混じる
21.	5Y4/1	灰	細砂～極細砂
22.	5Y6/1	灰	中砂～粗砂　下半部では砂礫を含む
23.	2.5Y6/2	灰黄	粗砂～砂礫　礫はφ3cm以下
24.	5Y3/2	オリーブ黒	極細砂～細砂
25.	5Y5/2	灰オリーブ	礫混り　細砂～粗砂　礫はφ1cm以下
26.	2.5Y3/1	黒褐	極細砂～細砂 極細砂～細砂を挟む
27.	5Y4/2	灰オリーブ	粗砂～砂礫　細砂～中砂のブロックを多く 含む
28.	5Y4/1	灰	細砂～中砂　比較的均質
29.	7.5Y4/1	灰	粗砂～砂礫　30,31層のブロックを多量に含む
30.	2.5Y2/1	黒	粘土
31.	2.5Y2/1	黒	砂質シルト　下部はシルト質砂　粗砂粒含む
32.	2.5Y4/1	黄灰	細砂～中砂
33.	2.5Y4/1	黄灰	極細砂～細砂　極細砂～細砂を挟む
34.	10YR3/2	黒褐	礫混り細砂　礫はφ1cm以下
35.	5Y2/2	オリーブ黒	細砂　ラミナをなす
36.	5Y6/2	灰オリーブ	細砂～中砂　ラミナをなす
37.	5Y4/1	灰	極細砂～細砂　ラミナをなす
38.	5Y6/2	灰オリーブ	砂礫　礫はφ2cm以下　細砂のレンズを挟む
39.	2.5Y2/1	黒	砂質シルト　下部はシルト質砂
40.	2.5Y4/1	黄灰	細砂～中砂
41.	5Y5/1	灰	中砂～細砂　極細砂を挟む

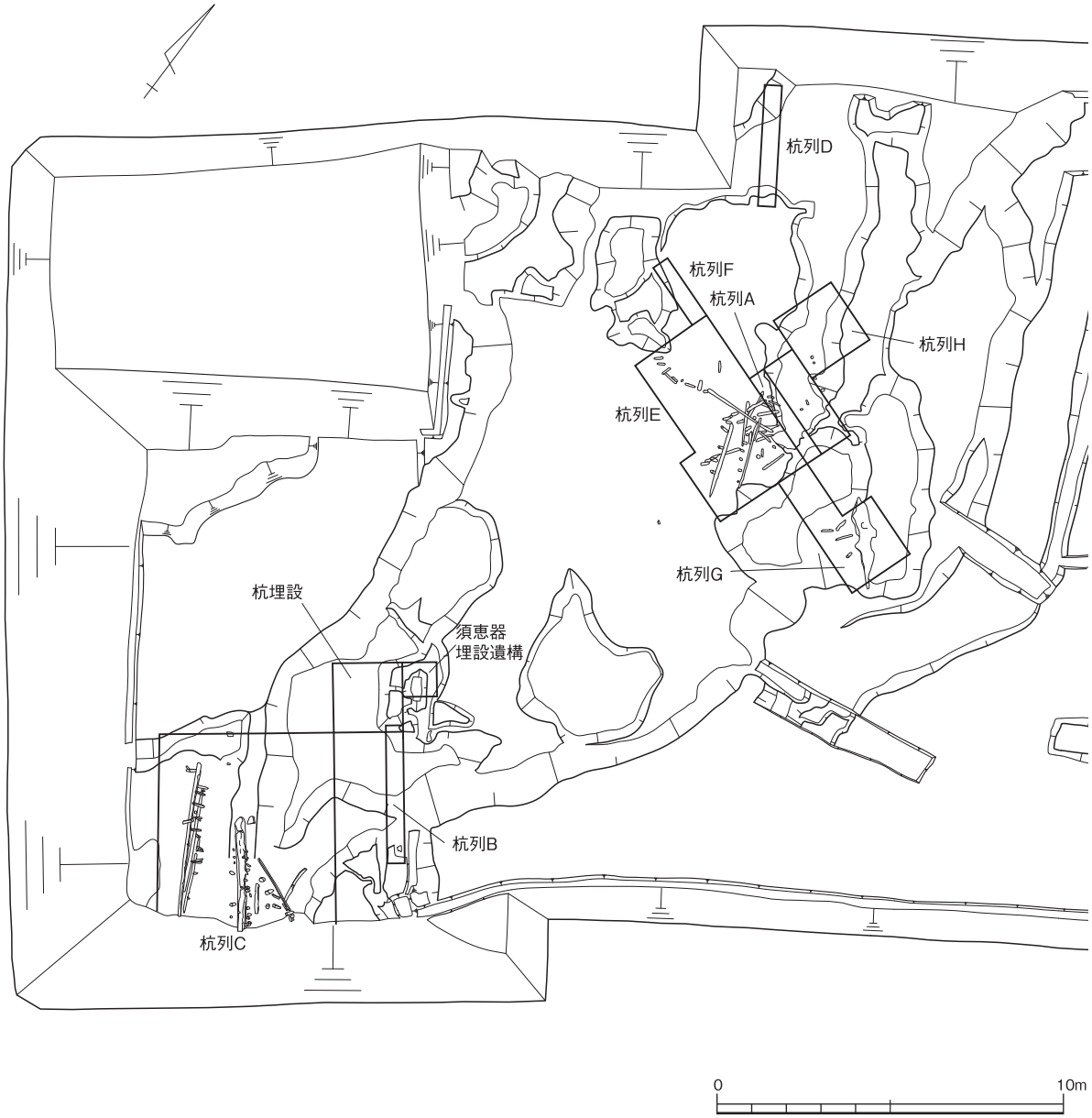


1.	10YR3/2	黒褐	極細砂
2.	2.5Y5/2	暗灰黄	砂礫　礫はφ3cm以下(マトリックスは淘汰の悪い砂)
3.	2.5Y3/1	黒褐	極細砂(中砂～粗砂の薄いレンズを挟む)
4.	2.5Y4/2	暗灰黄	砂礫　礫はφ2cm以下(マトリックスは淘汰の悪い砂)
5.	2.5Y6/2	灰黄	砂～砂礫(西側ではφ2cm以下の礫を含む) (東側は細砂～粗砂のラミナ状を呈する)
6.	2.5Y5/2	暗灰黄	粗砂　極粗砂～φ1cm以下の礫を含む
7.	5Y5/1	灰	細砂　一部にφ2cm以下の礫を含む
8.	2.5Y5/2	暗灰黄	細砂
9.	2.5Y5/2	暗灰黄	粗砂～極粗砂
10.	2.5Y3/1	黒褐	極細砂～細砂　細砂を挟む
11.	5Y3/2	オリーブ黒	砂礫　礫はφ4cm以下(マトリックスは淘汰の悪い砂)
12.	2.5Y3/1	黒褐	極細砂
13.	5Y5/1	灰	砂礫　礫はφ2cm以下(マトリックスは淘汰の悪い砂)
14.	2.5Y3/1	黒褐	極細砂
15.	2.5Y5/3	黄褐	細砂～中砂
16.	5Y4/1	灰	細砂　2.5Y3/1黒褐色極細砂を挟む
17.	2.5Y4/1	黄灰	砂～砂礫　礫はφ3cm以下
18.	2.5Y5/2	暗灰黄	中砂～粗砂
19.	2.5Y3/1	黒褐	極細砂～細砂 11層の砂が一部で19層を突き破って噴出している(噴砂) おそらく 8～10,14層相当と思われる
20.	5Y2/1	黒	粘土
21.	7.5Y3/1	オリーブ黒	砂混り粘土
22.	2.5Y3/1	黒褐	シルト質極細砂
23.	2.5Y4/2	暗灰黄	細砂～粗砂　水田面を被う 砂層
24.	2.5Y5/3	にぶい黄褐	砂礫　礫はφ1cm以下
25.	2.5Y3/2	黒褐	砂質シルト
26.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト混り砂(下部は極粗砂を含む)
27.	7.5Y3/2	オリーブ黒	粘土
28.	7.5Y3/2	オリーブ黒	シルト質中砂
29.	2.5Y3/1	黒褐	砂質シルト(水田土壌)
30.	7.5Y4/1	灰	粘土～シルト
31.	7.5Y3/1	オリーブ黒	シルト質極細砂





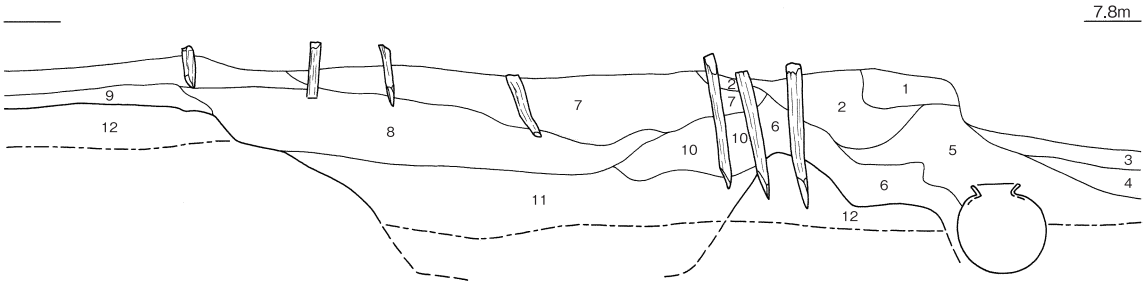
旧河道断面図



旧河道内杭列位置図

杭列A

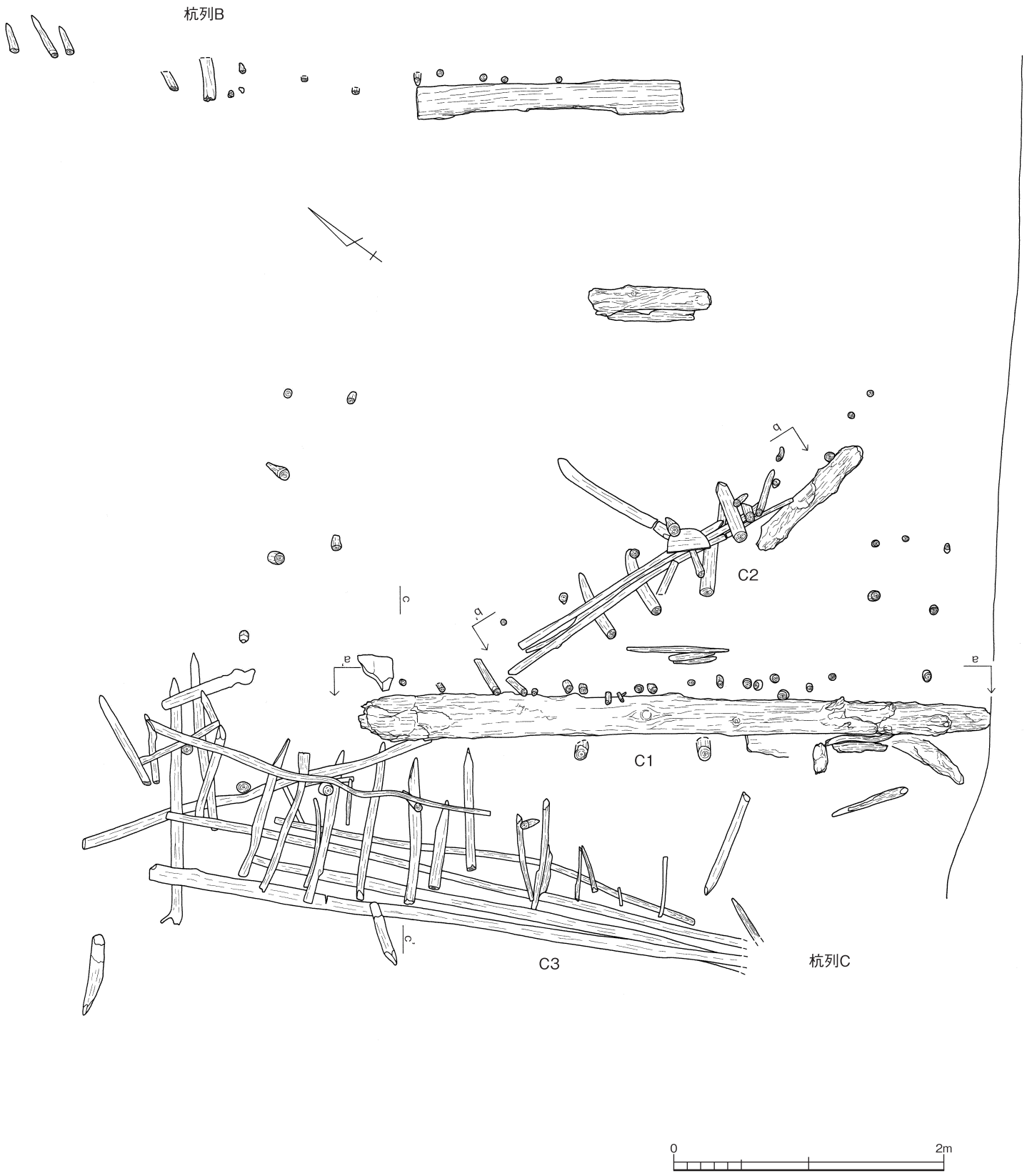
杭列B



1. 2.5Y3/1　黒褐　極細砂
2. 2.5Y6/2　にぶい黄　砂礫　礫はφ3cm以下　マトリックスは淘汰の悪い砂
3. 2.5Y6/3　にぶい黄　細砂～粗砂
4. 5Y4/1　灰　極細砂～細砂　一部でシルトのレンズを挟む
5. 5Y5/1　灰　粗砂～極粗砂
6. 2.5Y5/1　黄灰　細砂～粗砂　黒褐色極細砂のレンズを挟む
7. 2.5Y3/2　黒褐　極細砂　ラミナをなす
8. 2.5Y5/3　黄褐　粗砂～砂礫　砂礫をレンズ状に挟む（礫はφ2cm以下）
黒褐色極細砂のレンズを挟む
9. 2.5Y3/2　黒褐　細砂～極細砂
10. 2.5Y3/1　黒褐　極細砂
11. 5Y4/1　灰　細砂　ラミナを見せる
12.　ベース
13. 2.5Y5/2　暗灰黄　細砂～粗砂　黒褐色極細砂とラミナをなす

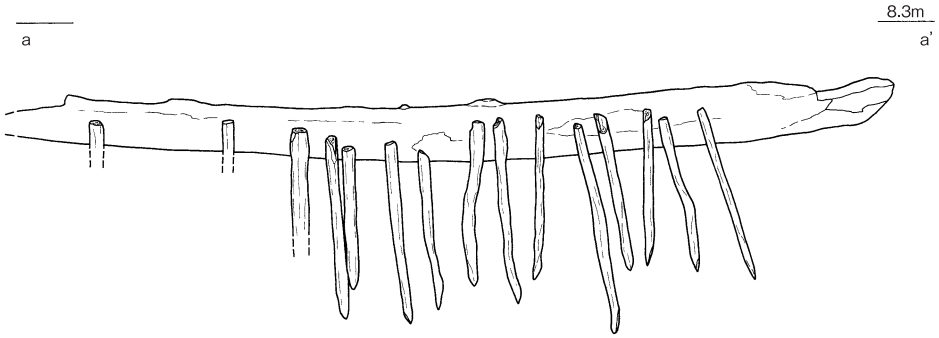
0　2m

杭列A･B　平面･断面図

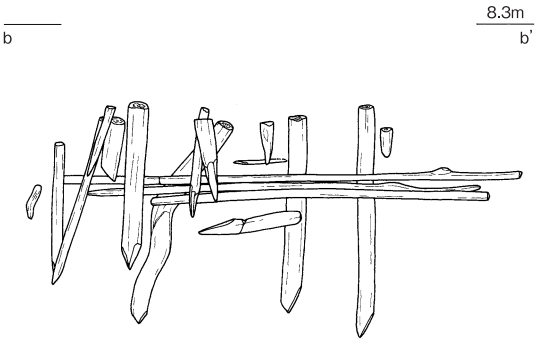


杭列B･C　平面図

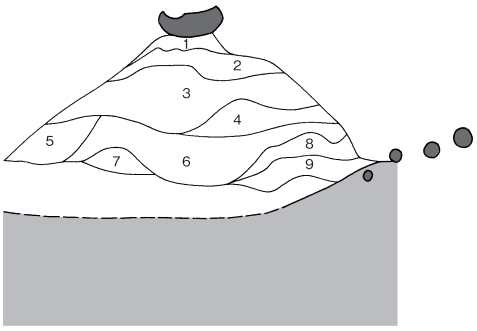
C1



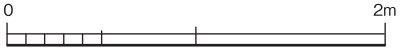
C2



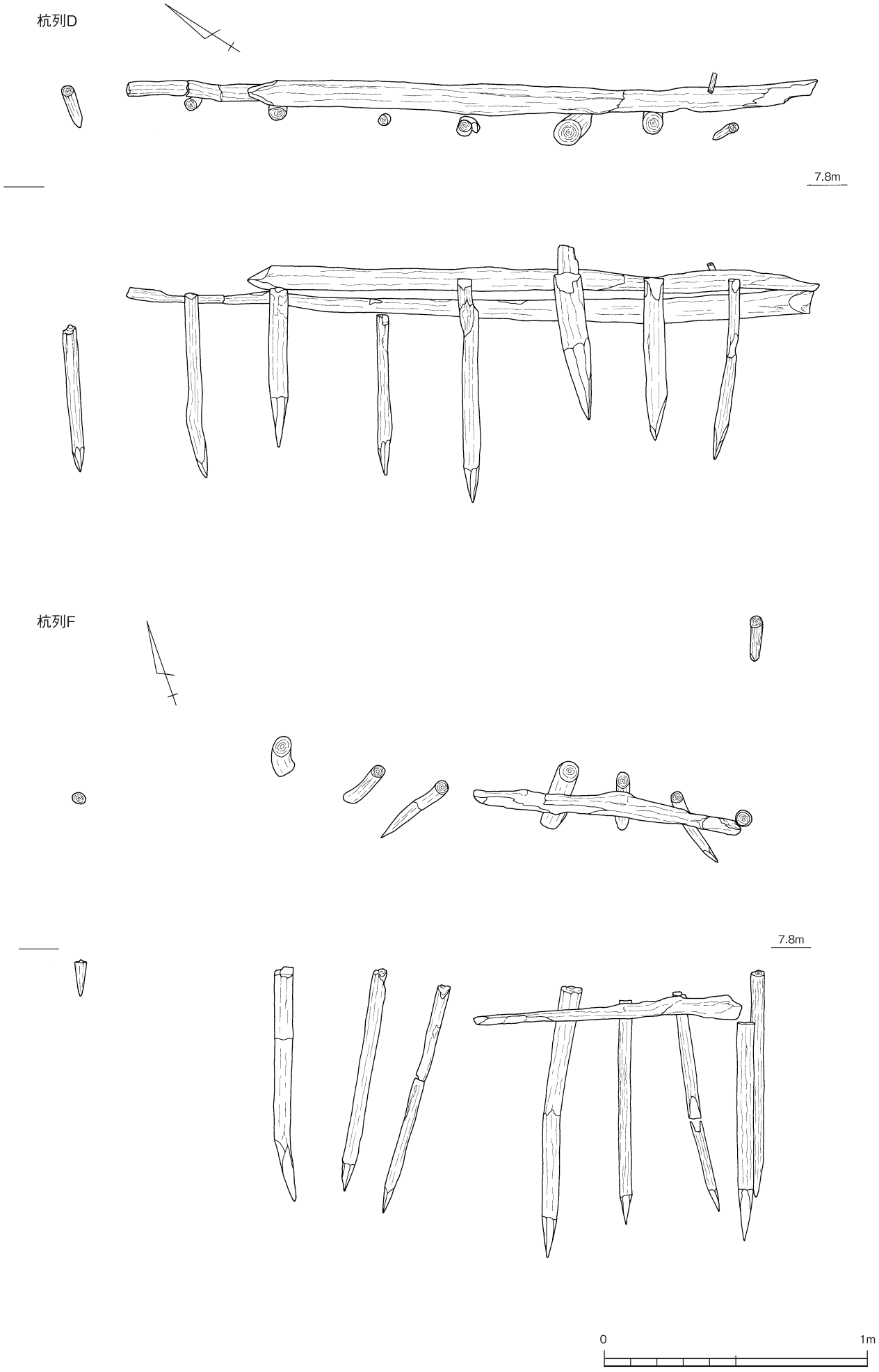
C3



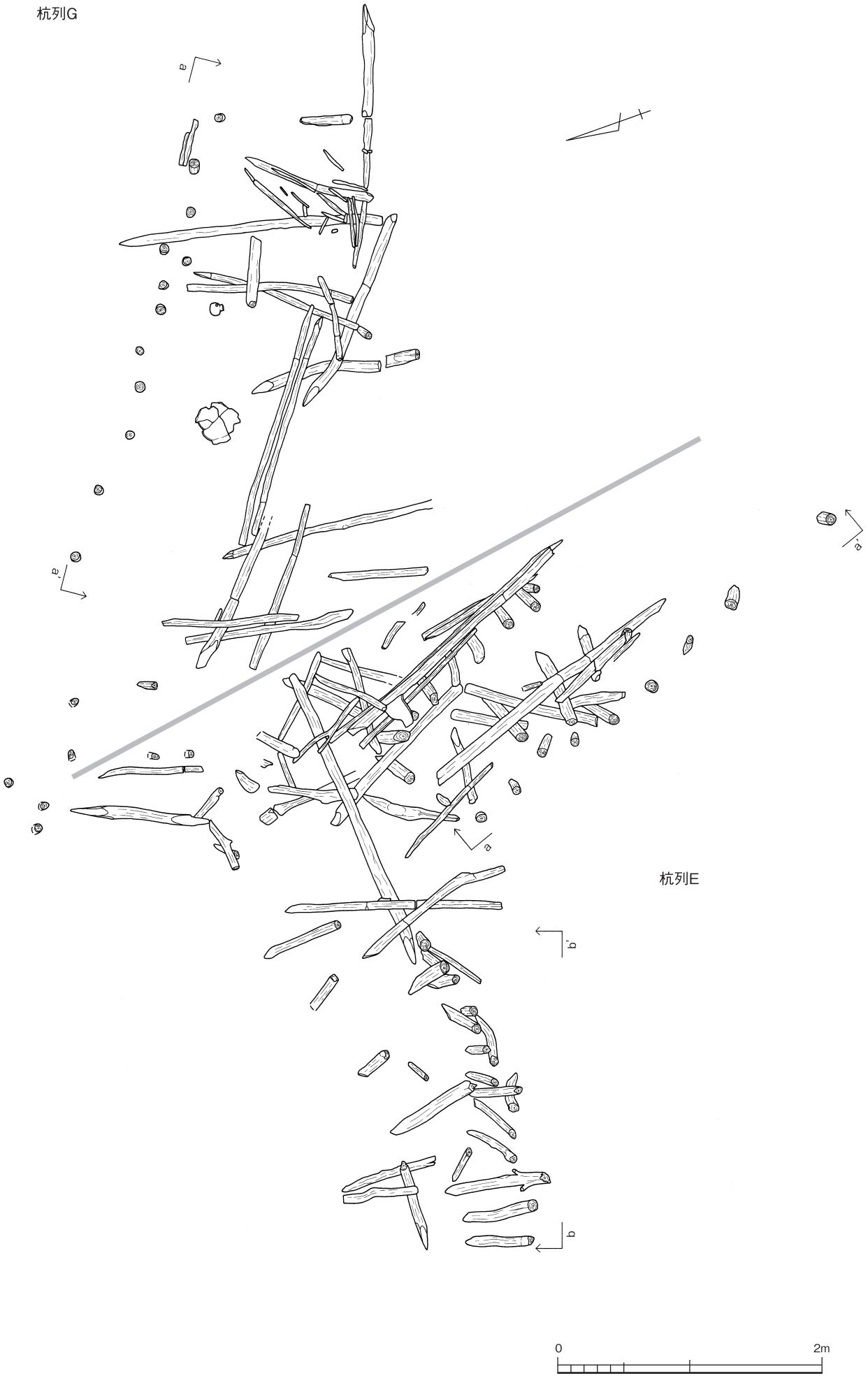
1.	2.5Y8/3～8/6	淡黄～黄	粗砂～小礫
2.	5GY3/1	暗オリーブ灰	粗砂混り粘質シルト
3.	10Y3/1	オリーブ黒	極細砂　一部に10Y5/1　灰　粘質シルトブロック含む
4.	10Y3/1	オリーブ黒	細砂～粗砂
5.	10Y3/1	オリーブ黒	細砂混り極細砂　5GY3/1　暗オリーブ灰　粘質シルトブロック含む
6.	10Y3/1	オリーブ黒	粘質シルト　細砂～粗砂混じる
7.	10Y3/1	オリーブ黒	極細砂　ラミナ状に10Y5/1　灰　極細砂混じる
8.	10Y3/1	オリーブ黒	粘質シルト　2.5Y5/4　黄褐　粗砂混じる
9.	10Y4/1	灰	粘質シルトと粗砂混じる
10.	2.5Y8/3～8/6	淡黄～黄	粗砂～小礫



杭列C　断面図

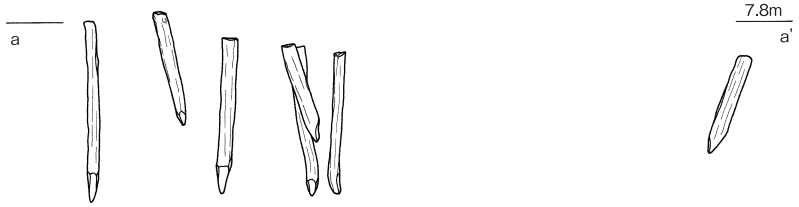


杭列D･F　平面･断面図

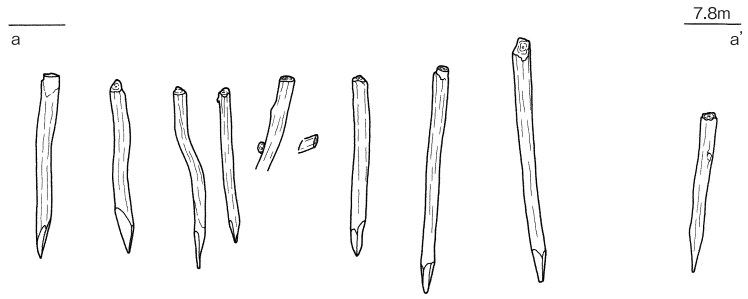


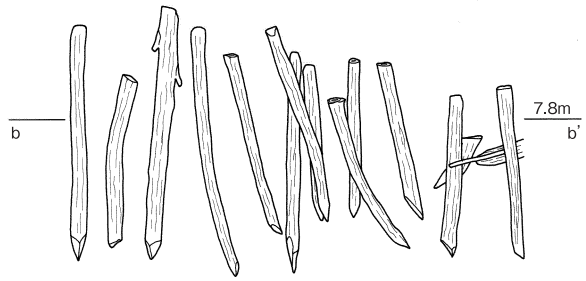
杭列E･G　平面図

杭列G



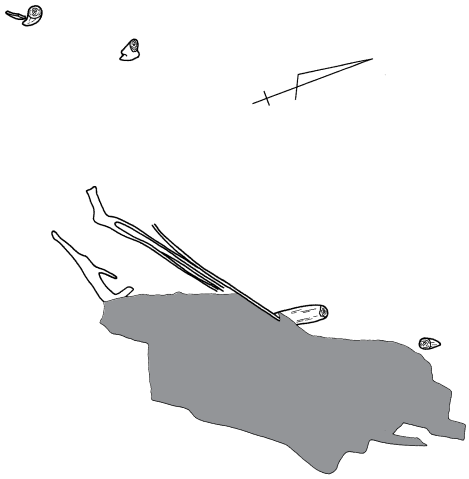
杭列E

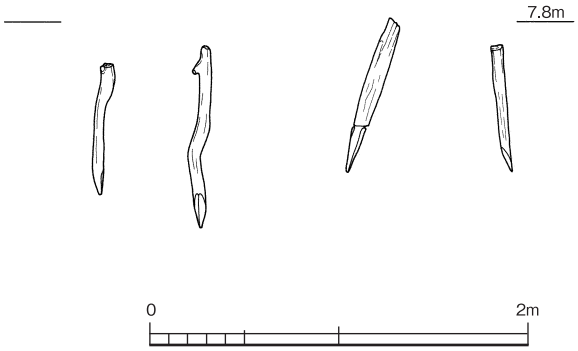




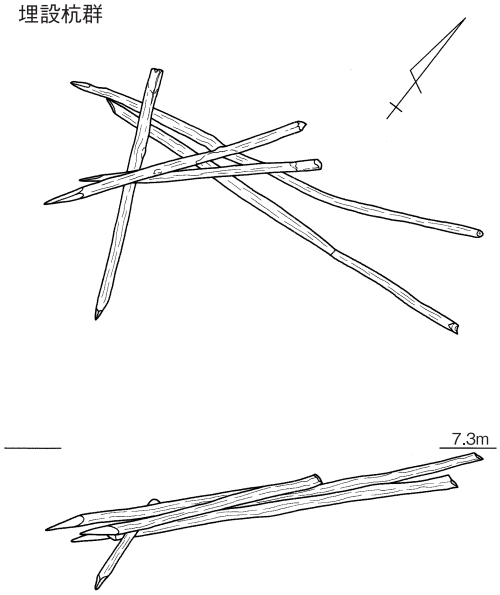
杭列E･G　断面図

杭列H



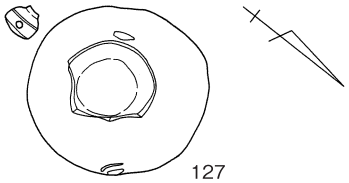


埋設杭群

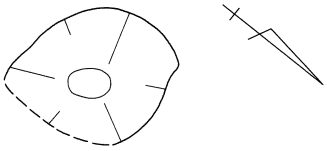


須恵器埋設遺構

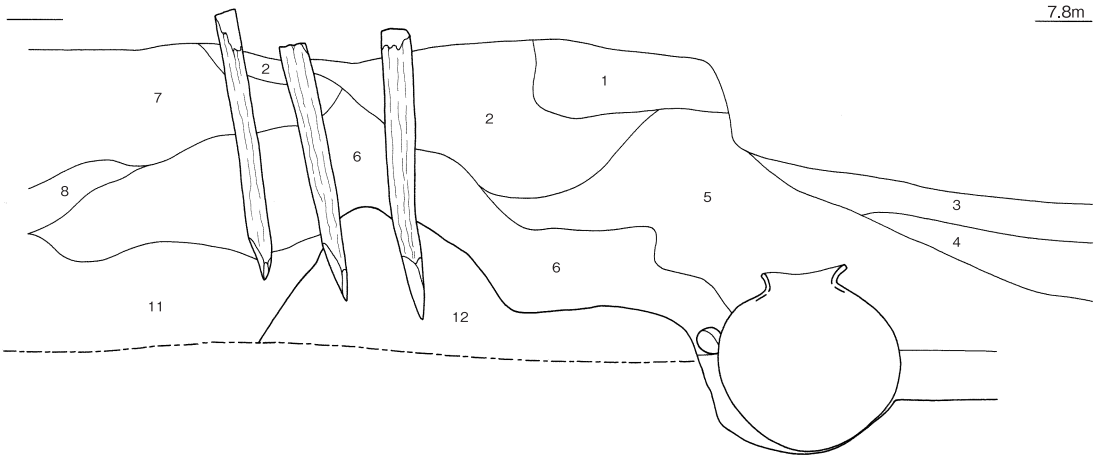
1. 2.5Y3/1	黒褐	極細砂
2. 2.5Y6/2	にぶい黄	砂礫　礫はφ3cm以下　マトリックスは淘汰の悪い砂
3. 2.5Y6/3	にぶい黄	細砂～粗砂
4. 5Y4/1	灰	極細砂～細砂　一部でシルトのレンズを挟む
5. 5Y5/1	灰	粗砂～極粗砂
6. 2.5Y5/1	黄灰	細砂～粗砂　黒褐色極細砂のレンズを挟む
7. 2.5Y3/2	黒褐	極細砂　ラミナをなす
8. 2.5Y5/3	黄褐	粗砂～砂礫　砂礫をレンズ状に挟む（礫はφ2cm以下） 黒褐色極細砂のレンズを挟む
10. 2.5Y3/1	黒褐	極細砂
11. 5Y4/1	灰	細砂　ラミナを見せる
12.		ベース

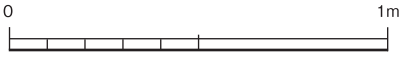


出土状況

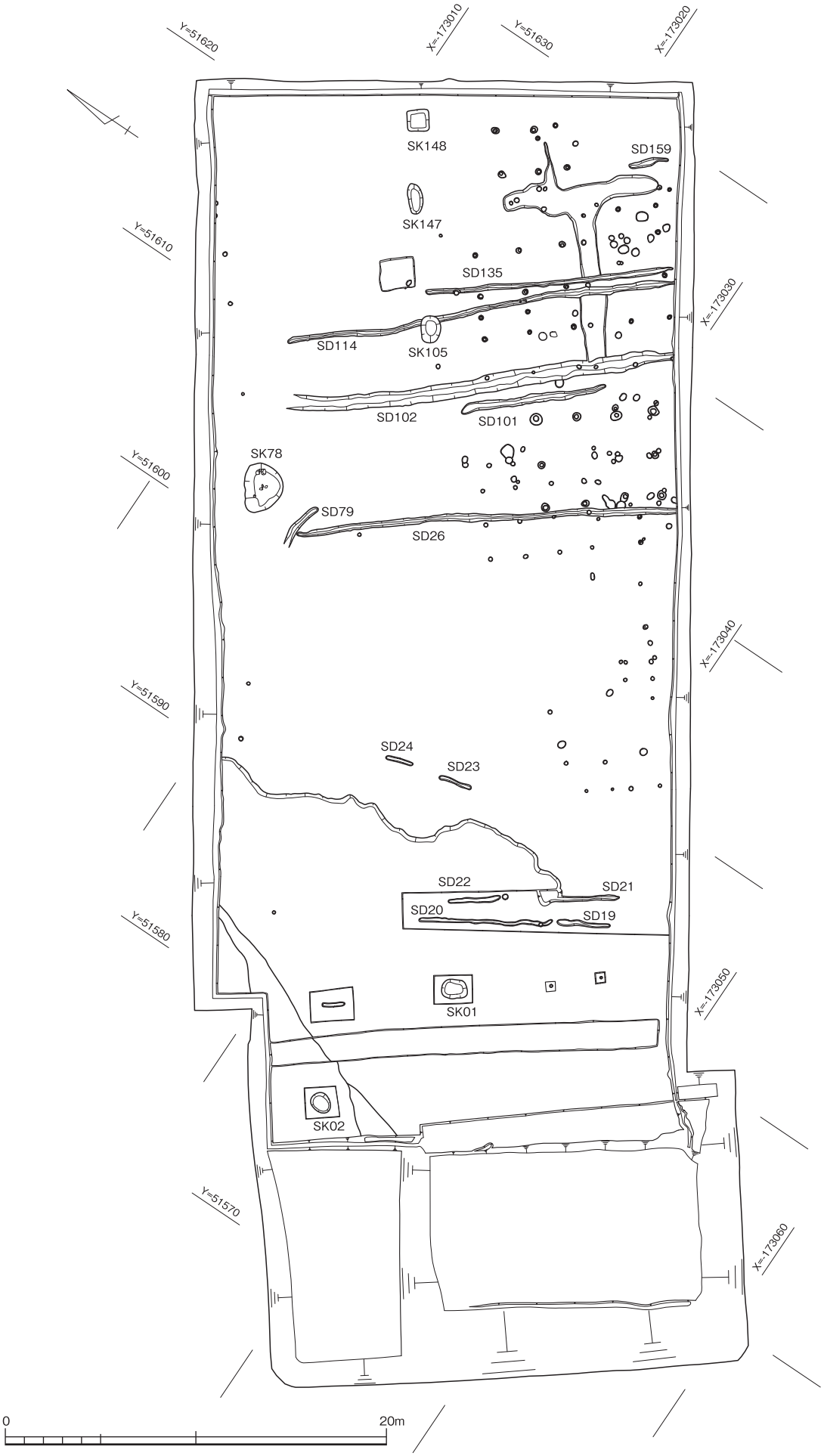


取り上げ後

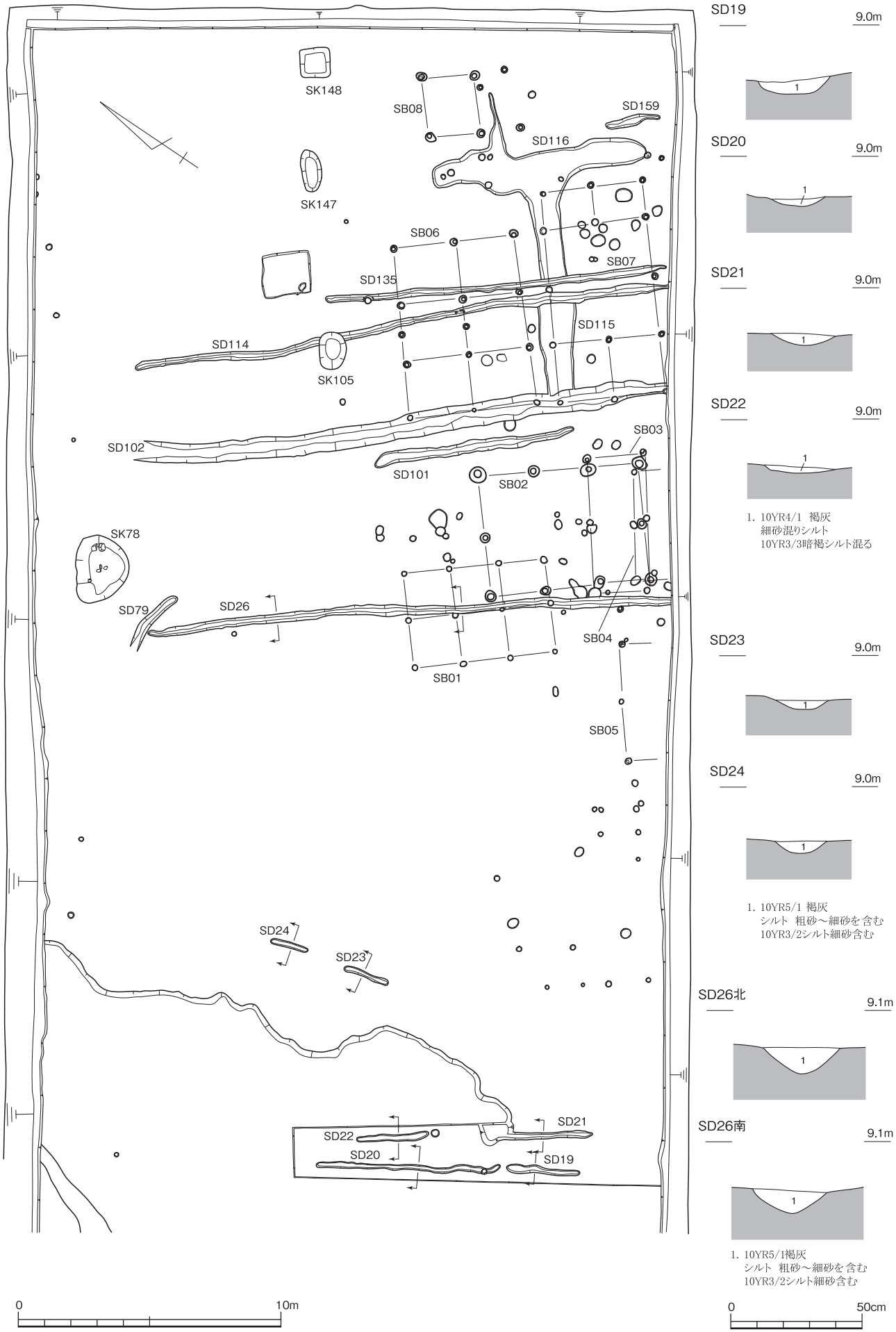




杭列H・杭群・須恵器埋設遺構　平面・断面図

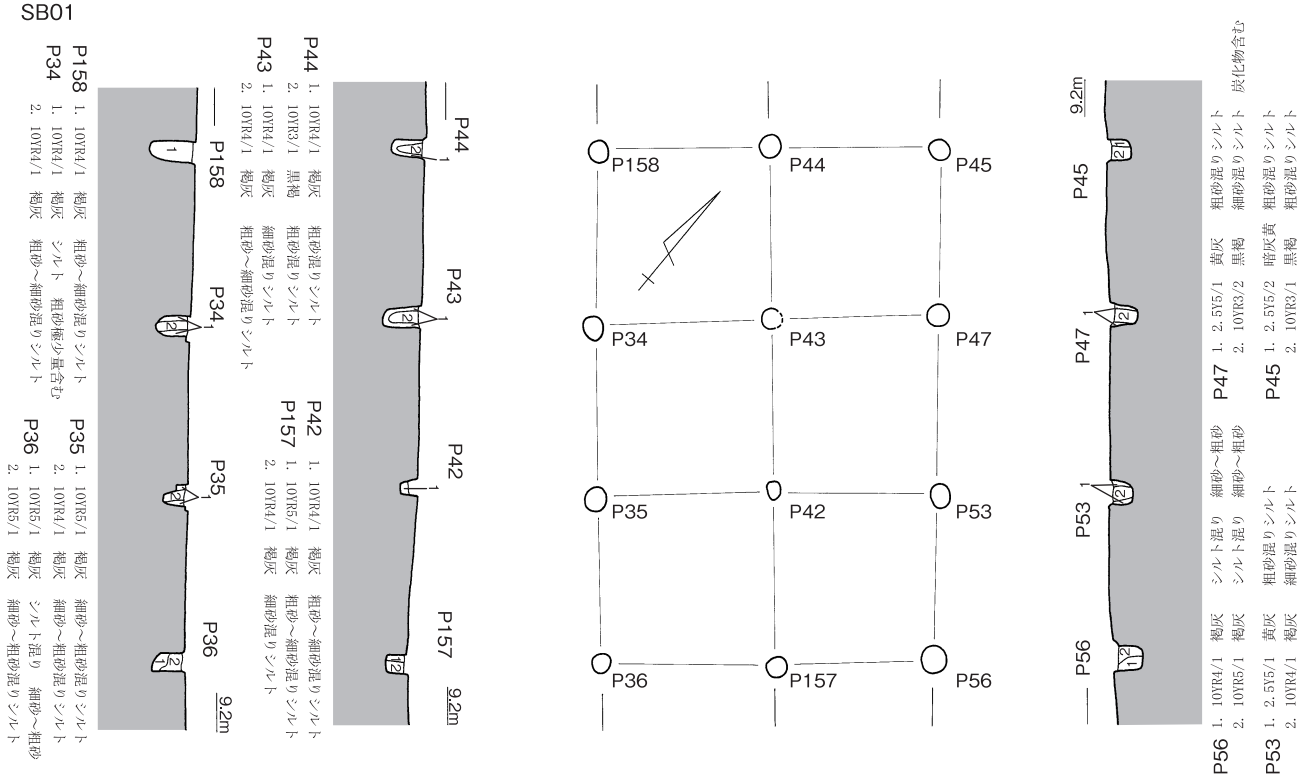

Y=51620
X=173010
Y=51630
X=173020
SK148
SD159
SK147
Y=51610
SD135
X=173030
SD114
SK105
SD102
SD101
SK78
Y=51600
SD79
SD26
X=173040
Y=51590
SD24
SD23
SD22
SD21
SD20
SD19
Y=51580
SK01
X=173050
SK02
Y=51570
X=173060
0
20m

平安時代遺構面　全体図

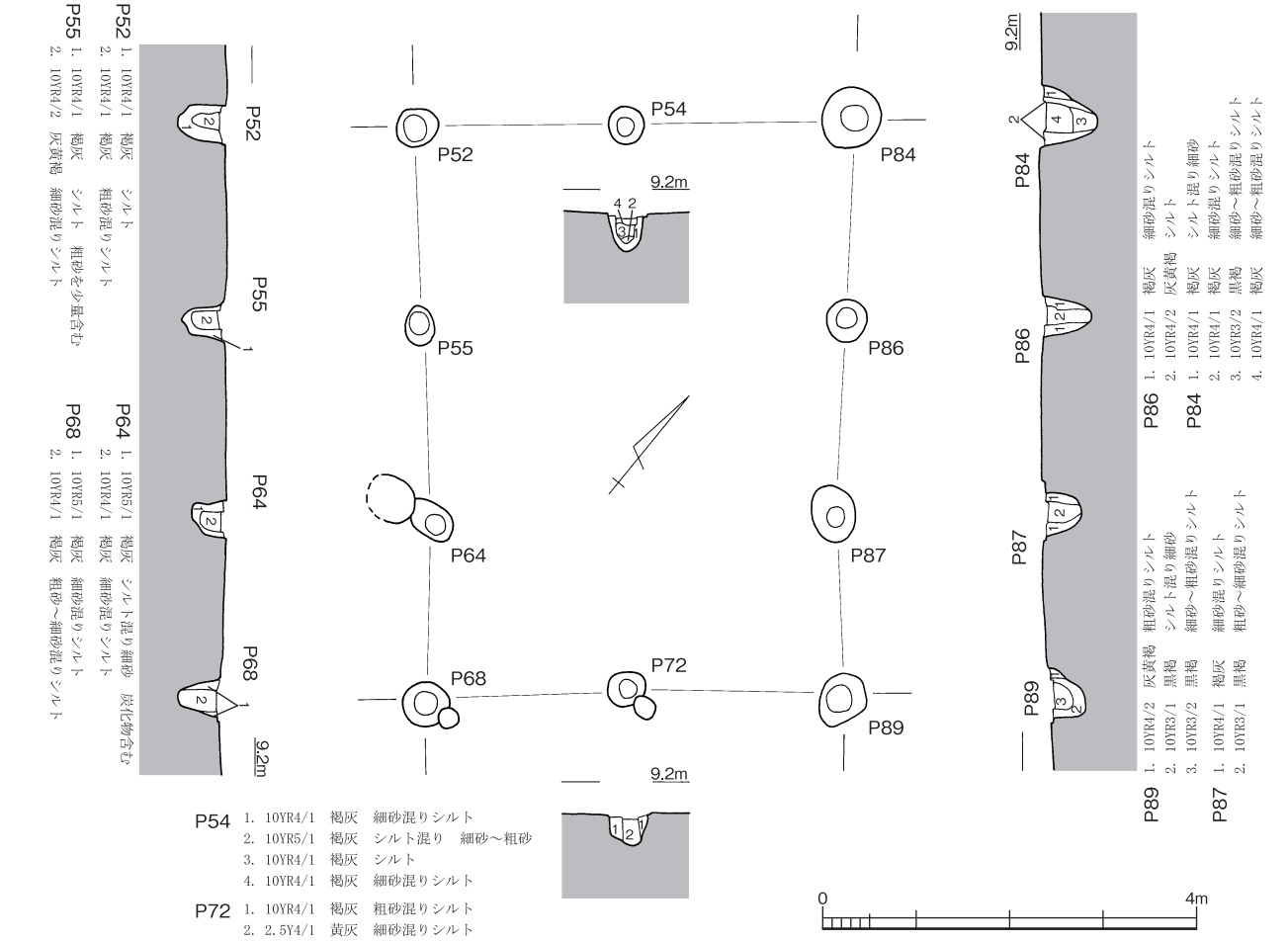


平安時代遺構面溝　平面図・断面図

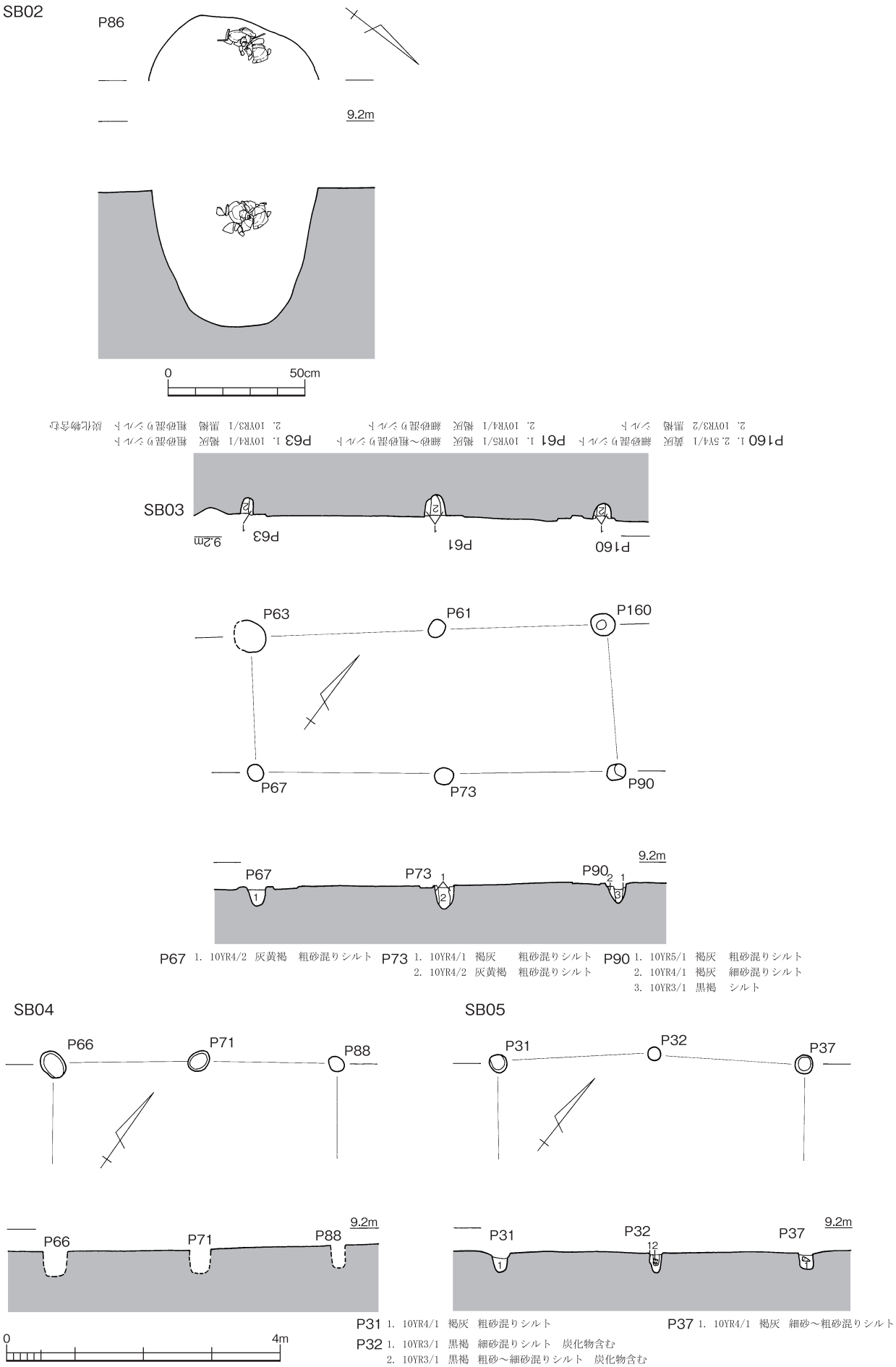
SB01



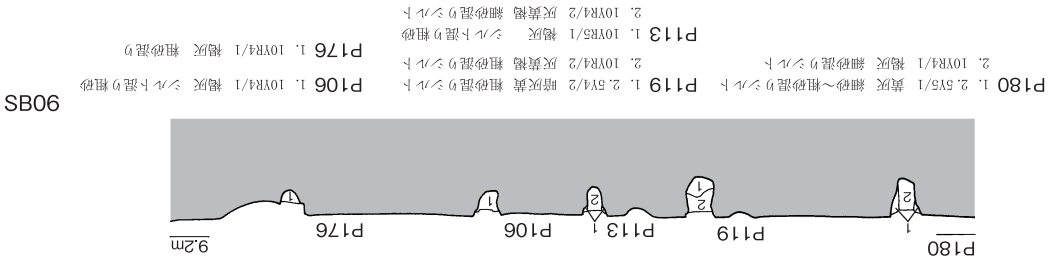
SB02

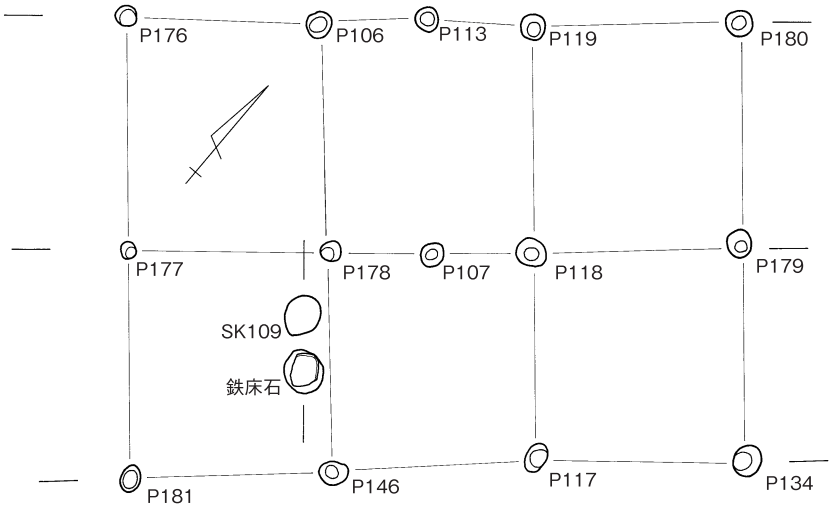


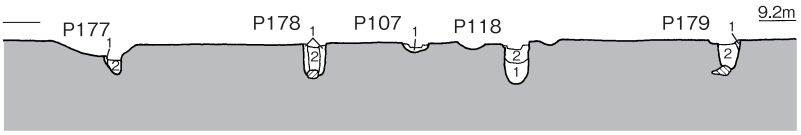
SB01・SB02　平面・断面図



SB02･P86　SB03～SB05　平面･断面図





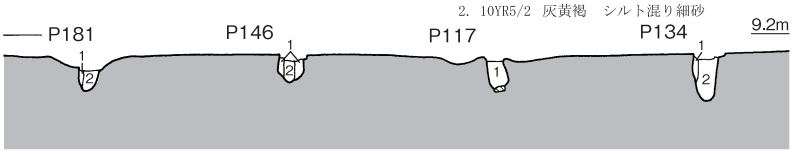


P177 1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト混り細砂
2. 10YR4/1 褐灰 粗砂混りシルト

P178 1. 10YR4/2 灰黄褐 粗砂混りシルト
2. 10YR3/3 暗褐 細砂～粗砂混りシルト

P107 1. 10YR4/2 灰黄褐 細砂～粗砂
P118 1. 10YR4/2 灰黄褐 粗砂混りシルト
2. 10YR5/2 灰黄褐 シルト混り細砂

P179 1. 10YR4/1 褐灰 粗砂～細砂混りシルト
2. 10YR3/2 黒褐 細砂混りシルト

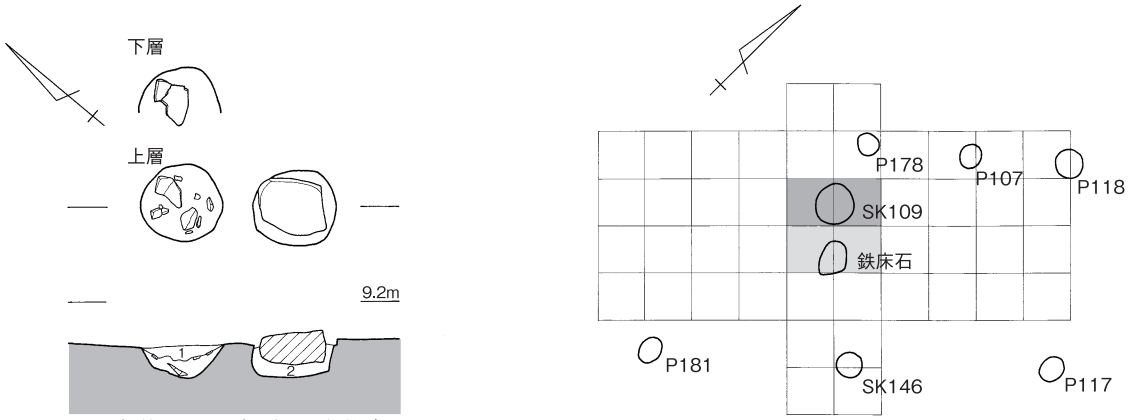


P181 1. 10YR4/1 褐灰 シルト 粗砂混り細砂
2. 10YR4/2 灰黄褐 細砂～粗砂混りシルト

P146 1. 10YR4/1 褐灰 シルト混り粗砂
2. 10YR4/1 褐灰 粗砂～細砂混りシルト

P117 1. 10YR4/1 褐灰 シルト 粗砂混り細砂 石は根石？

P134 1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト混り細砂
2. 10YR3/2 黒褐 細砂混りシルト



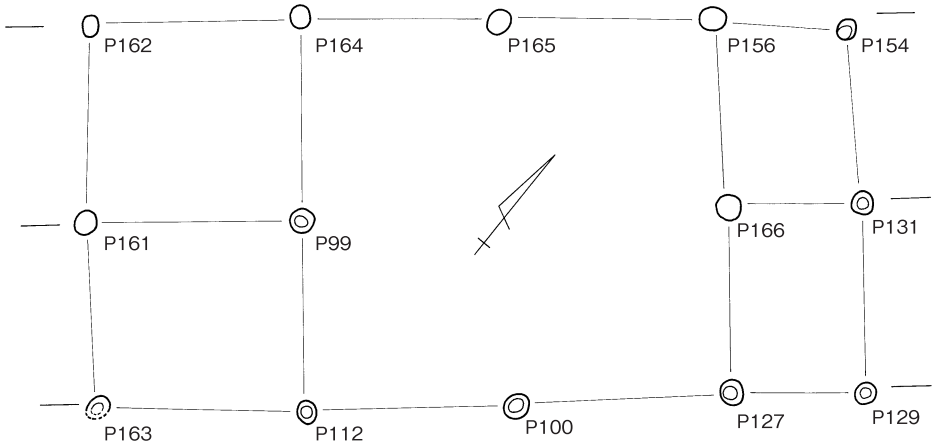
1. 粗砂混りシルト 炭・酸化した鉄分を含む
2. 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混りシルト（1cm厚） 炭化物含む
+10YR4/3 にぶい黄褐 極細砂～粗砂 マンガン・鉄分含む

0 1m　　0 4m

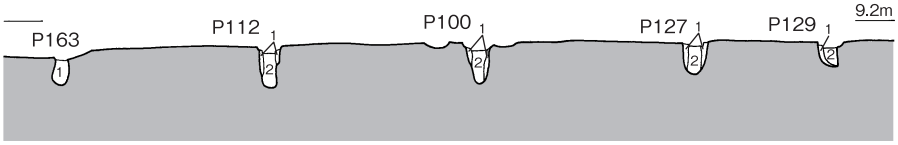
SB06 平面・断面図

SB07

P154 1. 10YR4/2 灰黄褐 細砂混りシルト
P156 1. 10YR4/2 灰黄褐 粗砂混りシルト
P165 1. 10YR4/1 褐灰 細砂～粗砂混りシルト
P164 1. 10YR3/2 黒褐 シルト混り細砂～粗砂
2. 10YR3/2 黒褐 細砂混りシルト
P162 1. 10YR3/2 黒褐 シルト混り細砂～粗砂
2. 10YR3/2 黒褐 細砂混りシルト

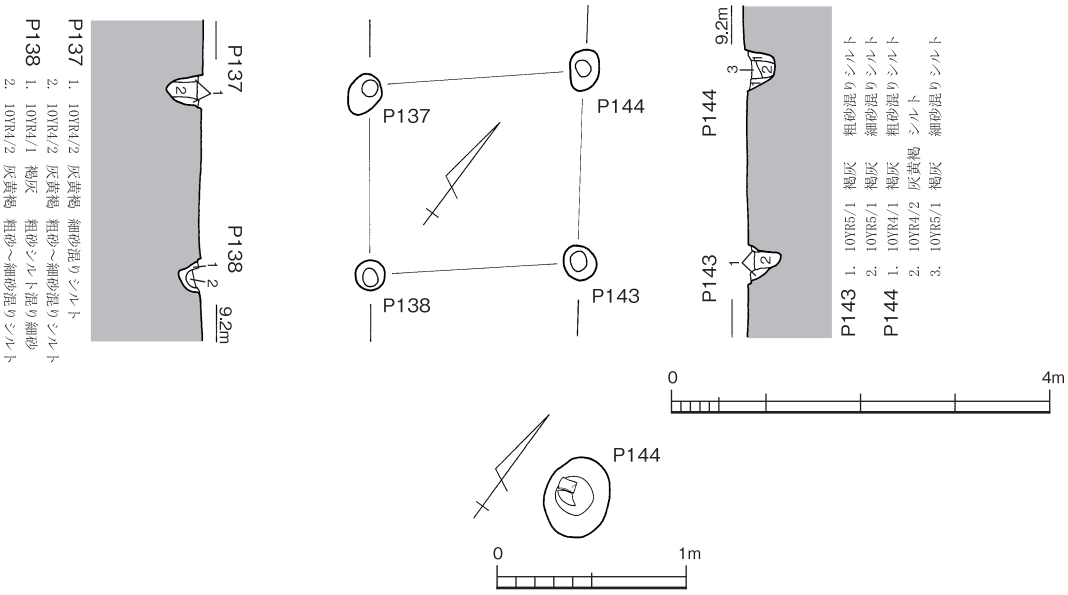


P161 1. 10YR4/1 褐灰 粗砂～細砂混りシルト
P99 1. 10YR4/1 褐灰 粗砂混りシルト
2. 10YR3/1 黒褐 細砂～粗砂混りシルト
P166 1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト混り細砂～粗砂
2. 10YR3/2 黒褐 細砂混りシルト
P131 1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト 粗砂混り細砂
2. 10YR3/2 黒褐 シルト 炭化物含む



P163 1. 10YR3/1 黒褐 シルト
P112 1. 10YR4/1 褐灰 粗砂混りシルト
2. 10YR3/1 黒褐 細砂混りシルト 炭化物含む
P100 1. 10YR4/1 褐灰 細砂～粗砂混りシルト
2. 10YR3/1 黒褐 細砂混りシルト 炭化物含む
P127 1. 10YR3/2 黒褐 細砂～粗砂混りシルト
2. 10YR2/2 黒褐 細砂混りシルト
P129 1. 10YR4/1 褐灰 粗砂混りシルト
2. 10YR3/1 黒褐 シルト 炭化物含む

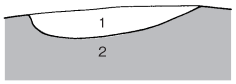
SB08



P137 1. 10YR4/2 灰黄褐 細砂混りシルト
2. 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～細砂混りシルト
P138 1. 10YR4/1 褐灰 粗砂シルト混り細砂
2. 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～細砂混りシルト
P143 1. 10YR5/1 褐灰 粗砂混りシルト
2. 10YR5/1 褐灰 細砂混りシルト
P144 1. 10YR4/1 褐灰 粗砂混りシルト
2. 10YR4/2 灰黄褐 シルト
3. 10YR5/1 褐灰 細砂混りシルト

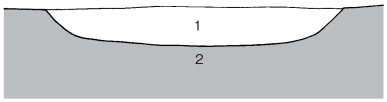
SB07・SB08 平面・断面図

SD101



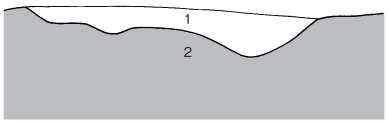
1. 10YR4/1 褐灰 細砂混りシルト
2. 10YR3/3 暗褐 シルト混り細砂

SD102北セクション



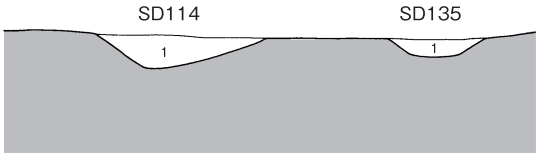
1. 10YR4/1 褐灰 細砂混りシルト
2. 10YR3/3 暗褐 シルト混り粗砂～細砂

SD102南セクション



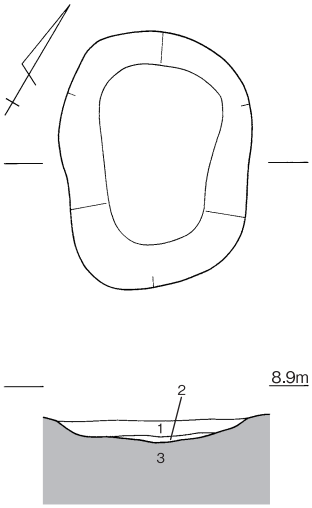
1. 10YR4/1 褐灰 細砂混りシルト
2. 10YR3/3 暗褐 シルト混り粗砂～細砂

SD114･SD135



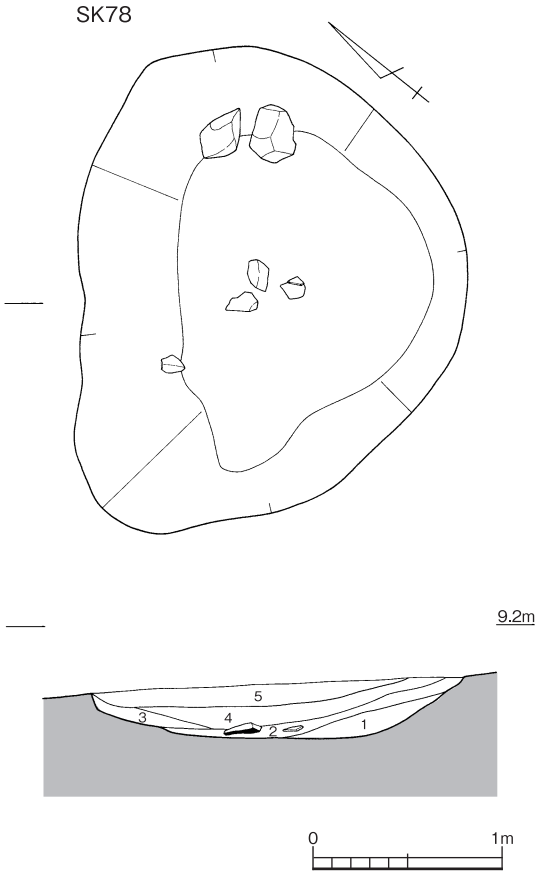
1. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト（ベース）

SK01



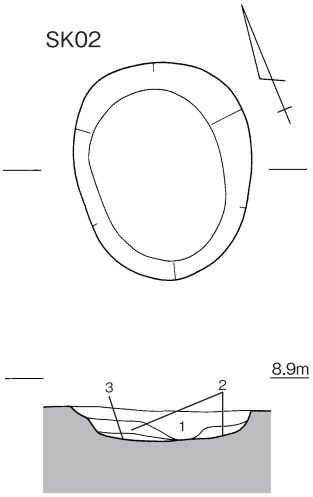
1. 5Y4/1 灰 シルト 部分的に10YR4/4褐
2. 10YR4/2 灰黄褐 粗砂
3. 10YR4/1 褐灰～10YR3/3暗褐 シルト混り細砂

SK78



1. 10YR4/1 褐灰 シルト 粗砂混り細砂
2. 2.5Y2/1 黒 粗砂混り粘質シルト（炭多く含む）（遺物含む）
3. 2.5Y4/1 黄灰 細砂～粗砂混りシルト
4. 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混り粘質シルト
5. 10YR6/2 灰黄褐 粗砂混りシルト
6. 10YR5/1 褐灰 10YR4/4褐 シルト混り細砂～粗砂

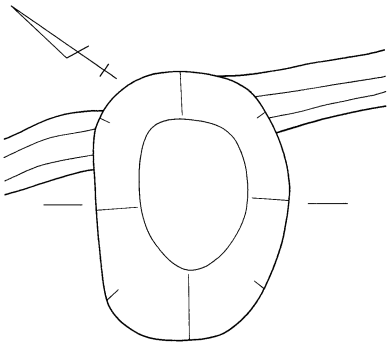
SK02

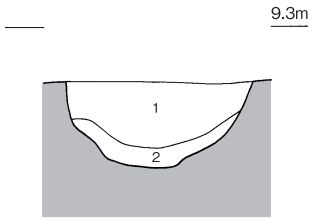


1. 5Y5/1 灰 細砂～粗砂
2. 5Y5/1 灰 シルト～細砂
3. 5Y4/1 灰 シルト

溝SD･土坑SK 平面･断面図

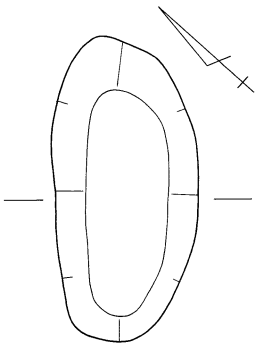
SK105

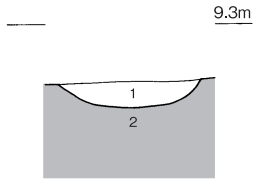




1. 2.5Y4/1 褐灰 シルト混り細砂（酸化鉄・マンガン含む）
2. 2.5Y4/1 褐灰 細砂混りシルト

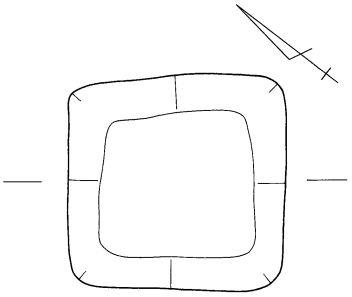
SK147

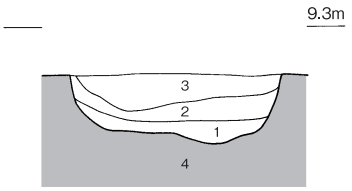




1. 10YR4/1 褐灰 細砂混りシルト（酸化鉄・マンガン）
2. 2.5Y3/2 黒褐 シルト混り細砂～粗砂

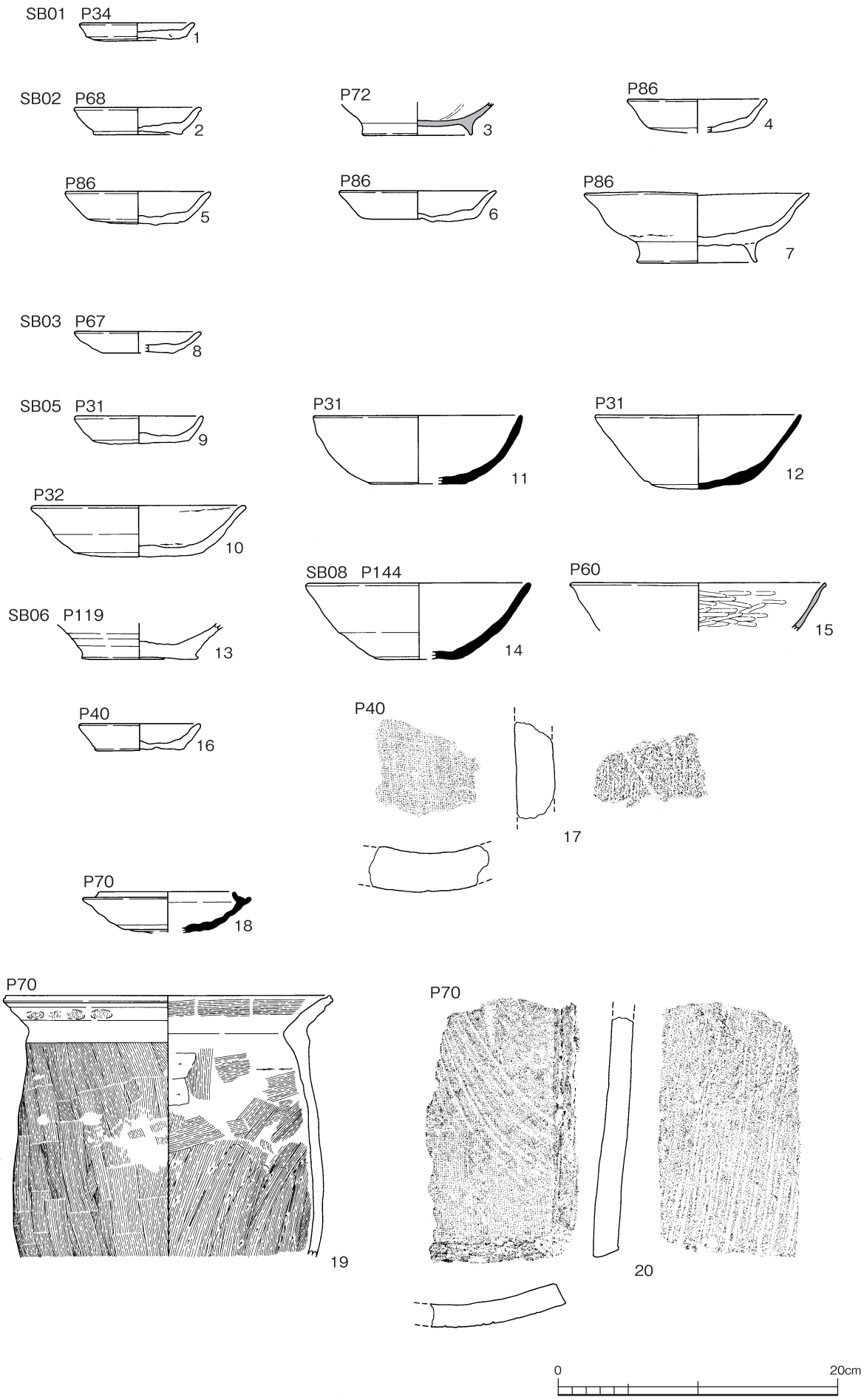
SK148



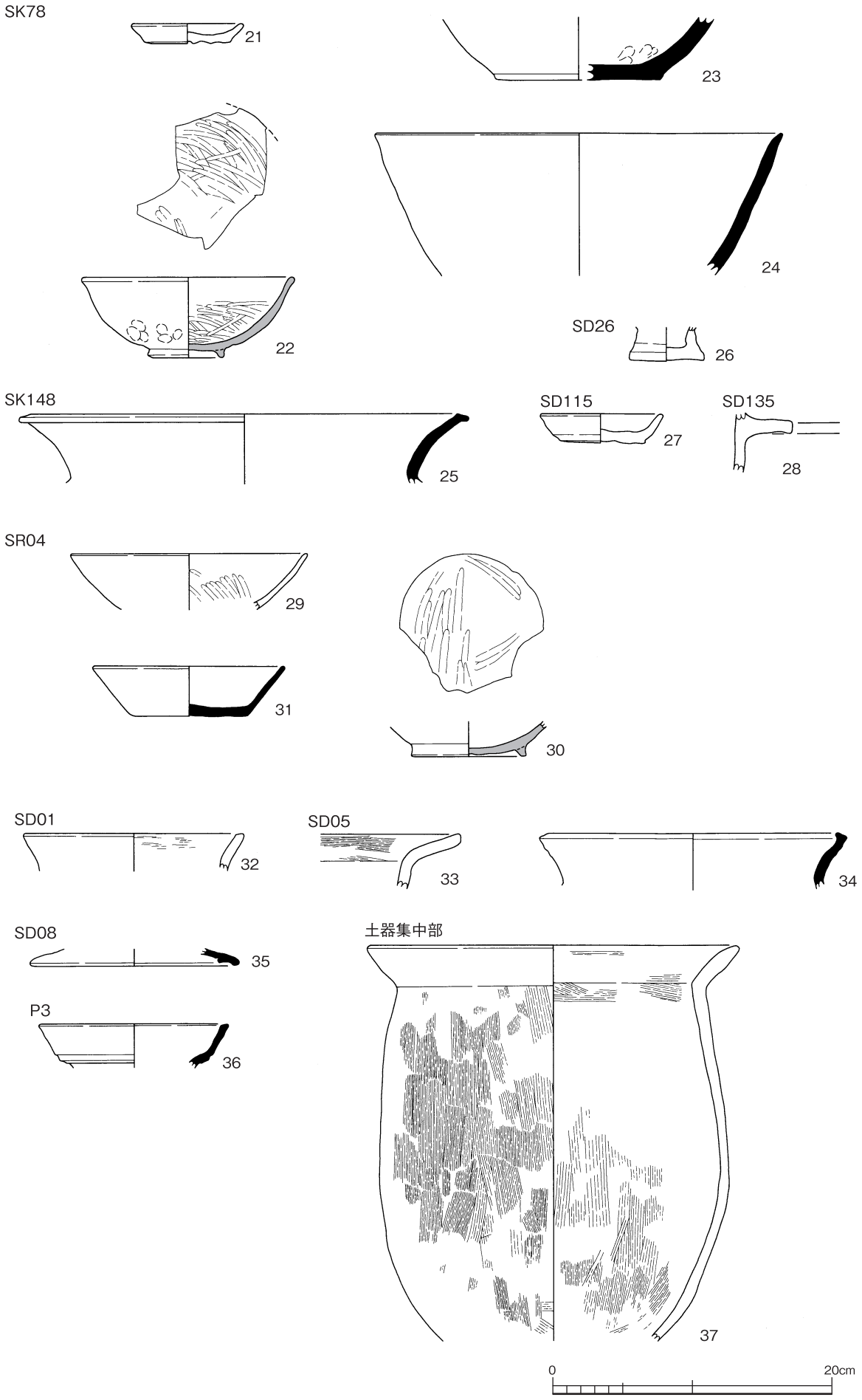


1. 10YR4/1 褐灰 細砂混り粘質シルト
2. 10YR4/2 灰黄褐 細砂混り粘質シルト
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混りシルト
4. 10YR3/2 黒褐 シルト

土坑SK　平面･断面図

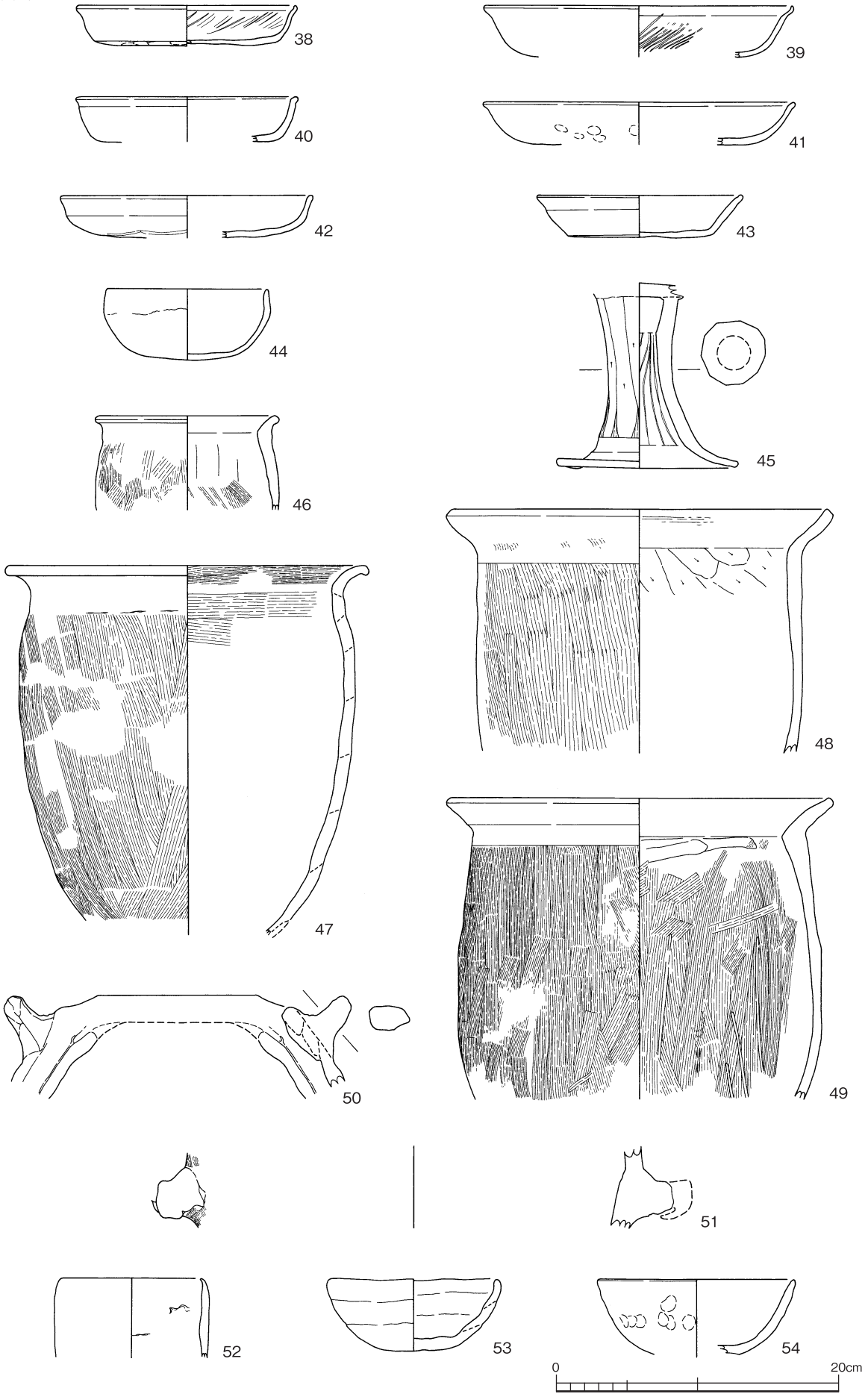

SB01 P34
1
SB02 P68
2
P72
3
P86
4
P86
5
P86
6
P86
7
SB03 P67
8
SB05 P31
9
P31
11
P31
12
P32
10
SB08 P144
14
P60
15
SB06 P119
13
P40
16
P40
17
P70
18
P70
19
P70
20
0
20cm

出土遺物1（土器1・瓦）


SK78
21
23
24
22
SD26
26
SK148
25
SD115
27
SD135
28
SR04
29
31
30
SD01
32
SD05
33
34
SD08
35
P3
36
土器集中部
37
0
20cm

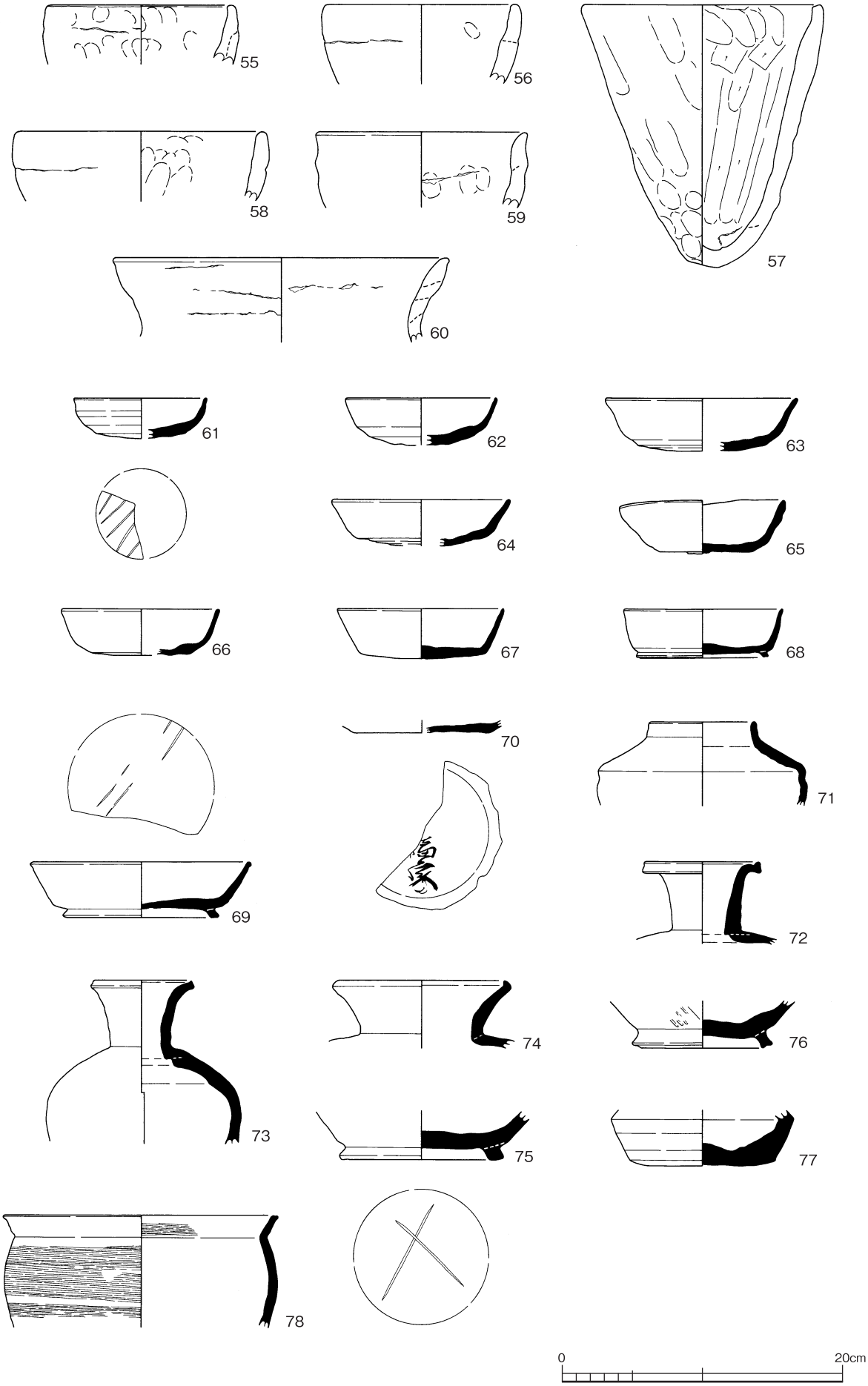
出土遺物2(土器2)

旧河道1

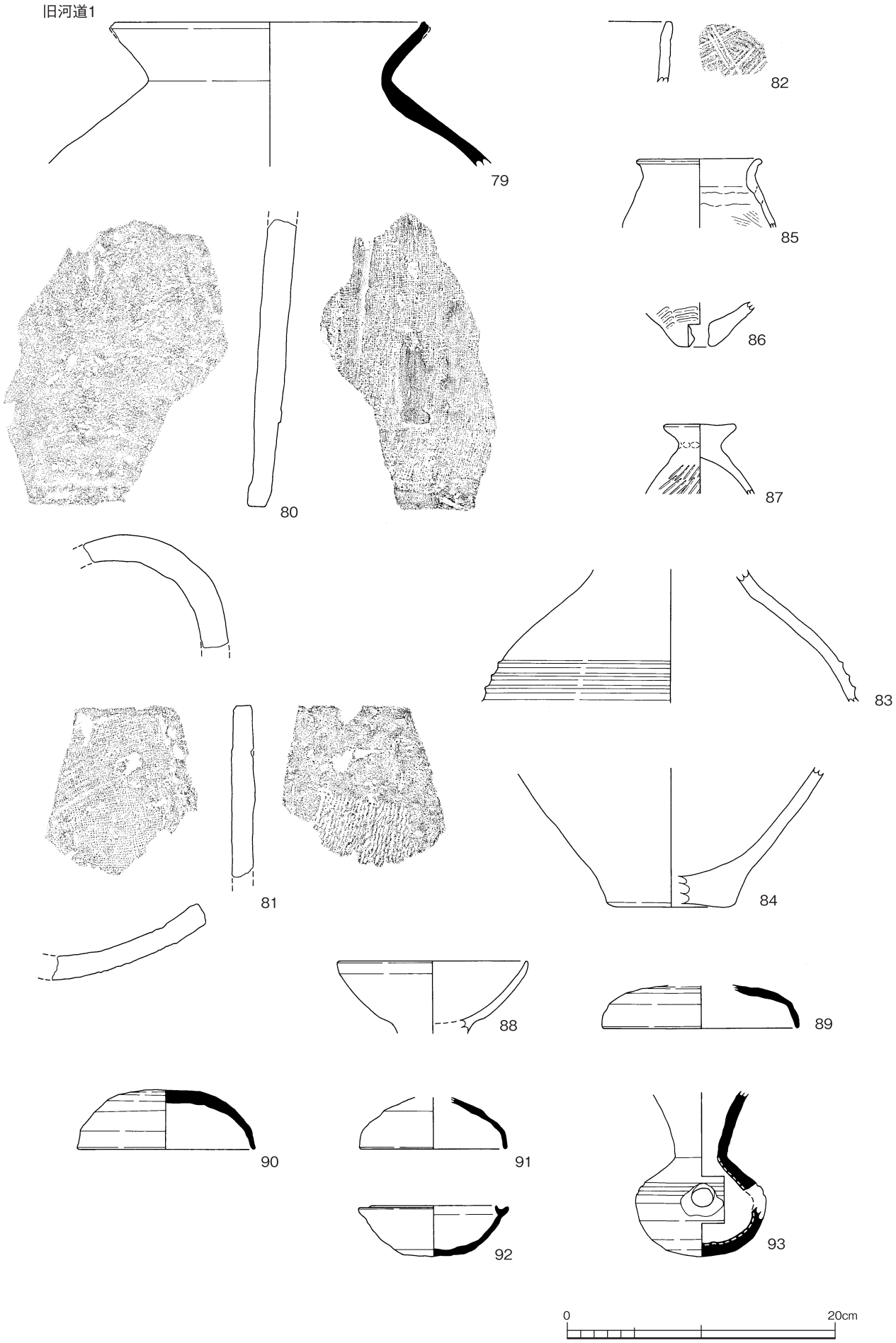


出土遺物3(土器3)

旧河道1

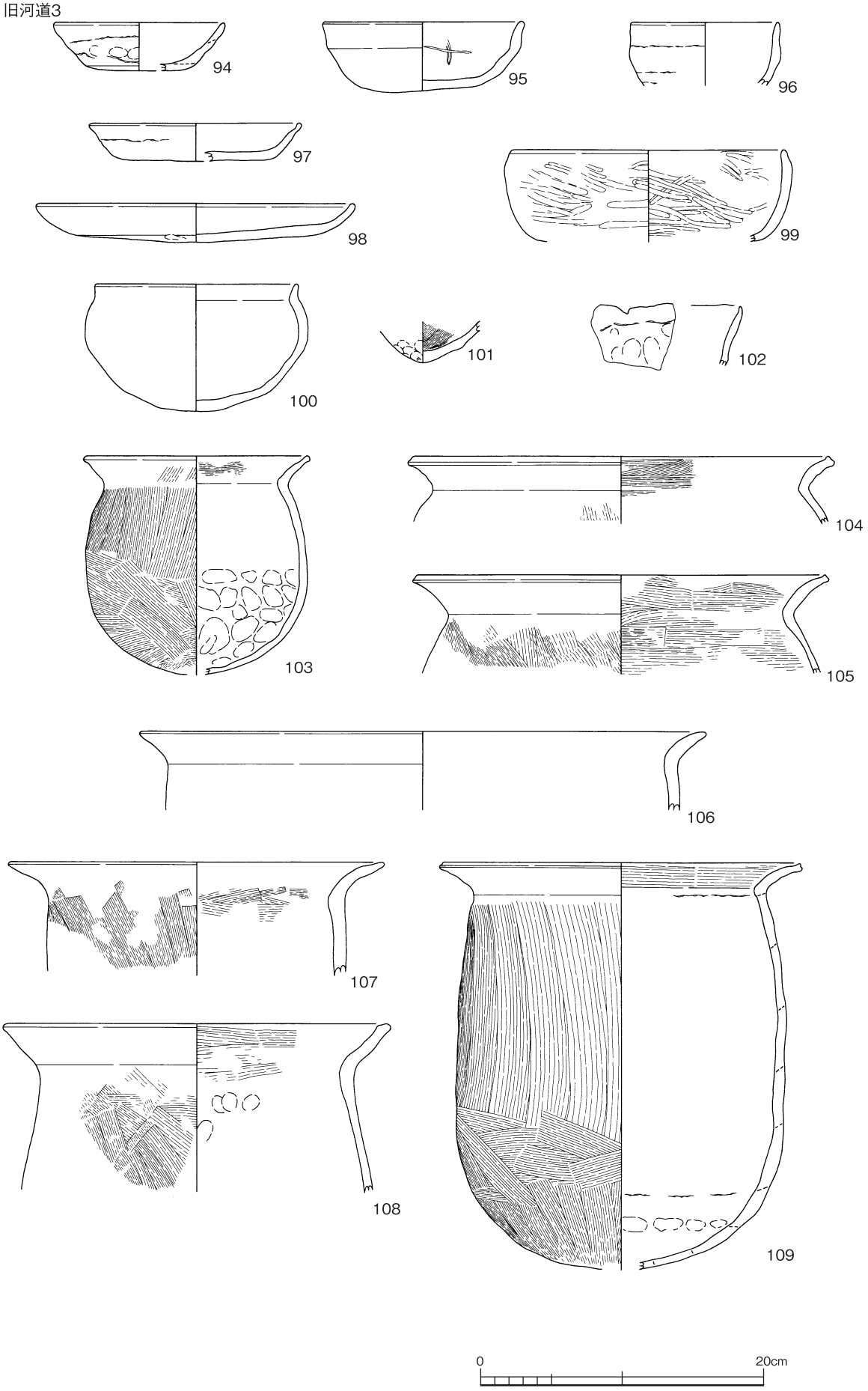


出土遺物4(土器4)



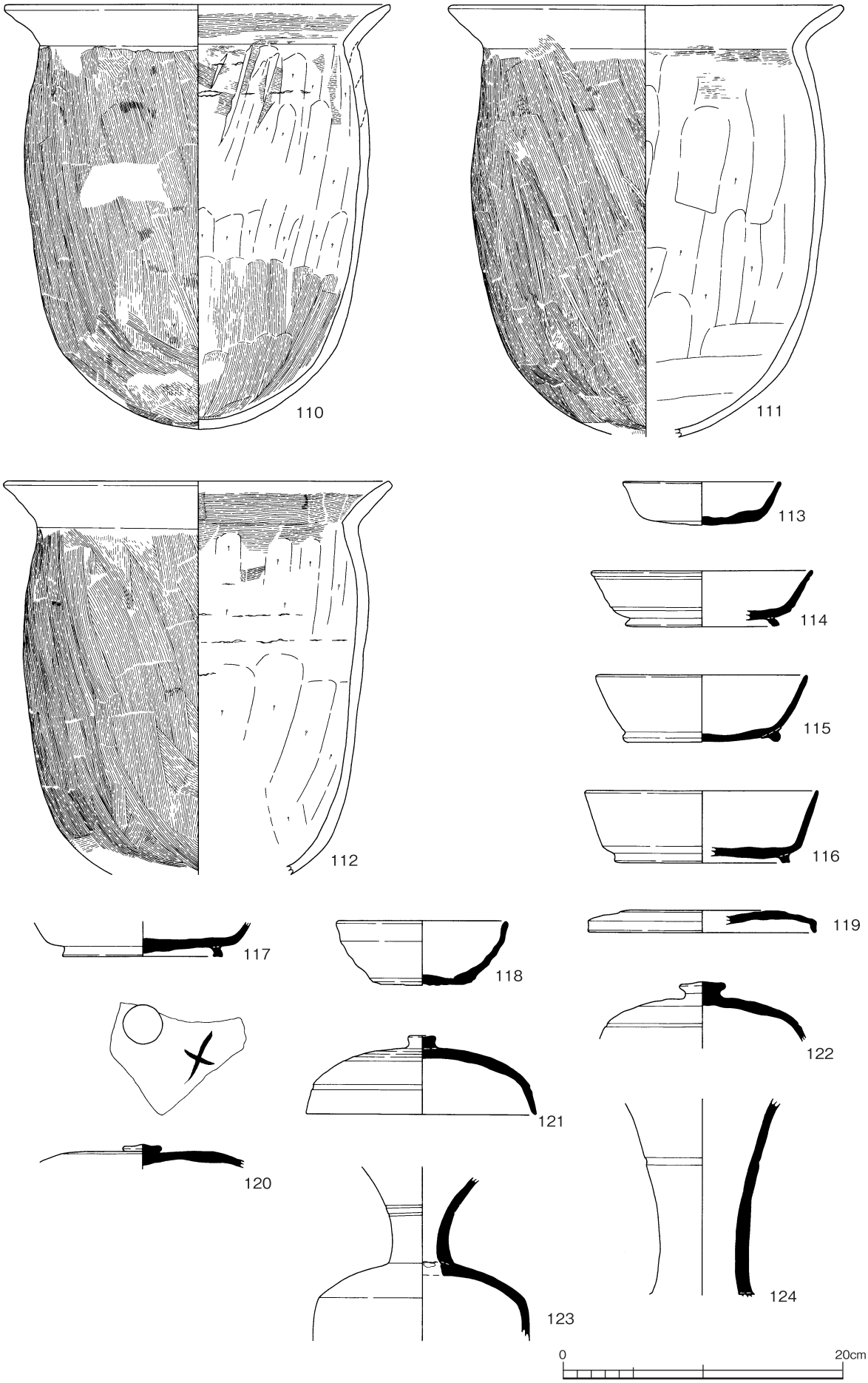
出土遺物5（土器5・瓦）

旧河道3



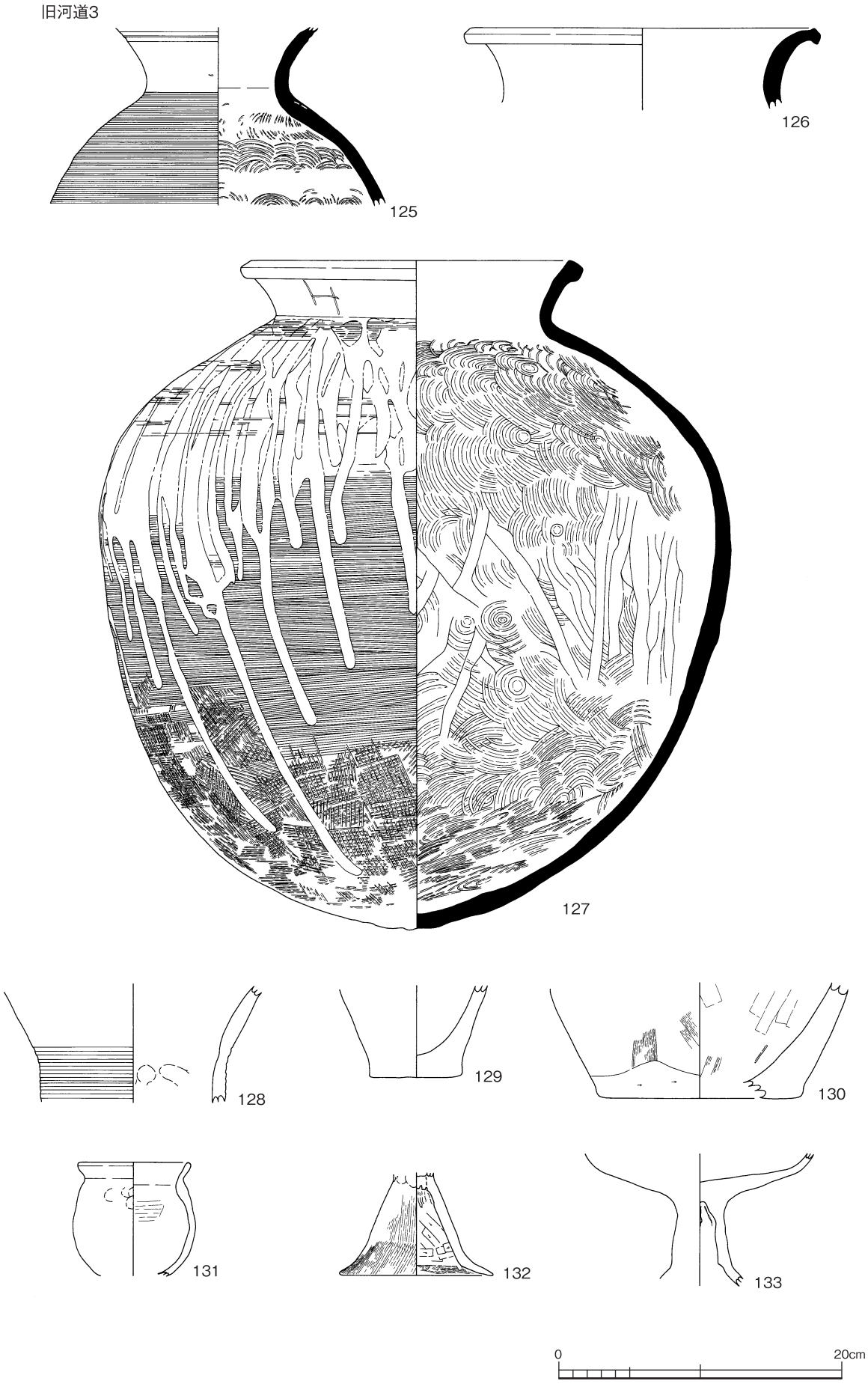
出土遺物6（土器6）

旧河道3



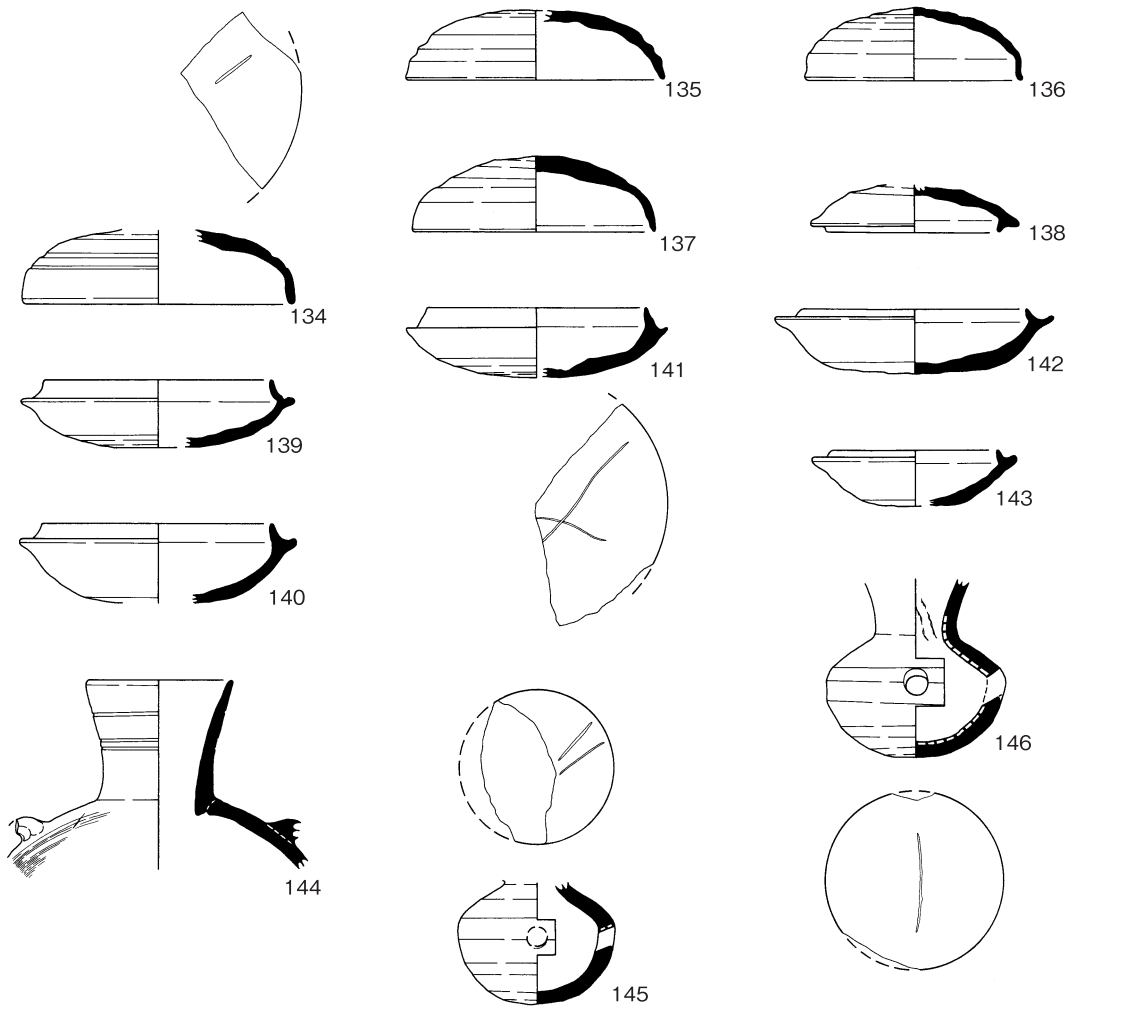
出土遺物7（土器7）

旧河道3

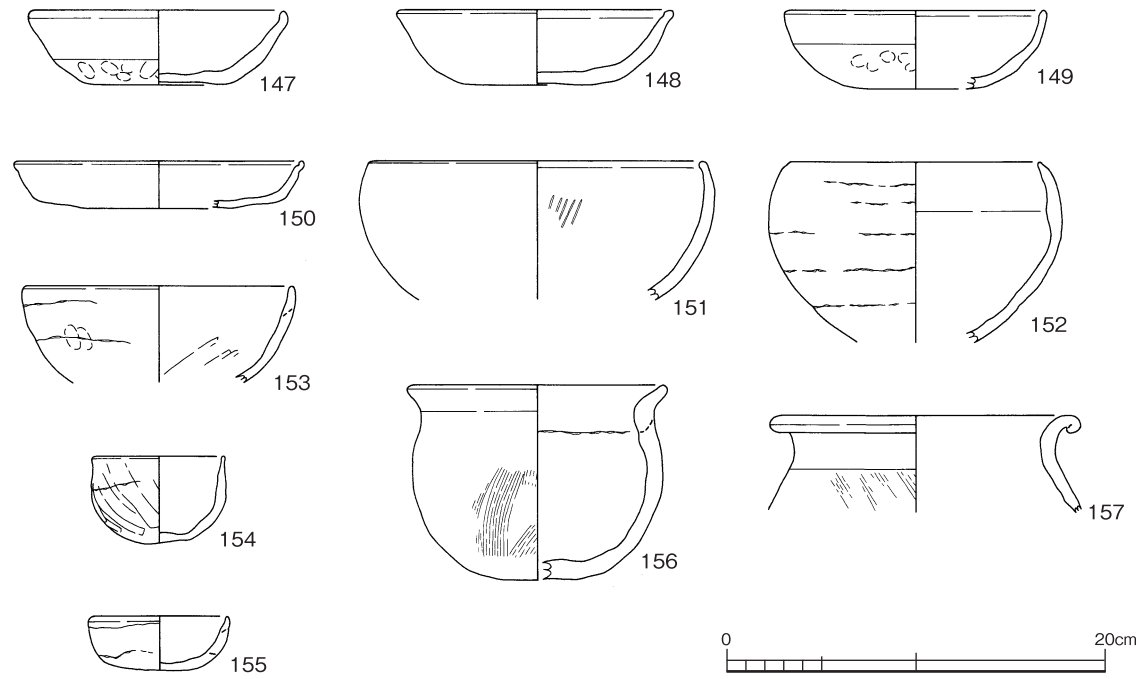


出土遺物8(土器8)

旧河道3

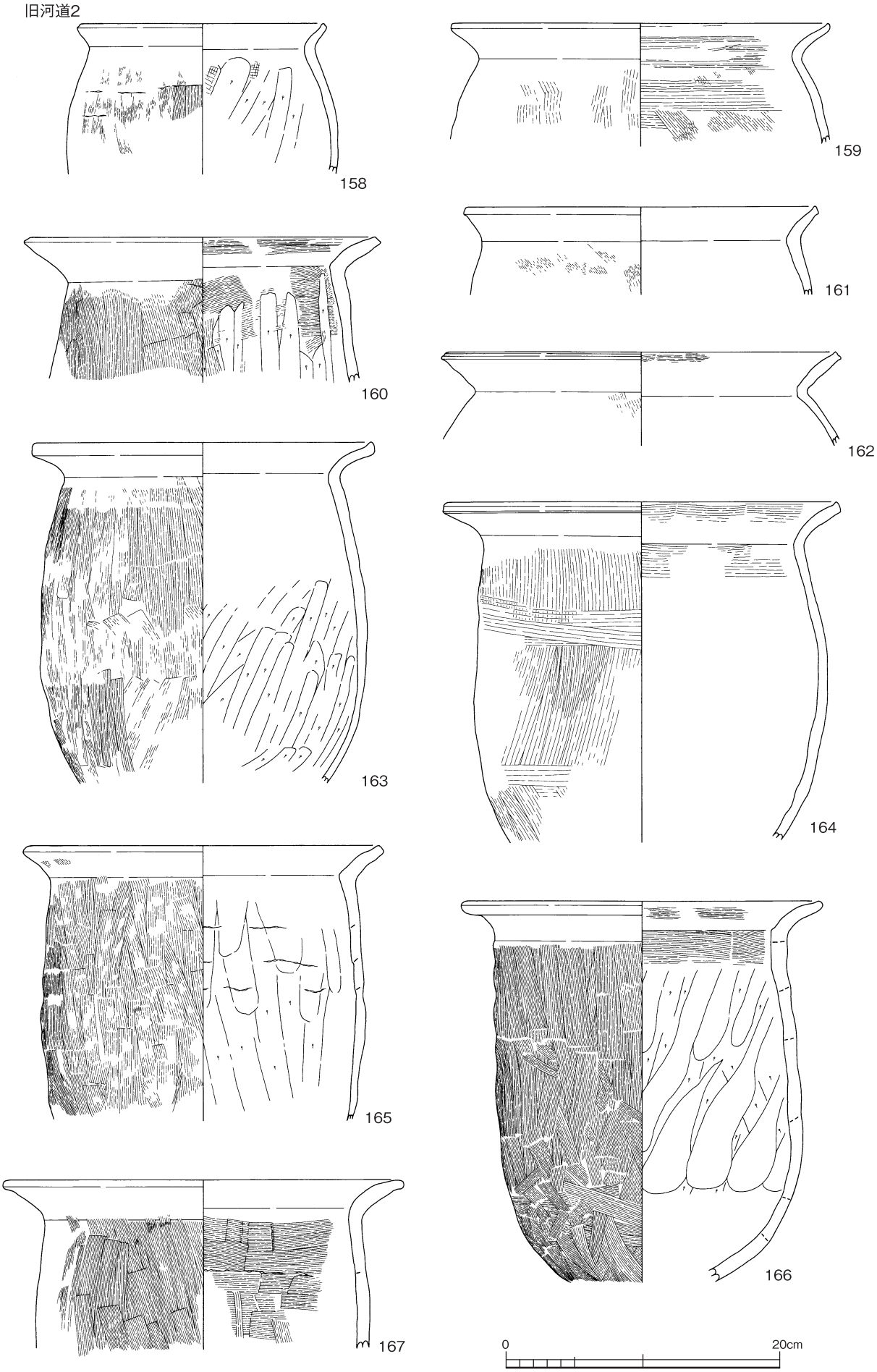


旧河道2



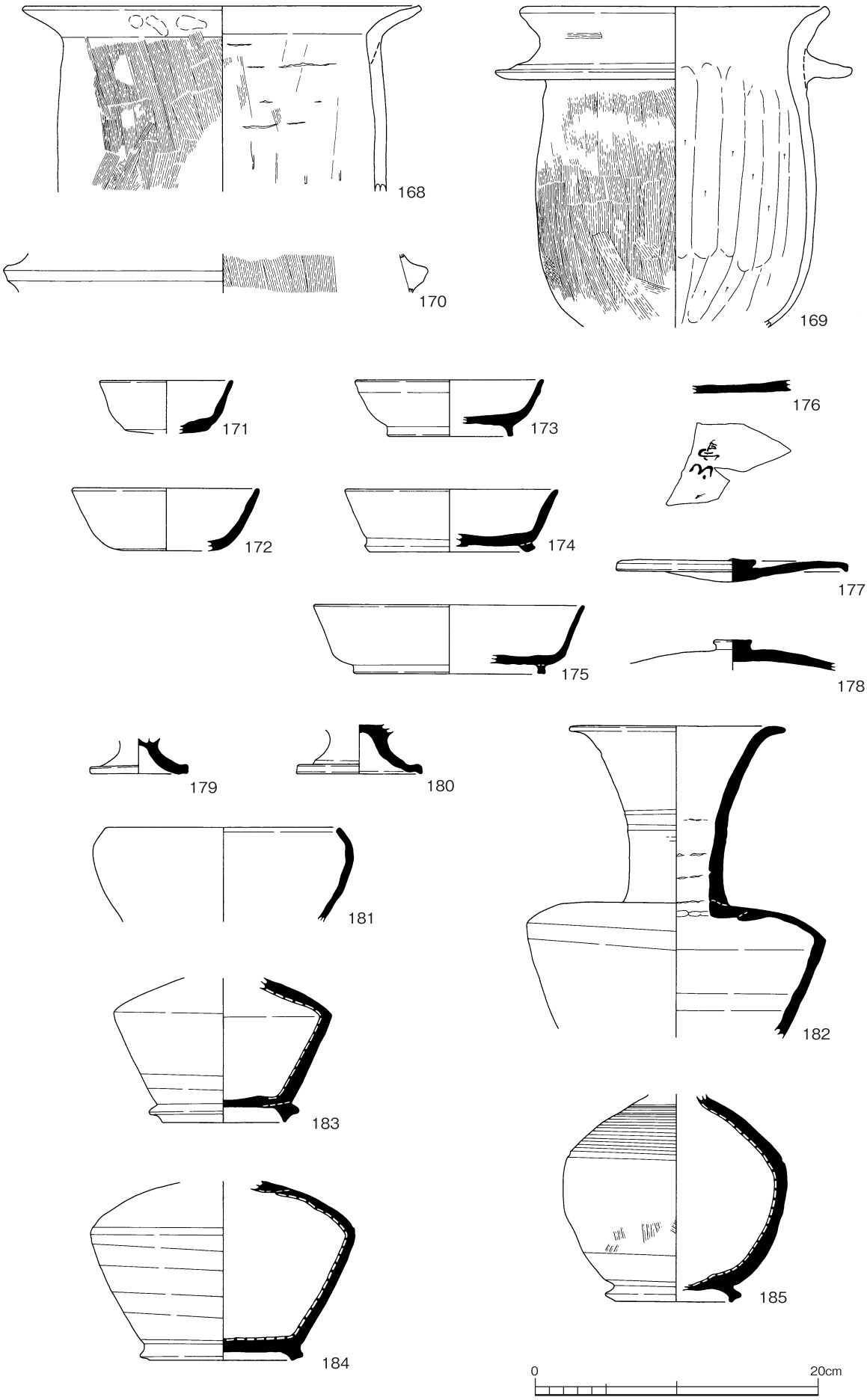
出土遺物9(土器9)

旧河道2



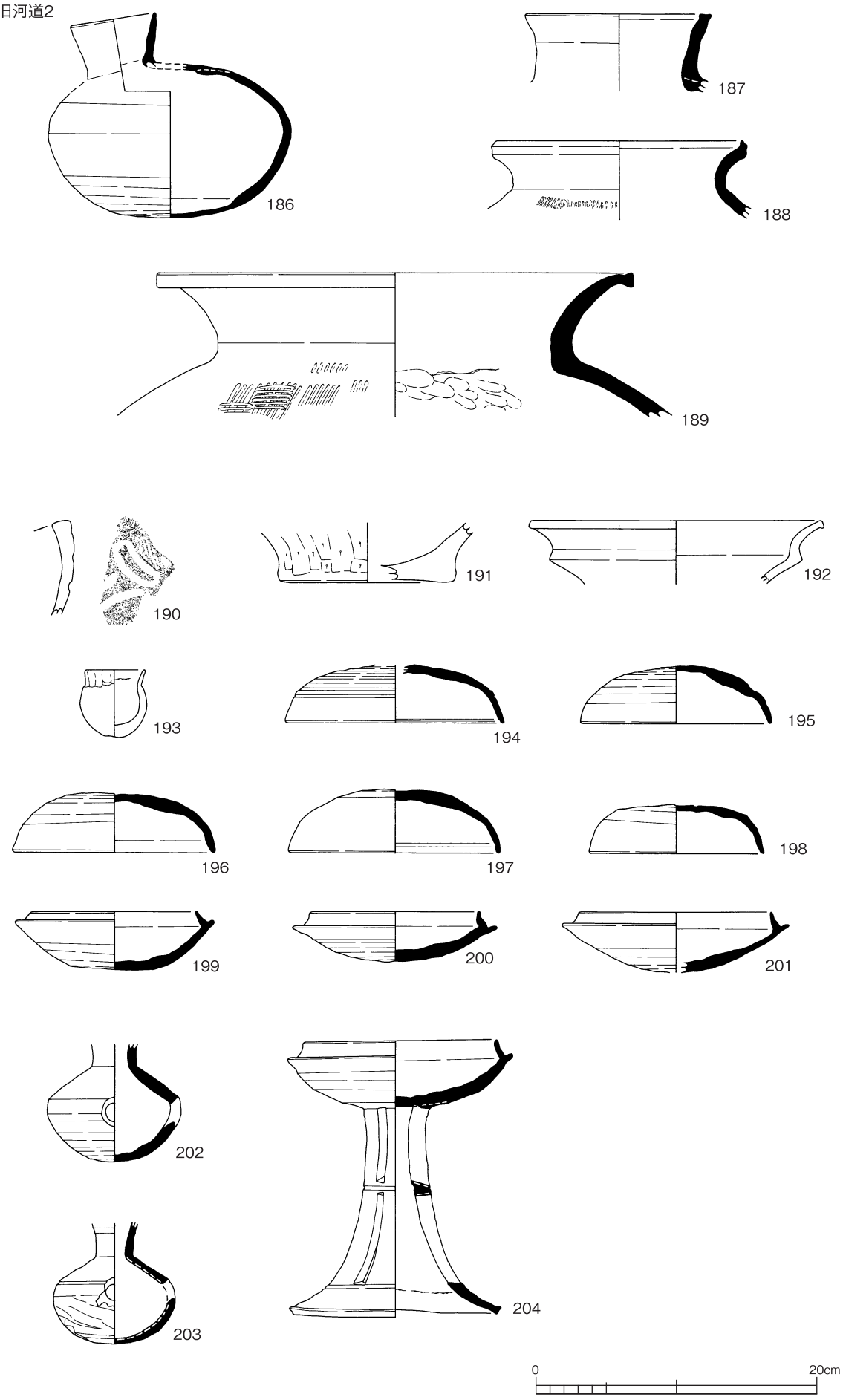
出土遺物10(土器10)

旧河道2



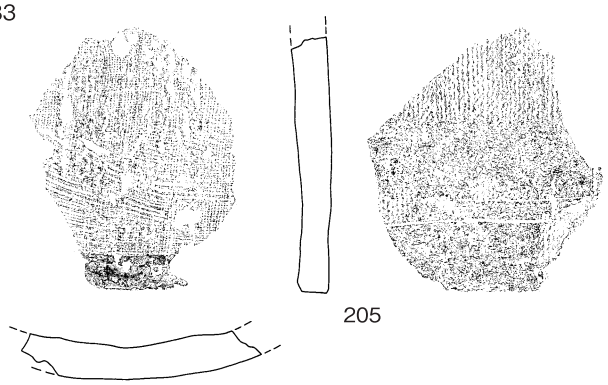
出土遺物11（土器11）

旧河道2

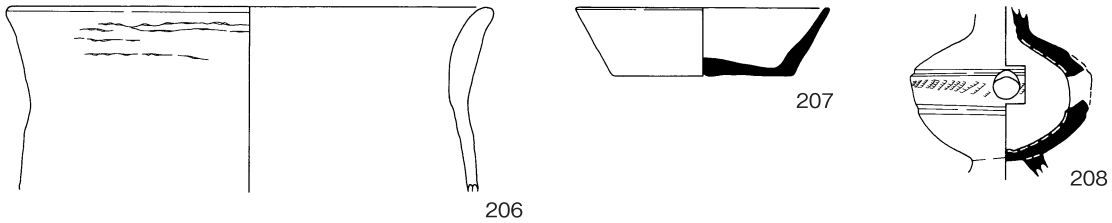


出土遺物12(土器12)

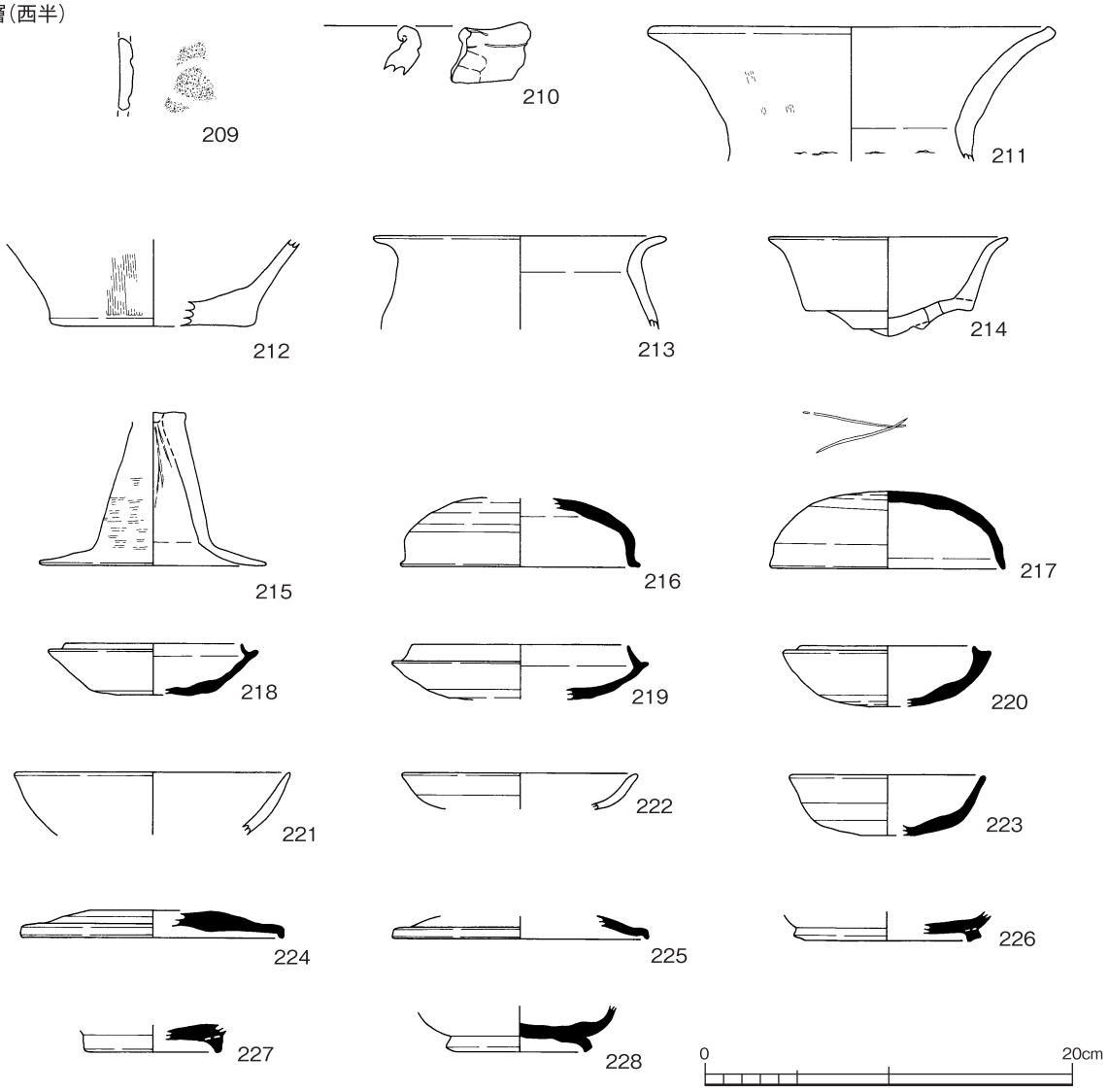
SD183



SD185

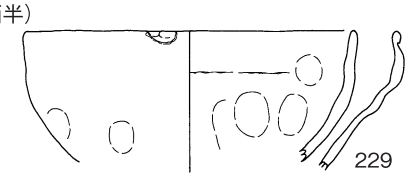


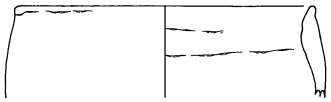
包含層(西半)

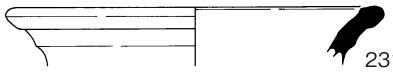


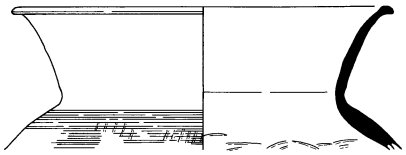
出土遺物13(土器13・瓦)

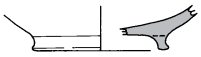
包含層(西半)

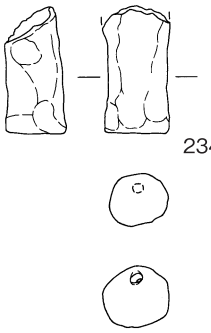


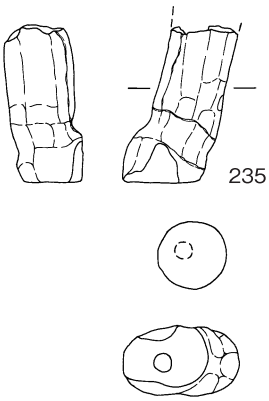




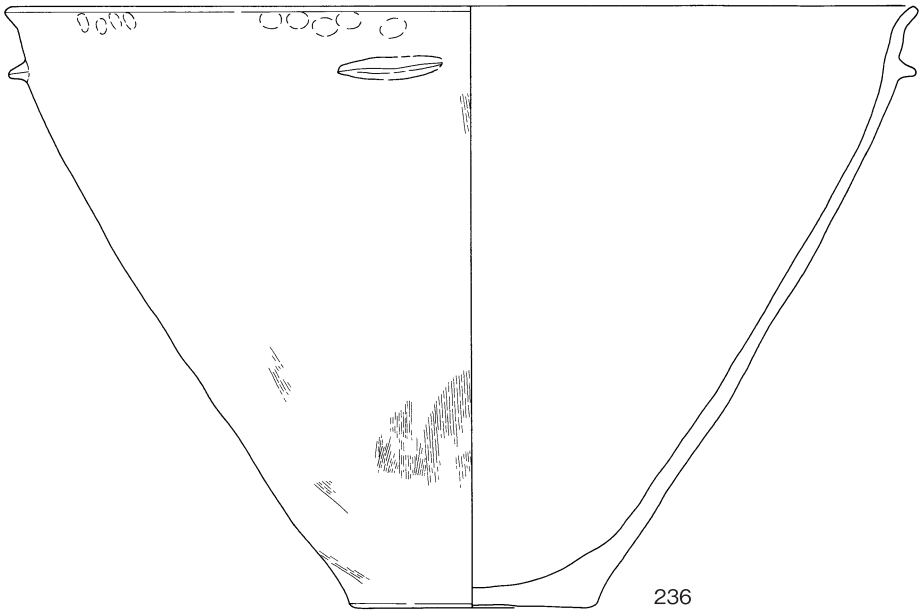


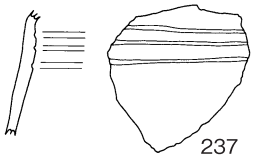


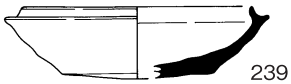


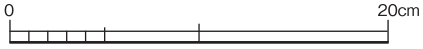


包含層(東半)

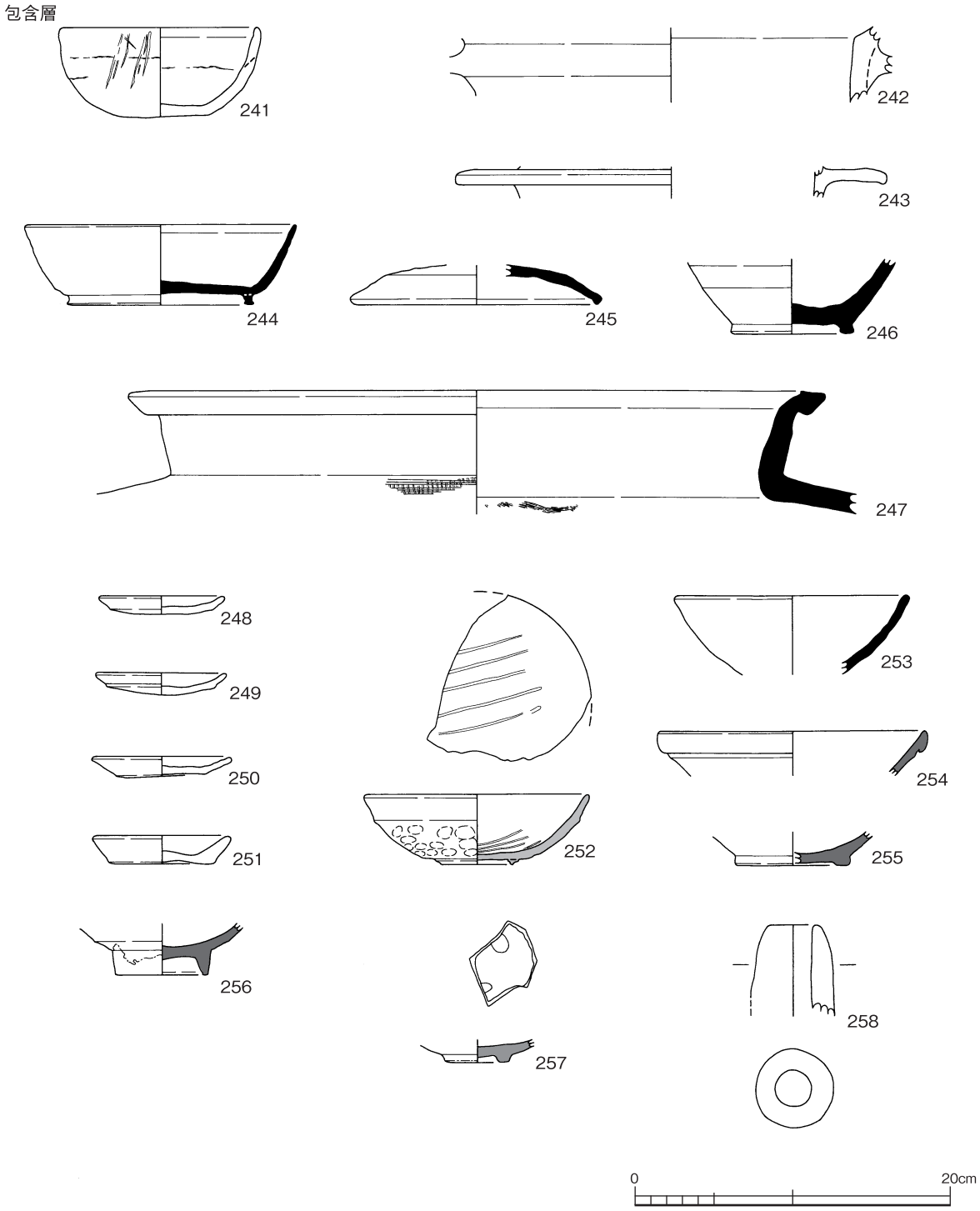


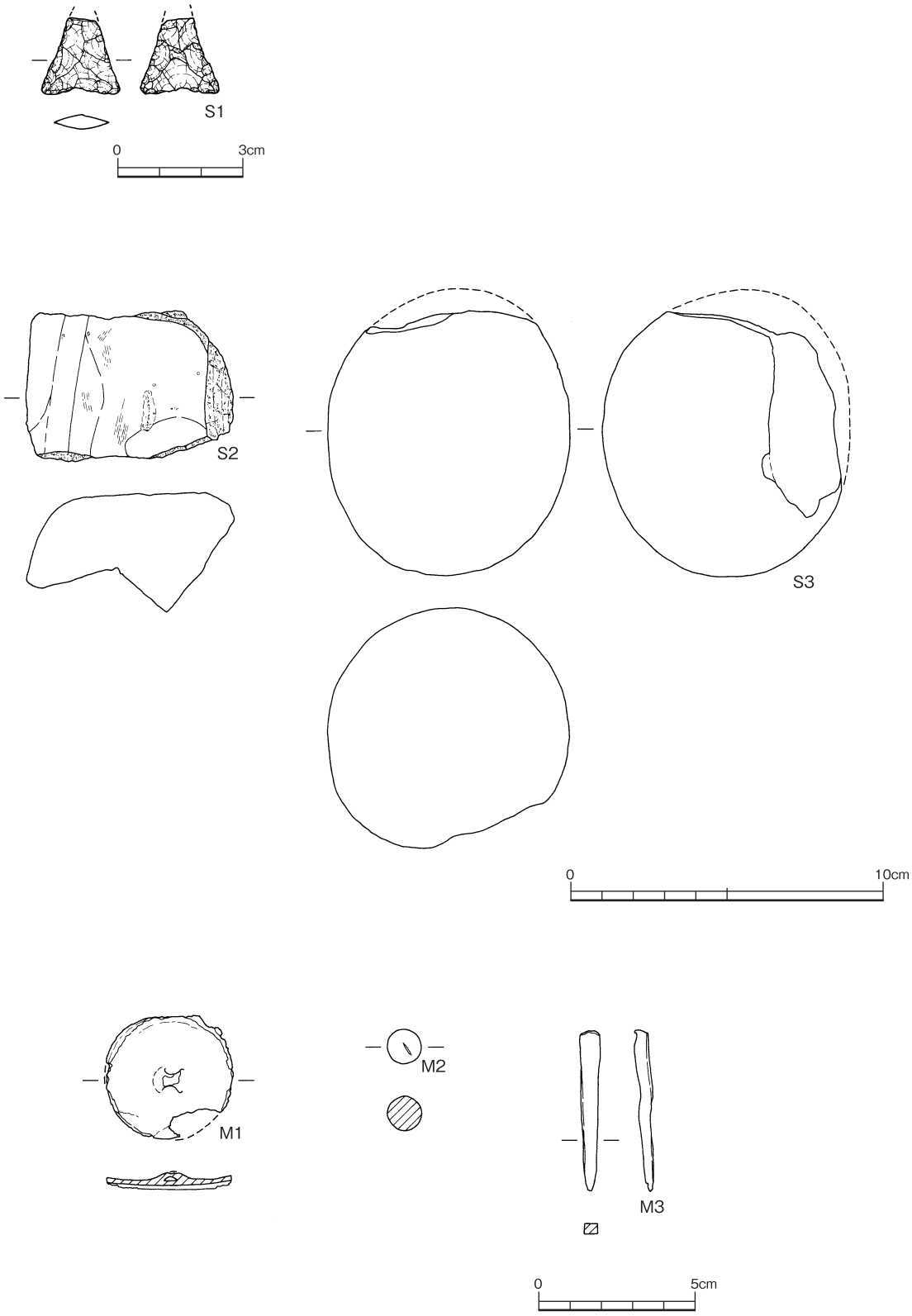




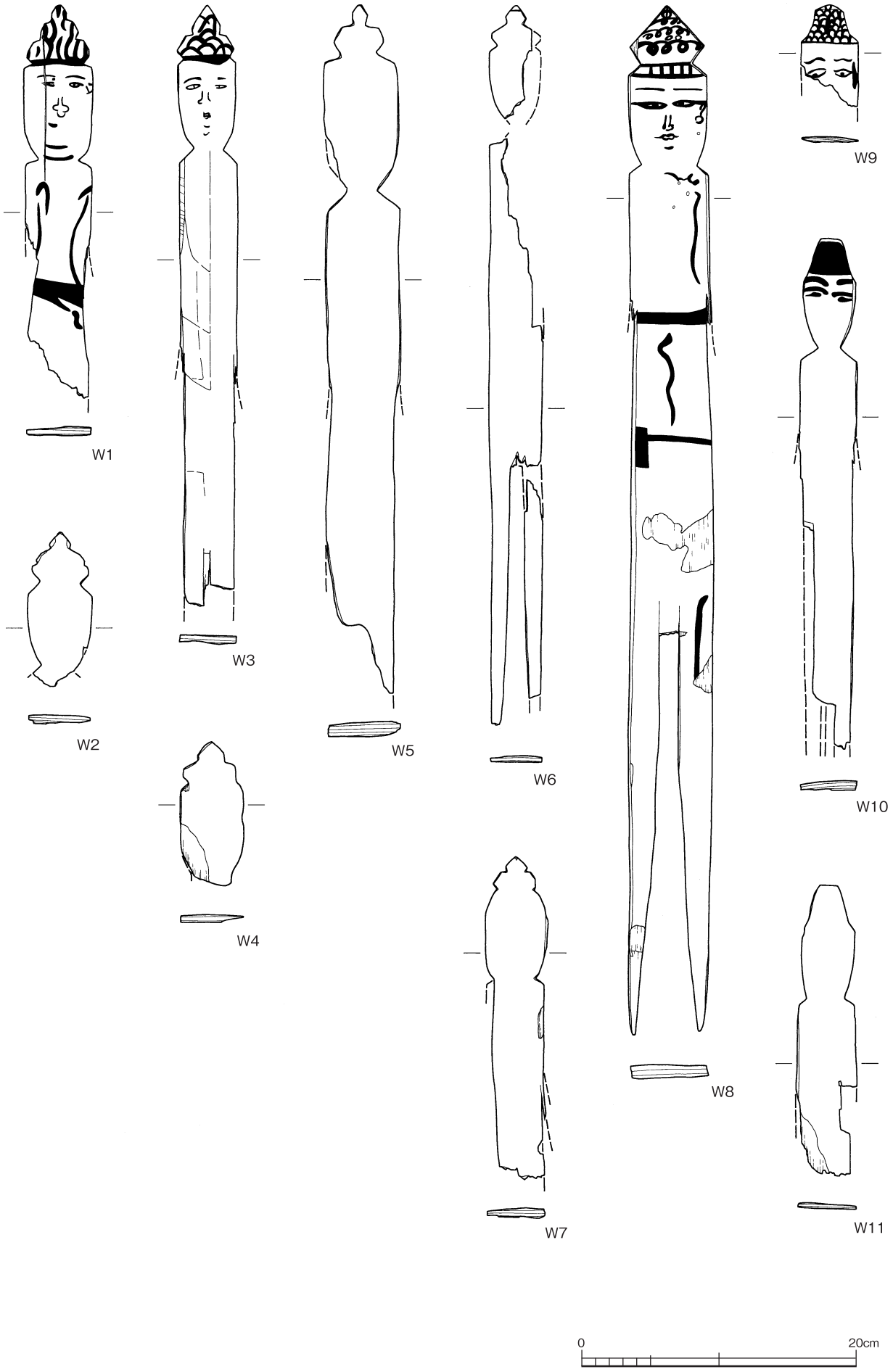


出土遺物14(土器14・土製品)

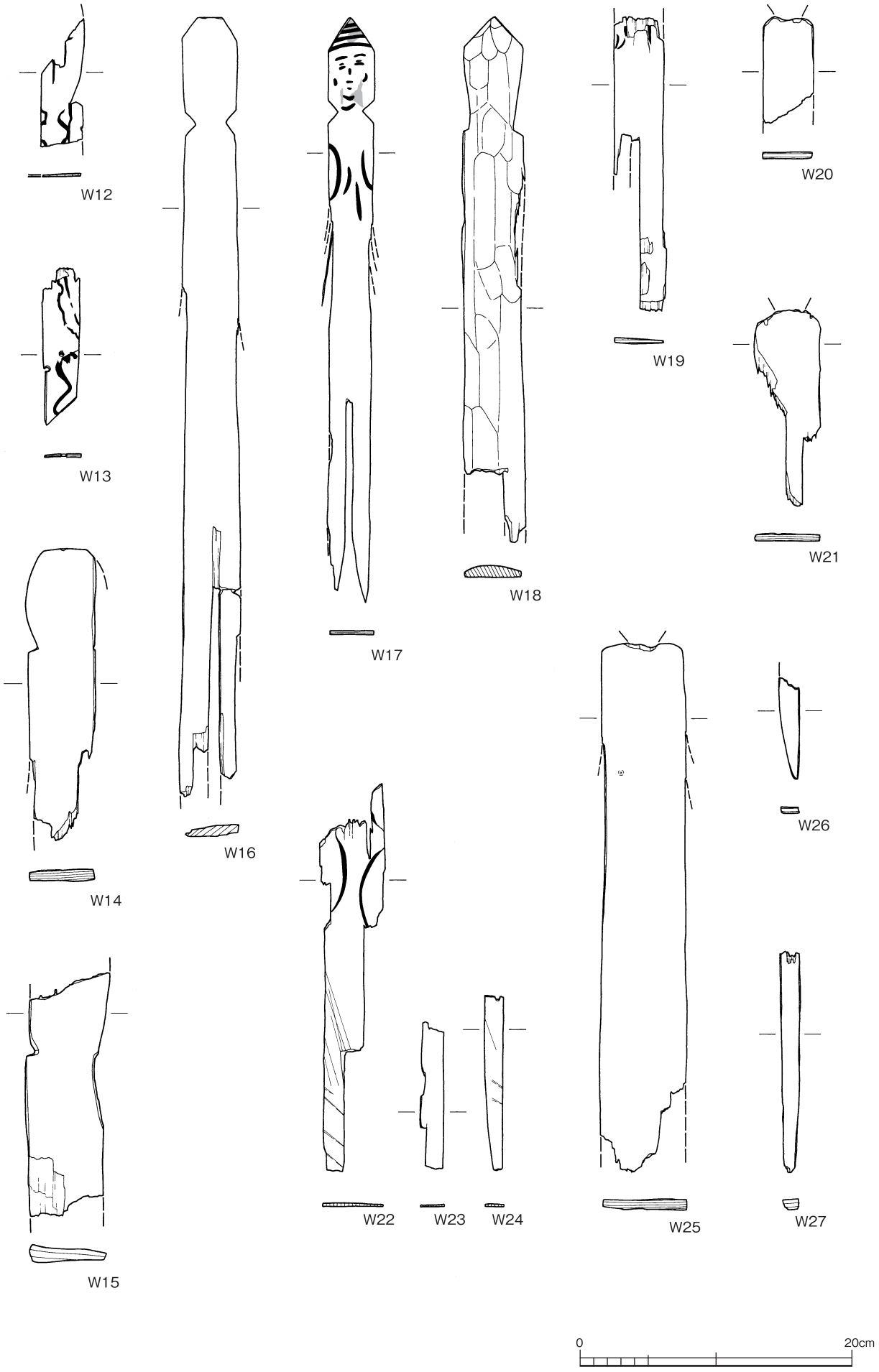

包含層
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
0
20cm



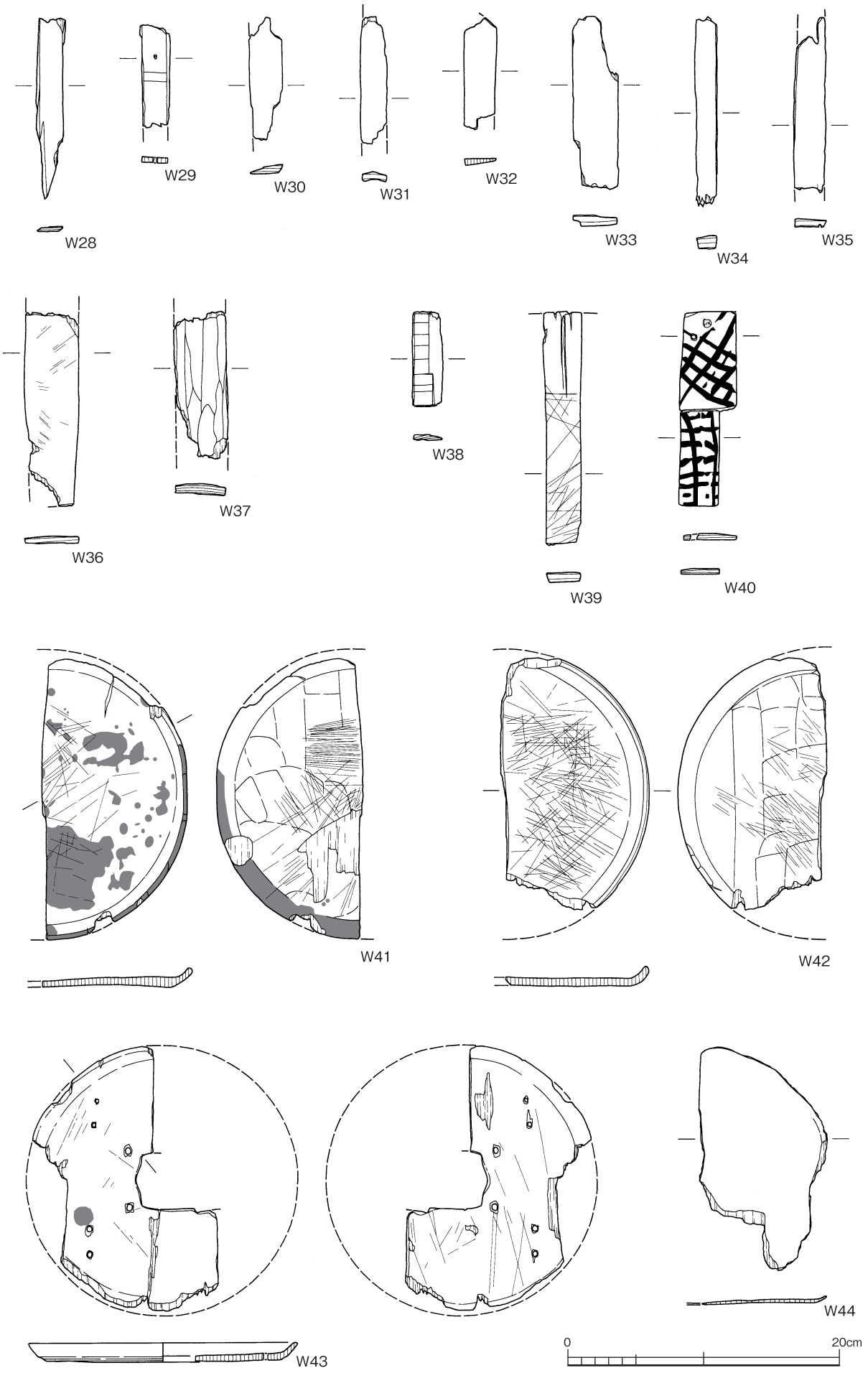
出土遺物16（石器・金属製品）



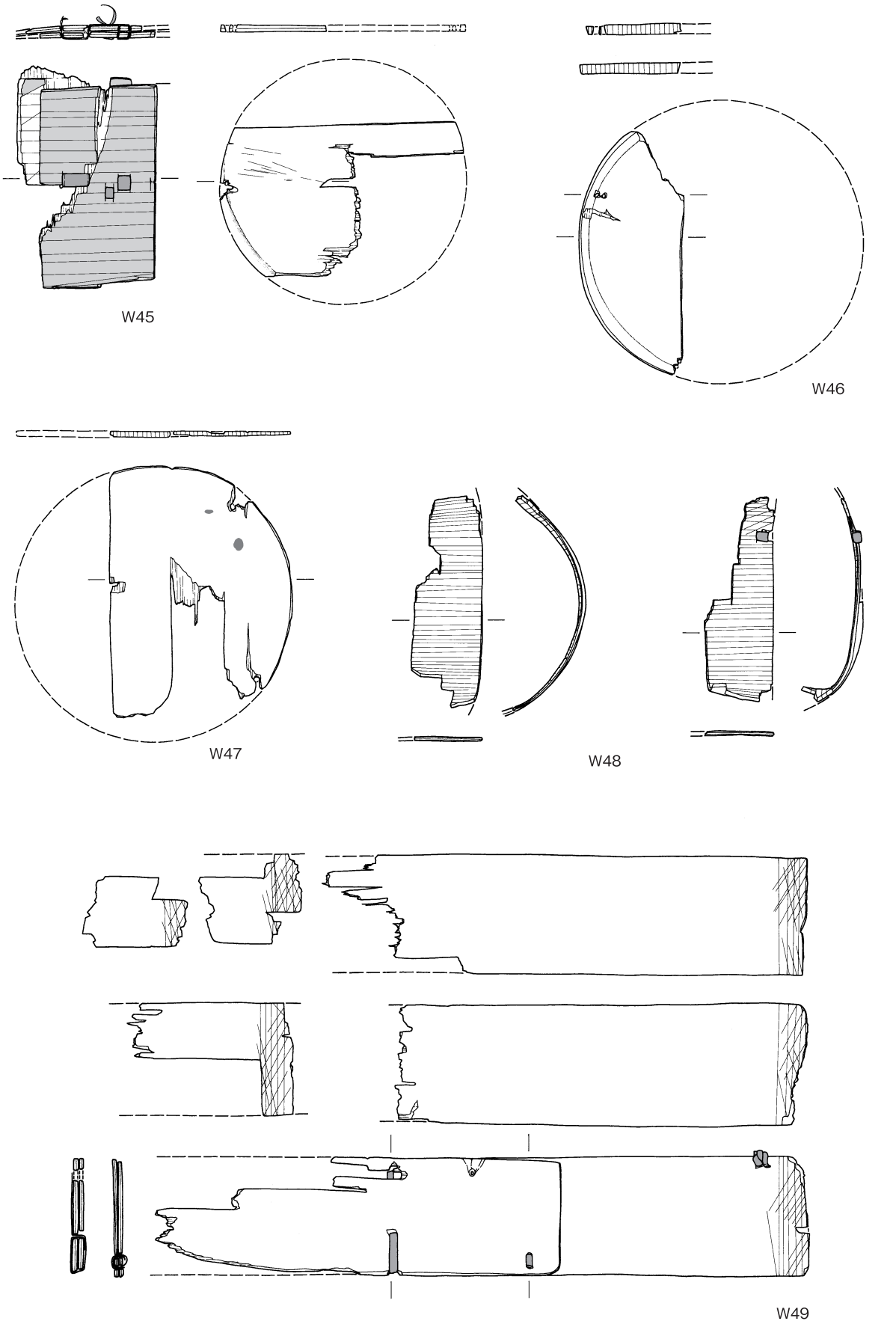
出土遺物17（木製品1）


W12
W13
W14
W15
W16
W17
W18
W19
W20
W21
W22
W23
W24
W25
W26
W27
0
20cm

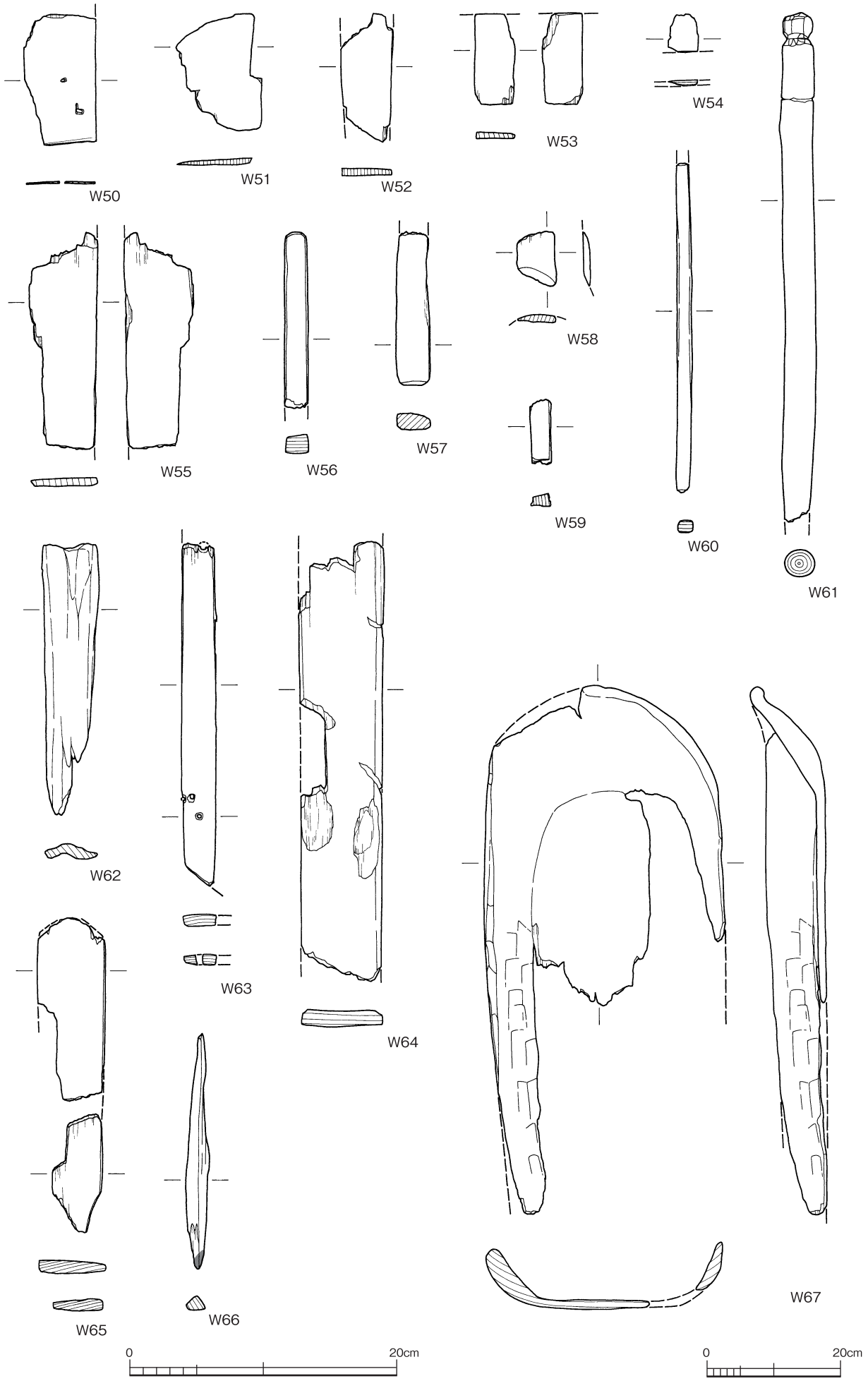
出土遺物18（木製品2）


W28
W29
W30
W31
W32
W33
W34
W35
W36
W37
W38
W39
W40
W41
W42
W43
W44
0
20cm

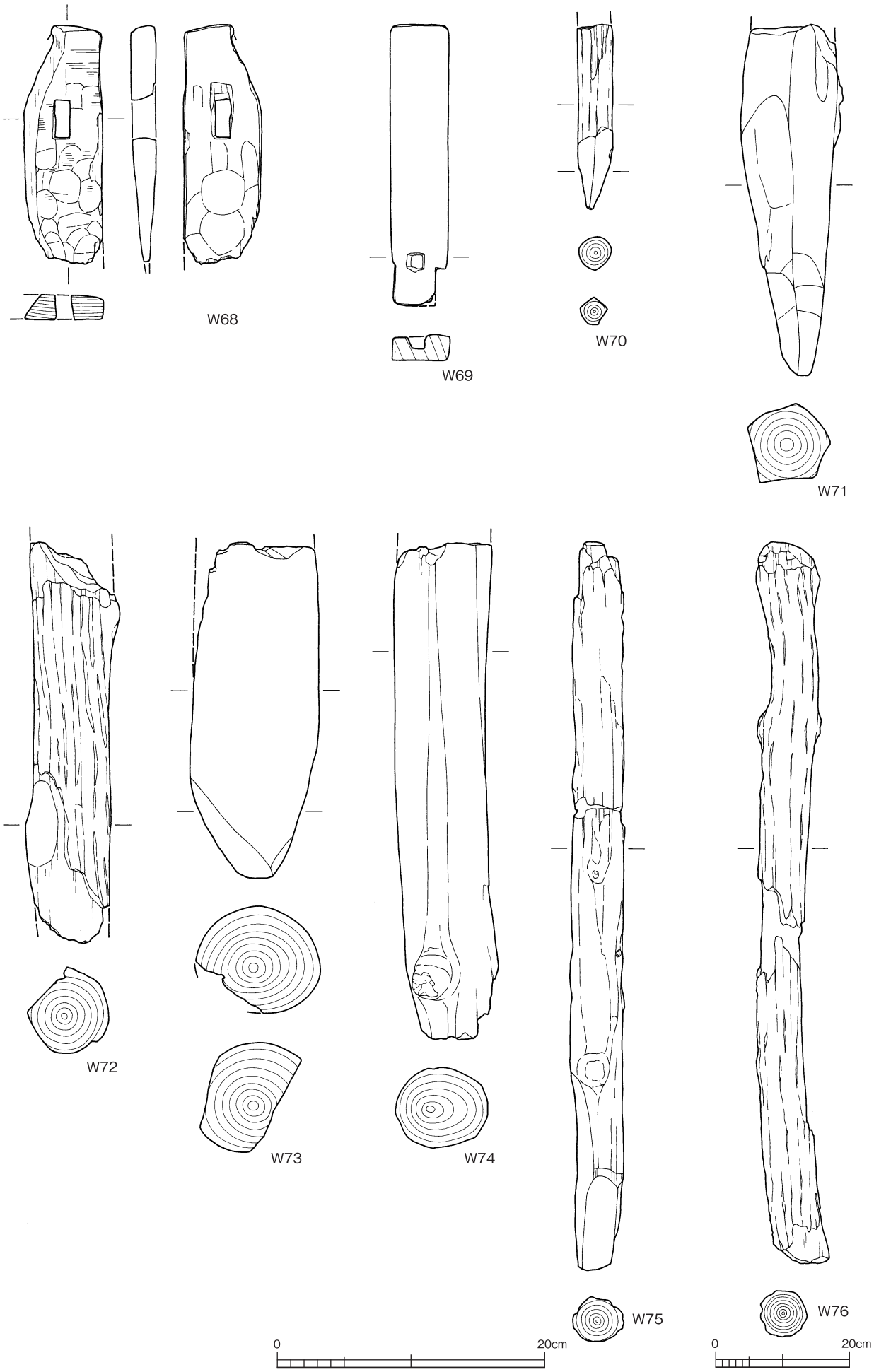
出土遺物19(木製品3)



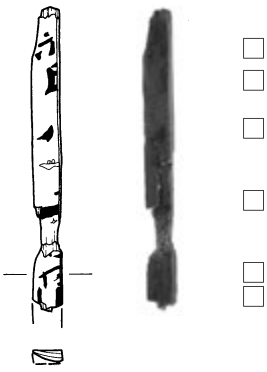
出土遺物20（木製品4）


W50
W51
W52
W53
W54
W55
W56
W57
W58
W59
W60
W61
W62
W63
W64
W65
W66
W67
0
20cm
0
20cm

出土遺物21（木製品5）



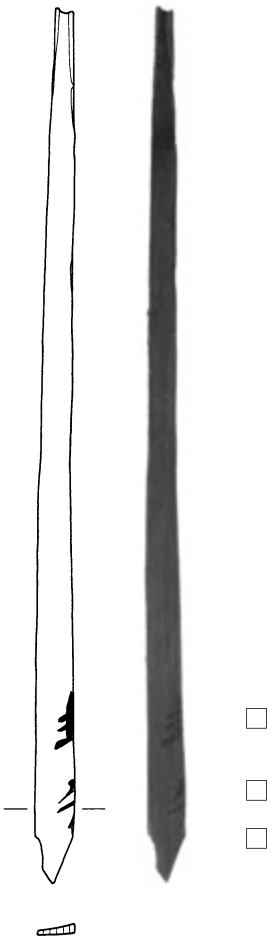
出土遺物22（木製品6）



W77

〔冊　束カ〕
上□一束五
末□二□
□□□□□五把
□

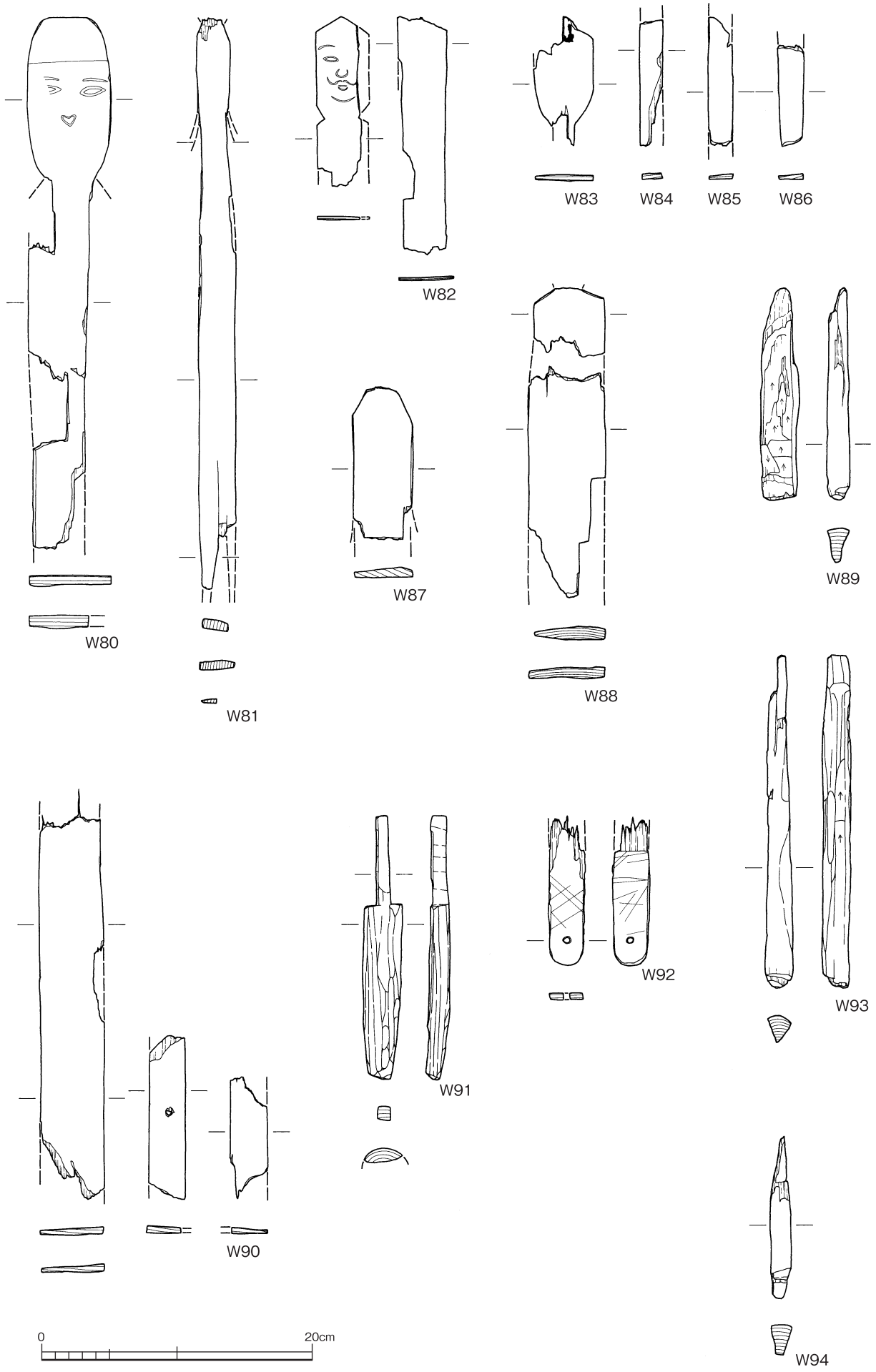
W78



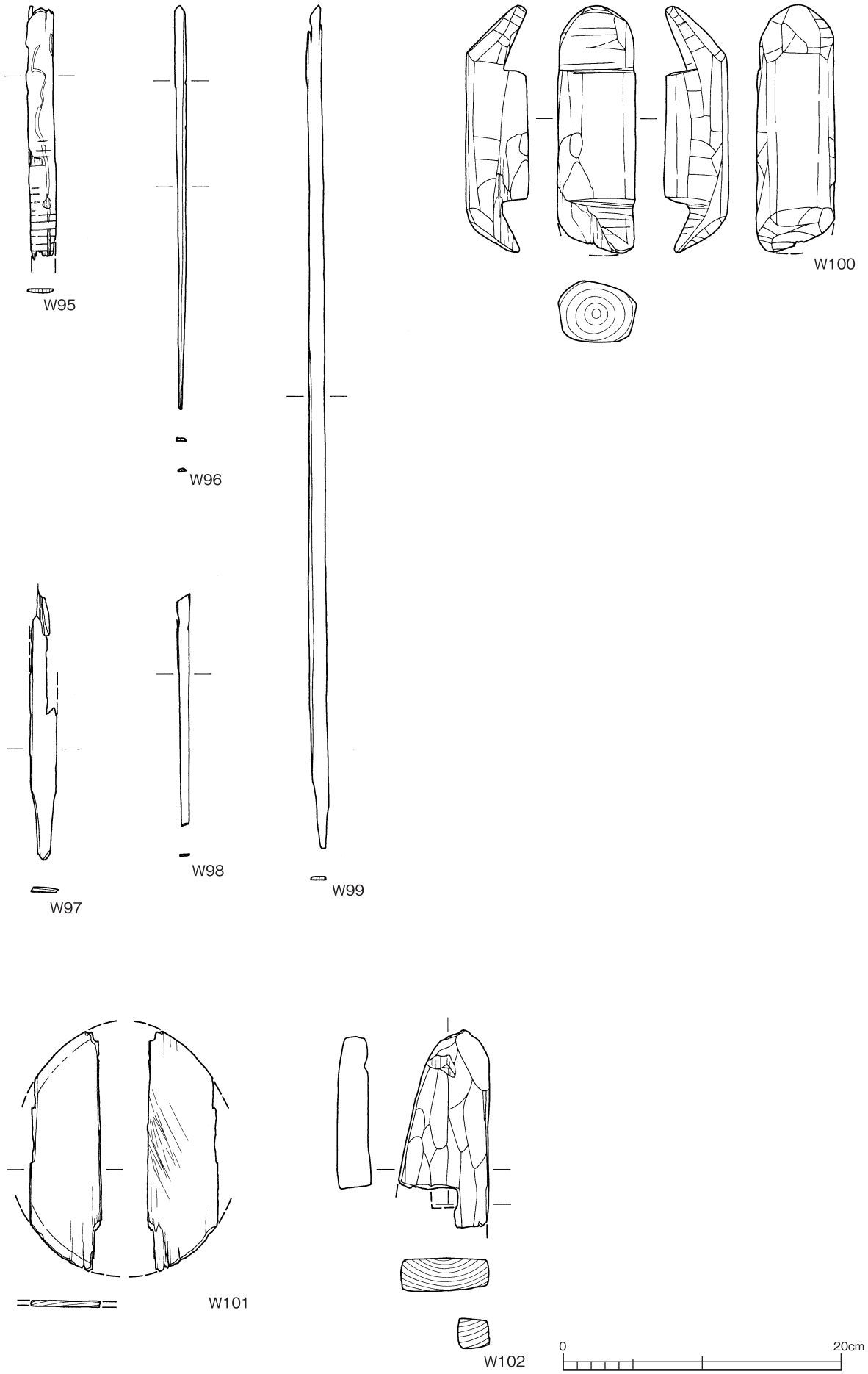
W79

0　10cm

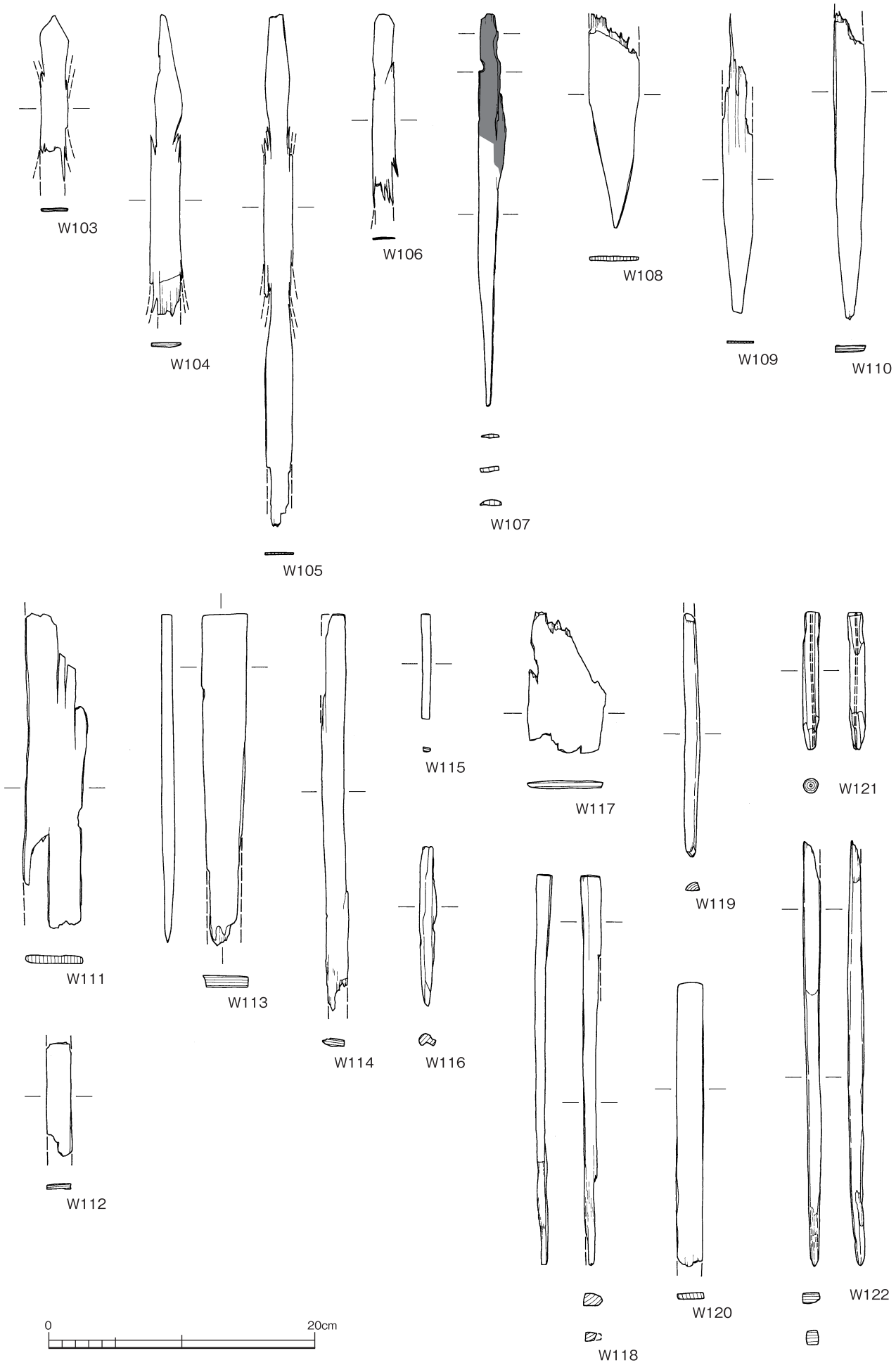
出土遺物23（木製品7）


W80
W81
W82
W83
W84
W85
W86
W87
W88
W89
W90
W91
W92
W93
W94
0
20cm

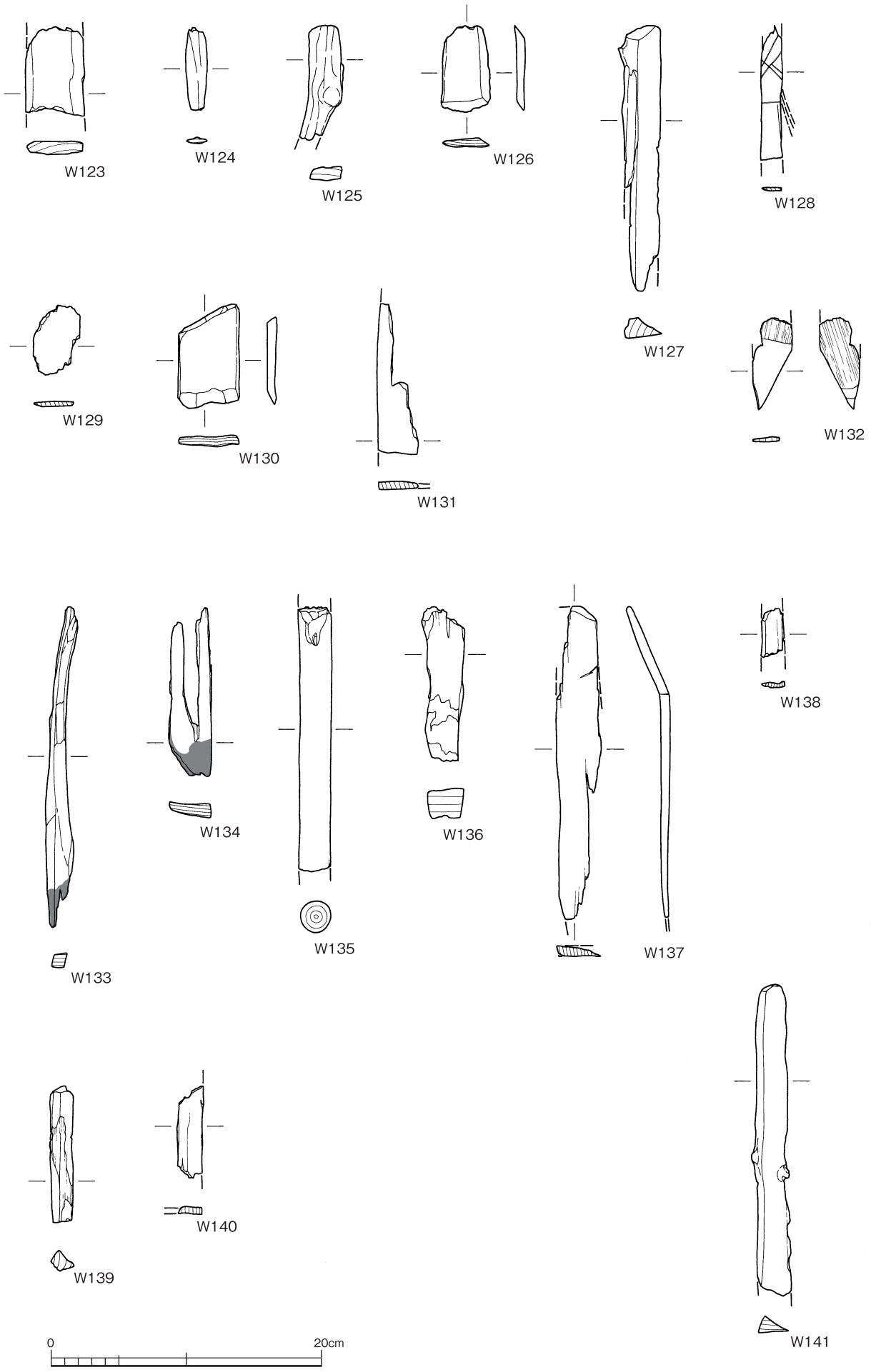
出土遺物24（木製品8）



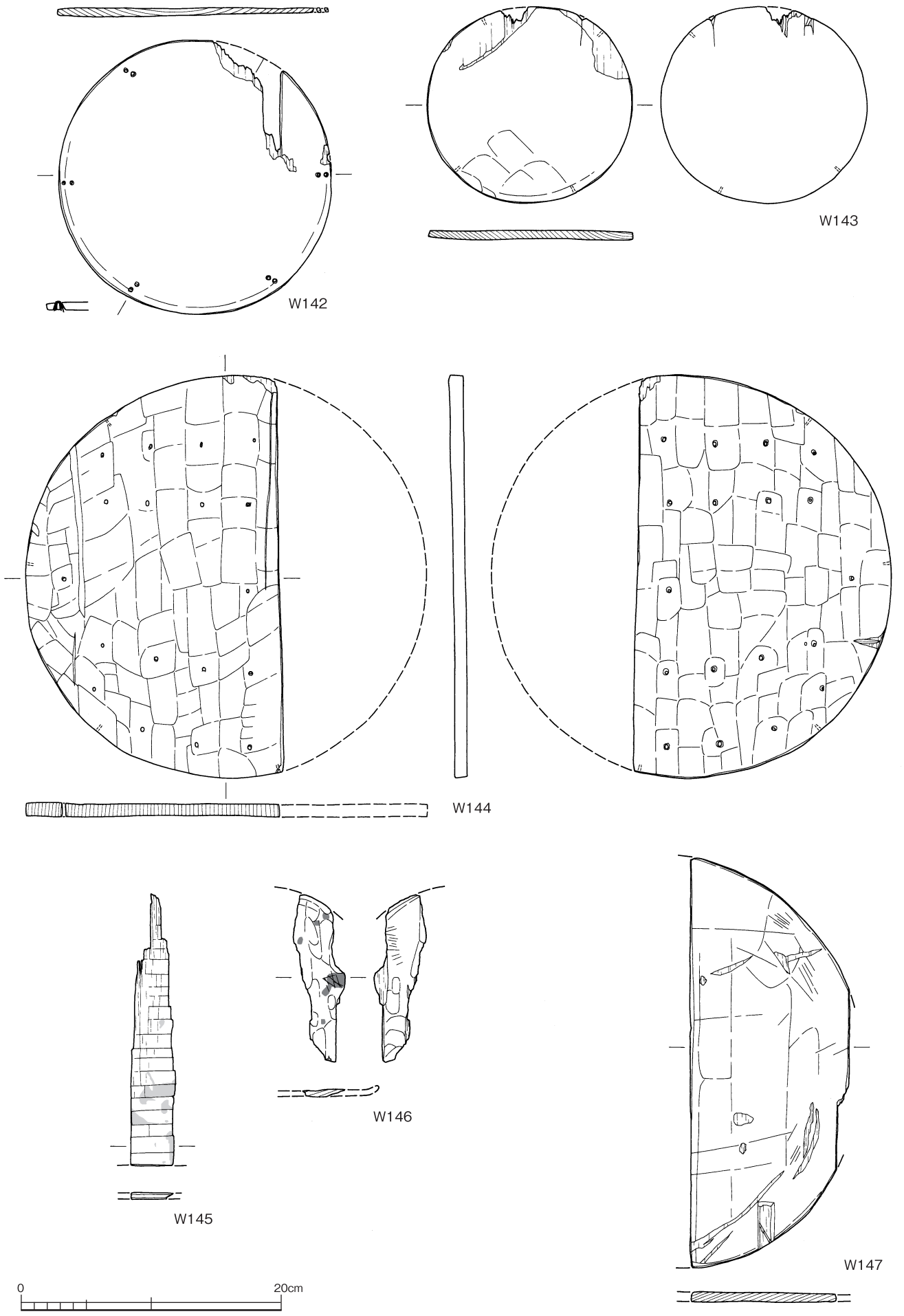
出土遺物25（木製品9）



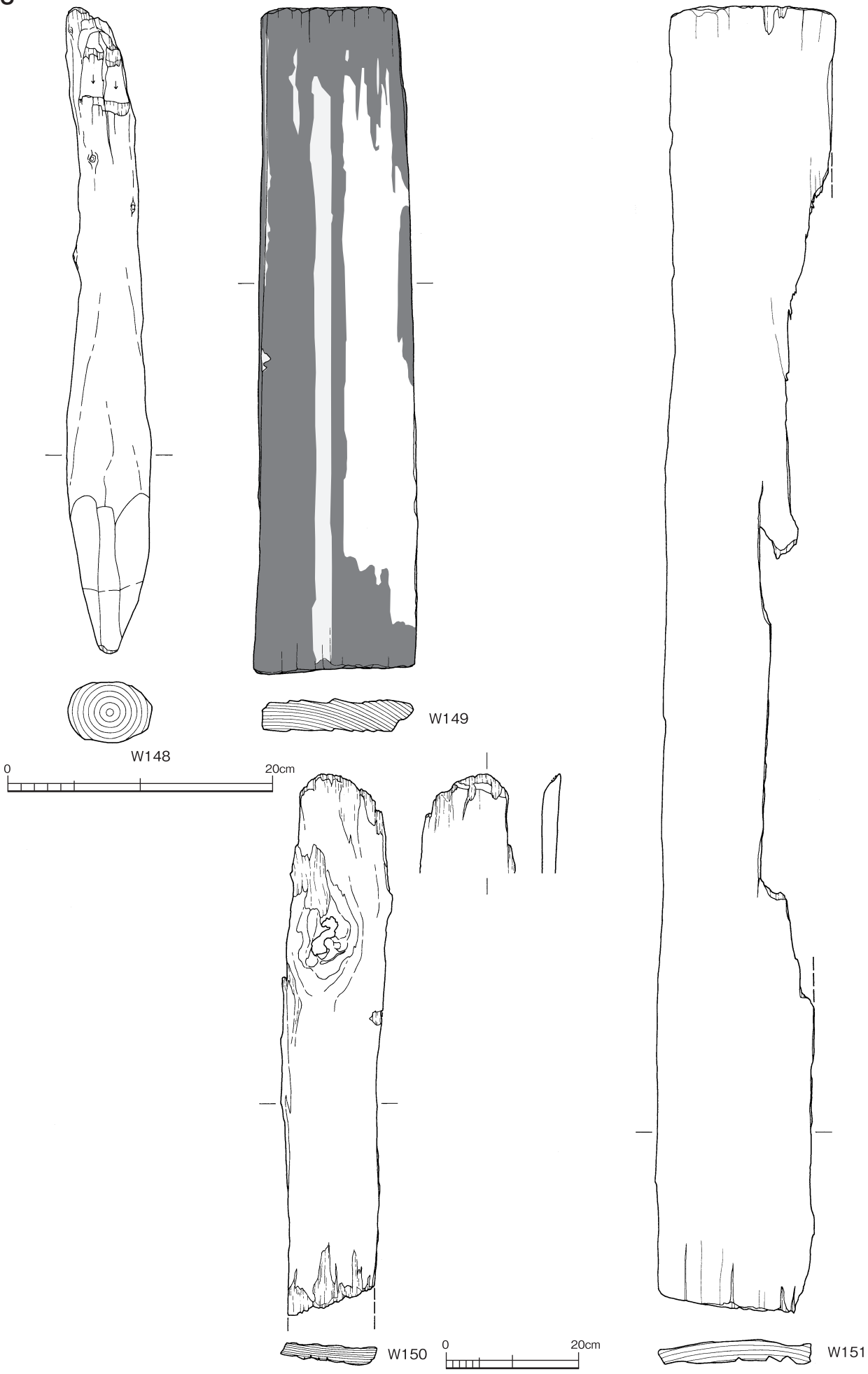
出土遺物26（木製品10）



出土遺物27（木製品11）



出土遺物28（木製品12）



出土遺物29（木製品13）

写真図版

上層水田面（奈良時代遺構面）全景（南から）

上層水田面（南東から）

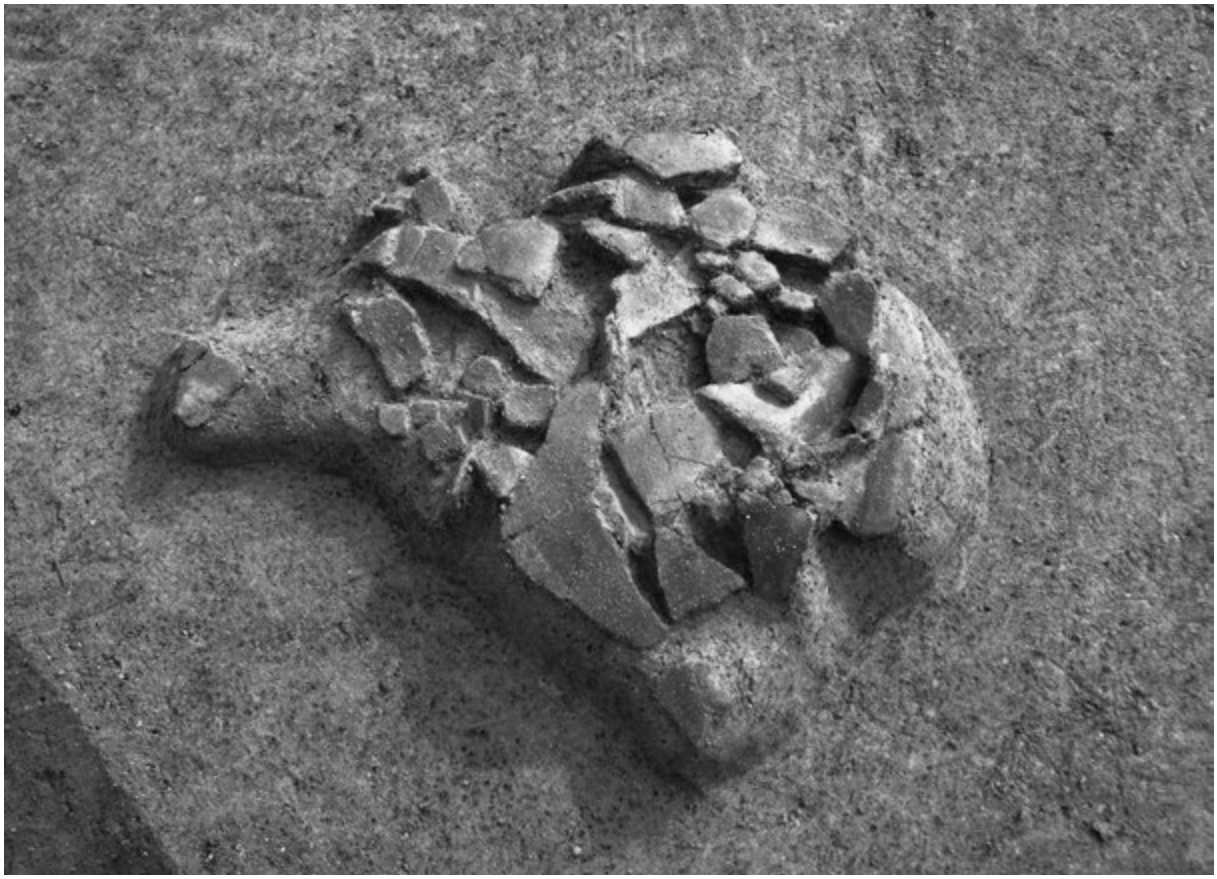
写真図版 2

2009 年度調査

上層水田面（南東から）

上層水田面（北東から）

上層水田面　土器出土状況（東から）

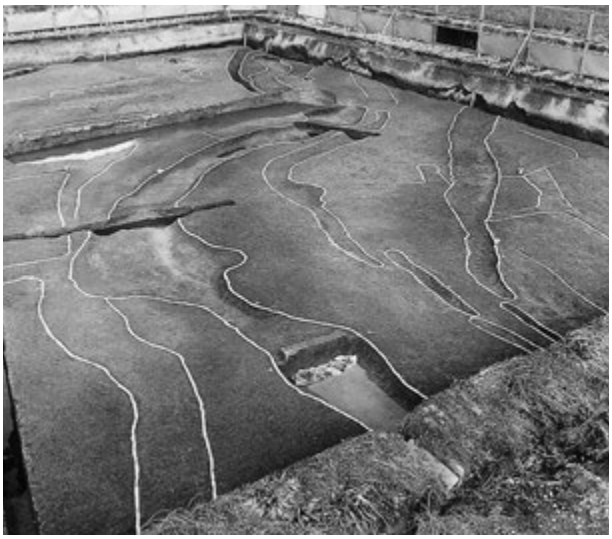


上層水田面　土器出土状況（北から）

写真図版 4

2009 年度調査

旧河道部上面（北西から）



旧河道部上面（南東から）

上層水田畦畔断面（北東から）

旧河道部噴砂断面（南東から）

溝 SD01 断面（南から）

溝 SD04 断面（南から）

溝 SD05 断面（西から）

溝 SD06 断面（西から）

溝 SD08 断面（南から）

溝 SD09 断面（南から）

溝 SD10 断面（南から）

溝 SD11 断面（南から）

写真図版 6

2011 年度調査

奈良時代遺構面
旧河道の重複状況
（西から）

旧河道全景
（北東から）

旧河道と下層水田面の
重複状況（北から）

飛鳥時代遺構面全景（西から）

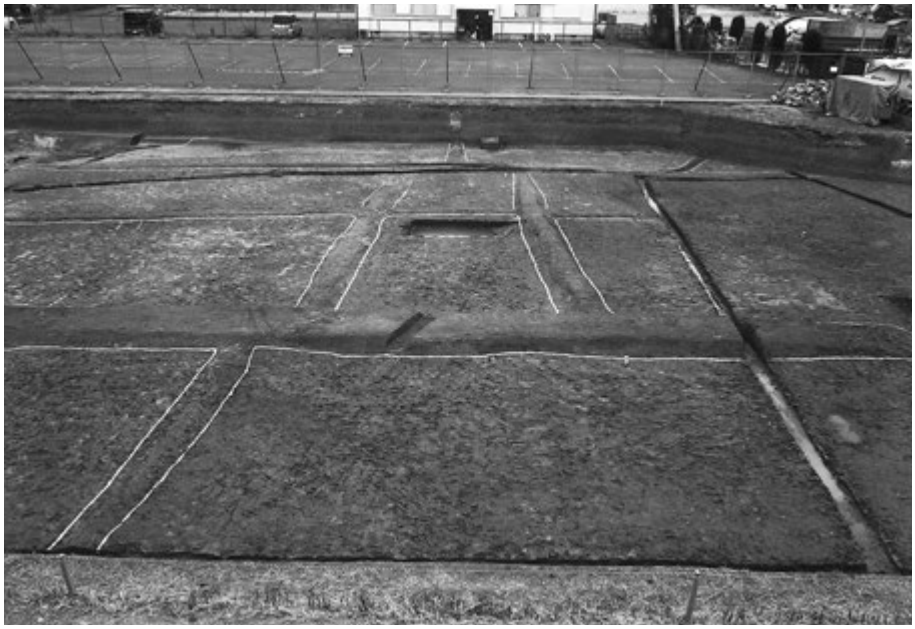
飛鳥時代遺構面全景（東から）

写真図版 8

2011 年度調査

飛鳥時代遺構面
（南東から）

飛鳥時代遺構面
（南から）



飛鳥時代遺構面
（北西から）

平安時代遺構面
（南東から）

飛鳥時代遺構面
（北から）

飛鳥時代遺構面
（南東から）

写真図版 10

2011 年度調査

溝 SR04 断面（東から）

溝 SD05 断面（西から）

溝 SD06 断面（西から）

溝 SD05 下層断面
（西から）

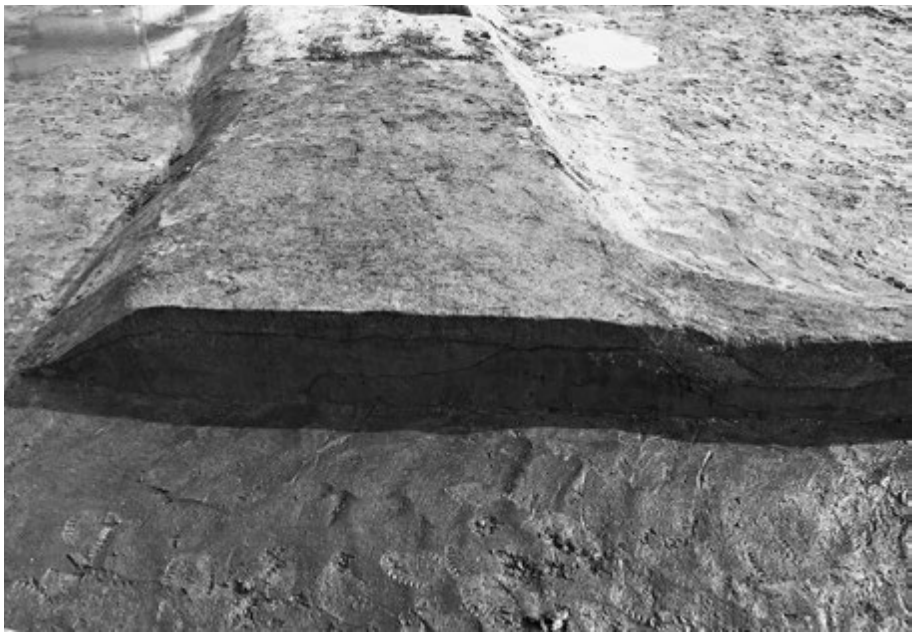
溝 SD05 下層断面
（西から）

飛鳥時代遺構面
大畦畔断面（西から）

写真図版 12

2011 年度調査

小畦畔断面(南から)



大・小畦畔とりつき部
断面(西から)

大・小畦畔とりつき部
断面（部分 西から）

奈良時代遺構面旧河道２・３杭列Ｂ・Ｃ検出状況（西から）

旧河道２・３杭列Ｂ・Ｃ検出状況（北から）

写真図版 14

2011 年度調査

旧河道２・３杭列Ｃ
検出状況
（南から）

旧河道２・３杭列Ｃ
検出状況
細部（西から）

旧河道２・３杭列Ｃ
検出状況
細部（北西から）

旧河道２・３杭列Ｂ検出状況（西から）

旧河道２・３杭列Ｂ検出状況（北西から）

旧河道２・３杭列Ｂ
検出状況細部
（南西から）

旧河道２・３杭列Ｂ
検出状況細部
（北西から）

旧河道２・３杭列Ｂ
検出状況細部
（北から）

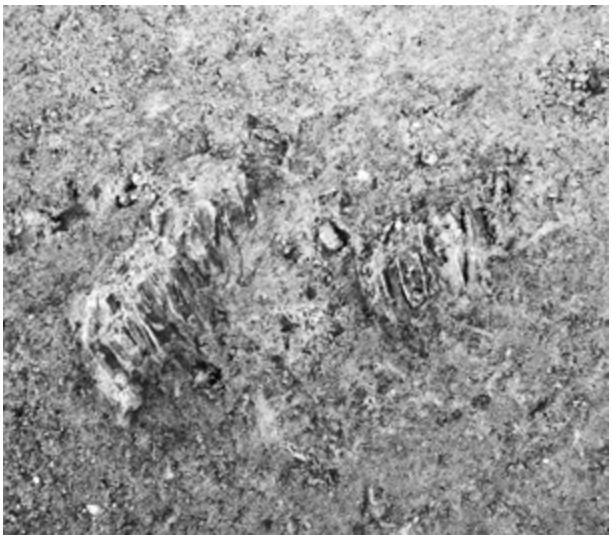
洪水砂中の青銅鏡出土状況

青銅鏡出土状況

旧河道内　槽出土状況（南から）

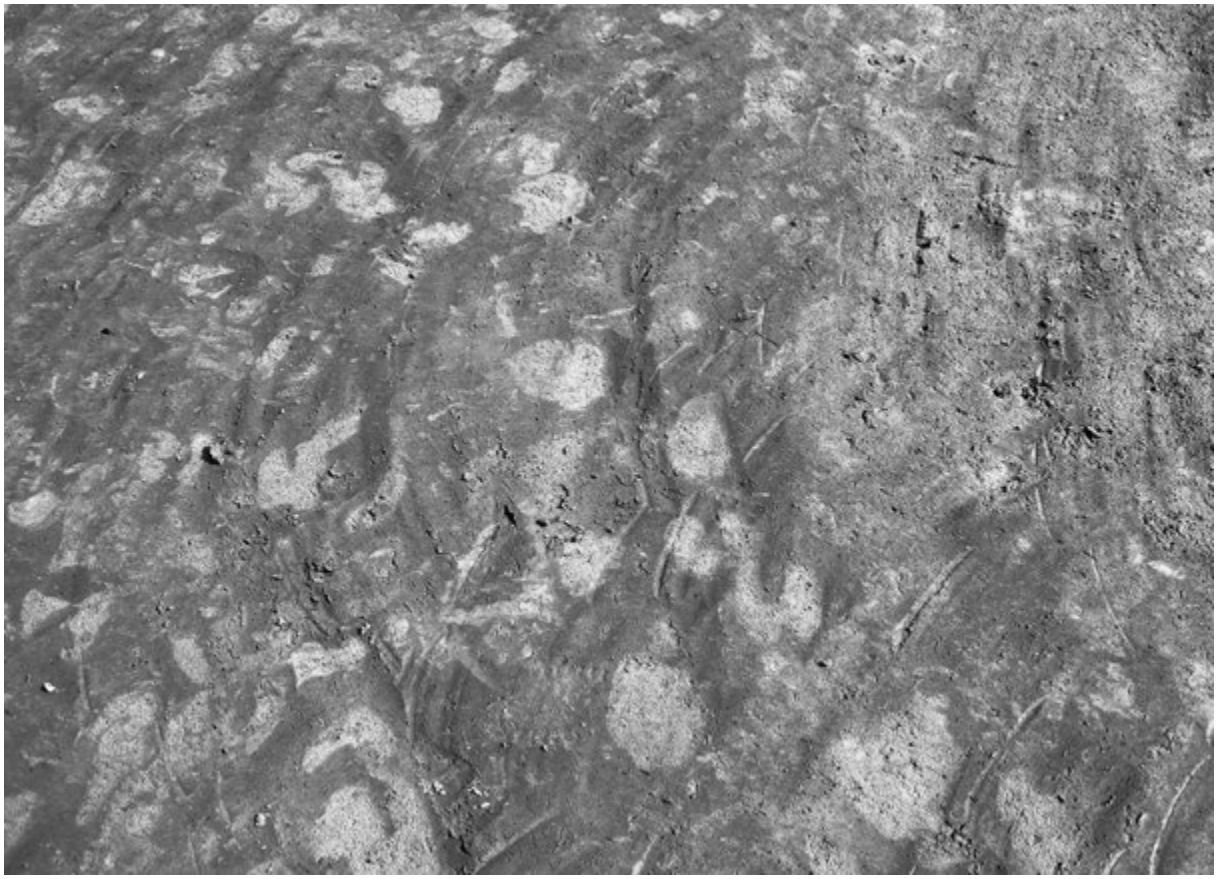
旧河道内　槽出土状況（南から）

旧河道内　舟形出土状況（南から）



洪水砂中の馬歯出土状況

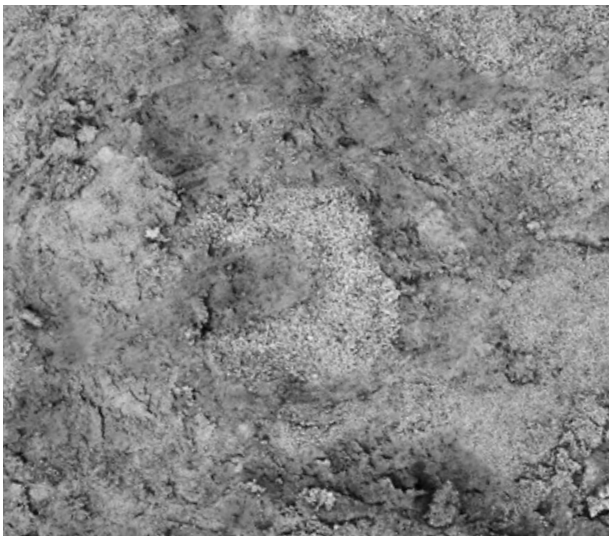
下層水田面（飛鳥時代遺構面）足跡（西から）



下層水田面足跡（西から）

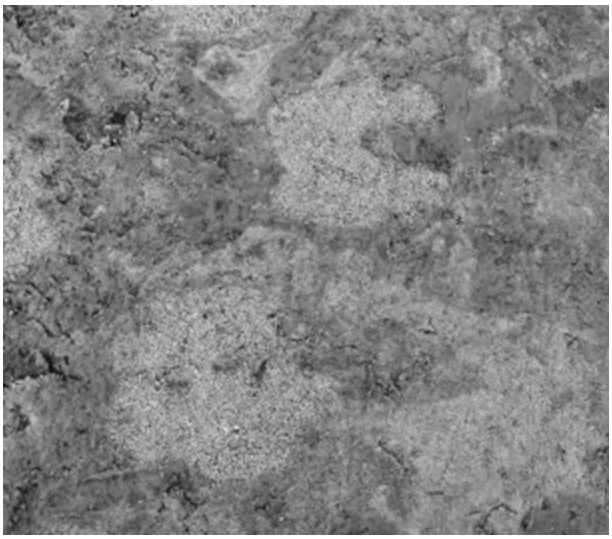
水田面足跡１検出状況（南から）

水田面足跡１掘削後（南から）



水田面足跡３検出状況（南から）

水田面足跡３掘削後（南から）



水田面足跡４（上）・５（下）検出状況（南から）

水田面足跡４（上）・５（下）掘削後（南から）

写真図版 20

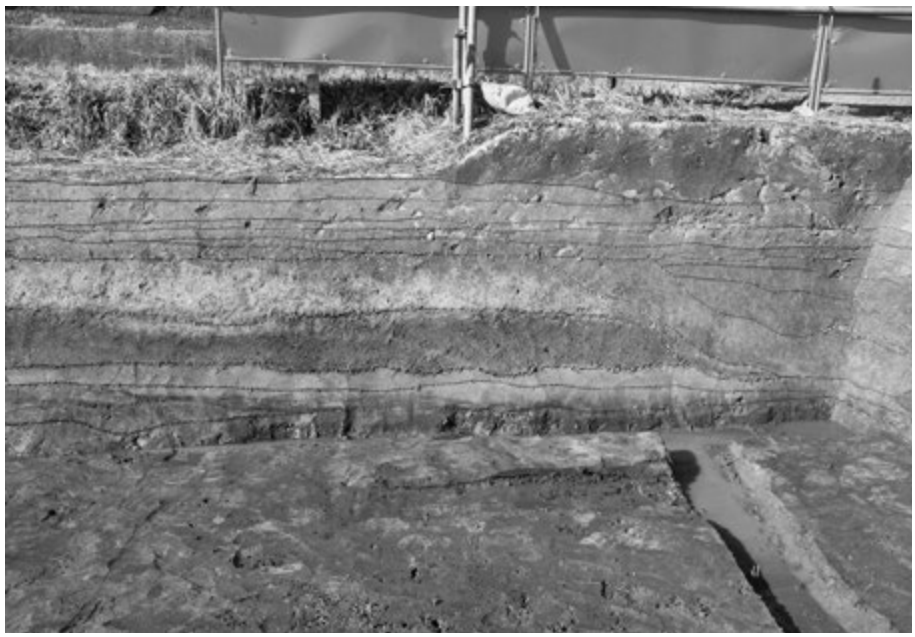
2011 年度調査

調査区北壁断面東部
（南西から）

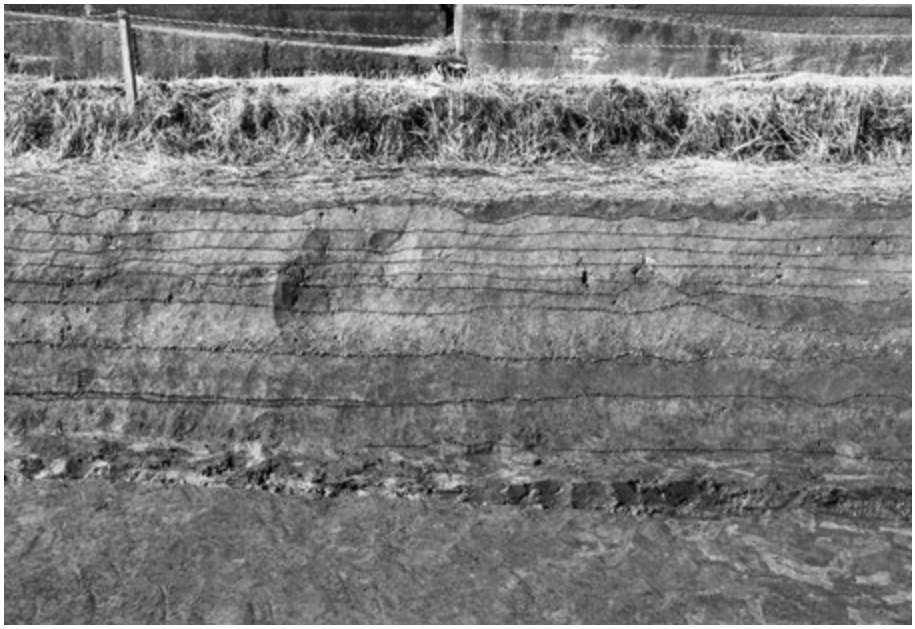
調査区北壁断面中央
（南東から）

調査区北壁断面西部
（南西から）

調査区北壁断面東部
（東から）



調査区北壁断面東部
（南東から）



調査区北壁断面中央
（南東から）

写真図版 22

2011 年度調査

調査区西壁断面
（北から）

調査区南壁断面西部
（北西から）

調査区南壁断面東部
（北西から）

調査区南壁断面東部
（北西から）

調査区南壁断面東部
（北西から）

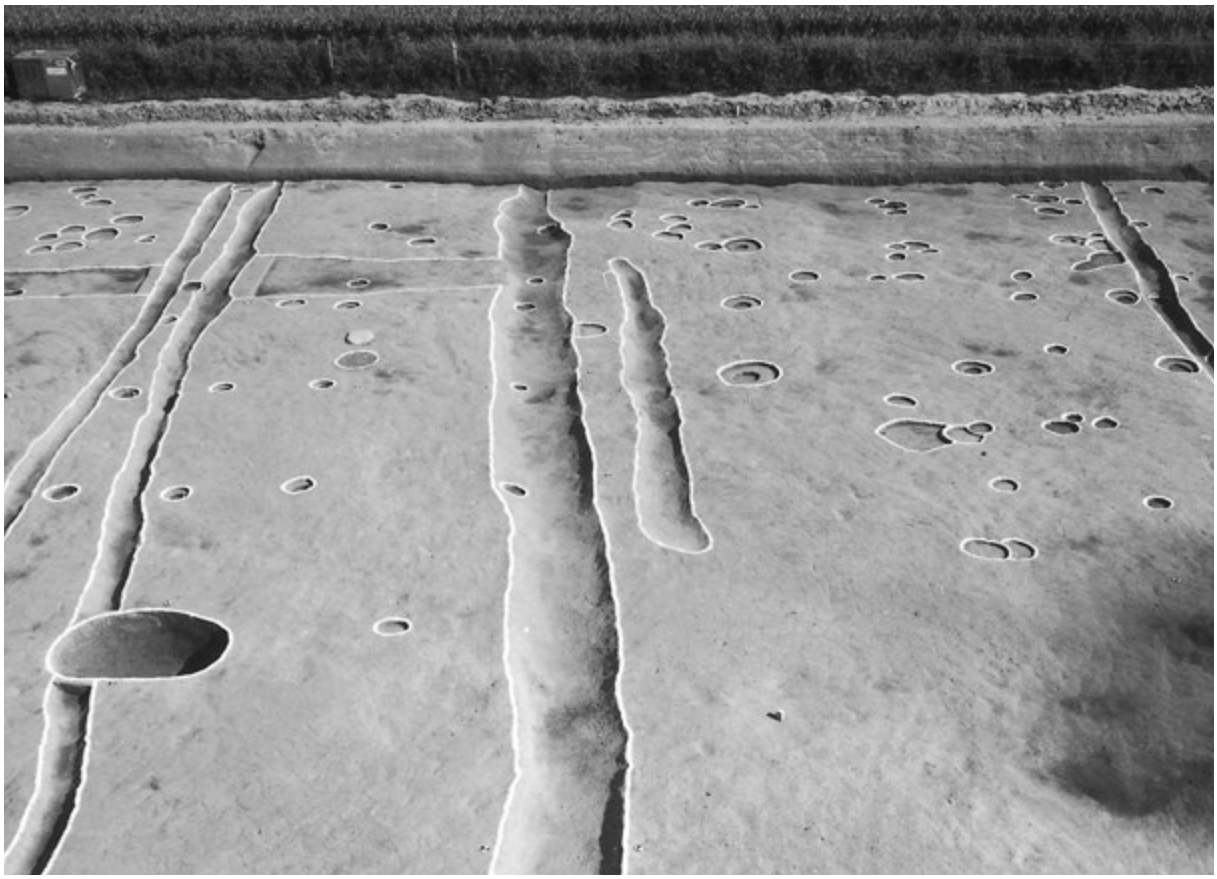
下層遺構面下位
暗緑灰色粘土層中の
土器出土状況

上層遺構面（平安時代遺構面）全景（南西から）

上層遺構面全景（北東から）

上層遺構面（平安時代遺構面）全景（北東から）

上層遺構面東部（西から）

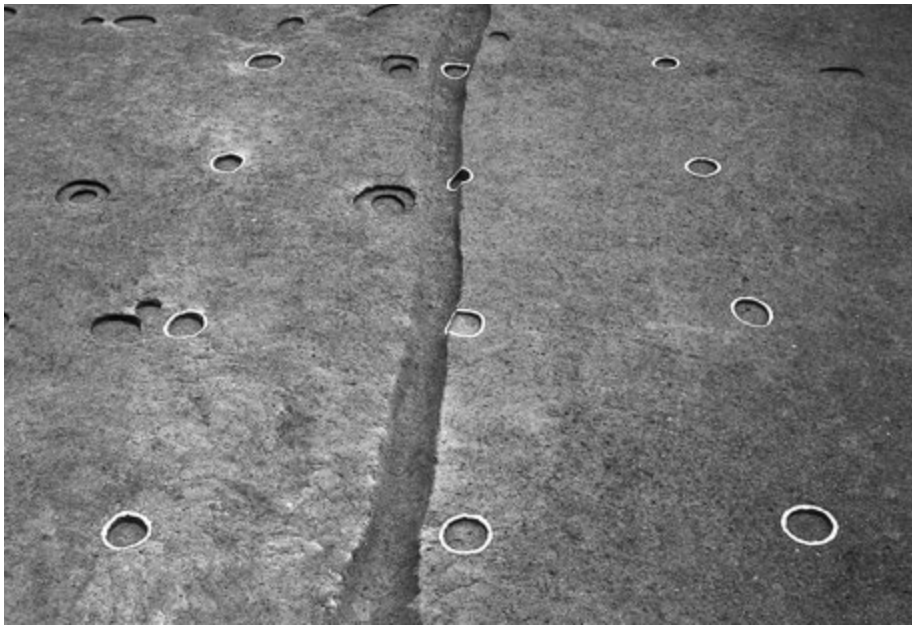


平安時代遺構面掘立柱建物跡群（北西から）

掘立柱建物跡群（西から）

掘立柱建物跡群（北から）

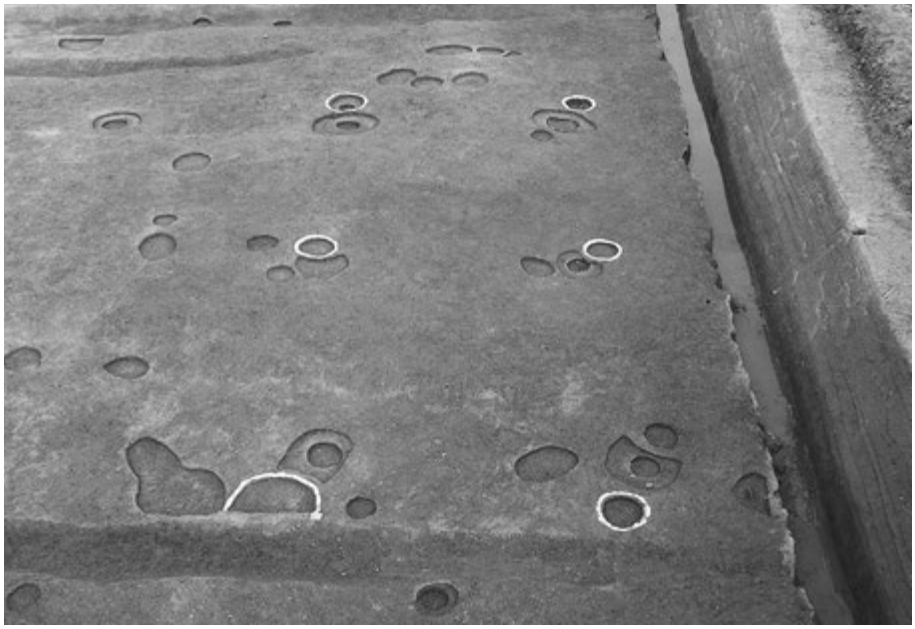
掘立柱建物跡 SB01
（南西から）



掘立柱建物跡 SB01
（北西から）

掘立柱建物跡 SB02
（南西から）

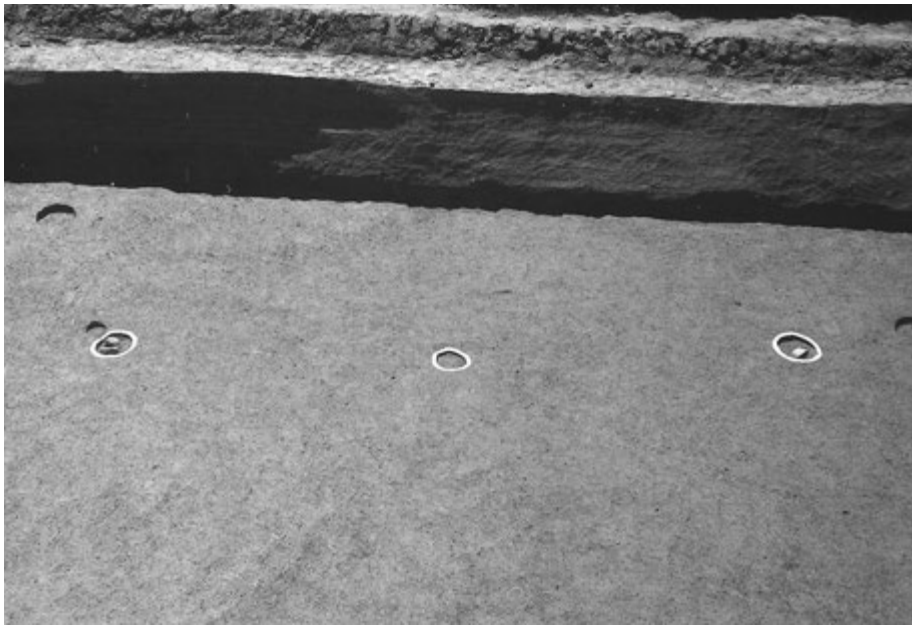
掘立柱建物跡 SB02
（北西から）



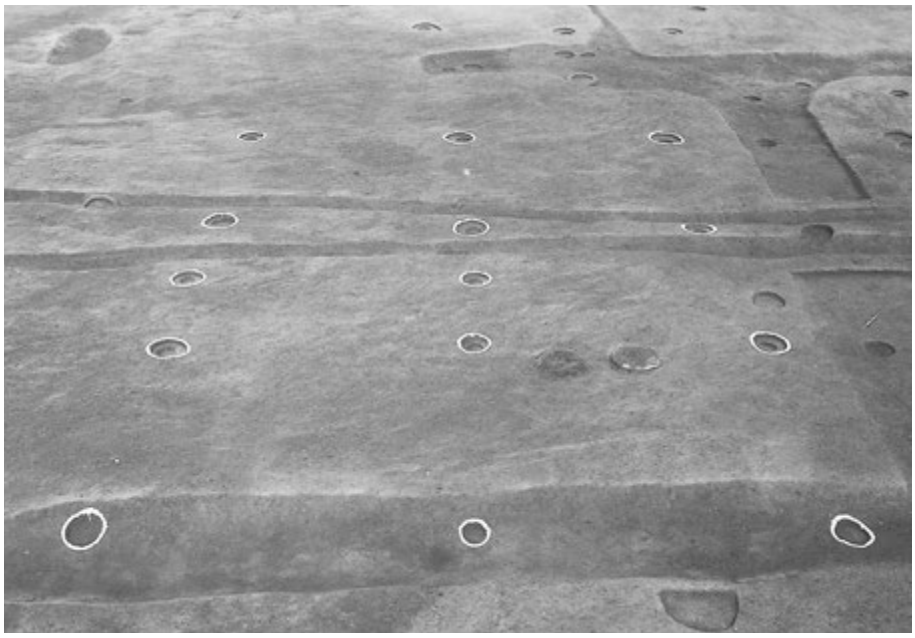
掘立柱建物跡 SB03
（南西から）

掘立柱建物跡 SB03
（北西から）

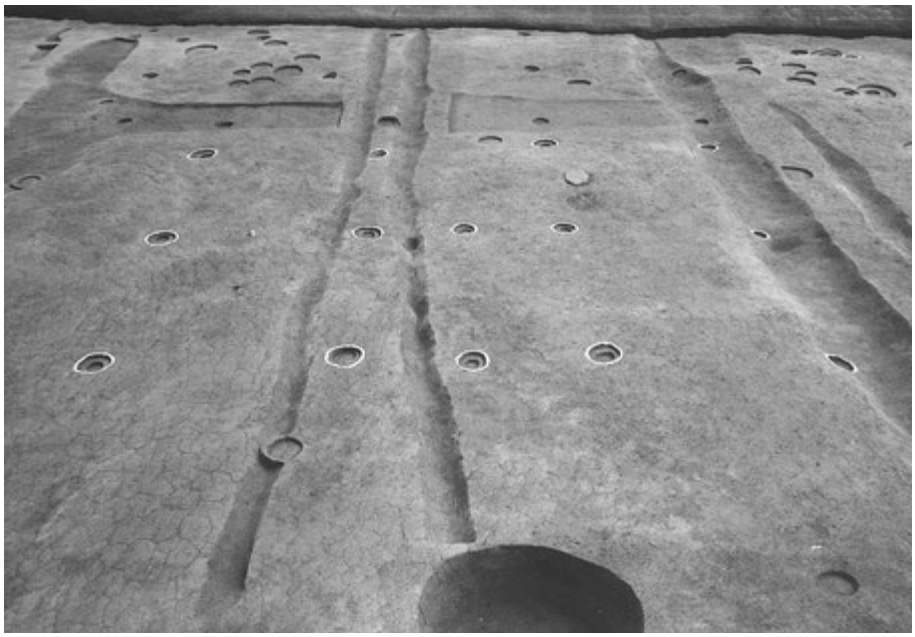
掘立柱建物跡 SB04
（北西から）



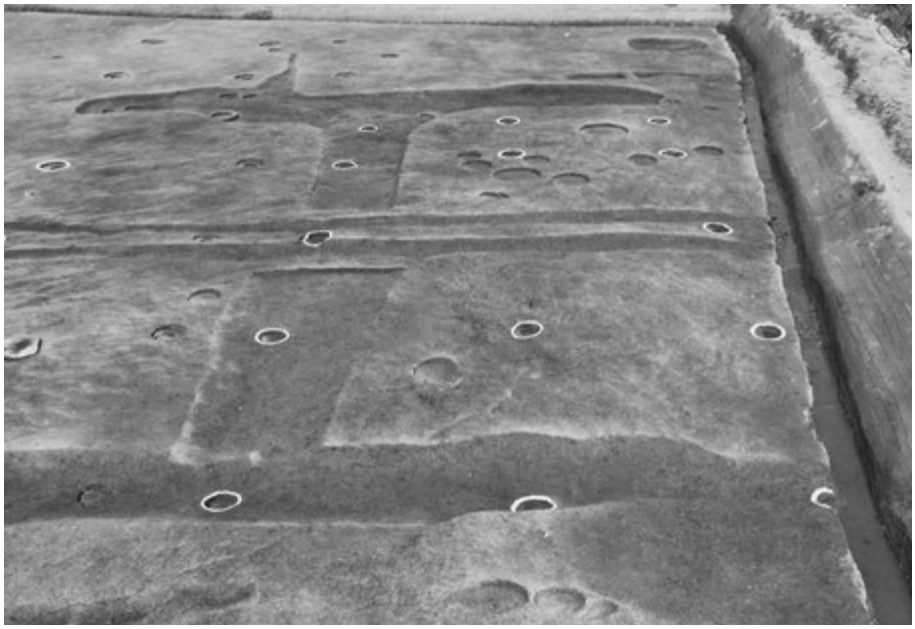
掘立柱建物跡 SB05
（北西から）



掘立柱建物跡 SB06
（南西から）



掘立柱建物跡 SB06
（北西から）



掘立柱建物跡 SB07
（南西から）

掘立柱建物跡 SB07
（北西から）

掘立柱建物跡 SB08
（北西から）

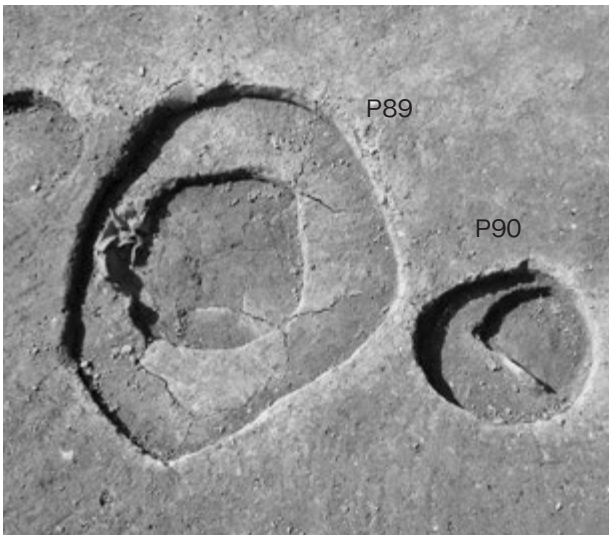
掘立柱建物跡 SB01 P34 遺物出土状況（南東から）

掘立柱建物跡 SB02 P68 遺物出土状況（南西から）

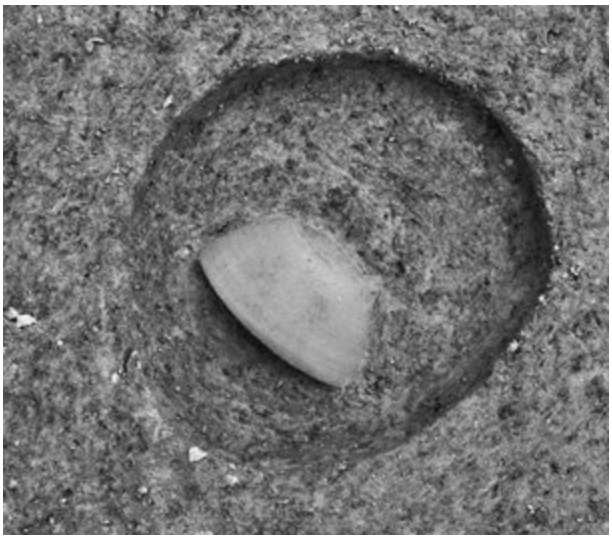
掘立柱建物跡 SB02 P86 根石出土状況（北東から）

掘立柱建物跡 SB02 P89 遺物出土状況（北東から）

掘立柱建物跡 SB02 P89 遺物出土状況（北東から）



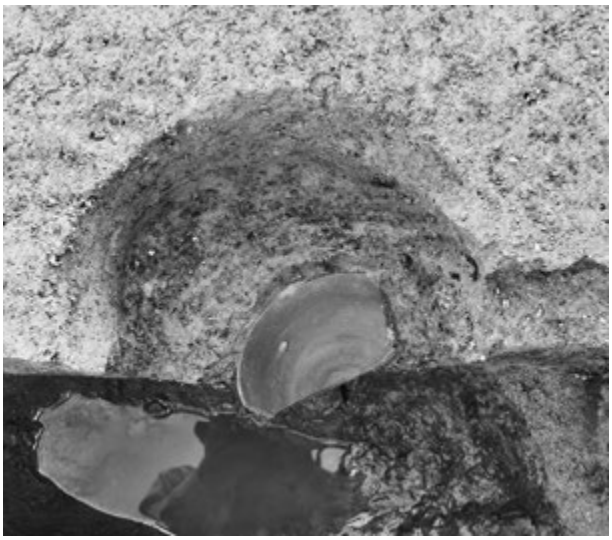
掘立柱建物跡 SB02 P89・SB03 P90
遺物出土状況（南東から）



掘立柱建物跡 SB05 P31 遺物出土状況（南西から）

掘立柱建物跡 SB05 P31 遺物出土状況（北西から）

掘立柱建物跡 SB05 P31 遺物出土状況（北西から）



掘立柱建物跡 SB05 P31 遺物出土状況（北西から）

掘立柱建物跡 SB05 P31 遺物出土状況（北西から）

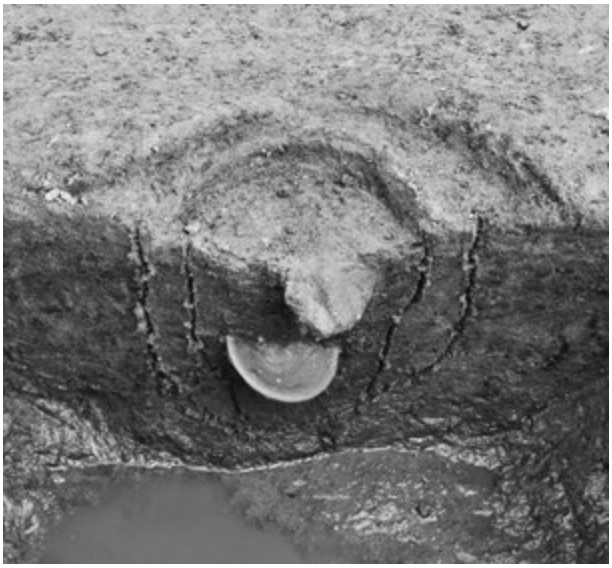
掘立柱建物跡 SB05 P32 遺物出土状況（北西から）

掘立柱建物跡 SB06 P117　根石出土状況（南東から）

掘立柱建物跡 SB06 P179　根石出土状況（北西から）

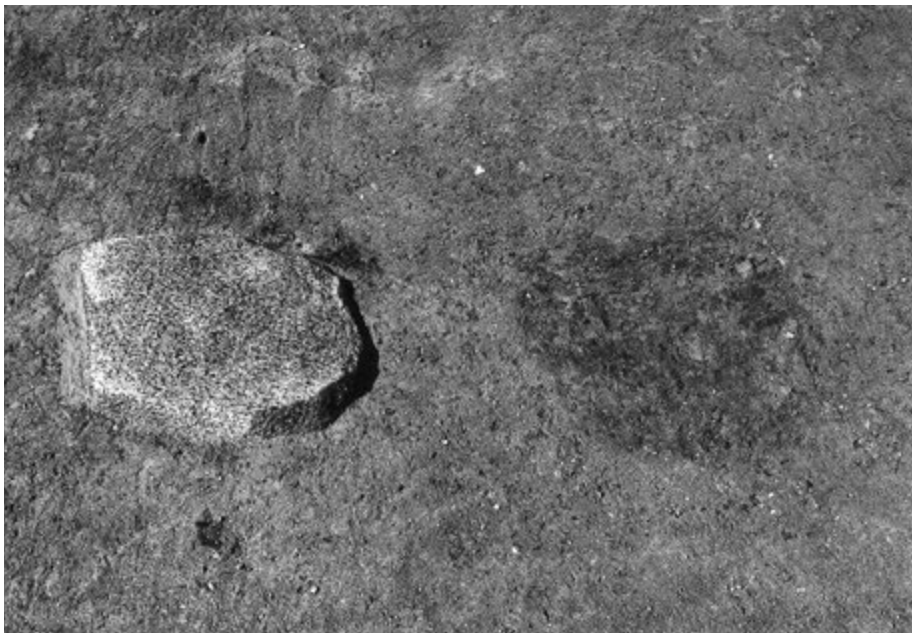
掘立柱建物跡 SB08 P144　遺物出土状況（北東から）

掘立柱建物跡 SB08 P144　断面（北東から）

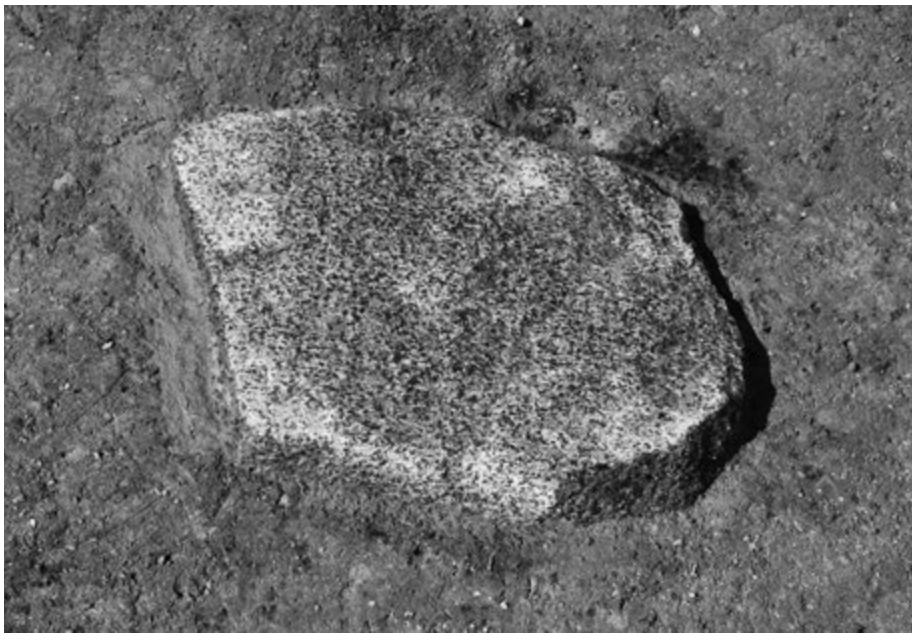


P40　断面（南西から）

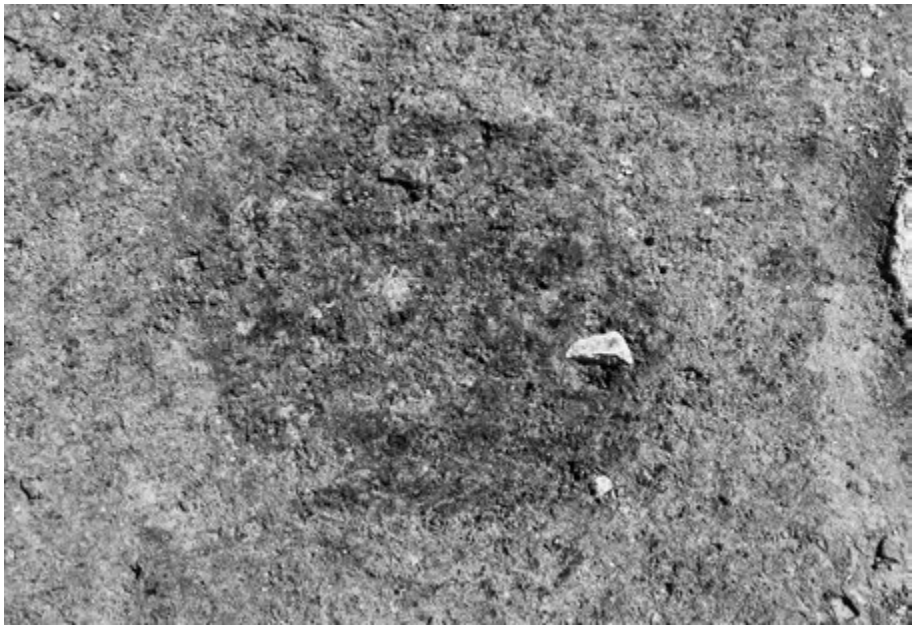
P40　遺物出土状況（南西から）



SB06 床面
鉄床石 110（左）・
土坑 SK109（右）
（北東から）

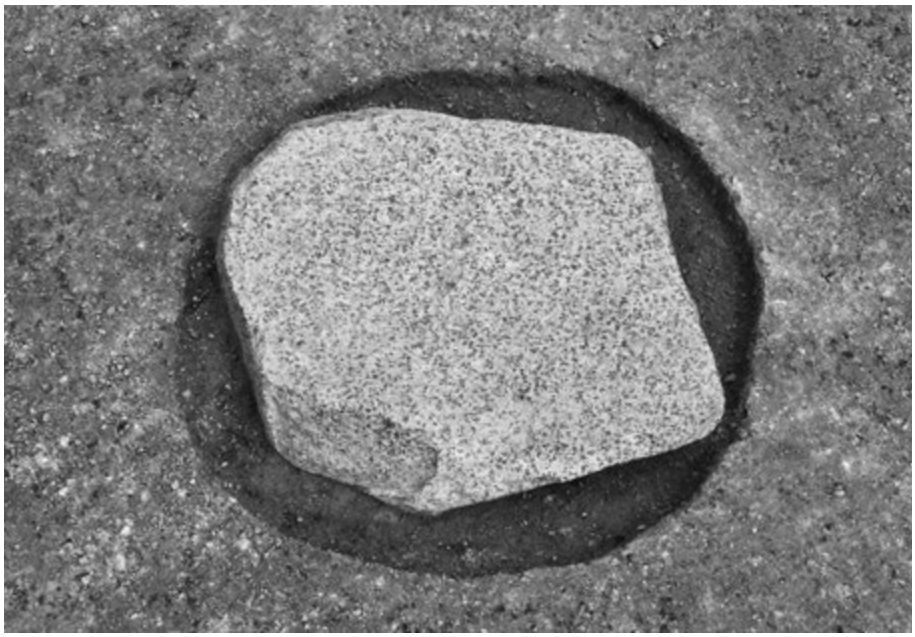


鉄床石 110
（北東から）

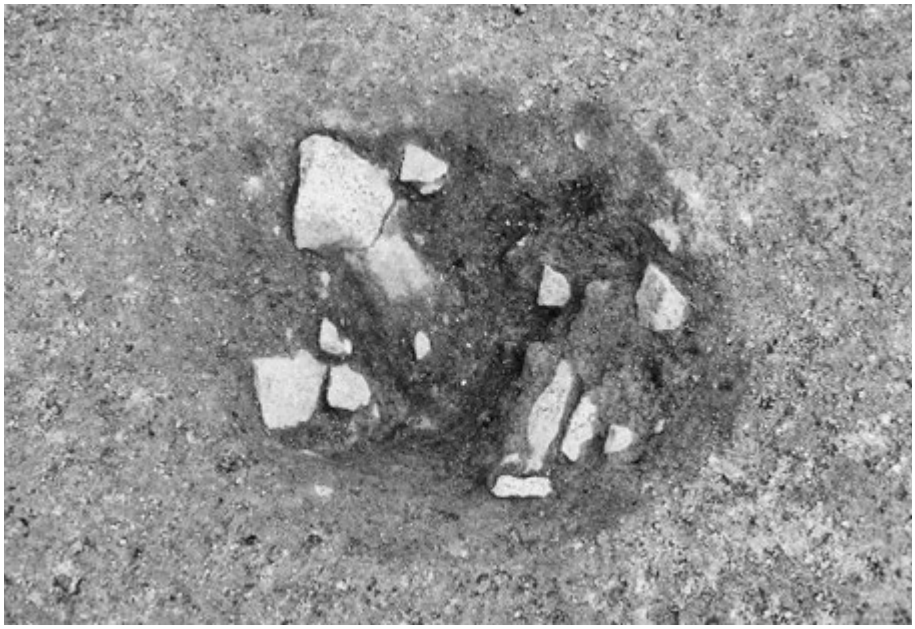


土坑 SK109 検出状況
（南西から）

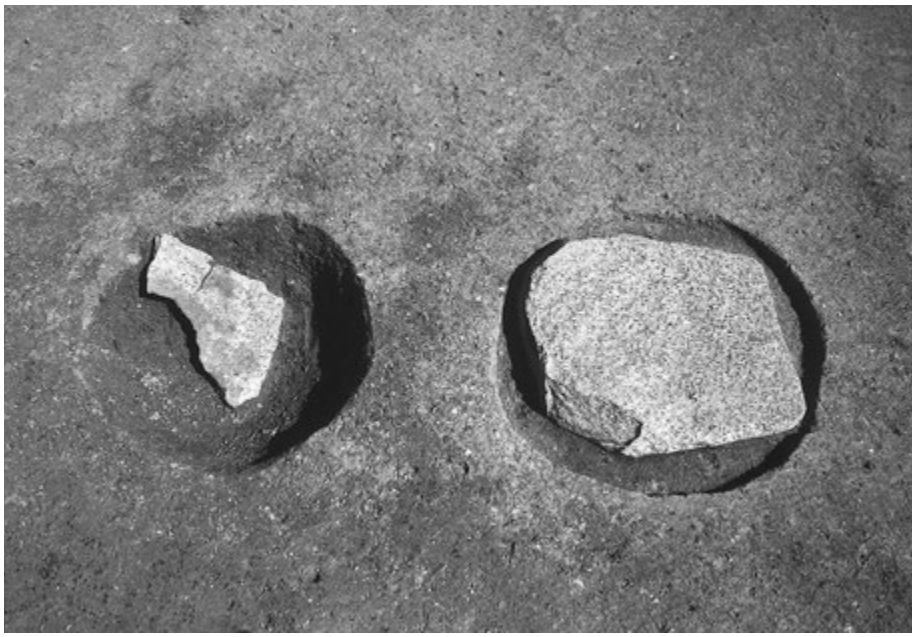
SB06 床面
土坑 SK109（左）・
鉄床石 110（右）
（南西から）



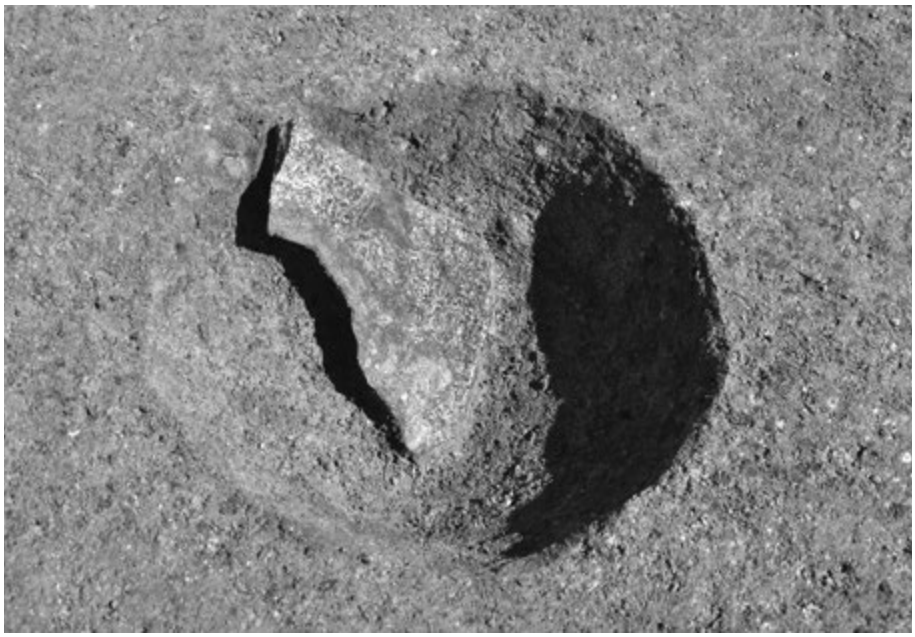
鉄床石 110（南西から）



土坑 SK109（南西から）

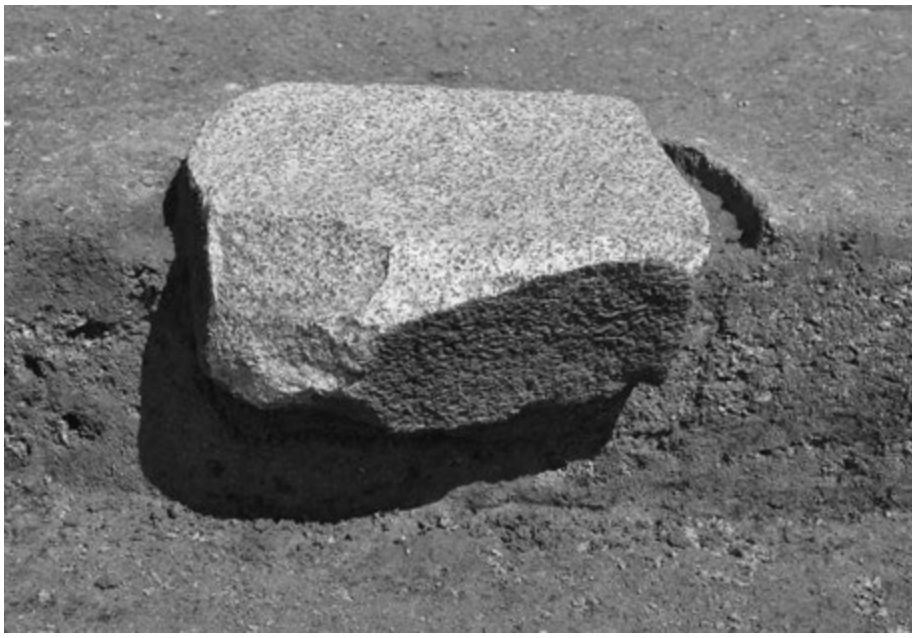


SB06 床面
土坑 SK109（左）・
鉄床石 110（右）
（南西から）



土坑 SK109
（南西から）

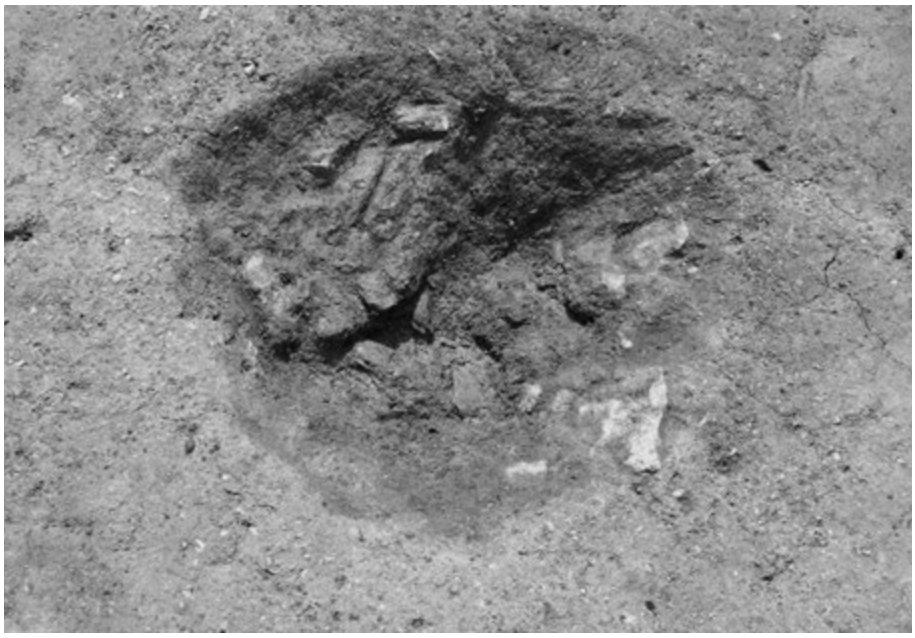
土坑 SK109（左）・
鉄床石 110（右）
断面（南西から）



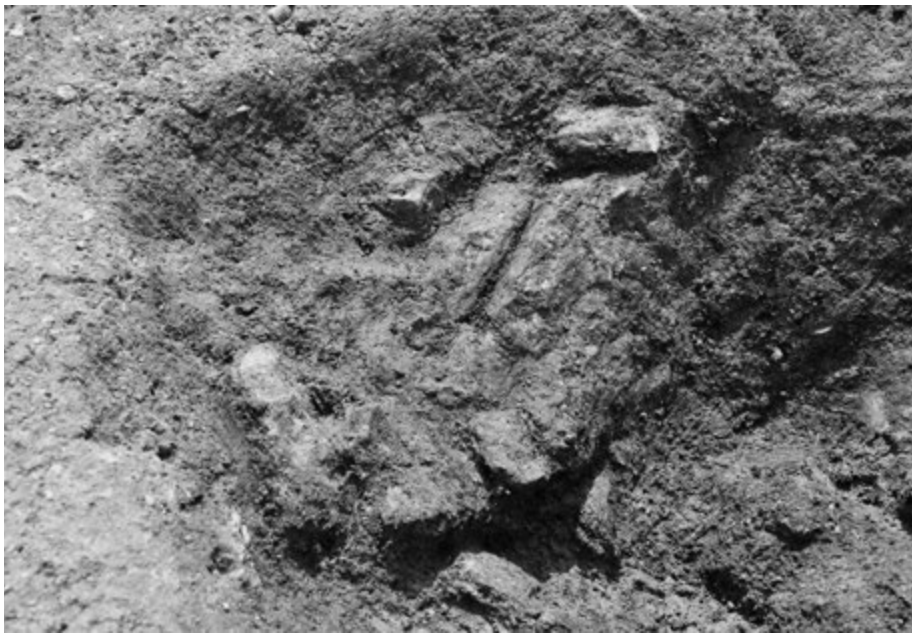
SB06 床面
鉄床石 110 断面
（南西から）

土坑 SK109 断面
（南西から）

土坑 SK109 断面
（南西から）

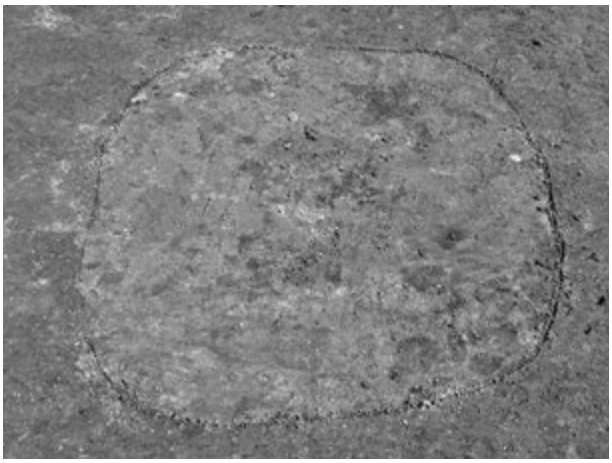


SB06 床面
土坑 SK109 底面
（北東から）



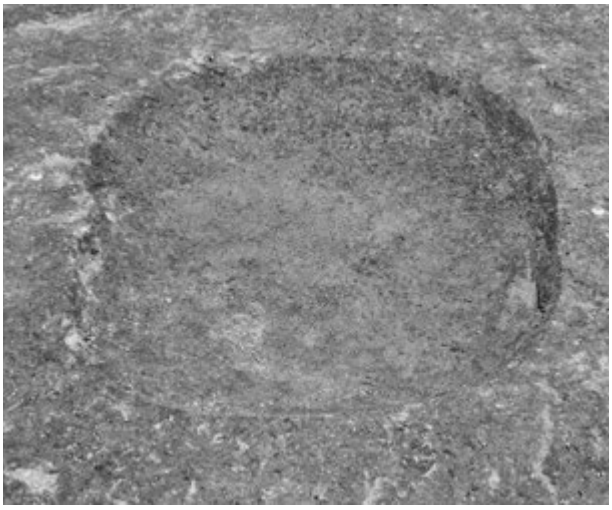
土坑 SK109 底面
（北東から）

土坑 SK109 底面
（南東から）

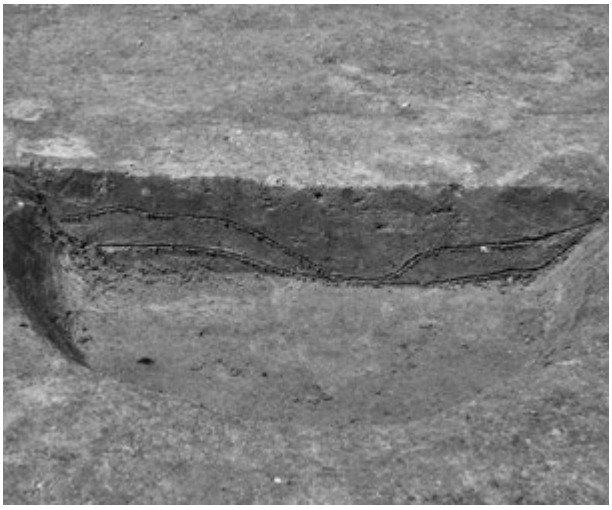


土坑 SK01 検出状況（南東から）

土坑 SK01 断面（南東から）



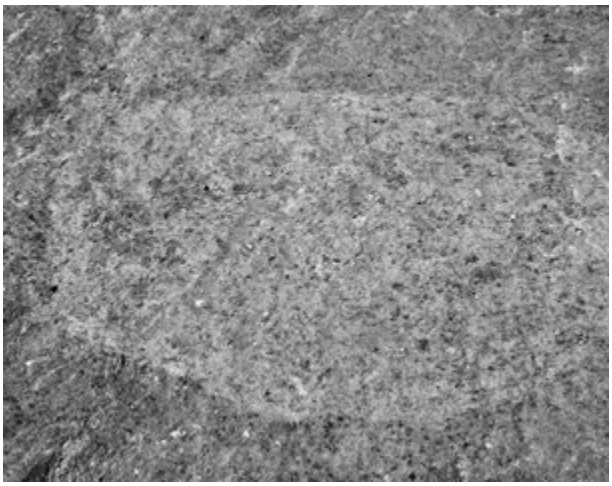
土坑 SK01 完掘状況（南東から）



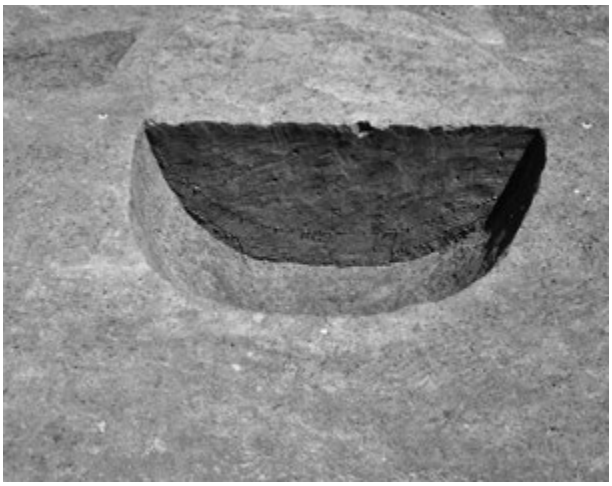
土坑 SK02 断面（南から）

土坑 SK78 断面（南西から）

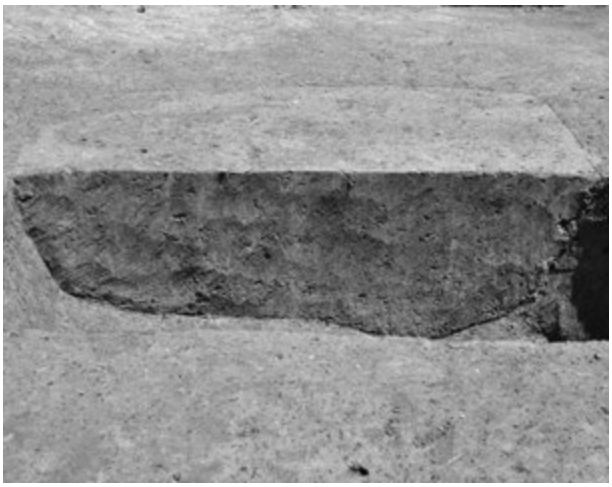
土坑 SK78 遺物等出土状況（南東から）



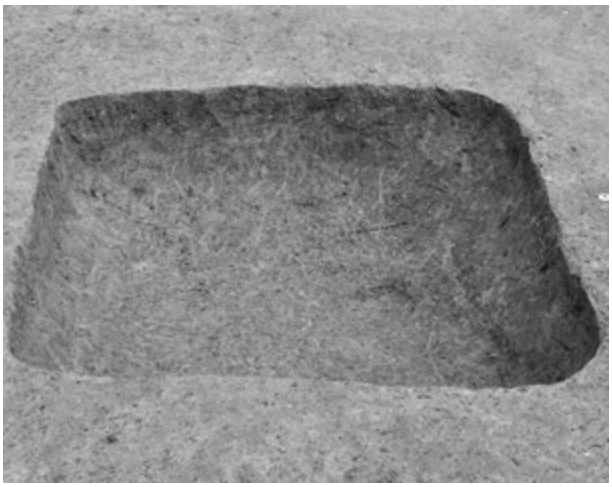
土坑 SK105 検出状況（南東から）



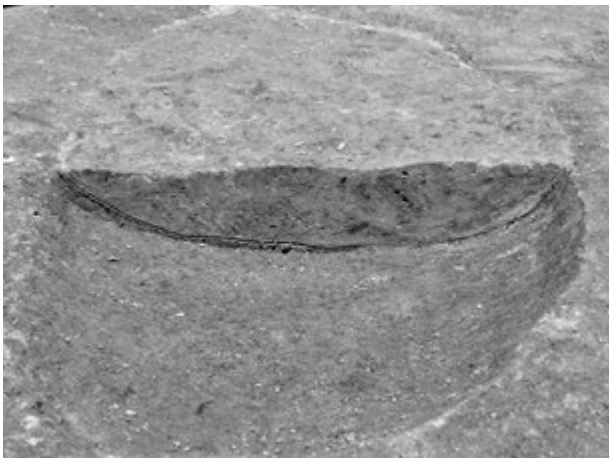
土坑 SK105 断面（南西から）



土坑 SK148 断面（南西から）



土坑 SK148 完掘状況（南西から）

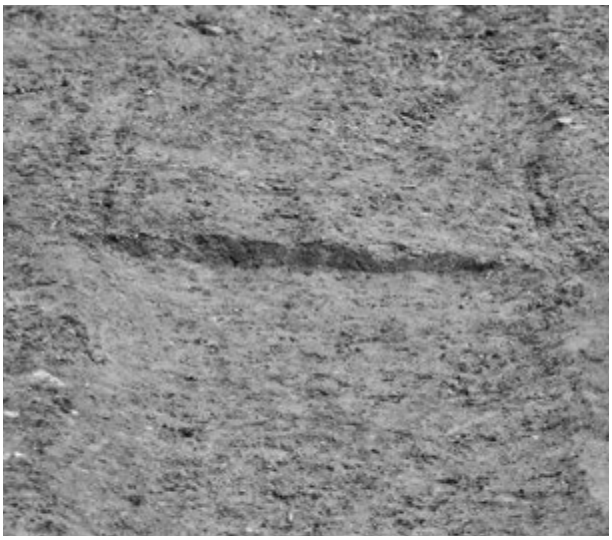


土坑 SK147 断面（南西から）

溝 SD19 断面（南東から）

溝 SD20 断面（南東から）

溝 SD21 断面（南東から）

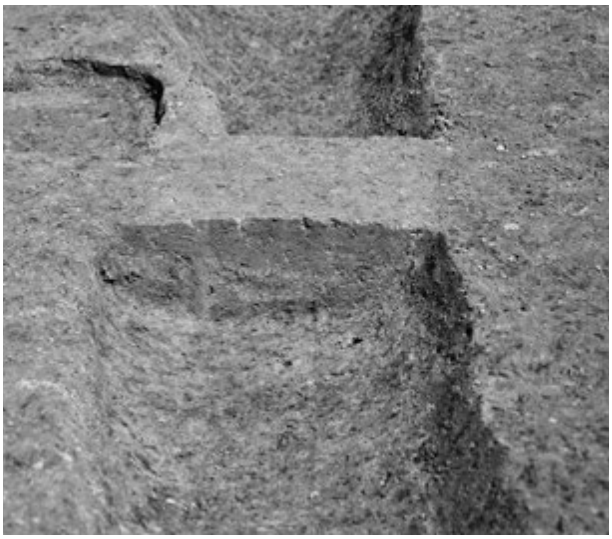


溝 SD22 断面（南東から）

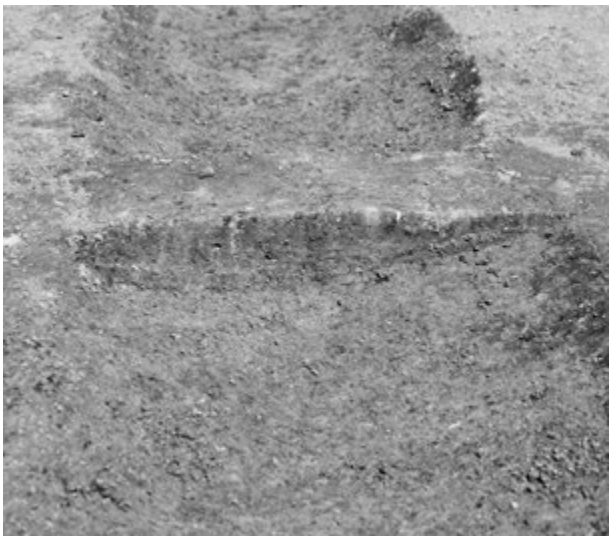
溝 SD23 断面（南東から）

溝 SD24 断面（南東から）

溝 SD26 北断面（南東から）



溝 SD26 南断面（南東から）



溝 SD101 断面（南東から）

溝 SD102 南断面（南東から）

溝 SD102 北断面（南東から）

溝 SD114（左）・SD135（右）断面（南東から）

溝 SD183・SD184
SR185 全景
（北東から）

溝 SD183・SD184 全景（北西から）

溝 SD183 断面（南東から）

溝 SD184 断面（南東から）

溝 SD115　土師器皿出土状況（南東から）

奈良時代旧河道全景
（南から）

飛鳥時代遺構面全景
（北東から）

飛鳥時代遺構面全景
（南西から）

旧河道 1　人形出土状況（南東から）

旧河道 1　人形出土状況（南から）

旧河道 1　人形出土状況（南南東から）

旧河道 1 北半　人形出土状況（南西から）

旧河道 1 北半　人形出土状況（南東から）

旧河道 1 北半　人形出土状況（北東から）

旧河道１北半　人形出土状況（北東から）

旧河道１北半　人形冠帽出土状況（北東から）

旧河道１北半　木製品出土状況（南から）

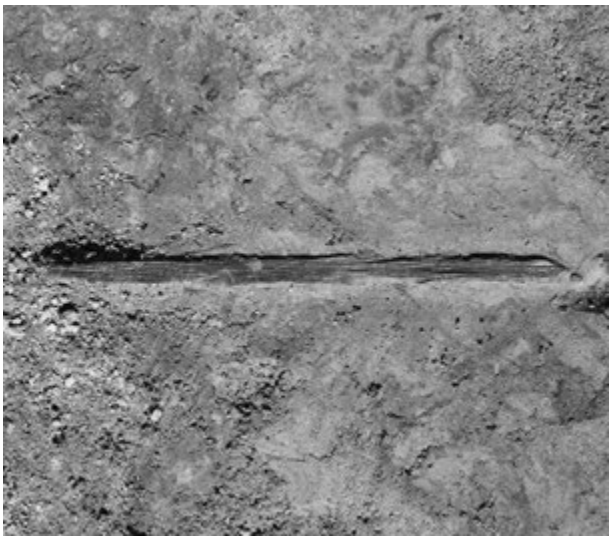
旧河道１　木皿出土状況（北東から）

旧河道２南１区　木製品出土状況（南東から）

旧河道２南２区杭列Ｂ東側　人形出土状況
（北東から）

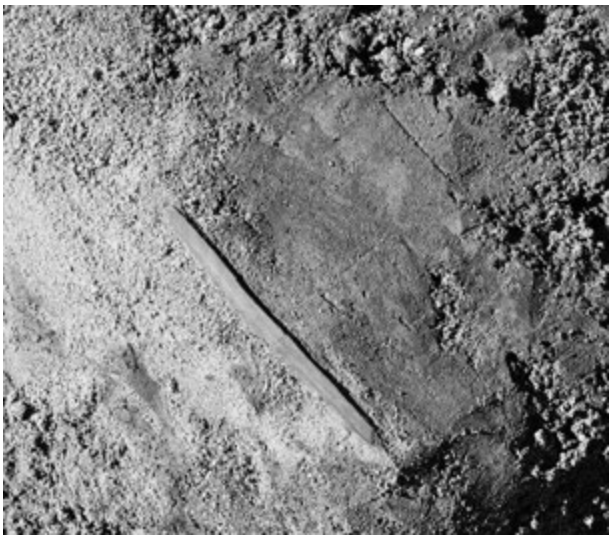
旧河道２南２区　木製品出土状況（北東から）

旧河道２南３区　木簡出土状況（北東から）

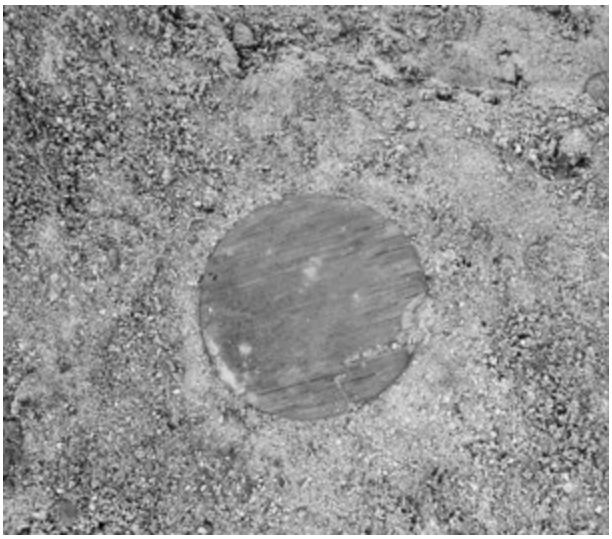


旧河道２南３区　斎串出土状況（南東から）

旧河道２南３区　木製品出土状況（北東から）



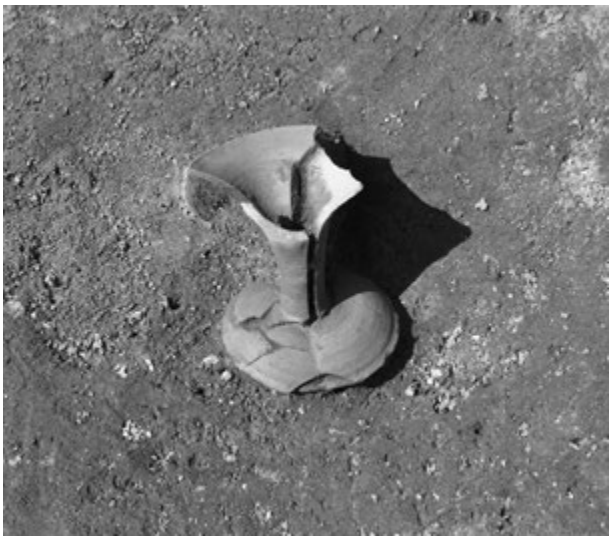
旧河道２南３区　木製品出土状況（北東から）



旧河道２南２区　木製品出土状況（南東から）

旧河道２あぜ 15 層　土器出土状況（南東から）

旧河道２南２区　土器出土状況（南西から）



旧河道２北半　土器出土状況（北東から）

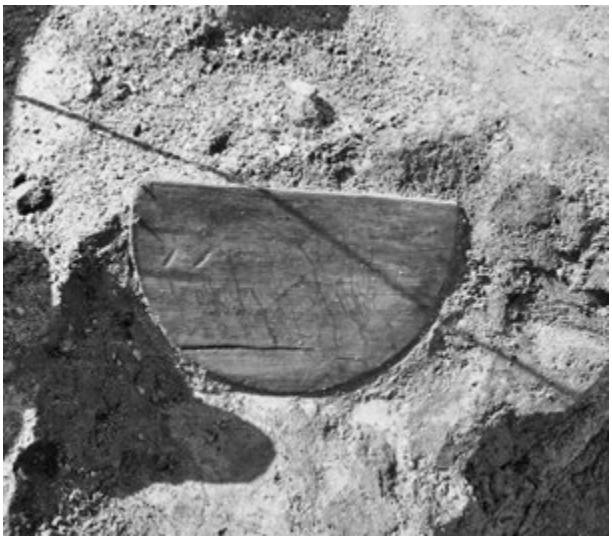
旧河道２北半　土器出土状況（北から）

旧河道２北半　土器出土状況（南東から）

旧河道２北半　土器出土状況（南東から）

旧河道３杭列Ｅ付近　木製品出土状況

旧河道３南３区　木製品出土状況（北西から）



旧河道３南３区杭列Ｃ内　木製品出土状況
（北東から）

旧河道３　須恵器出土状況（南西から）

旧河道３南１区東側下底　馬歯出土状況
（北西から）

旧河道３南１区東側　馬歯出土状況
（南西から）

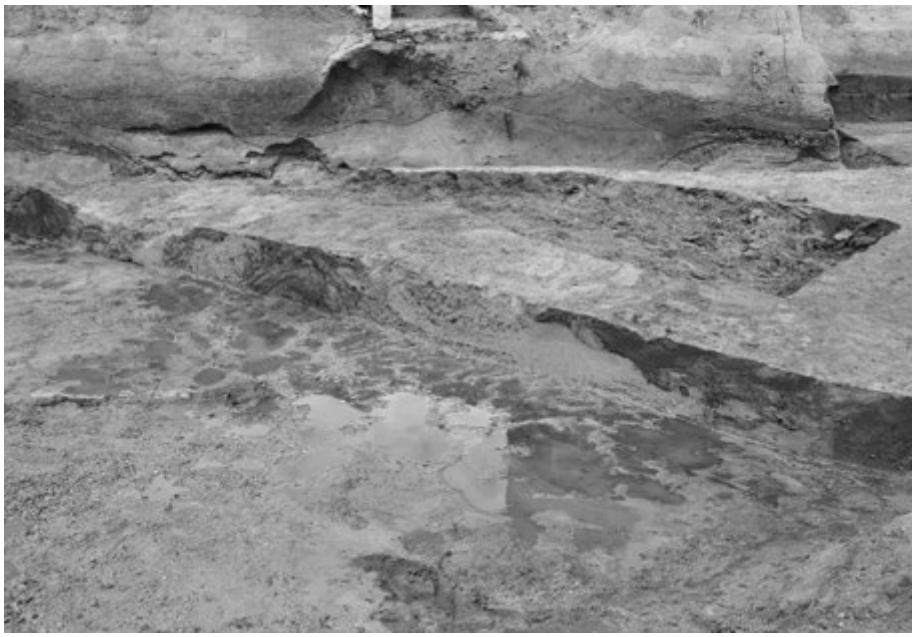
旧河道１北壁断面
（南東から）

旧河道１・２
北壁断面（南東から）

旧河道１・２
あぜ断面（南から）

写真図版 52

2012 年度調査



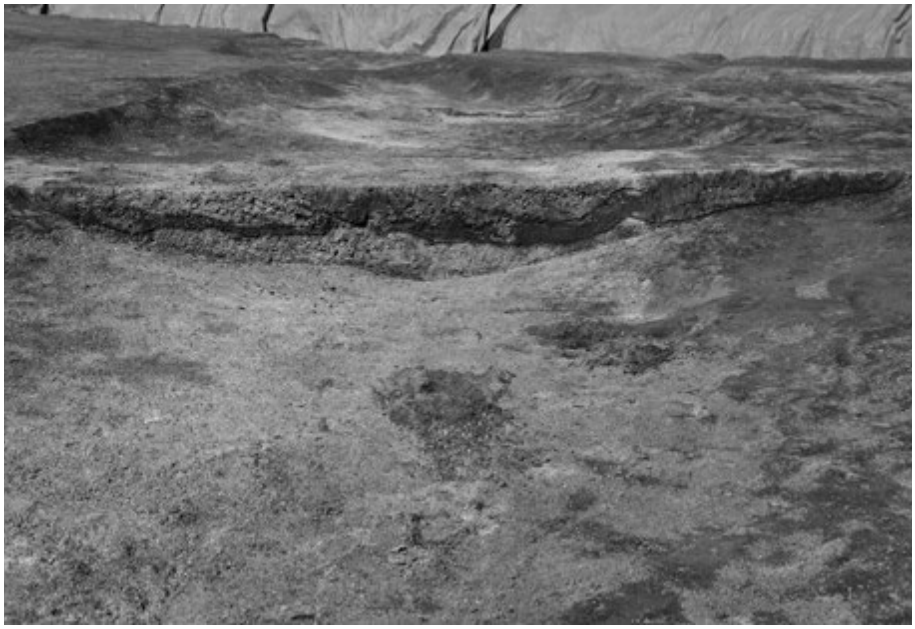
旧河道１あぜ断面
検出面－ 50㎝～－ 80㎝
（南東から）

旧河道２あぜ断面
（南から）

旧河道２南区
あぜ断面（南東から）

旧河道２南１区
根株検出状況（南東から）

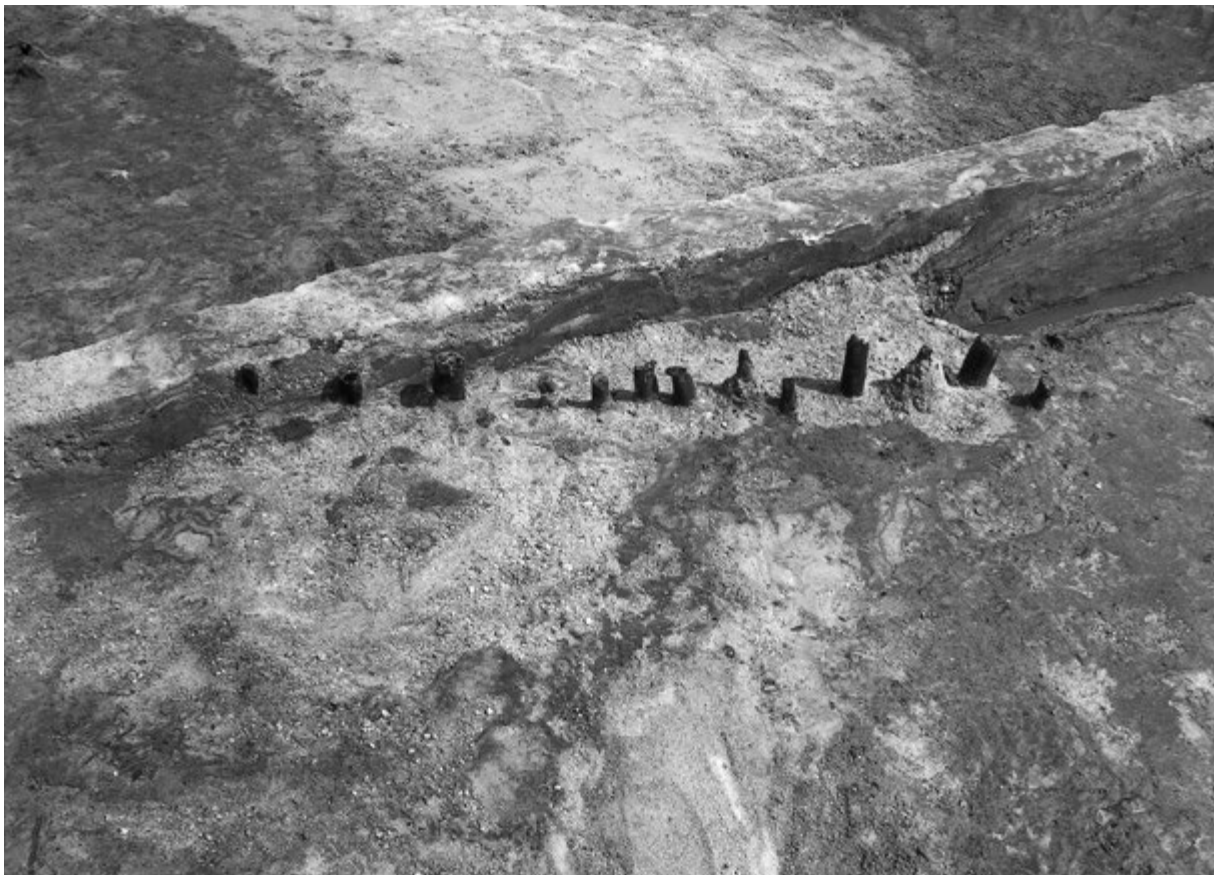
旧河道 SR185 全景
（北から）



旧河道 SR185 断面
（南東から）

旧河道２全景（北から）

旧河道２全景（北から）



旧河道２南１区杭列Ａ検出状況（南西から）

旧河道２杭列Ａ（北から）

写真図版 56

2012 年度調査

旧河道２杭列Ｂ・Ｃ
（北東から）

旧河道２杭列Ｂ・Ｃ
周辺の状況（北から）

旧河道２杭列Ｂ
断面（北東から）

旧河道２・３　杭列Ｃ（南東から）

旧河道２・３　杭列Ｃ（北西から）

旧河道２・３　杭列Ｃ横木１枝払痕（北から）

旧河道２・３　杭列Ｃ横木１伐採痕（北から）

旧河道２・３　杭列Ｃ（南西から）

旧河道２・３　杭列Ｃ断ち割り（北東から）

旧河道２・３　杭列Ｃ断ち割り（北東から）

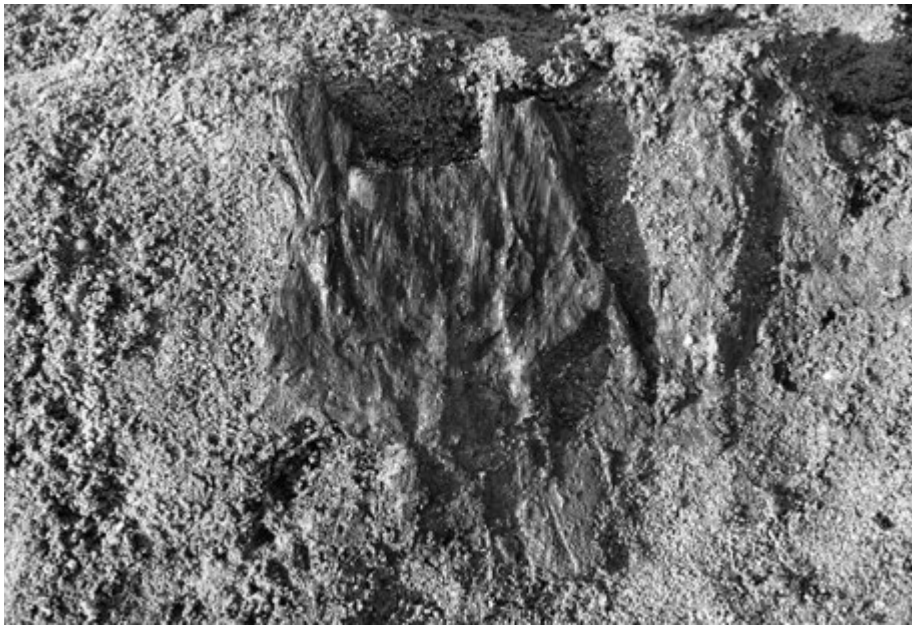
旧河道２・３　杭列Ｃ横断面（北西から）

旧河道２・３　杭列Ｃ東側（北東から）

旧河道２・３　杭列Ｃ最下部（北東から）

旧河道２　杭列Ｄ
（北東から）

旧河道３　杭列Ｄ
（南から）



旧河道３　杭列Ｄ
横木２直下草本遺体
（北東から）

旧河道３　杭列Ｅ（北西から）

旧河道３　杭列Ｅ（北西から）

旧河道３　杭列Ｅ
（南西から）

旧河道３　杭列Ｅ
（北西から）

旧河道３　杭列Ｅ
（南東から）

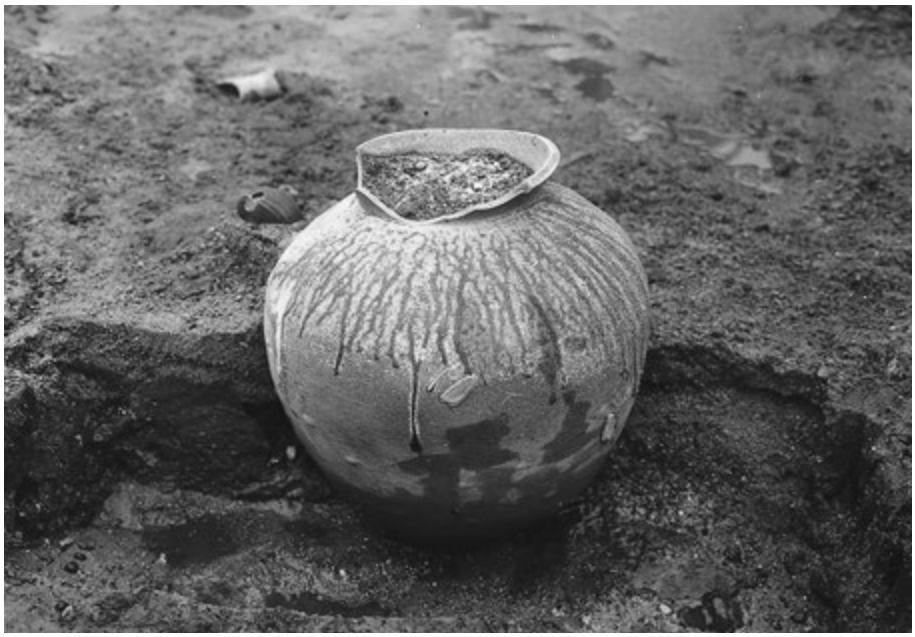
旧河道　杭列Ｅ・Ｇ（南から）

旧河道３　杭列Ｅ（南西から）

旧河道３　埋設杭群出土状況（南西から）

旧河道３　埋設杭群出土状況（南から）

旧河道３
須恵器甕出土状況
（東から）



旧河道３
須恵器甕（東から）

旧河道３
須恵器甕取りはずし後
（東から）

写真図版 68

2012 年度調査

調査区東壁断面北部
（南から）

調査区東壁断面
中央付近～南端
（西から）

調査区東壁断面
（西から）

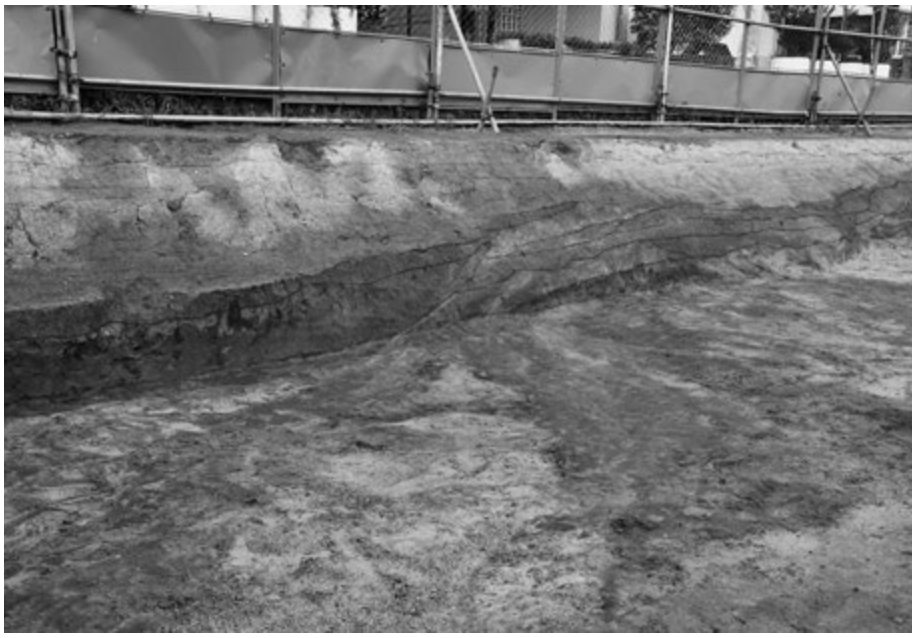
調査区南壁断面（北から）

調査区南壁断面（西から）

調査区南壁断面（西から）

写真図版 70

2012 年度調査



調査区北壁断面西部
（南から）

調査区北壁断面西部
（南から）

調査区北壁断面東部付近
（南から）

調査前の状況（南西から）

機械掘削状況

平安時代遺構面調査状況

調査風景

掘立柱建物跡調査状況

図化作業

写真図版 72

2011 年度調査
2012 年度調査

図化作業（2012 年度）

工楽善通氏現地指導状況（2012 年度）

青木哲哉氏現地指導状況（2012 年度）

志筑小学校生見学（2012 年度）

現地説明会実施状況（2011 年度）

現地説明会実施状況 2（2012 年度）

出土遺物１（土器１）

11

12

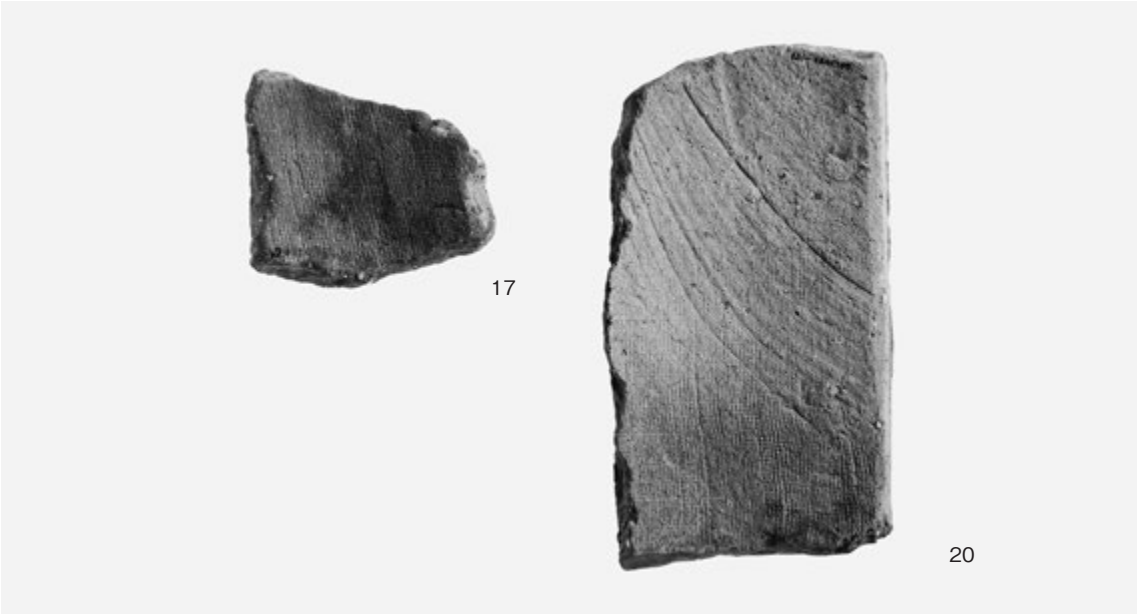
13

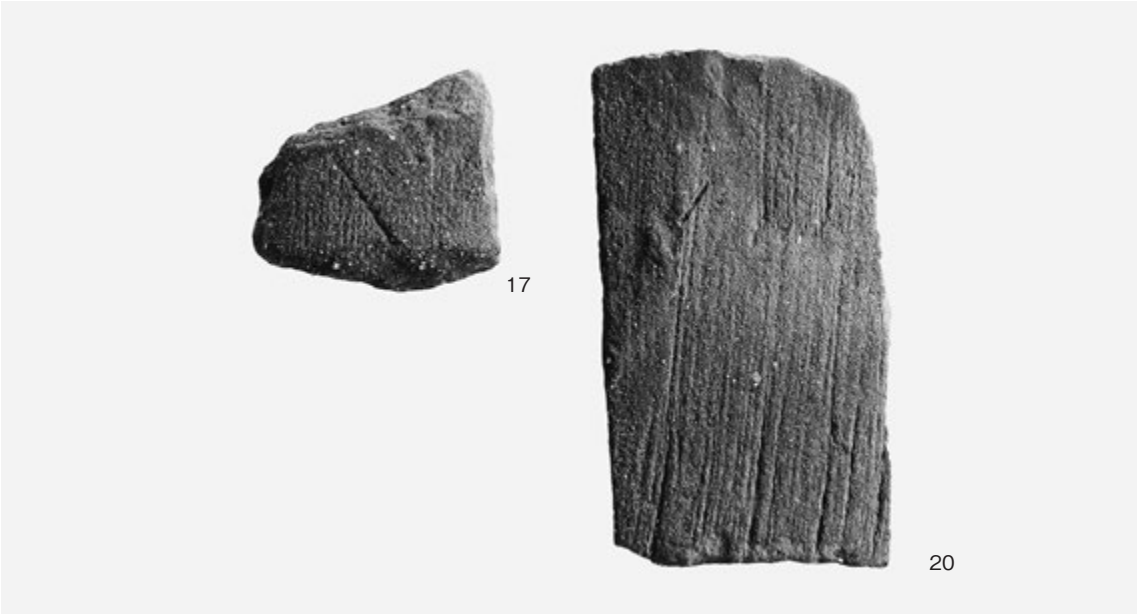
14

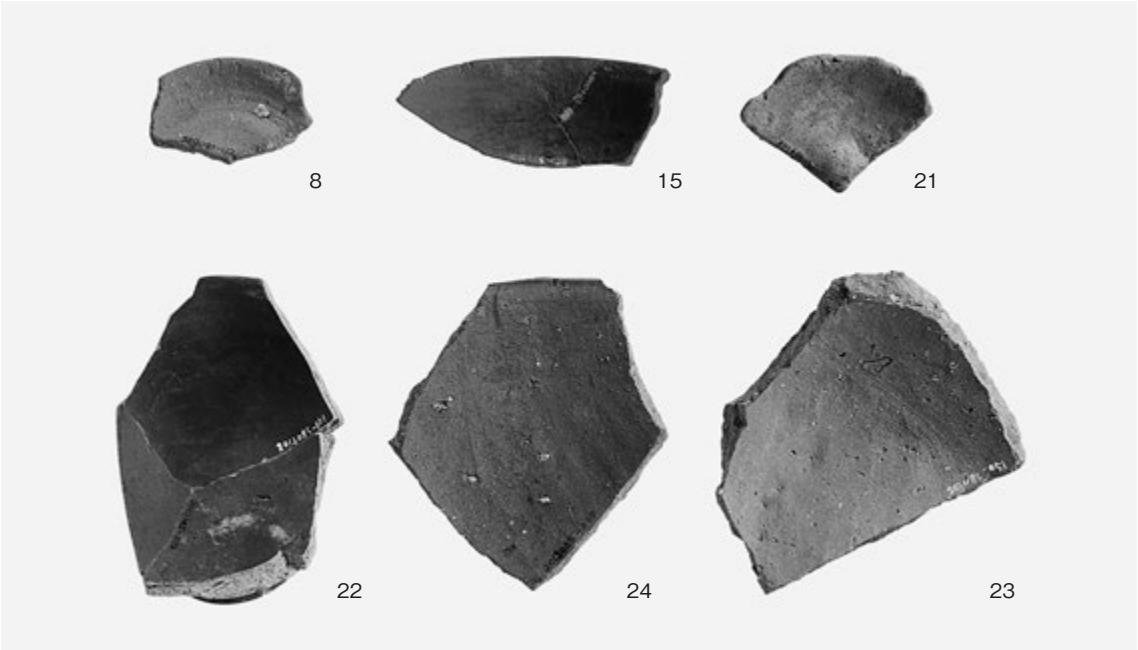
16

19

出土遺物２（土器２）



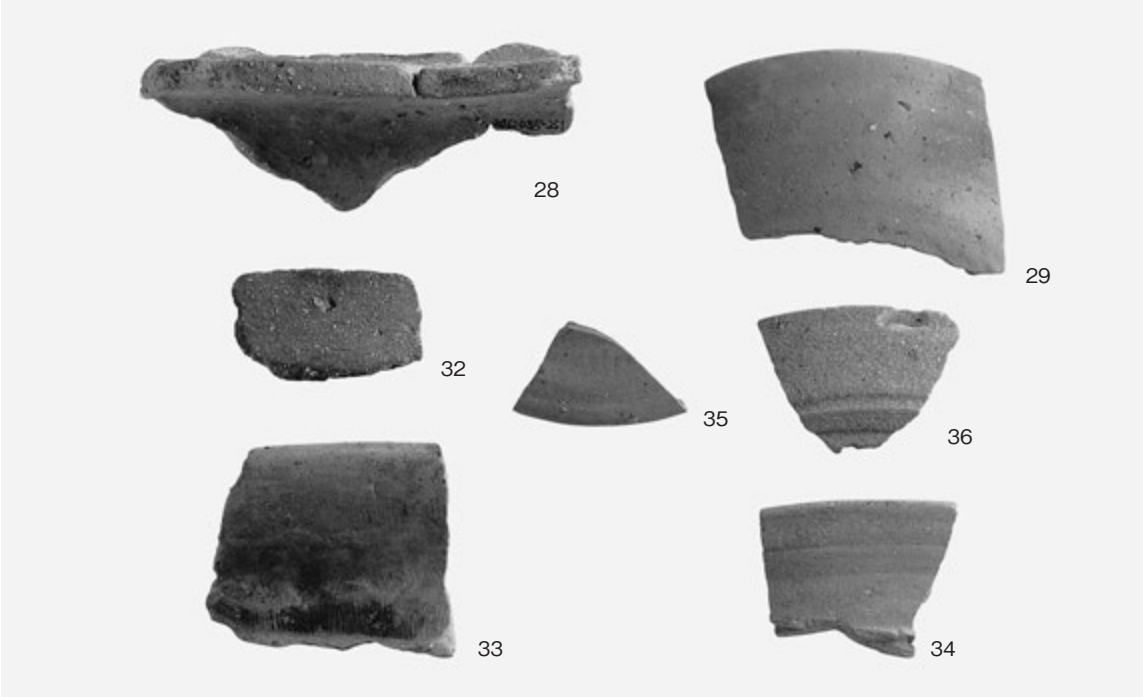




出土遺物３（土器３・瓦）

26

27

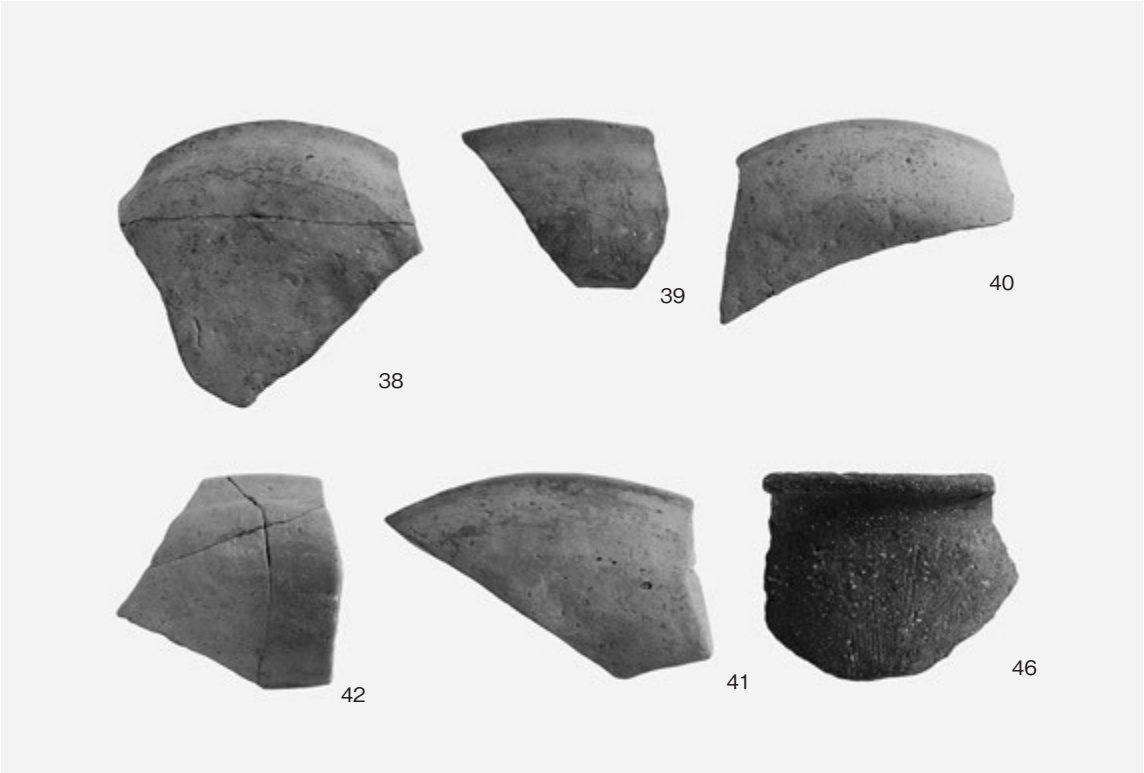


30

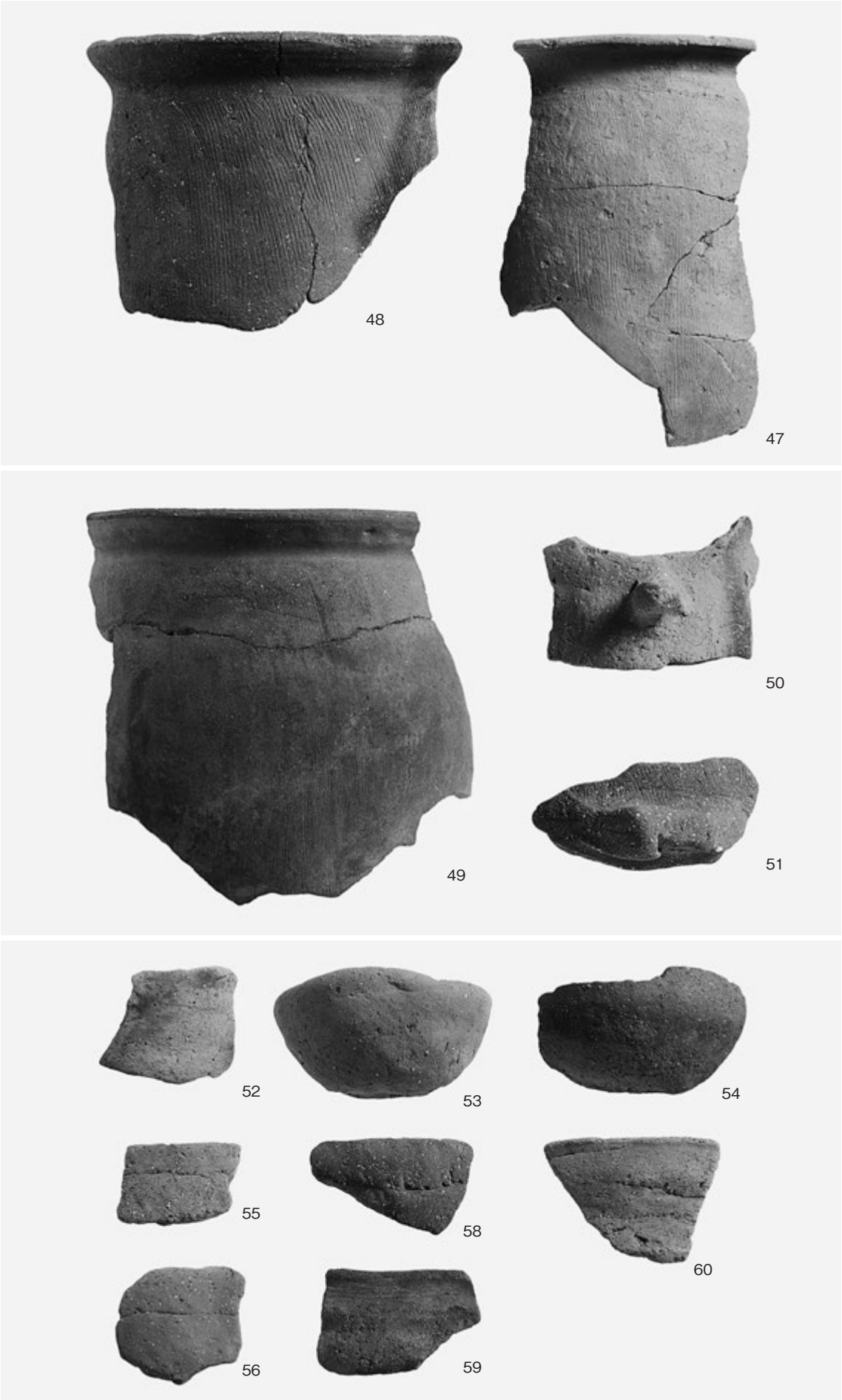
37

31

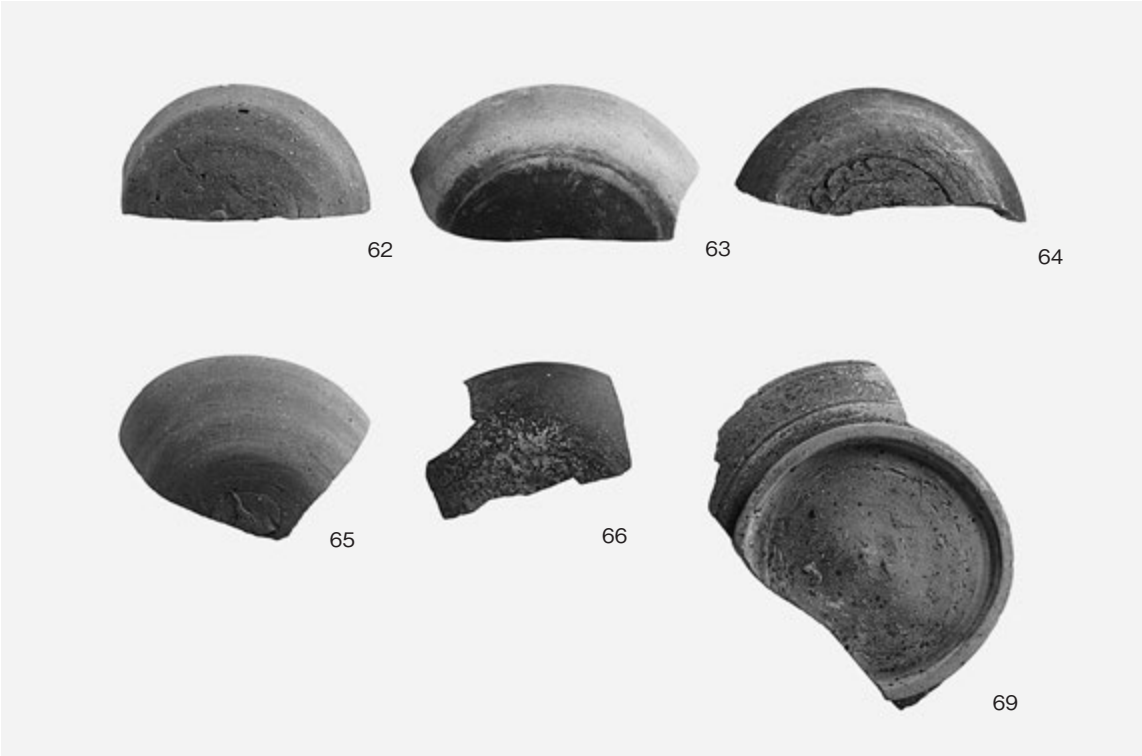
出土遺物４（土器４）



出土遺物５（土器５）



出土遺物６（土器６）

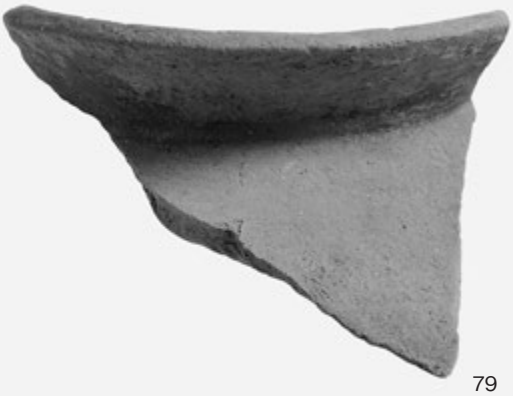


出土遺物７（土器７）

70

72

71


79

78

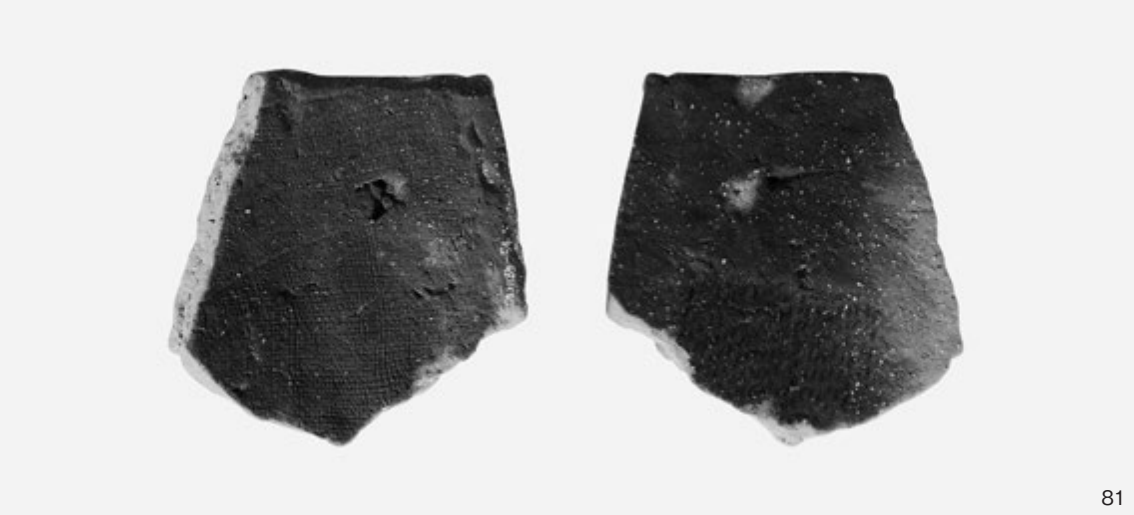
73

75

77

出土遺物８（土器８）

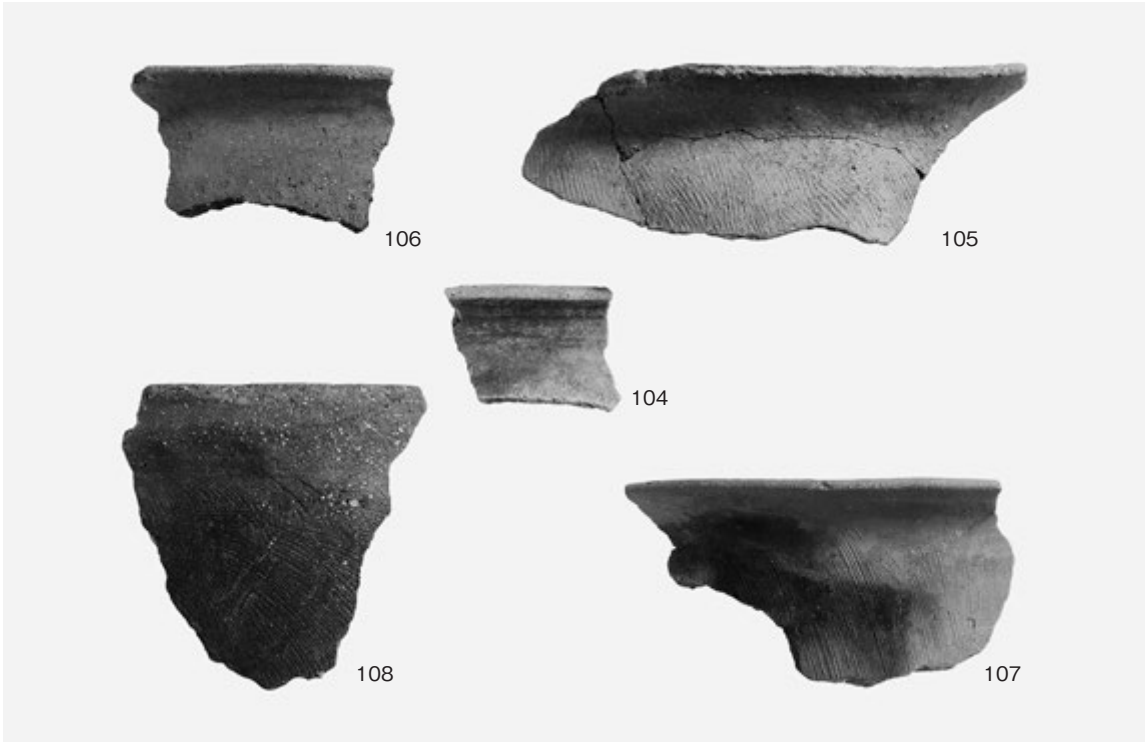
80



81

93

出土遺物９（土器９・瓦）



出土遺物 10（土器 10）

出土遺物 11（土器 11）

116

118

121

123
124
125

128
131
133

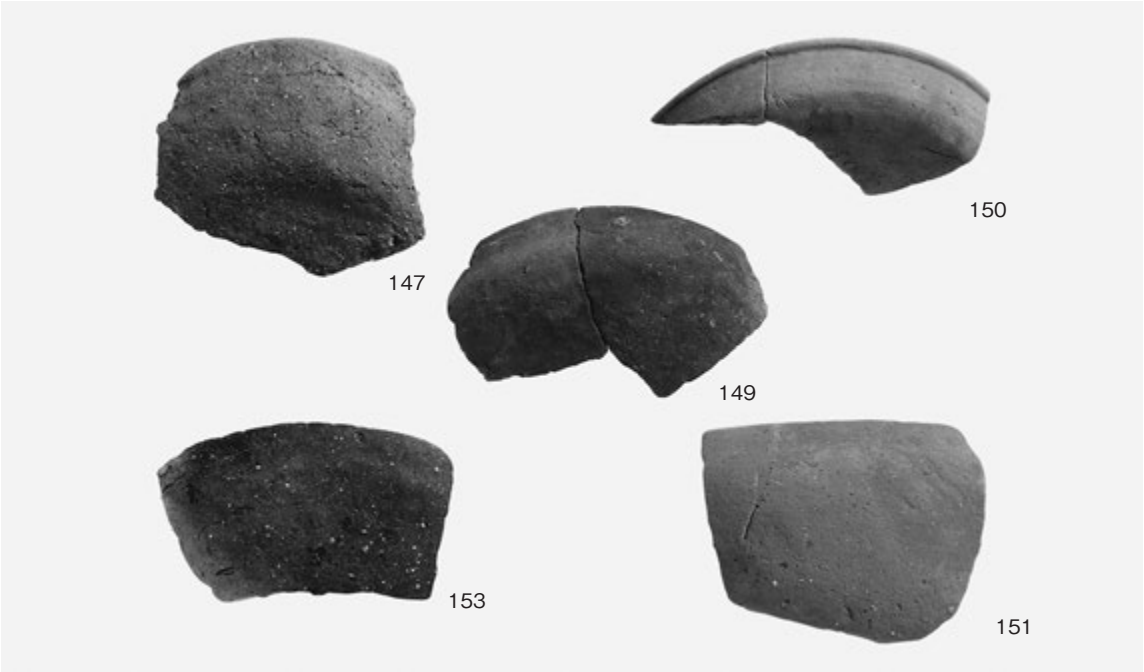
出土遺物 12（土器 12）

出土遺物 13（土器 13）

138

144

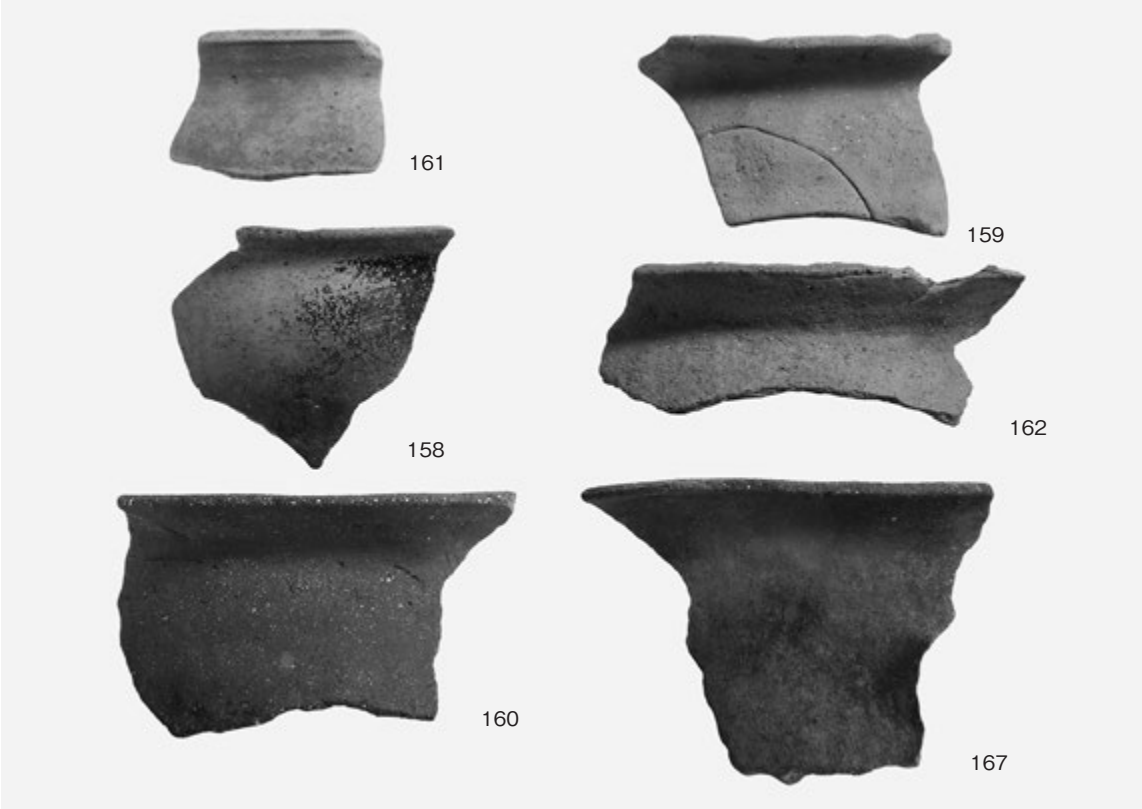
146



148

156

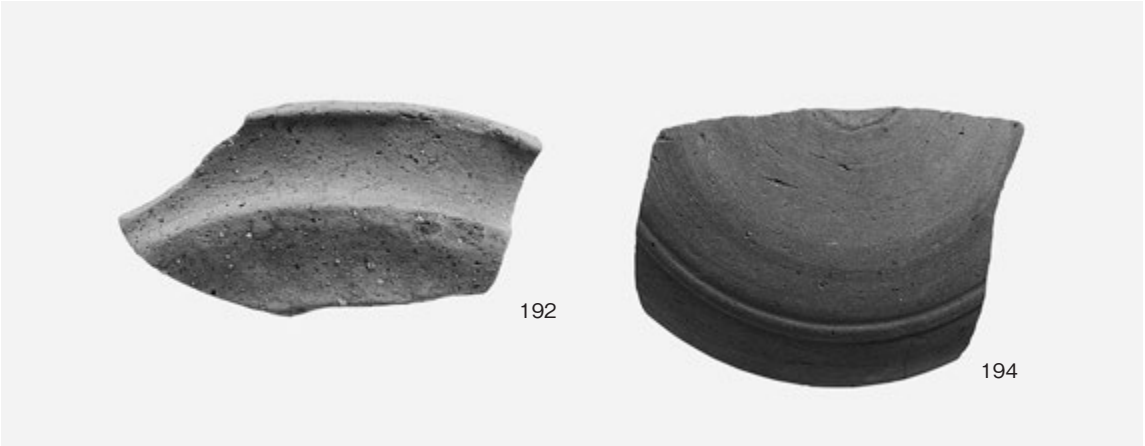
出土遺物 14（土器 14）



出土遺物 15（土器 15）

出土遺物 16（土器 16）

出土遺物 17（土器 17）



出土遺物 18（土器 18）

193

195

196

197

198

199

202

203

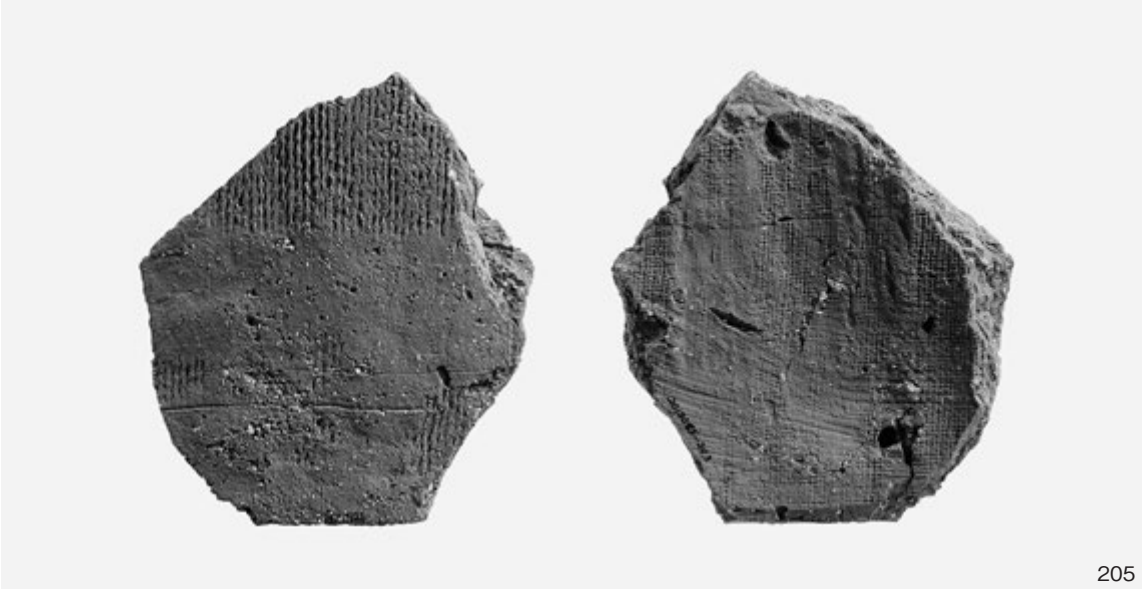
出土遺物 19（土器 19）

204

207

208

215


205

出土遺物 20（土器 20・瓦）

217

234

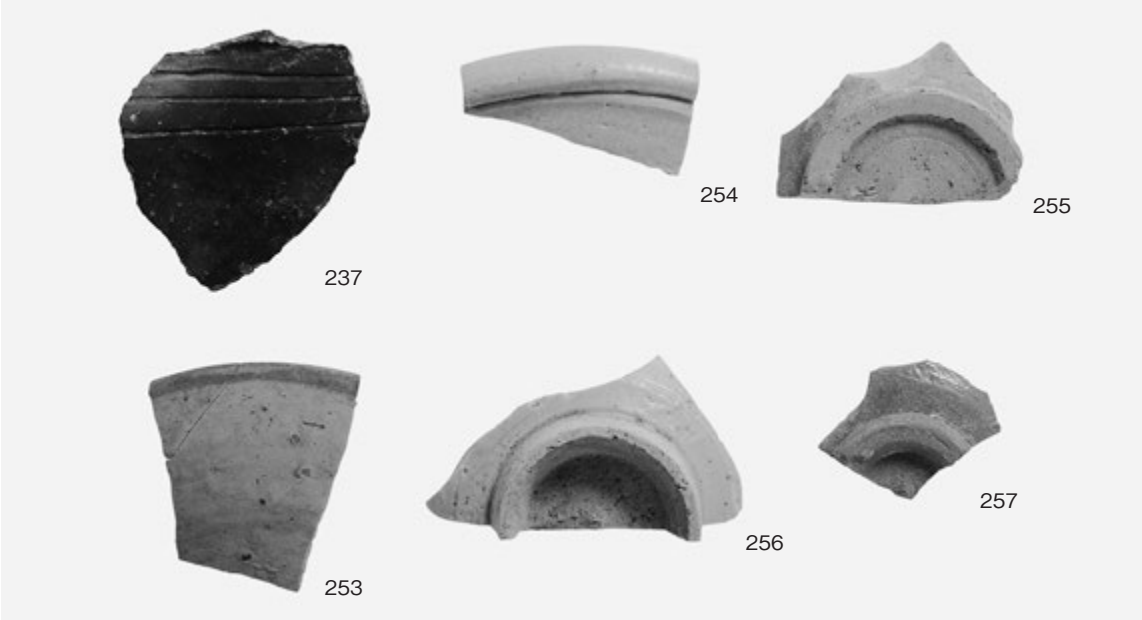
235

出土遺物 21（土器 21・土製品）

236

238

239



241

出土遺物 22（土器 22）

247

248

249

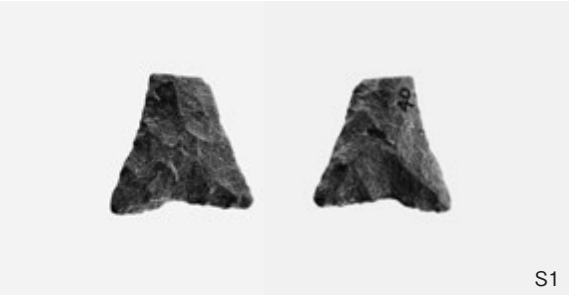
250

251

252

258

出土遺物 23（土器 23・土製品）


S1

S2

S3

M1

M2

M3

出土遺物 24（石器・金属製品）

W1

W1

W5

W6

W3

W3

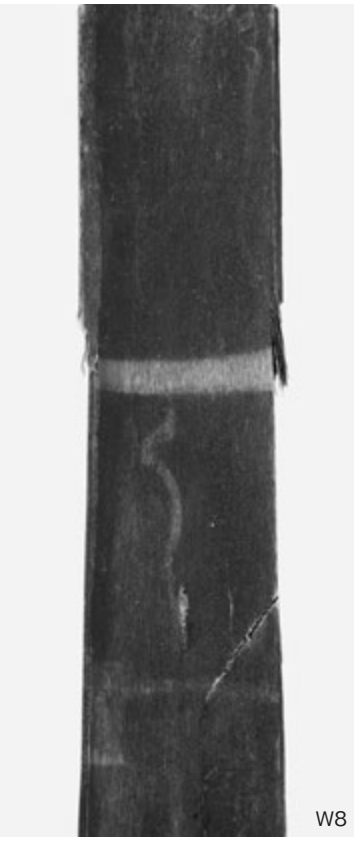
W7

W2

W4

W8

W8

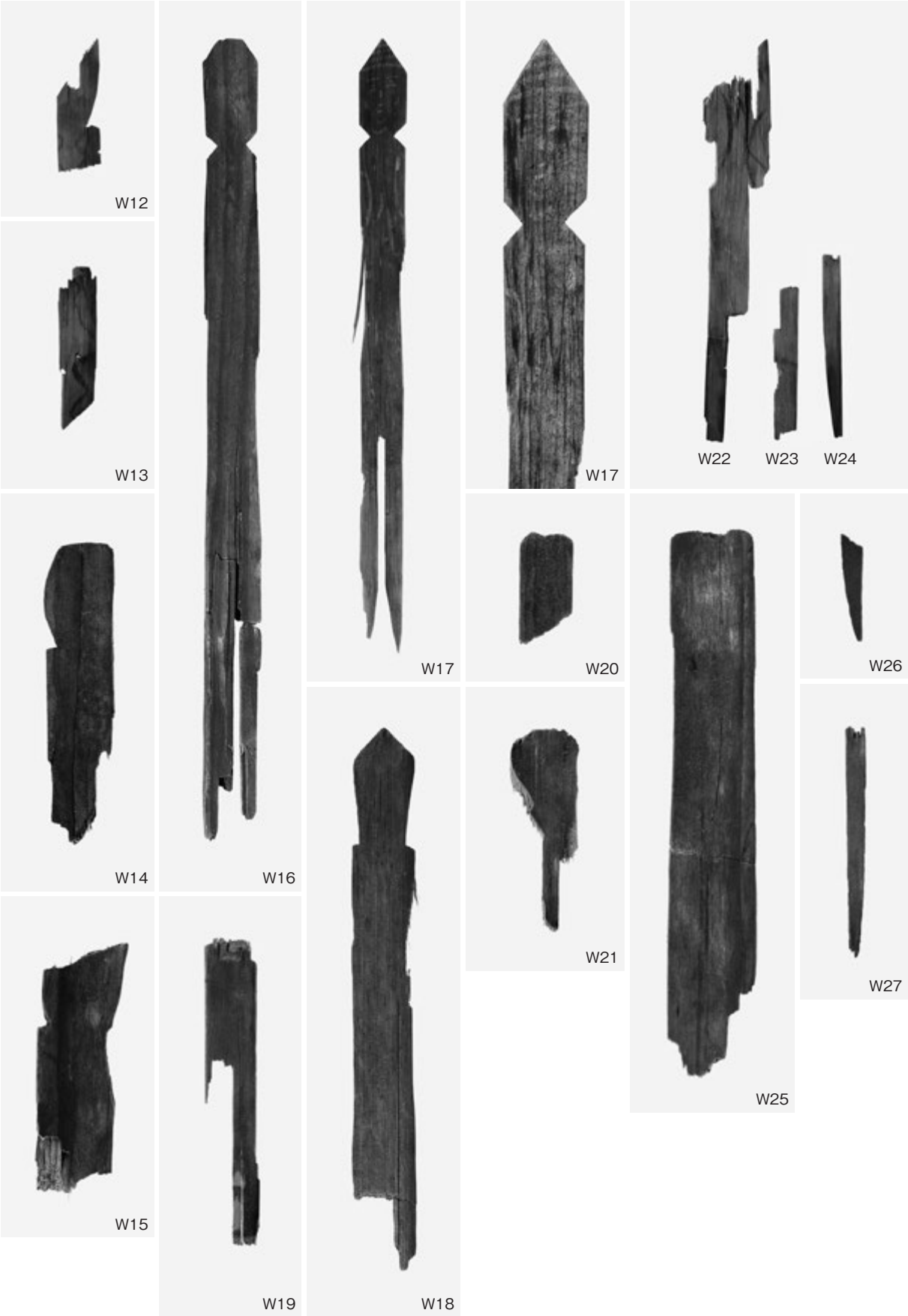

W8

W9

W9

W10

W11


W12
W13
W14
W15
W16
W19
W17
W18
W17
W20
W21
W22
W23
W24
W25
W26
W27

出土遺物 27（木製品３）

W28

W29

W30

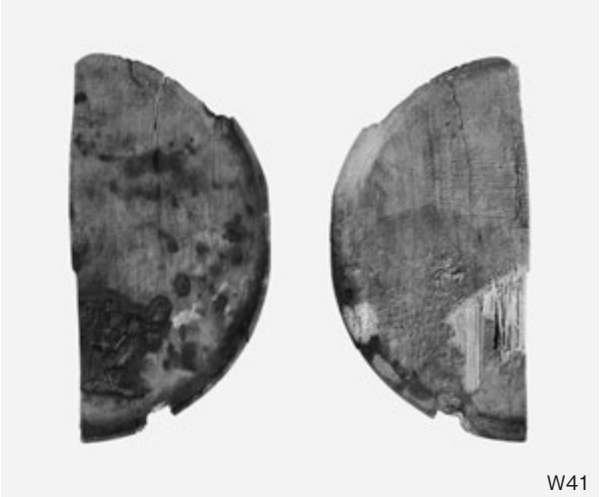
W33

W35

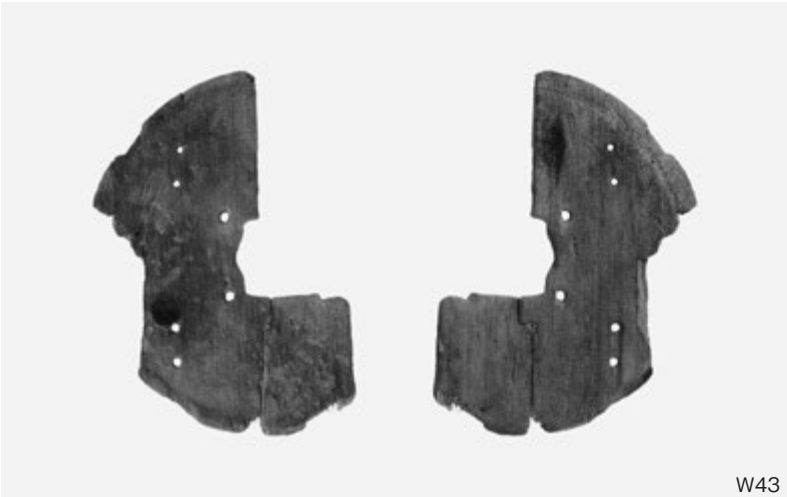
W36

W39

W40


W41

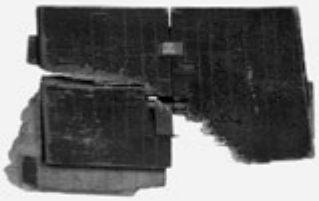
W42


W43

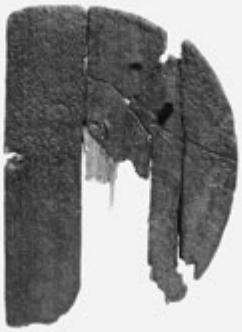
W44

出土遺物 28（木製品４）

W45


W45

W46


W47

W48

W48

W49

W50
W51
W52
W53
W54
W55
W56
W57
W58
W59
W60
W64
W65
W66
W61
W67

W68

W69

W70

W71

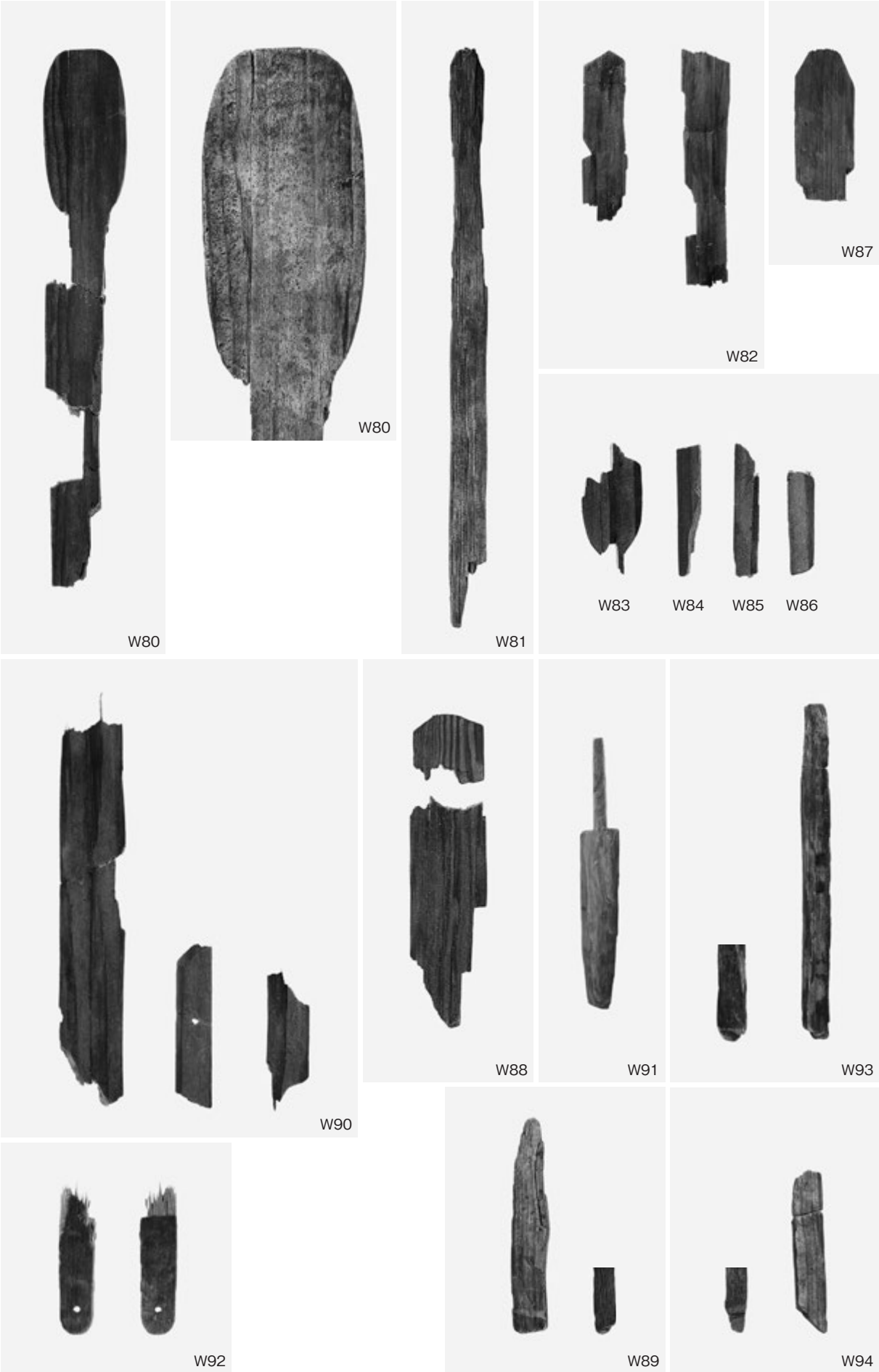
W72

W74

W76

W73

出土遺物 31（木製品７）



出土遺物 32（木製品８）

W96

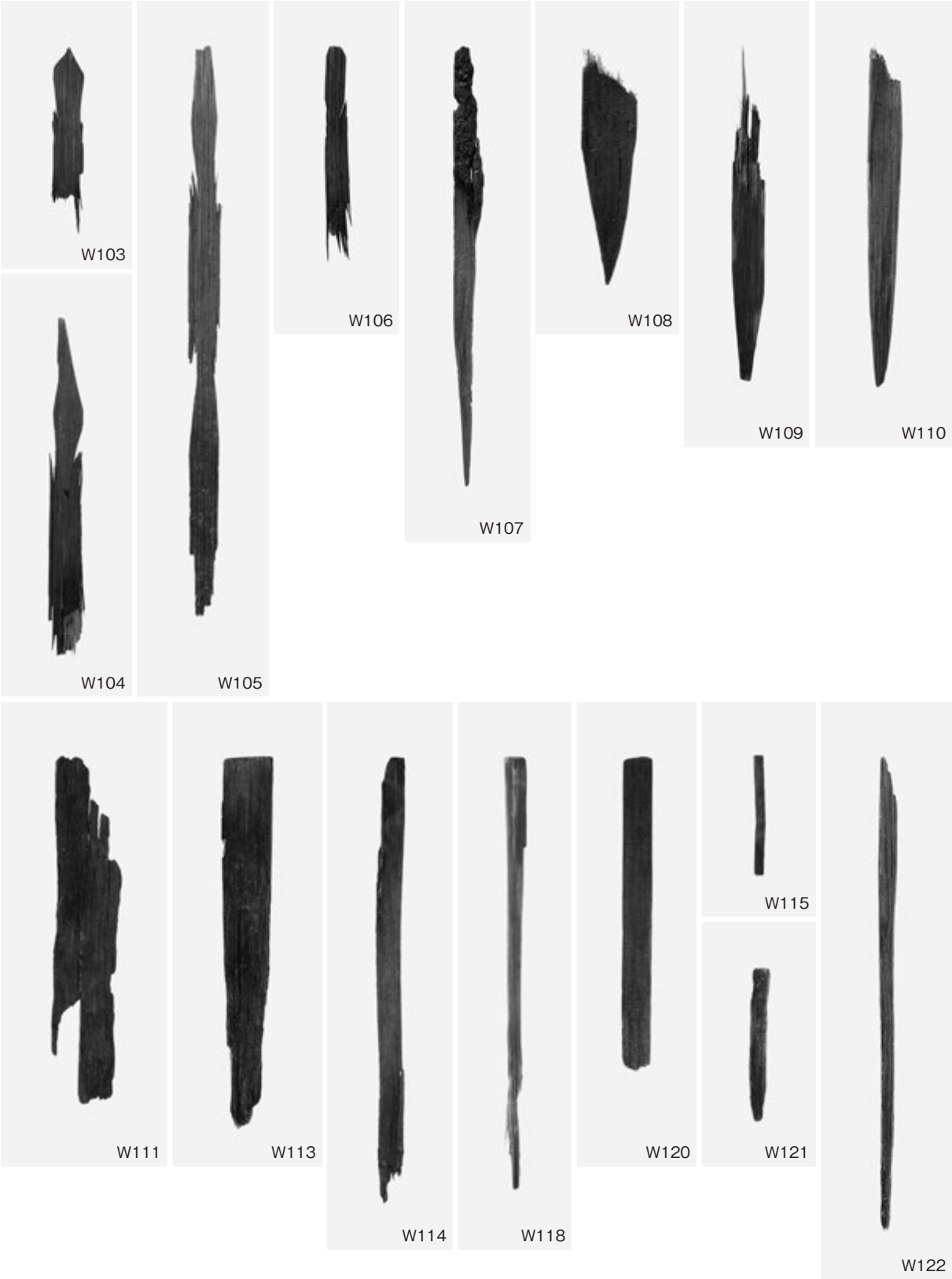
W98

W99

W100

W97

W101


W103
W104
W105
W106
W107
W108
W109
W110
W111
W113
W114
W118
W120
W115
W121
W122

W127

W128

W131

W129

W132

W137

W141

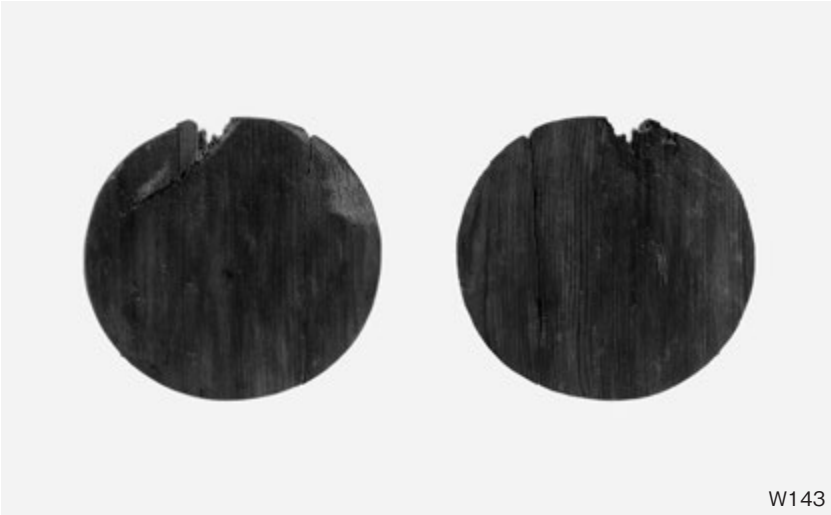
W138

W140

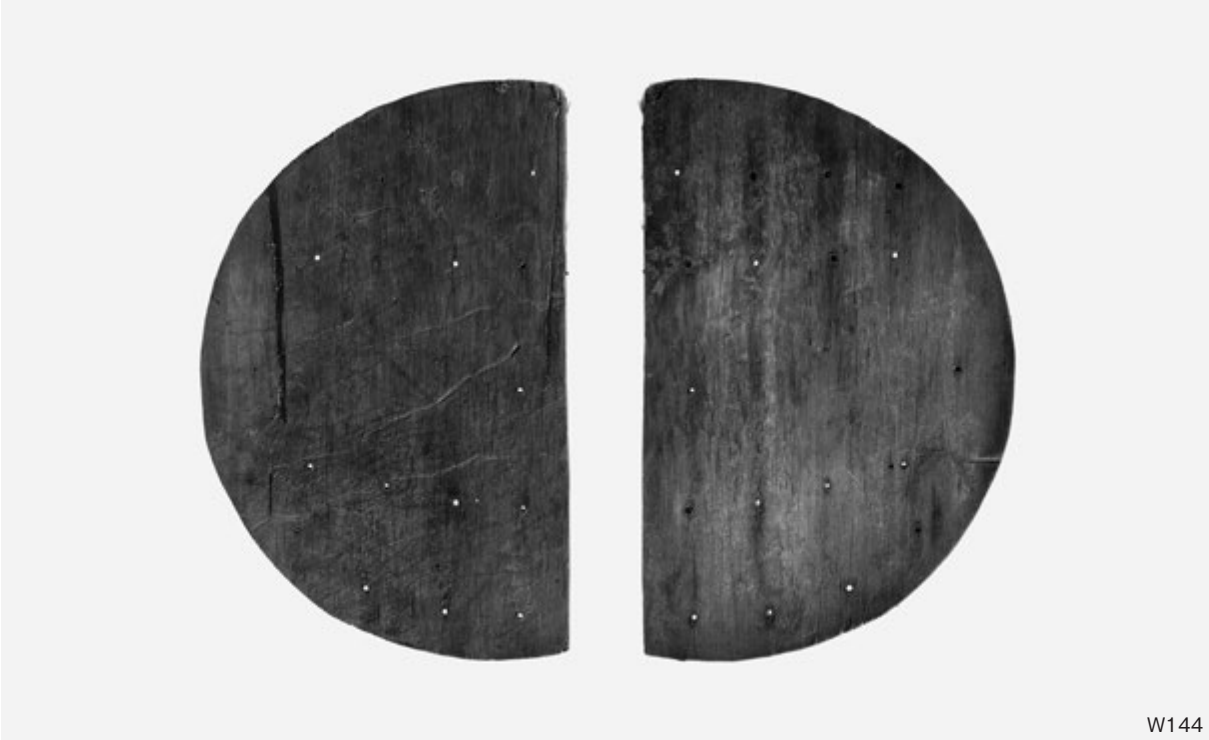
W142

W145

W146


W143

W147


W144

出土遺物 36（木製品 12）

W148

W149

W150

W150

W151

出土遺物 37（木製品 13）

報 告 書 抄 録（Outline of the Report）

ふ り が な	たいえーいせき	About the Report
書　　名	田井 A 遺跡	Excavation report of the Tai-A archaeological site
副 書 名	（二）志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う発掘調査報告書	
シ リ ー ズ 名	兵庫県文化財調査報告	Report of the Archaeological Sites of Hyogo prefecture vol. 474
シリーズ番号	第 474 冊	The Author/Editor : Hiroyuki Kubo Keisuke Nishiguchi Hideki Kurogane
編 著 者 名	久保弘幸・西口圭介・鐵　英記	Hyogo Construction Technology Center for Regional Development Archeological Research Department Address : 1-1-1 Onaka, Harima-cho, Hyogo pref. Japan
編 集 機 関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部	
所　在　地	兵庫県加古郡播磨町大中 1-1-1 （兵庫県立考古博物館内）　℡ 079-437-5561	
発 行 年 月 日	平成 27（2015）年 3 月 23 日	Publication : March 23, 2015

所収遺跡名	所　在　地	コード		北　緯	東　経
		市町村	遺跡番号	northern latitude	east longitude
田井 A 遺跡	淡路市志筑	28226	880127	34° 26′ 20″	134° 53′ 41″

遺跡調査番号	調査の種別	調　査　期　間	調　査　原　因
2009225 2011185 2012085	本発掘調査	＊ 2009/11/24 ～ 2010/2/26 ＊ 2011/10/26 ～ 2012/3/19 ＊ 2012/7/20 ～ 2012/11/16	（二）志筑川床上浸水対策特別緊急事業
遺跡の種別	集落遺跡 生産遺跡	主な遺構	掘立柱建物跡・鍛冶炉・旧河道・井堰・水田
遺跡の時代	縄文時代晩期～弥生時代 前期・飛鳥時代 奈良時代・平安時代	主な遺物	須恵器・土師器（製塩土器を含む）・木製品（木簡・人形・舟形・鋤形・斎串・曲物）

要　　約	4 段階の遺構が検出された。遺構面は上位から、平安時代中期・奈良時代・飛鳥時代・縄文時代晩期～弥生時代前期に属する。 平安時代：掘立柱建物跡群及び溝が検出された。掘立柱建物跡のうち 1 棟の床面には、鍛冶炉と鉄床石が設けられていた。 奈良時代:水田跡および旧河道が検出された。旧河道内には、少なくとも 8 か所以上の堰が設けられており、河道内の堆積物中からは、大量の土器類とともに、木製祭祀具が出土した。 飛鳥時代：水田面が検出された。水田は大畦畔と小畦畔から成るが、大畦畔は 90 m以上も直線的にのび、これに小畦畔が直角に取り付くという、条里型地割に類する規格性を見せる。 縄文時代晩期～弥生時代前期：飛鳥時代水田の下位にある粘土層より、少数の土器が出土した。

Address of the site	Shiduki, Awaji, Hyogo pref. Japan	Date of the Excavation	＊ 2009/11/24 ～ 2010/2/26 ＊ 2011/10/26 ～ 2012/3/19 ＊ 2012/7/20 ～ 2012/11/16
Category	Settlement, Paddy field,	Archaeological Features	＊ Asuka,period Wet rice field ＊ Nara period Wet rice field, Former river beds, Sluices, Pits, Ditches ＊ Heian period Posthole-type buildings, smith hearth and anvil stone, Pits, Ditches
Period	＊ Late Jomon~Early Yayoi period*Asuka,period(7th century), ＊ Nara period(8th century), ＊ Late Heian~Kamakura period(12th century)	Main Relics	Jomon pottery, Yoayoi pottery, Haji wares, Sue wares, Salt-making pottery, Wooden relics for religious service, Mokkan(narrow strips of wood on which an official message is written)

兵庫県文化財調査報告　第 474 冊

淡路市

田　井　A　遺　跡

－（二）志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 27（2015）年 3 月 23 日　発行

編　集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒 675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号
（兵庫県立考古博物館内）

発　行：兵庫県教育委員会
〒 650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号

印　刷：交友印刷株式会社
〒 650-0047　神戸市中央区港島南町 5 丁目 4 番 5 号